平成27年度　教師海外研修報告書

～国際理解教育の授業実践事例集～

新潟県、群馬県、埼玉県、千葉県、東京都、長野県

独立行政法人 国際協力機構　東京国際センター

はじめに

独立行政法人国際協力機構（JICA）では、開発途上国の現状や日本との関係、そこに暮らす人々の生活や課題、それらをともに解決するための「国際協力」に対する理解を深め、学校における教育活動の一層の充実を図ることを目的に、教師海外研修を毎年実施しています。

平成27年度、JICA東京国際センター及び駒ヶ根青年海外協力隊訓練所では、東京都、埼玉県、千葉県、群馬県、新潟県、長野県から20名の教員を募り、国内研修を経て、モンゴル国、ザンビア共和国の2カ国に派遣しました。本報告書は、今年度の研修の概要及び帰国後の勤務校における授業実践の実例を中心にまとめたものです。

文部科学省国立教育政策研究所とJICAが実施した「グローバル化時代の国際教育の在り方国際比較調査」（2014年）によると、近年、欧米の先進的な国々では、従来の知識伝達型の一斉授業から、生徒の主体性を重視した協働学習への転換が図られています。従来から重視されてきた系統的な知に加え、答えのない課題を与え、自ら考え、他者の意見に耳を傾け、それらを踏まえ、さらに発展的に考え止揚していくことにより、問題解決型の知を育成しようというものです。

本報告書で紹介されている授業実践は、このような考え方を促進させる具体的で有効な事例となっています。日常の生活の繰り返しのなかではなかなか気づかないことで、生徒の目線や身の丈に合うテーマを与え、読んで、見て、聞いて、触れるような教材により疑似体験させていく。そして興味を持たせ、協働しながら学習させていく。是非参考にしていただき、学校現場の先生方によって、このような国際理解教育／開発教育の授業実践が積極的に推進され、生徒の問題解決型の知の育成につながることを期待いたします。

結びに、本研修の実施にあたりご支援をいただいた外務省、文部科学省、各都県教育委員会、学校関係者ならびに関係各者に感謝を申し上げるとともに、今後ともJICAが取り組む市民参加協力事業にご協力を賜りますようお願い申し上げます。

平成28年3月

独立行政法人国際協力機構
東京国際センター
所長　佐々木　十一郎

目　次

はじめに ―――― 佐々木　十一郎 …… 1

1　教師海外研修概要 …… 6

2　教師海外研修の流れ …… 10
(1)　研修の流れ …… 10
(2)　参加者 …… 11

3　研修日程・内容 …… 14
(1)　国内研修日程 …… 14
(2)　海外研修日程 …… 17

4　プロジェクト概要 …… 20
(1)　事業形態概要 …… 20
(2)　プロジェクト概要 …… 21
(3)　青年海外協力隊／シニア海外ボランティア …… 23
(4)　訪問先位置図 …… 25

5　同行者報告 …… 28
(1)　モンゴル派遣 ―――― 西　　梨月 …… 28
(2)　ザンビア派遣 ―――― 山田　　優 …… 29

6　同行者所感 ―――― 桶田　雅仁 …… 32

7　実践授業報告 …… 34
(1)　モンゴル派遣
1)　小学校
①　「川島町から世界に発信!」～モンゴル＆日本～ ―――― 埼玉：菅原　千絵 …… 38
②　世界に目を向けて ―――― 千葉：今井　清人 …… 44
③　世界で輝く日本人 ―――― 千葉：川向　典希 …… 50
④　世界とつながろう ―――― 千葉：髙橋　千尋 …… 56
⑤　考えよう　外国のこと、見つめよう　自分のこと ―――― 東京：奥山 さやか …… 62
⑥　かんがえよう　ぼくたち・わたしたちにできること ―――― 東京：杉本 万貴子 …… 68
⑦　せかいのなかまと　つながろう ～うしなかちゃん　モンゴルへ行くの巻～
―――― 東京：蕎麦田 佳子 …… 74
⑧　わたしとモンゴルと世界と ―――― 東京：濵元　徹美 …… 80
⑨　明日をつくるわたしたち ―――― 長野：松井 真由美 …… 86
2)　特別支援学校
①　モンゴルについて学ぶ ―――― 東京：加藤　佑圭 …… 92

⑵　ザンビア派遣
1)　中学校
①　アフリカの人々の暮らしとその変化 ―――― 埼玉：島村　　勲 …… 98
②　地理的分野・世界のさまざまな地域「よりよいアフリカ州をめざして」
～アフリカ州の持続可能な発展～ ―――― 東京：輪湖 みちよ …… 104
③　世界とつながる日本 ～共助・共生の関係を目指して～ ―― 新潟：石黒 富久美 …… 110
④　私達は開発途上国とどのような関係を築いていけば良いのか
―――― 長野：市川　志野 …… 116
⑤　ザンビアを通して世界の課題を考える ―――― 長野：續　　美穂 …… 122
2)　高等学校
①　食のグローバリゼーション！
～これからも美味しいゴハンを食べ続けるために私たちにできること～
―――― 群馬：岡橋　弘和 …… 128
②　国際協力について考える ―――― 埼玉：箱田 恵梨香 …… 134
③　英語で世界に出会う ―――― 埼玉：松村　美緒 …… 140
④　「国際協力」について考えてみよう！―――― 千葉：富田　明澄 …… 146
⑤　持続可能な社会をめざして ～発展途上国とのつながりから考える～
―――― 新潟：蜂屋 有希子 …… 154

8　授業実践を終えて ―――― 仲山　嘉彦 …… 160

9　過年度参加者ネットワークづくり事例 ―――― 和田　　直 …… 162

10　おわりに ―――― 濵野　　清 …… 164

11　教師海外研修を終えて ―――― 仁田　知樹 …… 166

付録：参考資料 …… 168

1　教師海外研修概要

1　平成27年度教師海外研修概要

■　研修の目的

国際理解教育／開発教育に関心を持つ教員を対象に、国内での研修と開発途上国への訪問により、開発途上国が置かれている現状や国際協力の必要性、日本との関係に対する理解を深め、学校現場での授業実践等を通じて、次代を担う児童・生徒の育成（特に国際問題、相互依存、国際協力の必要性の理解促進等）に役立てていただくことを目的として実施します。

また研修参加後は、JICAと協力し、または自発的に教育現場で国際理解教育／開発教育の推進に活躍していただくこともねらいとしています。

【研修で修得を目指すスキル】

① 国際理解教育／開発教育の必要性を理解し、説明できる。
② 開発途上国が置かれている現状、国際協力の現場で起きている現状を理解し、説明できる。
③ 開発途上国と日本との関係、特に相互依存関係について理解し、説明できる。
④ 国際協力及びJICAの概要を理解し、説明できる。
⑤ 国際協力及び援助の必要性を理解し、説明できる。
⑥ 上述①～⑤を踏まえた国際理解教育／開発教育のカリキュラム・教材を作成できる。
⑦ 上述⑥のカリキュラム・教材を基に、国際理解教育／開発教育の授業を実施できる。

■　主　催

独立行政法人 国際協力機構　東京国際センター（JICA東京）
駒ヶ根青年海外協力隊訓練所（JICA駒ヶ根）

■　後　援

外務省、文部科学省、各都県及び政令指定都市の教育委員会、
各都県の私立中学高等学校協会

■　研修国と派遣人数

対象地域：新潟県、群馬県、埼玉県、千葉県、東京都、長野県
モンゴル：10名（小学校・特別支援学校教職員）
ザンビア：10名（中学校・高等学校教職員）
※研修国は年度により異なります。

■　研修内容

・日本における派遣前、派遣後研修の実施
・開発途上国（JICAの事業現場等）への訪問
・学校現場での国際理解教育／開発教育の授業実践

■　研修日程

研修名	日　程	場　所	主な内容
派遣前 研修	7月4日（土） 5日（日）	JICA地球ひろば JICA東京	・国際協力ODA事業説明 ・本研修及びJICA事業概要説明 ・国際理解教育／開発教育について ・授業実践に向けての意見交換 ・研修国事情と海外研修準備・手続き
海外 研修	【ザンビア】 7月27日（月）～8月5日（水） 【モンゴル】 8月9日（日）～8月18日（火）	ルサカ、 ウランバートル ほか	・JICA事業現場視察 ・現地教育関係者意見交換 ・研修国の文化、生活、社会事情の視察 ・授業のための素材収集
派遣後 研修	8月30日（日）	JICA東京	・海外研修の体験・情報の整理・共有 ・授業実践に向けての意見交換 有識者からの助言・指導
授業実践	9月～12月の期間の1日以上	各学校現場	・研修成果を生かした授業実践
報告会	12月～2月の期間の1日	各都県毎の会場	・授業実践報告

※派遣前の研修ではJICA東京での宿泊となります。
※海外研修中は団体行動のため、個人行動はできません。
※報告会は都県別に一般公開にて実施します。
　日程は、各都県の参加者の都合を勘案の上決定します。

■　応募資格

次の資格をすべて満たす方とする。

① 東京都、埼玉県、千葉県、群馬県、新潟県、長野県の国公立、私立の小学校、中学校、高等学校、中等教育学校、高等専門学校（1～3年生を担当）、特別支援学校において教育活動に従事していること。
② 応募締切の時点で、年齢が満50歳以下であること。
③ 応募締切の時点で、教員経験年数が2年以上であること。
④ 所属する学校の校長の推薦があること。
⑤ 研修国の事情を勘案した上で、参加に耐えうる健康状態であること。
⑥ 過去に、本研修、JICAボランティア、JICA専門家、国際協力レポーター、JICAパートナーシップセミナー、ODA民間モニター等当機構の事業にて海外に派遣された経験がないこと。

■　参加要件

次の要件をすべて満たす方とする。

① 国内研修及び海外研修の全行程に参加可能であること。
② パソコンメールアドレスでの連絡（ファイルの送受信を含む）が可能なこと。
③ 帰国後、所定の期日内に海外研修報告書を提出すること。
④ 帰国後、本研修の定めた期間内に所属校において授業の実践を行うこと。
⑤ 当該授業の実践報告書を提出すること。
⑥ JICAのウェブサイトにて一般公開されることに同意すること。
⑦ JICAが実施する国際理解教育／開発教育支援事業に協力可能であること。

■　参加費用

⑴　JICA 負担

・　国内交通費（自宅最寄駅／バス停から研修会場及び成田空港まで）
・　国内宿泊費
・　海外渡航費（含トランジットの際の宿泊費）
・　査証料、空港使用税
・　現地視察に必要な交通費及び入場料
・　海外旅行保険加入費

⑵　参加者負担

・　パスポート取得にかかる費用
・　予防接種代
・　食費
・　現地宿泊費
・　追加保険の加入費用（任意）
・　その他、上記（1）以外の費用

※平成 27 年度の募集要項は、JICA 東京のホームページでご覧いただけます。
※平成 28 年度の募集要項は、4 月中旬頃に JICA 東京のホームページに掲載します。

2　教師海外研修の流れ

(1)　研修の流れ（平成27年度）

■　派遣前研修

7月4日（土）・5日（日）

・研修の趣旨および、JICAや日本の国際協力、訪問国に関する理解を深める。

・国際理解教育／開発教育への理解。

・研修における各自の役割の理解と、海外研修に向けて準備。

■　海外研修

ザンビア派遣：7月27日（月）～8月　5日（水）（10日間）

モンゴル派遣：8月9日（日）～8月18日（火）（10日間）

訪問国の現状や国際協力の必要性、日本との関係について、実際の現場を訪問することで体験、理解する。また、授業実践に必要な教材の材料などを収集する。

※帰国後、海外研修報告書の提出

■　派遣後研修

8月30日（日）

海外研修の経験を生かした授業の実施・教材作成について考える。

■　授業実践

9月～12月（各勤務校において1回以上）

研修の経験を生かした授業を実施し、成果を各自で検証する。

※実施後、授業実践報告書の提出

■　授業実践報告会

12月～2月（各都県別に1回）

研修の成果（主に授業実践）について、教育関係者をはじめとする地域の方に報告する。

■　教師海外研修参加後（翌年以降）

研修の成果を生かして、各所属校及び地域で国際理解教育／開発教育を推進する。

・ 授業／活動のブラッシュアップ

・ JICA国際理解教育／開発教育支援プログラムの活用

・ 実践者のネットワークへの参加　等

（2）参加者

モンゴル派遣（10 名）

氏　名	都県	学校名	担当教科
菅原　千絵	埼玉	川島町立八ツ保小学校	全教科
川向　典希	千葉	四街道市立中央小学校	全教科
髙橋　千尋	千葉	船橋市立塚田小学校	全教科
今井　清人	千葉	野田市立中央小学校	教務主任
杉本　万貴子	東京	東村山市立久米川小学校	全教科
加藤　佑圭	東京	東京都立王子特別支援学校	音楽、生活
蕎麦田　佳子	東京	新宿区立牛込仲之小学校	全教科
濵元　徹美	東京	多摩市立大松台小学校	全教科
奥山　さやか	東京	練馬区立南町小学校	全教科
松井　真由美	長野	中野市立倭小学校	全教科

同行者

氏　名	所属
桶田　雅仁	東京国際センター（学校教育アドバイザー）
西　梨月	JICA 群馬デスク

ザンビア派遣（10 名）

氏　名	都県	学校名	担当教科
岡橋　弘和	群馬	群馬県立伊勢崎興陽高等学校	農業
島村　勲	埼玉	埼玉県立伊奈学園中学校	社会
箱田　恵梨香	埼玉	埼玉県立伊奈学園総合高等学校	国語
松村　美緒	埼玉	自由の森学園中学校・高等学校	英語
富田　明澄	千葉	千葉県立成田国際高等学校	生物
輪湖　みちよ	東京	墨田区立両国中学校	社会
市川　志野	長野	栄村立栄中学校	理科
續　美穂	長野	松本秀峰中等教育学校	社会
蜂屋　有希子	新潟	新潟県立高田高等学校	家庭
石黒　富久美	新潟	阿賀町立阿賀津川中学校	英語

同行者

氏　名	所属
仲山　嘉彦	東京国際センター（学校教育アドバイザー）
山田　優	ＪＩＣＡ多摩地区デスク

3　研修日程・内容

(1)　国内研修日程

派遣前研修

日　時：平成 27 年 7 月 4 日（土）・5 日（日）

場　所：JICA 地球ひろば・JICA 東京

目　的：①　研修の趣旨及び JICA や日本の国際協力、訪問国に関する理解を深める。

②　国際理解教育／開発教育を理解し、授業実践に用いる教材の作成方法を理解する。

③　実践授業計画・教材収集を踏まえて研修における各自の役割を理解する。
また、海外研修における各種手続き・準備内容を理解する。

派遣前研修プログラム

【1 日目】

7 月 4 日（土）地球ひろば

（敬称略）

時　間		内　容		担　当	
09:30	20		開催挨拶	東京国際センター 地域連携課	佐藤　俊也
09:50	50	研修概要・導入	研修概要／全体説明	東京国際センター 地域連携課	稲生　俊貴
10:40	30	国際理解Ⅰ　講義	日本と地球的規模の課題の理解 日本政府の途上国支援と JICA 事業の理解	東京国際センター 地域連携課	古賀　聡子
11:10	50	国際理解Ⅱ　講義	ODA と非政府組織 NGO（身近な国際協力）の活動理解	東京国際センター NGO 連携課	山崎　唯司
12:00	60	昼食			
13:00	90	研修導入Ⅰ　講義	市民参加協力、国際理解教育／開発教育	地球ひろば 地球案内人	中野　学
↓	↓	研修導入Ⅱ　見学	体験ゾーン見学		
↓	↓	研修導入Ⅲ　ＷＳ	国際理解教育ワークショップの体験		
14:30	45	訪問国理解Ⅰ	訪問国概要（歴史、文化、風習）	元モンゴル SV	佐藤　聡
15:15	45	訪問国理解Ⅱ	両国と地球的規模の課題（2 か国と日本から）	元ザンビア SV	上野　和憲
16:00	45	訪問国理解Ⅲ	ODA プロジェクト、援助実績、日本との関係	東・中央アジア部 東アジア課	小田　遼太郎
16:45	45	訪問国理解Ⅳ		アフリカ部 アフリカ第 3 課	原澤　竜馬
17:30	30	渡航ブリーフィングⅠ	途上国一般と両国の治安、安全について	総務部 安全管理室	池田　俊一郎 佐々木　秀幸
18:00	20	渡航ブリーフィングⅡ	海外研修の日程と必要な事前準備について、諸手続き	地域連携課	稲生　俊貴
18:20	10		事務連絡	JICA 多摩地区デスク JICA 群馬デスク	山田　優 西　梨月

※ＷＳ：ワークショップ

【2 日目】

7 月 5 日（日）JICA 東京

（敬称略）

時　間		内　容		担　当	
09:00	60	ESD の視点Ⅰ	持続発展教育（ESD）と国際理解教育	文部科学省 国立教育政策研究所	濵野　清
10:00	60	ESD の視点Ⅱ	教師海外研修における ESD 的視点	東京国際センター 地域連携課	仲山　嘉彦
11:30	60	昼食			
12:30	45	授業計画Ⅰ　講義	実践授業計画・事例紹介	千葉県館山市立 神戸小学校	下村　圭
13:15	45	授業計画Ⅱ　講義	実践授業計画・事例紹介	中央大学 杉並高等学校	大塚　圭
14:00	30	国際理解Ⅲ　ＷＳ	テーマ設定	駒ヶ根訓練所 業務課	茂木　優子
14:30	30	授業計画Ⅲ　ＷＳ	実践授業で伝える内容	東京国際センター 地域連携課	本田　龍輔
15:00	90	授業計画Ⅳ　ＷＳ	実践授業計画・授業案検討 実践授業計画・コンサルテーション	東京国際センター 地域連携課	仲山　嘉彦
16:30	20		国内事前研修終了にあたって	東京国際センター 地域連携課	佐藤　俊也
16:50	10		事務連絡	JICA 多摩地区デスク JICA 群馬デスク	山田　優 西　梨月
17:00		終了			

※ＷＳ：ワークショップ

派遣後研修

日　時：平成 27 年 8 月 30 日（日）

場　所：JICA 東京

目　的：海外研修の経験を生かした授業の実施・教材作成について考える

（敬称略）

時　間		内　容		担　当	
09:00		受付			
09:30	10		開催挨拶（事後研修の意義・趣旨）	東京国際センター 地域連携課	稲生　俊貴
09:40	50	授業計画Ⅶ　ＷＳ	海外研修の整理	東京国際センター 地域連携課	仲山　嘉彦
			(1) 個人ワーク		
			(2) グループ内発表		
			(3) グループ内質問		
10:40	50	授業計画Ⅷ　ＷＳ	海外研修の共有（教材共有）	東京国際センター 地域連携課	仲山　嘉彦
			(1) グループ内発表		
			(2) グループ内質問		
			(3) 個人ワーク(聞いたことの整理)		
11:40	20	授業計画Ⅸ　講義	実践授業・事例の紹介	東京国際センター 地域連携課	本田　龍輔
12:00	60	昼食			
13:00	30	授業計画Ⅹ　講義	授業計画について	東京国際センター 地域連携課	仲山　嘉彦
13:30	115	授業計画Ⅺ　ＷＳ	授業づくりについて	東京国際センター 地域連携課	仲山　嘉彦 桶田　雅仁
			(1) 授業計画づくり		
			(2) 実践授業計画の共有		
16:00	30	実践授業導入・講義	機構が期待する成果、実践授業と報告会へ向けた計画・授業実践への期待	駒ヶ根訓練所 業務課	片山　裕之
16:30	20		事務連絡	JICA 多摩地区デスク JICA 群馬デスク	山田　優 西　梨月
16:50	10		閉会挨拶	東京国際センター 地域連携課	稲生　俊貴
17:00		終了			

※ＷＳ：ワークショップ

(2) 海外研修日程

【モンゴル】

日　時：平成 27 年 8 月 9 日（日）～ 18 日（火）

月　日	曜日	時間	訪問先・活動	内　容
8月9日	日		移動（成田→インチョン→ウランバートル）	
8月10日	月	09:00	JICA事務所	無償資金協力事業：小学校見学、ゲル地区見学
		11:30	日本大使館	
		14:30	第17番学校（無償資金協力）	
		18:00	振り返り	
8月11日	火	09:30	JICA事務所	ソンギノハイルハン地区の教育・文化課長および第12番学校長からモンゴルの教育についてブリーフィング
		13:30	JICA事務所	教育分野ブリーフィング
		16:00	保健開発センター：「一次及び二次レベル医療施設従事者のための卒後研修強化プロジェクト」	
		18:00	振り返り	
8月12日	水	13:00	モンゴル日本人材開発センター	
		14:30	新モンゴル高校：篠原学爾（青年海外協力隊：日本語教師）	ボランティア活動事例、現地における高等学校の教育の現状・課題
		16:00	ウランバートル市内教材収集	
		18:00	淡水資源・自然保護センター：横山裕樹（青年海外協力隊：環境教育）	ボランティア活動事例、現地における環境教育の現状・課題
		10:00	振り返り	
8月13日	木	09:00	移動（ウランバートル→トゥブ）	
		12:00	トゥブ県スポーツ委員会：河村亮（青年海外協力隊：バレーボール）	ボランティア活動事例、現地における初等学校の教育の現状・課題
		14:30	新ウランバートル国際空港建設事業	円借款事例紹介：建設サイト見学
		15:30	移動（トゥブ→ウランバートル）	
		17:15	中間振り返り	
8月14日	金	09:00	セーブ・ザ・チルドレン・ジャパン モンゴル事務所	本邦NGOの活動事例紹介
		10:45	JICA事務所：吉田量子＜スジャータシャンド（NGO）＞（青年海外協力隊：幼児教育）	ボランティア活動事例、現地における幼児教育の現状・課題
		14:30	モンゴル生命科学大学：「獣医・畜産分野人材育成能力強化プロジェクト」	SATREPS事例紹介、日本の援助の現状と成果
		17:30	振り返り	
8月15日	土	08:30	移動（ウランバートル→カラコルム）	無償資金協力事例紹介、日本の援助の現状と成果
			世界遺産：オルホン渓谷の文化的景観	
		16:00	チベット仏教寺院群エルデニ・ゾー	
		17:20	カラコルム博物館：「カラコルム博物館建設計画」案件視察（無償資金協力）	
		18:00	ゲルキャンプ　チェックイン	
		18:30	遊牧民族訪問	
8月16日	日	09:00	移動（カラコルム→ウランバートル）	
		17:00	振り返り	
8月17日	月	09:15	JICAモンゴル事務所報告	
		10:15	JICA事務所：ESD視点での研修成果整理、報告書作成	
		14:00	ウランバートル市内見学	
		16:30	市内教材購入	
			ガンダン寺	
		18:00	ザイサンの丘	
8月18日	火		移動（ウランバートル→インチョン→成田）	

※SATREPS：地球規模課題対応国際科学技術協力
(Science and Technology Research Partnership for Sustainable Development)

【ザンビア】

日　時：平成 27 年 7 月 27 日（月）～ 8 月 5 日（水）

月　日	曜日	時間	訪問先・活動	内　容
7月27日	月		移動（羽田→ドバイ→ルサカ）	
7月28日	火	08:00	JICA事務所	事務所ブリーフィング
		13:00	ナショナルサイエンスセンター：「授業実践能力強化プロジェクト」	専門家によるザンビア教育セクターの説明 プロジェクト教育プログラムの説明・教材政策現場の視察
7月29日	水	08:20	ルサカ州教育省表敬	
		10:15	ムカマンボ・セカンダリー・スクール：「授業実践能力強化プロジェクト」	学校見学・校長先生表敬 理数科目の授業研究見学
		14:30	チャリンバーナ・プライマリー・スクール：「授業実践能力強化プロジェクト」	教師・生徒との意見交換
		17:20	振り返り	
7月30日	木	09:00	ザンビア大学獣医学部：「ウィルス性人獣共通感染症の調査研究プロジェクト」	SATREPS事例紹介、日本の援助の現状と成果
		10:45	AFIL ENGINEERING LTD.：「品質・生産性向上（カイゼン）展開プロジェクト」（開発調査）	開発調査事例紹介、日本の援助の現状と成果
		14:00	ンゴベコンパウンド：吉澤雄介隊員（障害児支援）	ボランティア活動事例、現地における障害児支援の現状・課題
		15:30	ンゴベコンパウンド：「ルサカ市周辺地区給水計画」案件視察（無償資金協力）	無償資金協力事例紹介、日本の援助の現状と成果
7月31日	金	09:00	マテロヘルスセンター：ルサカ郡病院整備計画（無償資金協力）	無償資金協力事例紹介、日本の援助の現状と成果
			マテロヘルスセンター：安藤政子（シニアボランティア：看護師）	ボランティア活動事例、現地における医療事情について
		10:45	移動（ルサカ→マザブカ）	
		14:00	セント・クレメンツ初等学校：藤輪翔大（青年海外協力隊：小学校教育）	ボランティア活動事例、現地における初等学校の教育の現状・課題
		16:00	マザブカ畜産研究所：近藤博（シニアボランティア：家畜飼育）	ボランティア活動事例、現地における日本の援助の現状と成果
8月1日	土	07:30	移動（マザブカ→リビングストン）	
		13:00	世界遺産：モシ・オ・トゥニャ（ヴィクトリアの滝）国立公園視察等	
8月2日	日	09:00	移動（リビングストン→ルサカ）	
		18:00	振り返り	
8月3日	月	08:30	ルサカ市内見学	
			市内教材購入	
		14:00	ワークショップ報告	
		17:00	準備・資料整理	
8月4日	火	09:30	事務所報告	
		14:30	大使館報告	
			移動（ルサカ→ドバイ）	
8月5日	水		移動（ドバイ→羽田）	

※ SATREPS：地球規模課題対応国際科学技術協力
(Science and Technology Research Partnership for Sustainable Development)

4　プロジェクト概要

(1)　事業形態概要

■　有償資金協力（円借款）

多くの開発途上国では、電力・ガス、運輸、通信などの経済社会基盤（インフラ）の整備が不十分です。また近年、世界的な貧困層の拡大に加え、国境を越えたHIVなどの感染症、大気や水の汚染、紛争・テロなどの地球的規模の問題が顕在化しています。このような問題に対処するため、国際社会では「ミレニアム開発目標（MDGs）」を共通のゴールとして定め、各国がさまざまな対策を打ち出しています。

また問題解決のため、開発途上国に対して低利で長期の緩やかな条件で開発資金を貸し出すことにより、開発途上国の発展・経済社会基盤の向上への取組みを支援します。

円借款による支援地域は、日本と地理的・歴史的・経済的なつながりの強いアジア地域が中心となっていますが、アジア地域以外の国々のニーズも大きく、これまで合計103カ国に及ぶ幅広い国と地域を支援しています。

■　無償資金協力

開発途上国の中でも、所得水準の低い諸国を中心に、経済社会開発のために必要な分野が中心に必要な資金を贈与するもので（いわゆる現物供与は行っていません。）返済を求めない資金協力です。

特に医療や給水、農村開発、運輸交通などの基礎的な分野においては、病院、学校、道路、橋等の建設を行う「施設の建設」、医療機材や教育訓練機材等の調達を行う「資機材の調達」を中心とした社会・経済の基盤づくりなど、主にハード面での協力を担っています。また、教育、HIV対策、子どもの健康、環境など、開発途上国やその国民の将来にかかわるサービスを購入することも可能です。

無償資金協力は、開発途上国及び国際社会のニーズを踏まえて、迅速かつ機動的な援助を実施するものであり、相手国にも高く評価されています。

■　技術協力（技術協力プロジェクト）

技術協力の中心的な事業です。開発途上国の人づくりを中心とする事業目的の達成のため、専門家派遣、研修員受入、機材供与の3つの投入を、ひとつの協力事業（プロジェクト）として有機的かつ柔軟に組み合わせながら一定期間実施するものです。事業計画の立案から実施、評価までを一貫して計画的かつ総合的に運営・実施することで、より確実な成果を得てきました。

近年、開発途上国のニーズが従来にも増して多様化している状況を踏まえ、日本はこれまで以上に限られた資源を有効に活用し、相手国の広範なニーズより大きく貢献できる技術協力を行うため、専門家派遣、研修員受入、機材供与等の投入要素の組み合わせや投入規模、協力期間を事業の目標・成果に応じて柔軟に選択できる技術協力プロジェクトを導入しました。

多くの技術協力プロジェクトでは、開発途上国のオーナーシップを高めるため、計画の立案と運営管理・評価に、プロジェクト対象地域の住民などにも参加してもらう「参加型」の手法を取り入れています。また、民間企業や大学、NGOなどと連携し、蓄積された経験や知識、ノウハウを各方面で活用してもらうことで、より複雑で高度な課題に対応するとともに、より広範に成果を普及させることを目指しています。

■　青年海外協力隊／シニア海外ボランティア

日本国政府による海外ボランティア派遣制度です。「開発途上国の経済・社会の発展、復興への寄与」「友好親善・相互理解の深化」「国際的視野の涵養とボランティア経験の社会還元」の3つを目的とし、120以上の職種において参加者を年2回募集します。「自分の持っている技術・知識や経験を開発途上国の人々のために活かしたい」と望む／強い意欲を持つ20歳～39歳までの日本国民を開発途上国に主として2年間派遣します。1965年の発足、派遣開始から約4万人が88カ国に派遣されました。近年では年間で2,000人が途上国で活動しています。40～69歳までを対象としたシニア海外ボランティアの制度もあります。

(2)　プロジェクト概要

【モンゴル】

■　オルホン渓谷／カラコルム博物館

1235年にモンゴル帝国の首都に定められたカラコルムは遡る8世紀の突厥の時代から16世紀末までモンゴル本土の拠点都市として重要視されていました。

このカラコルムが位置するオルホン川河畔はまた、オルホン渓谷としてユネスコ（国際連合教育科学文化機関）の世界遺産に登録されています。

カラコルムの遺跡群は国際的にも極めて重要でありますが、同地には出土品を保存・収蔵する施設がなかったため、貴重な遺物の劣化や損傷が危惧されてきました。そのため遺跡の保護・調査・公開に係る拠点の整備について日本へ支援の要請があり、日本政府は一般文化無償資金協力の一環でカラコルム博物館が建設され2011年6月に開館しました。

博物館は貴重な遺跡や出土品を守るとともに観光拠点として世界遺産の中核を担っています。

■　新ウランバートル国際空港建設事業

近年、モンゴル国はその豊富な地下資源や畜産資源を背景に経済成長率を遂げており、海外からの渡航者も年々増えています。しかしながら、既存のチンギスハーン国際空港は、その立地条件から離着陸が一方向に限られ、気象条件によっては、航空機の離着陸が制限されています。このようなモンゴルの経済成長に伴い、国際線を中心とした航空需要の増加に対応するために計画されました。新空港は円借款を活用し、三菱商事株式会社　千代田化工建設株式会社が共同で建設を受注、下請け建設業者は韓国のサムソン、モンゴル側の下請け企業は国家建設コーポレーション。3カ国の企業による連携プロジェクトで2017年の開港を目指しています。

■　モンゴル日本人材開発センター

1990年代から市場経済体制への移行を推し進めるモンゴルは、近年、豊富な鉱物資源の価格上昇を背景に目覚ましい経済成長を遂げています。一方、鉱業以外の産業育成が進まず、産業の多角化や雇用創出の観点から、中小企業の育成、強化が重要な課題となっています。

こうした背景を踏まえ、2002年から「モンゴル日本人材開発センタープロジェクト」を実施し、モンゴル日本人材開発センターをベースに市場経済化に取り組むモンゴル政府の人材育成と日本との関係強化を支援してきました。センターは、日本の無償資金協力でモンゴル国立大学構内に建設され、ビジネス人材育成事業、日本語教育事業、相互理解促進事業を3本柱として展開しています。

これまでセンターは、ビジネス人材育成事業を通じ、1万人以上のモンゴルの中小企業経営者や従業員を育成するとともに、経営改善を支援してきましたが、近年では大手企業への経営改善支援でも高い評価を受けており、モンゴル企業関係者との信頼関係に基づくネットワークは、両国の財産となっています。

■　獣医・畜産分野人材育成能力強化プロジェクト

モンゴルでは、農牧業、とりわけ牧畜業は重要な産業ですが、これを支える獣医師の質の向上が大きな課題となっていました。特に、同国内において獣医・畜産分野の人材育成の中心的な役割を担うモンゴル国立生命科学大学（旧モンゴル国立農業大学）獣医学部の教育改善及び、既に現場で活動している獣医・畜産技術者の能力強化を求められてきました。

このプロジェクトでは、北海道大学が培ってきた日本の経験を活用し、同学部の教育カリキュラムの改善、教材等の整備、また教員の指導能力の強化を図っています。加えて、関連機関と連携して社会人教育コースの充実も図っています。

【ザンビア】

■　アフリカにおけるウイルス性人獣共通感染症の調査研究プロジェクト

ザンビアではヒトと動物の双方に感染する「ウイルス性人獣共通感染症」の発生が確認されており、その対策は国の優先課題の1つとなっています。しかしながら、教育体制や研究基盤は不完全であり、調査研究・情報の蓄積や検査診断体制等は脆弱でした。

さらには、アフリカには未知もしくは未同定のウイルスが存在している可能性が高く、新規ウイルスの研究は周辺国においても大きなニーズとなっています。

このような問題解決のため2013年から北海道大学とザンビア大学獣医学部は共同でJICAと独立行政法人科学技術振興機構（JST）による科学技術協力（SATREPS）を実施しています。

2014年の西アフリカにおけるエボラ熱の流行においてはザンビア政府は同獣医学部をエボラ出血熱検査機関に指定するとともに日本人専門家を中心に早期発見と拡散防止に貢献しました。

■　授業実践能力強化プロジェクト（STEPS）

ザンビアでは、経済発展に伴う国民の生活レベルの向上や基礎教育へのアクセス拡大により、多くの子どもが小学校に入学できるようになりました。しかし、生徒を受け入れるための教室や教材の確保、教員の育成、生徒の学力の向上が大きな課題となっています。

JICAは、2005年より授業研究を校内研修に取り入れた「理科研究授業支援プロジェクト」（SMASTE）を開始し、その成果を受けて2008年から対象地域を3州に拡大（フェーズ2）。さらに2011年からは「授業実践能力強化プロジェクト（STEPS）」を実施し、全国10州の教員に対して授業研究を通した授業実践能力の強化を図り、継続的な授業の質の改善を目指しています。一連の協力のカウンターパート機関であるナショナルサイエンスセンターでは、移動式理科実験キットや教材を製造している現場を見学、ムカマンボセカンダリースクールでは、研究授業（理科・数学）を見学しました。

■　品質・生産性向上（カイゼン）展開プロジェクト

日本の高度経済成長の原動力の一つとして、多くの生産現場にプラスの変化を生み出してきた「カイゼン」。5S〔整理（Sort）、整頓（Set）、清掃（Shine）、清潔（Standardize）、躾（Sustain）〕－カイゼン包括的品質管理アプローチが、世界の生産現場で存在感を高めています。ザンビアでは、

産業分野及びその他分野の生産性向上のため、カイゼン活動の運営組織であるザンビア・カイゼン機構（KAIZEN Institute of Zambia：KIZ）の立上げ及び、KIZ スタッフの能力強化を目的としたプロジェクトを 2014 年から実施中です。活動内容はザンビア政府内のカイゼン（品質・生産性向上）に係る組織・体制の整備、KIZ 内にカイゼンに係る指導を行うコンサルタントが継続的に育成される仕組みの構築、カイゼン活動についての関心を喚起・促進させる能力の向上などです。

(3) 青年海外協力隊／シニア海外ボランティア

【モンゴル】 ＜青年海外協力隊＞

■ 横山裕樹　職種：環境教育　配属先：淡水資源・自然保護センター

モンゴルは豊かな自然、多種多様な生態系に恵まれていますが、1990 年代以降の無秩序な開発により、生態系への悪影響や環境問題が生じています。その解決を目指し、無償資金協力によって環境保全の分野における人材育成を目的としたセンターが設立されました。横山隊員は、センター内の環境保全分野を担当し、外来者や研修者等に対して、興味を引く様な環境教育を実施する他、地域の教育機関に対しても環境教育の普及活動を行っています。

■ 河村亮　職種：バレーボール　配属先：トゥブ県スポーツ委員会

モンゴルにおいて、バレーボールは人気の高いスポーツであるが、指導者の経験が少なく知識も豊富ではないことが課題となっています。河村隊員はスポーツ委員会にて、12 ～ 18 歳の青少年に対し、バレーボールの楽しさを伝えると共に基礎的なバレーボールの実技支援や監督業務を行っています。

■ 吉田量子　職種：幼児教育　配属先：スジャータシャンド（現地 NGO）

モンゴルでは子供たち中心の指導をめざしているものの、現場の幼稚園教諭の理解は十分でなく、改善が望まれています。吉田隊員は、ウランバートル市内の幼稚園を巡回し、遊びを通じた学び、障害児向けのアクティビティの紹介、保育に関するセミナーを実施しています。また、訪問保育に協力し、障害児の療育、保護者向けの指導を行っています。

■ 篠原学璽　職種：日本語教育　配属先：新モンゴル高等学校

新モンゴル高等学校は、国内の学校の中で最も多くの留学生を日本へ送り出しています。篠原隊員は、生徒の日本語能力を向上させるべく、日本語教師に授業のカリキュラムや指導法改善のための助言をし、学校全体の日本語教育レベルを向上させるための活動を行っています。

【ザンビア】 ＜青年海外協力隊＞

■ 吉澤雄介　職種：障害児・者支援　配属先：リトル・アッシジ（ンゴベコンパウンド内）

コンパウンドと呼ばれる非計画居住区に住む知的障害、肢体不自由障害を持つ子供たちが通う学校にて活動をしています。障害の程度が軽～中度の発達障害、自閉症、脳性麻痺、ダウン症等の子供たちへの授業、同僚に対する指導案作成支援、児童の家族に対する障害児教育を行っています。また、吉澤隊員が活動するンゴベコンパウンドでは、日本の無償資金協力事業によって給水施設が作られており、これまで上水道施設の無かった住民生活の向上に大きく寄与しています。

■　藤輪翔大　職種：小学校教育　配属先：セント・クレメンツ初等学校

セント・クレメンツ初等学校は、日本の小・中学校に当たる約800名の児童・生徒が在籍しているが、教員数が17名と少なく、効果的な理数科・体育科授業実施をするための教員が不足しています。藤輪隊員は、体育科授業の実施の他、理数科授業の補助、授業後の時間を利用したクラブ活動を実施しています。

＜シニア海外ボランティア＞

■　安藤政子　職種：看護師　配属先：マテロ・ヘルスセンター

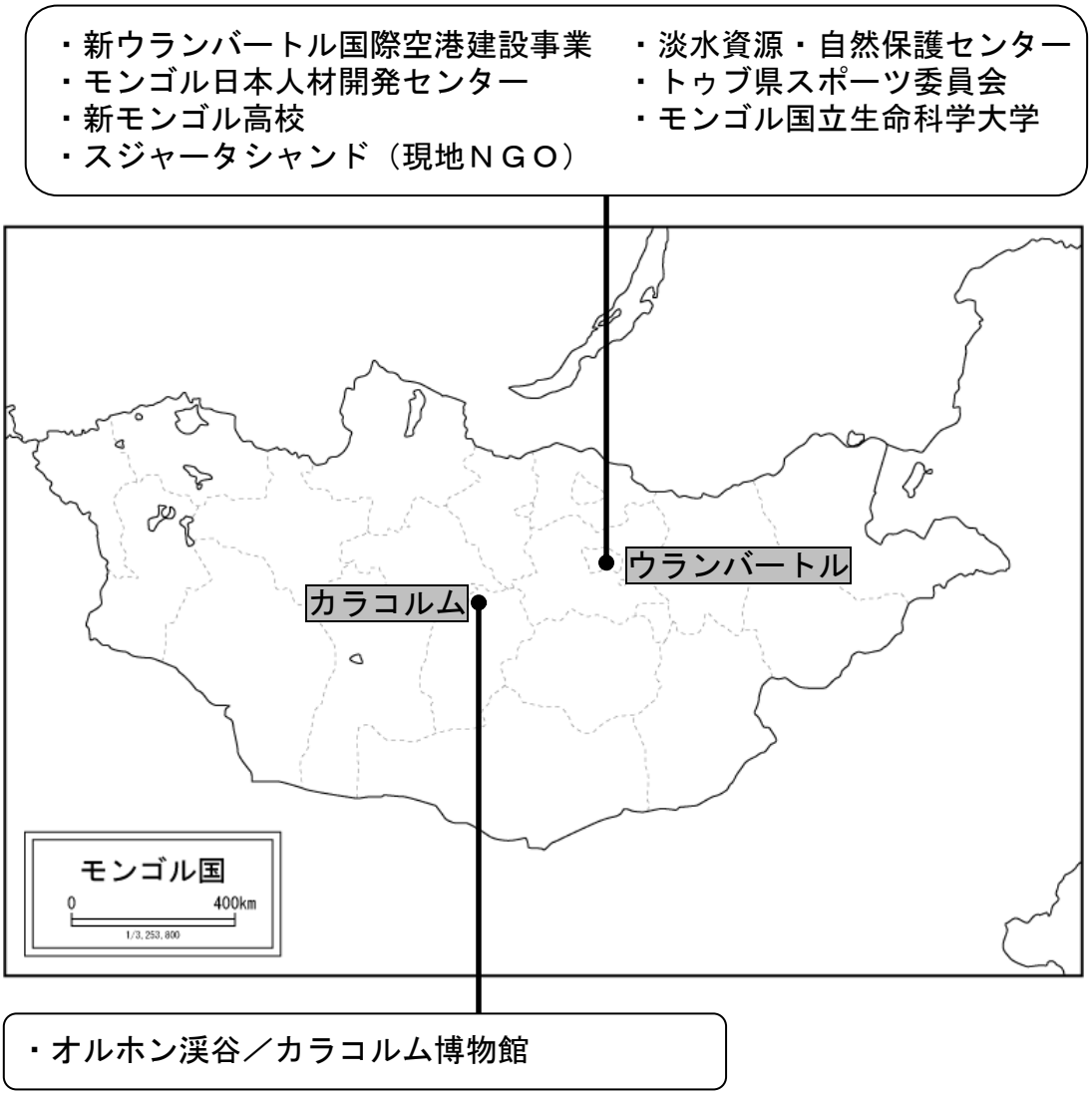
保健分野の無償資金協力として、ルサカ郡の2つのヘルスセンターに施設の整備と機材の調達を支援しました。施設を郡病院へ格上するとともに、看護師をはじめとするスタッフ数の増加、その技術レベルの充実を図る必要があり、その支援のためにボランティアが派遣されています。安藤ボランティアは、ヘルスセンターの日常業務のサポートや看護師教育、ヘルスセンター内の5S（整理、整頓、清潔、清掃、躾）改善活動に貢献しています。

■　近藤博　職種：家畜飼育　配属先：マザブカ畜産研究所

ザンビア国の南部州では一般的に畜産農家が多く、放牧が盛んに行われていますが、小規模農家レベルでは、自然交配を繰り返している為に純粋な良品種が減少しています。近藤ボランティアは、同施設で家畜の人工授精や品種改良、牧草栽培、放牧地管理などについて指導しています。

（4） プロジェクトサイト位置図

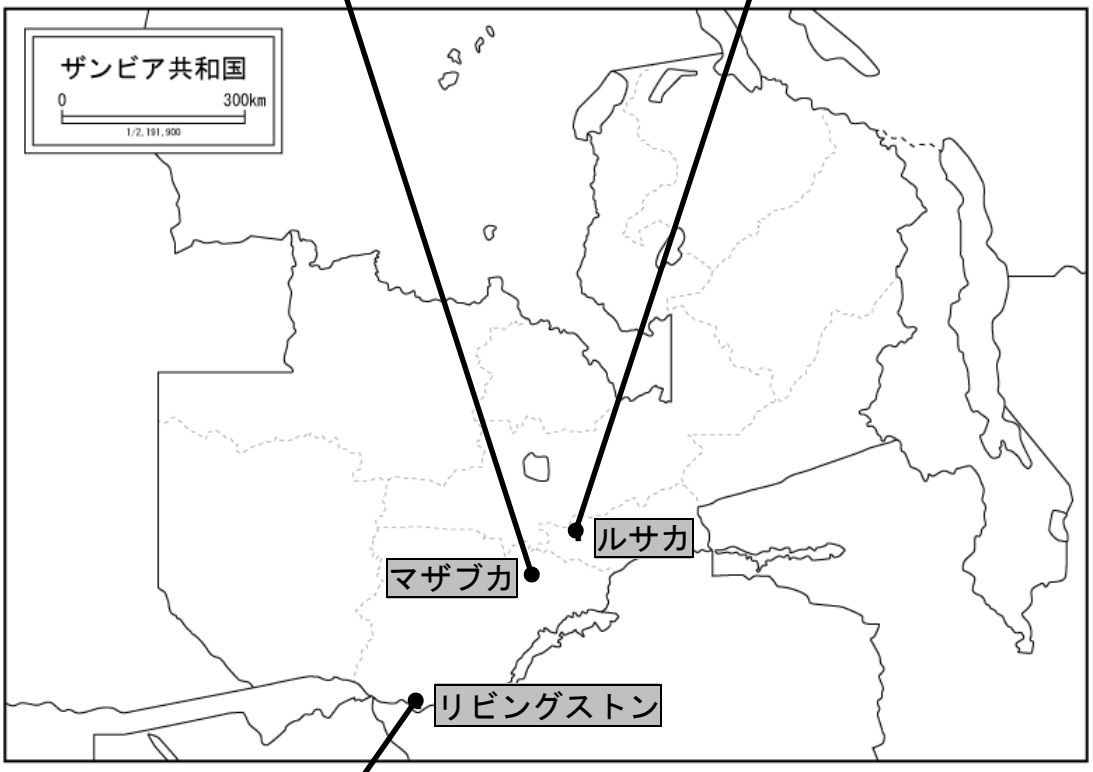
【モンゴル】



【ザンビア】

・ルサカ州教育省
・ナショナルサイエンスセンター
・ムカマンボ・セカンダリー・スクール
・チャリンバーナ・プライマリー・スクール
・ザンビア大学獣医学部
・ザンビア改善機構
・マテロ・ヘルスセンター
・ンゴベコンパウンド

・セント・クレメンツ初等学校
・マザブカ畜産研究所



・モシ・オ・トゥニャ（ヴィクトリアの滝）

5　同行者報告

(1)　同行者報告（モンゴル）

JICA 群馬デスク
国際協力推進員　西　梨月

モンゴルチームは、10 日間の海外研修で、モンゴルの文化・人々の生活習慣をはじめ、モンゴルが直面している教育・環境・医療・産業分野の課題を見聞きしました。当機構が実施している無償資金協力、有償資金協力、技術協力プロジェクト、共同研究、青年海外協力隊と、様々な国際協力の現場を視察し、参加教諭は日本が国際協力を行う意義や事業に関わる日本人の意気込み、また文化や背景が異なる人と共に活動をする難しさを学ぶことができたと思います。多方面からモンゴルや日本の国際協力を学び帰国した参加教諭は、帰国後研修で現地での学びを整理し、他の参加教諭と意見交換を重ねながら授業を組み立てました。

多くの教材を得たなかでも、特に海外で活躍をする日本人として「青年海外協力隊」は参加教諭の印象に強く残り、授業実践で扱う方が多くいました。現地のことを考えながら、現地の人々と共に課題に取り組んでいる彼らの姿は、参加教諭自身の仕事への取り組み方を見直す機会となったようで、児童・生徒に対しても「働き方」のひとつ、「自分の生き方を考える」教材として採用していました。同じ青年海外協力隊という教材であっても、参加教諭の切り口は様々で、青年海外協力隊は「モンゴルで何をしているのか？」、「なぜモンゴルで活動をしているのか？」、「何を大切に活動しているのか？」、「活動の難しさは何か？」など各教諭の伝えたい視点で児童・生徒に問いかけ、考えさせる授業を行いました。

ある教諭は、「児童に外国が抱える問題に対して何かしたいという気持ちを育んでもらいたい。」と考え、環境教育の青年海外協力隊の活動に焦点を当てました。彼がモンゴルのゴミ問題（ゴミのポイ捨てやリサイクルがされていない現状）について子ども達に授業をしていることを紹介し、環境問題に対して取り組みたいことをポスター制作により宣言させました。低学年の児童も、モンゴルを例に環境問題を知り、「水や電気を無駄にしない。」、「食べ物は残さない。」など、自分にも地球のためにできることがあるという意識が芽生えました。また別の教諭は、「異なる文化を持つ人々と協力する態度を育てたい。」という目標を掲げ、青年海外協力隊の活動や葛藤、課題を紹介することで、国際協力を行う際に大切にしていることは何かを児童に考えさせる授業を行いました。文化も習慣も環境も異なるモンゴルで、彼らはどんな気持ちで活動をしているのか、児童は普段の学校生活と照らし合わせながら考え発表し合いました。「相手のことを考えて活動している。」、「みんなを助けたい気持ちが強くなった。」、「日本はモンゴルを大切にしている。」と、児童は他国を尊重し、協力をしていく大切さを学習しました。

このような授業を通し、児童・生徒は外国への興味・関心が高まり、世界の問題に対して日本人が協力をしていること、外国のことを理解することが大切であることを学ぶと同時に、自分自身の生活の見直しや自分にできることを考える機会となりました。小学校高学年の児童は、自分の意見を発表、交流することで、多様な意見があることにも気づくことができました。

授業実践を振り返り、参加教諭の多くは、児童・生徒に考えさせる時間を十分に取ること、さらに意見交流や討論を行い、考えを深めていくこと、最終的には行動につなげていくことが今後の課題であると捉えています。今回のみの国際理解教育にさせないためには、各教科に関連させて、自身の海外体験を基に世界の問題を児童・生徒に少しずつ伝えていくこと、また児童・生徒の気づきや行動変容を継続的にサポートしていくことが不可欠であると感じています。

(2) 同行者報告（ザンビア）

JICA 多摩地区デスク
国際協力推進員　山田　優

本研修を通してザンビアチームの教員は、地球的規模の課題に対して日本が包括的にアプローチしていることを学び取り、生きた教材として実践授業に生かしていました。

海外研修視察先の１つ「アフリカにおけるウィルス性人獣共通感染症の調査研究プロジェクト」においては、当該プロジェクトがザンビアにおける獣医学の人材育成だけでなく日本の科学技術の発展にもつながる共同研究であり、双方にとって価値のある国際協力の形であることに教員は感銘を受けていました。当プロジェクトサイトであるザンビア大学獣医学部に対して、日本は 1984 年から継続した支援を行っており、その結果、同大学は安全で正確な検査技術を評価され数少ないエボラ出血熱確定診断のできる機関に指定されるに至り、感染拡大防止や早期治療開始に貢献しています。これを受けて教員からは、同じ日本人の活躍や日本の支援が地球規模的課題の最前線で解決に寄与していると思うととても誇らしい、などの声が挙がっていました。

授業実践では同一の視察先を教材として扱いながらも、各教科、各教員によって多様な切り口の展開が見られました。マテロヘルスセンター（病院）視察を教材とした例では、ある社会科教員は同病院の増築工事が無償資金協力によって行われていることを紹介し、無償資金協力・有償資金協力の長所・短所を生徒に考えさせました。一連の授業を受けた生徒は、日本の支援は途上国の課題に応じて無償・有償資金協力や技術協力など複合的な手法を取っており、相手国の自助努力促進や持続性を重視している点が特徴的だと学んでいました。またある家庭科教員は同病院に派遣されている看護師のシニア海外ボランティアの活動を通して乳幼児及び妊産婦死亡率の高さやエイズなど母子保健の問題を取り上げ、子どもの成長・発育にとって「よい環境」とは何か、また「よい環境」をくつるには何をすべきか問題提起しました。生徒からは教育、医療、衣食住、安全などがキーワードとして挙がり、授業後には、将来恵まれない子どもたちへの支援に関わりたい、次世代のことも考えて行動することが大切、など自身の進路や持続可能な社会を意識した感想も得られました。

授業実践後の課題としては、生徒へのインプットや学習内容が多くなり、思考する時間や共有の時間が十分にとれなかったこと、学習内容を生かした「行動」に促すことだと多くの教員が捉えています。今後の展望としては、扱う教材を選別し授業の焦点を絞ること、「行動」へ移せるよう別教科の授業と連携し学校全体で取り組むこと、JICA などの外部リソースを継続的に活用することなどが挙げられています。JICA としても国際理解教育／開発教育支援プログラムの充実、本研修過年度参加教員を含めた国際理解教育実践者のネットワークづくりの支援などを通して、教員が国際理解教育の実践を継続できるようサポートしていきます。

6　同行者所感

教師海外研修（モンゴル）に同行して

東京国際センター地域連携課
学校教育アドバイザー　桶田　雅仁

8月9日（日）～18日（火）の10日間、モンゴルへの教師海外研修に同行させていただきました。学校教育アドバイザーという立場での同行でしたが、私自身、参加された先生方とともに国際理解教育／開発教育について勉強することのできる良い機会であると捉え、そして何よりこの研修が安全にかつ充実したものとなるようお手伝いができればと考えていました。

参加者の多くは海外渡航経験が豊富であり、国際社会に目を向けようとする広い視野を持った先生方ばかりでしたので、一人ひとりしっかりとした目標（テーマ）を設定し研修に参加されていたと思います。現地でのサイト見学を通じて、改めてJICAの国際協力の素晴らしさを実感し、それをどう帰国後の授業実践に落とし込めていくか、日々の振り返りでの意見交流はとても盛り上がりました。

また、事前研修→海外研修→事後研修と、参加者・同行者合わせた12名が1つのチームになっていく様子がとても印象的でした。同じ時間を共有していくなかで、お互いがお互いを理解し、それぞれが自分の役割を持ち集団が確立していく姿は、まるでクラスが出来上がっていく過程を見ているようでした。

最後に、教師海外研修の目的は参加することではなく、参加された先生方がこの研修で見た･聞いた･感じたことを学校現場、そして地域に還元していくことだと思います。今後ともお互い情報交換をしながら切磋琢磨し、それぞれが研修の成果を広めていくことで、12名の小さな輪がさらに大きな輪へと広がっていくことを期待しています。

7　実践授業報告

授業実践報告書フォーマット

［ESDの視点に基づいた授業実践］

“持続可能な発展のための教育（ESD）”の視点に基づいて授業を実施し、その視点について報告書内に記載しています。

・「2. 単元の目標」
ESDで重視する7つの能力・態度に該当するものがあれば記載

・「3. ESDの視点」
該当するESDの視点を丸で囲み、具体的な内容を記載

学校名：
氏名：
［担当教科：］
● 実践教科等：
● 時間数　：　時間
● 対象生徒　：
● 対象人数　：　人

1 単元名

2 単元の目標（ESDの能力・態度）

3 ESD（持続可能な社会づくり）の視点

多様性	相互性	有限性	公平性	連携性	責任性

4 単元の指導について
（1）教材観
（2）児童生徒観
（3）指導観

5 評価規準

観点				
評価規準				
評価方法				

6 単元の構成
※太枠の授業内容詳細を「7授業事例の紹介」に記載

時限	小単元名	学習のねらい	授業内容
1			
2			
3			
4			
5			

【参考資料】

持続可能な発展のための教育（ESD）を学校教育でどう進めるか？！
「ESDの学習指導過程を構想し展開するために必要な枠組み」
（国立教育政策研究所　教育課程研究センター）
http://www.nier.go.jp/kaihatsu/pdf/esd_leaflet.pdf

7 授業事例の紹介

小単元名【　　】

（1）指導案
（ア）実施日時　〇〇月〇〇日（　）第〇限
（イ）実施会場　〇〇〇教室
（ウ）本時の目標
（エ）指導のポイント
（オ）本時の展開

過程・時間	指導内容	学習活動	指導形態	指導上の留意点	評価（評価規準・評価方法）

（2）授業の振り返り
（3）使用教材
（4）参考資料等

8 単元をとおした児童生徒の反応/変化

9 授業実践全体の成果と課題及び課題の改善策

10 教師海外研修に参加して

［PDCAサイクルに基づいた授業実践］

PDCAサイクルに基づいて授業を実践し、検証の結果を報告書内に記載しています。

・「9. 授業実施全体の成果を課題及び課題の改善策」

単元目標の達成状況を記載。PDCAサイクルにおける授業実施におけるチェック（検証）とアクション（改善）の一連のプロセスを具体的に記載する。また、8で記載した児童生徒の反応／変化に関する所見に加え、学校全体や他の教員への波及、保護者の反応等があれば記載する。

※　「教師海外研修」過年度参加教員の実践事例をJICA東京ホームページに掲載しています。
http://www.jica.go.jp/tokyo/enterprise/kaihatsu/kaigaikenshu/

（1） モンゴル派遣

1） 小学校

① 「川島町から世界に発信！」～モンゴル＆日本～ …… 38
埼玉県比企郡川島町立八ッ保小学校　菅原　千絵

② 世界に目を向けて …… 44
野田市立中央小学校　今井　清人

③ 世界で輝く日本 …… 50
四街道市立中央小学校　川向　典希

④ 世界とつながろう …… 56
千葉県船橋市立塚田小学校　髙橋　千尋

⑤ 考えよう　外国のこと、見つめよう　自分のこと …… 62
練馬区立南町小学校　奥山 さやか

⑥ かんがえよう　ぼくたち・わたしたちにできること …… 68
東村山市立久米川小学校　杉本 万貴子

⑦ せかいのなかまと　つながろう　～うしなかちゃん　モンゴルへ行くの巻～ …… 74
新宿区立牛込仲之小学校　蕎麦田 佳子

⑧ わたしとモンゴルと世界と …… 80
多摩市立大松台小学校　濱元　徹美

⑨ 明日をつくるわたしたち …… 86
長野県中野市立倭小学校　松井 真由美

2） 特別支援学校

① モンゴルについて学ぶ …… 92
東京都立王子特別支援学校　加藤　佑圭

(2) ザンビア派遣

1) 中学校

① アフリカの人々の暮らしとその変化 …… 98
埼玉県立伊奈学園中学校　島村　勲

② 地理的分野・世界のさまざまな地域
よりよいアフリカ州をめざして」～アフリカ州の持続可能な発展 …… 104
東京都墨田区立両国中学校　輪湖 みちよ

③ 世界とつながる日本　～共助・共生の関係を目指して～ …… 110
阿賀町立阿賀津川学校　石黒 富久美

④ 私達は開発途上国とどのような関係を築いていけば良いのか …… 116
長野県栄村立栄中学校　市川　志野

⑤ ザンビアを通して世界の課題を考える …… 122
松本秀峰中等教育学校　續　美穂

2) 高等学校

① 食のグローバリゼーション！
～これからも美味しいゴハンを食べ続けるために私たちにできること～ …… 128
群馬県立伊勢崎興陽高等学校　岡橋　弘和

② 国際協力について考える …… 134
埼玉県立伊奈学園総合高等学校　箱田 恵梨香

③ 英語で世界に出会う …… 140
自由の森学園中学・高等学校　松村　美緒

④ 「国際協力」について考えてみよう！ …… 146
千葉県立成田国際高等学校　富田　明澄

⑤ 持続可能な社会をめざして　～発展途上国とのつながりから考える～ …… 154
新潟県立高田高等学校　蜂屋 有希子

学校名：埼玉県比企郡川島町立八ッ保小学校 氏名：　菅原　千絵 ［担当教科：全教科］	● 実践教科等：総合的な学習の時間 ● 時間数　　：8時間 ● 対象生徒　：5年生 ● 対象人数　：14 人

1　単元名

「川島町から世界に発信！」～モンゴル＆日本～

2　単元の目標

・世界の多様な文化・生活を知り、類似点・相違点に気付き、外国への興味を持つ。
（進んで参加する態度）

・世界の児童たちの現状を知り、自分に何ができるかを考えることができる。
（未来像を予測して計画を立てる力）

・世界との貿易や工業生産について知り、世界の実情を理解する。　（多面的・総合的に考える力）

・違いを認め合いながら、豊かな人間関係をつくるための行動目標を自己決定できる。
（つながりを尊重する態度）

3　ESD（持続可能な社会づくり）の視点

多様性	相互性	有限性	公平性	連携性	責任性

・モンゴルと日本の文化や生活の類似点・相違点に気付く。（多様性）

・貿易及び工業生産を通して、日本と世界はつながっていることに気付く。（相互性）

・互いの違いを認め合い、自分と異なる意見や立場を大切にしながら、自分にできることを考える。
（連携性）

4　単元の指導について

（1）教材観

本単元では、モンゴルの生活や地理的環境、工業生産などを通して、世界の実情や日本と世界のつながり、日本との類似点・相違点について理解を深めながら豊かな人間関係を構築する素地を養うことをねらいとしている。

本校は、開校百二十余年を数える伝統校である。学区内は田園の中に集落が点在する伝統的な農村地帯で、豊かな自然環境に恵まれている。

一方で、平成 20 年には圏央道（首都圏中央連絡自動車道）川島インターチェンジの供用が始まり、田園環境と調和した産業基盤づくりとして郊外型商業施設やインター産業団地を整備している。このように、社会の様相が変化している中、変化に柔軟に対応する力を育成することが求められている。

一人一人を大切にする気風の中で、児童は伸びやかに育ち、豊かな体験活動を通して、確かな学力と健やかな心と体を身につけるよう取り組んでいる。また、地域の温かい思いを受け止め、元気に学校生活を送っている。

一方で、多様な価値観を認め合いながら豊かな人間関係を築くことに課題がある。モンゴルの様子から、世界の国々の暮らしや文化の違いを見つめ、学ぶことで多様な見方や考え方を育むためにふさわしい教材である。モンゴルという国、文化に触れて、日本との違いを「楽しい」「おもしろい」と感じるように展開し、興味を持たせていく。そして、日本がモンゴルを始めとする開発途上国といわれる国々に対して行っている支援・協力活動は、一方的なものではなく、将来、世界中の人々のためになる強い繋がりのあるものであることを考えさせていきたい。

（2）児童観

本学級の児童は、新しい知識や考えを知ることに興味を持って取り組む姿が見られる。外国語活動では、英語を話したり、様々な国の言葉や文化を知ったりすることにとても意欲的である。社会科では、国旗や国名に興味のある児童や、外国の食文化や生活習慣の違いに興味を持ち家

庭学習で調べてくる児童が見られる。

学校生活に関するアンケートの結果や日頃の生活の様子から考えると、児童間の関係は概ね良好であるといえる。しかしながら、少人数、変化の少ない人間関係から、友達と比較したり、「あの子には何をやってもかなわない。」と最初からあきらめてしまったりする児童もいる。周囲から認められることにより自分のよさに気付き、自信を持つことができるようになると考える。一人ひとりが素晴らしい個性を持った存在であり、自分のよさや可能性を大切にしていこうとする心情を高めたい。そして、今後、新しい環境になっても、変化に対応しながら豊かな人間関係を築くことができるようになってほしいと考え本単元を設定した。

（3）指導観

5年生の発達段階として、個人差はあるが以下の特徴があげられる。

・知的欲求が高まり、表面的な楽しさだけでなく、興味関心のあること、考えて行う活動に興味を持つようになる。
・抽象的な内容を分析して理解することができる。
・物事を論理的に思考する力を求めるようになり、知識を体系化する能力が高まってくる。
・思考の範囲が広がり、日本からさらに世界への関心を持つようになる。
・マスメディアからの情報を正確に理解し、推理する力が高まる。
・広い視野を持って自らの個性を探る時期になる。

身体も大きく成長し、自己肯定感を持ちはじめる時期であるが、反面、発達の個人差も大きく見られることから、自己に対する肯定的な意識を持てず、劣等感を持ちやすくなる時期でもある。

社会科を始め、各教科や道徳の時間を中心に、「児童たちの自己肯定感を高め、未来に夢を持てる児童を育成すること」を目指してきた。このような時期の児童にとって、本単元は抽象的な思考への対応や他者の視点に対する理解にふさわしいと考える。自他の尊重の意識や他者への思いやりなどの涵養にもつなげていきたい。

教師海外研修に参加し、共生社会の中で生きていること、日本と世界は相互関係にあることを実感した。世界の実情を知り、考えることで、将来にわたり国際貢献に取り組む児童の育成につながると考える。国際理解教育がねらいとする、「広い視野とともに、異文化に対する理解や、異なる文化を持つ人々と共に協調して生きていく態度を育成する。」ことは、違いを認め、そして豊かな人間関係を育むことにつながると考えた。日本は様々な形で国際貢献を行い、共生社会の中で生きていくことを伝えていきたい。自分自身が実際に見学して受けた感銘や実感したことを児童に伝え、これからの未来を創る児童が社会への希望、興味・関心を持つきっかけづくりとしたい。

5 評価基準

観点	世界の多様な文化・生活について興味・関心を持って取り組む。（関心・意欲・態度）	世界の現状を知り、自分にできることを考える。（思考・判断・表現）	フォトランゲージを通してモンゴルと日本の共通点・相違点を見つける。（技能）	世界との貿易や工業生産あんど日本とのつながりについて理解する。（知識・理解）
評価規準	世界の多様な文化・生活について知り、自分と同じところ、違うところに気付き、外国への興味を持って学習に参加している。	世界の実情を知り、自分にできることを考え、発表したりワークシートに書いたりしている。	日本とモンゴルを比較して見つけた共通点・相違点を書いたり発表したりしている。	世界との貿易や工業生産など日本とのつながりについて理解している。
評価方法	学習の様子 発言 ワークシート	学習の様子 発言 ワークシート	学習の様子 発言 ワークシート	学習の様子 発言 ワークシート

６ 単元の構成

時限	小単元名	学習のねらい	授業内容
1	世界の国々を知ろう	世界の国々に目を向け、興味・関心を持つ。	・世界地図を用いて世界の国々を知る。
2	モンゴルを知ろう	モンゴルの写真や遊びを通じてモンゴルという国について知る	・モンゴルの写真を見たり、クイズに答えたり、話を聞いたりして、日本との共通点・相違点について知る ・モンゴルのじゃんけんゲーム、伝統的なおもちゃ「ジャガイ」をして遊びを体験する。
3	モンゴルを知ろう、味わおう	モンゴルの伝統的なお茶「スーテーツァイ」を通して、食文化や生活習慣にふれる。	・モンゴルのじゃんけんゲーム、伝統的なおもちゃ「ジャガイ」をして遊びを体験する。 ・「スーテーツァイ」を試飲する。
4	違いについて考えよう。	食文化の違いや多様性について考える。	・嗜好と健康の視点からお互いの違いを認めること、生活習慣の違いを理解すること、共通点を探すことについて考える。
5	モンゴルの子供の様子について知ろう	モンゴルの学校について知る。日本が行っている支援活動について知る。	・学校の様子や子供の様子を知る。 ・日本が支援活動を行っていることを知る。
6	日本が行っている支援・協力について考えよう。	海外で活躍する日本人の姿や国際社会での日本の役割を知り、国際協力の大切さをしる。	・モンゴルで活躍する日本人ボランティア・専門家の活動を通して、JICA には技術協力と資金協力があることを知る。 ・日本が国際的な支援・協力によって復興できたことを知る。 ・日本の協力がどのように持続可能な生活の向上に役立つか考える。
7	青年海外協力隊の活動について知ろう。	JICAのボランティア活動について知り、日本が行っている国際協力について考える。	・ゲストティーチャーによる話から、青年海外協力隊の活動について知る。
8	日本が、私たちができることを考えよう。	・JICAの活動が、どのようにして持続可能な社会づくりにつながるかを考える。 ・自分にできることを考える。	・支援活動・協力活動がどのような成果を上げ、持続可能な社会づくりに役立つのかを考える。 ・3学期に自分が考えたり、調べたりしたいことをの計画を立てる。

７ 授業事例の紹介

小単元名【日本が行っている支援・協力について考えよう】

（1） 指導案

（ア）実施日時　12 月 15 日（火）第5限

（イ）実施会場　5年生教室

（ウ）本時の目標

・モンゴルで活躍する日本人に関心を持ち、資料などから意欲的に調べたり考えたりする。

（関心・意欲・態度）

・日本の技術協力や支援の仕組み・必要性について考える。（思考・判断）

（エ）指導のポイント

・日本らしい支援の在り方が協力であるということに気付かせる。支援や協力が持続可能な社会づくり、共生社会につながることをおさえる。
・日本も支援を受けてきた歴史があることを知り、支援・協力とは一方的でないことを知る。

①「新ウランバートル国際空港建設サイト」を教材とする。海外派遣研修で撮影した新ウランバートル国際空港の建設サイトの写真や、動画を用いる。社会科の学習と関連させながら、日本の高い技術力を生かした日本らしい協力の仕方について考えさせる。そして、写真から考えたこと、気付いたこと、想像したことを発表し、視覚的な面から児童の思考を深めさせる。

②児童の多様な考えを引き出すためにワークシートを活用する。少人数であることのよさを生かし、全員の考えや感想を発表させる。

③グループでの話し合い活動を通して、互いの意見を交流させる。

④戦後の給食の様子や東日本大震災後にモンゴルから受けた支援について写真を用いて紹介する。日本が受けてきた国際支援・協力の上に、現在の日本があることに気付かせる。そして自分自身の生活が共生社会の中で成り立っていることを考えさせる。

（オ）本時の展開

過程・時間	指導内容	学習活動	指導形態	指導上の留意点	評価（評価規準・評価方法）
導入 5分	学習課題提示	①モンゴルの小学校建設には日本が関わっていたことを確認する。	一斉	・前時を想起させる。	
展開 30分	めあて：日本がモンゴルに行っている支援・協力について考えよう。				
	海外（モンゴル）で活躍する日本の技術、日本人について知る。活動について考える。	②支援と協力について知る。 支援は「励ましながら助けること」協力は「力を合わせること。」という意味を確認する。 ③新ウランバートル空港建設に日本が支援・協力をしていることを知る。 どんな支援・協力をしているか考えて発表する。		・国語辞典で調べさせる ・気付いたこと、わかったことはワークシートに書きこませる。 ・新ウランバートル空港建設サイトの様子を写真・映像で紹介し、以下のことを説明する。 （新空港建設に関して） ①モンゴル、韓国、日本が協力して建設していること②円借款プロジェクトであること③モンゴルの自然環境に配慮しながら建設に取り組んでいること。 （モンゴルの希望） ①日本の技術（コンクリート、ガラス、自動車、機械など）②日本人の建設技術（大工さんの高い技術）③メイドインジャパンの製品に対する強い信頼	日本の支援・協力について考えている。（発言・ワークシート） 日本とのつながりについて考えている。理解している。（発言・ワークシート）
		④なぜ、日本は支援・協力をしているかを考える。	グループ 個人		支援の仕組み、必要性について考えている。理解している。 （発言・ワークシート）
まとめ 10分	日本も支援を受けていた歴史について知る。	⑤日本が戦後に受けた支援、東日本大震災後に受けたモンゴルからの支援について知り、国際協力の必要性を考える。	個人	・写真をもとに、戦後、支援を更けて復興し、経済を発展させて今の日本があることを説明する。 ・東日本大震災後、モンゴルから受けた支援について知らせる。	
	本時の学習をまとめ、次々の展開を予告する。	⑥感想を発表する。	一斉	・支援・協力が持続可能な社会づくり、共生社会につながることをおさえる。	

（2）授業の振り返り

（良かった点）

・日本らしい支援の在り方が協力であるということに気付き、支援や協力が持続可能な社会づくり、共生社会につながることを理解していた。

・写真や映像を活用したことにより、興味・関心を持って意欲的に学習に取り組むことができた。

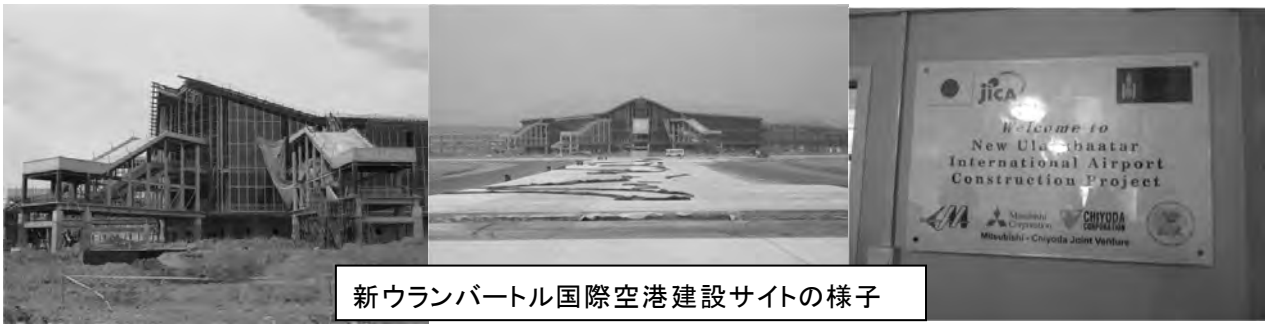
・新ウランバートル空港建設サイトを中心教材としたことにより、社会科での工業生産の学習につながった。

・学習内容を生かし、発展させながら考えることで話し合いを深めることができた。

・全員が積極的に自分の意見を発表できた。さらに、お互いの意見を聞き合うことで、様々な立場、視点から物事を考えたり、共通点・相違点を見つけたりすることができた。

（改善点とその具体的な改善策）

・お互いの感想を交流したり、考えを深め合ったりする時間を十分に持つことに課題が残ったため、次時に行った。



新ウランバートル国際空港建設サイトの様子

東日本大震災後、モンゴルから届いた支援物資

戦後、日本が援助を受けていた頃の様子

（4）参考資料等

・外務省「外交政策ODA（政府開発援助）」

＜http://www.mofa.go.jp/mofaj/gaiko/oda/hanashi/story/1_2.html＞（2015 年 12 月 1 日アクセス）

・国立教育政策研究所教育課程研究センター

「総合的な学習の時間における評価方法等の工夫改善のための参考資料（小学校）

＜http://www.nier.go.jp/kaihatsu/hyouka/shou/01_sho_sougou.pdf?time=1452072290524＞

「評価規準の作成、評価方法等の工夫改善のための参考資料（小学校　社会）

＜http://www.nier.go.jp/kaihatsu/hyouka/shou/02_sho_shakai.pdf?time=1452072536028＞

（2015 年 12 月 1 日アクセス）

8　単元をとおした児童の反応/変化　＜児童の感想から＞

（1）モンゴルの子供たち、学校の様子を調べて

・モンゴルの人が喜んでくれると、日本の工業をやっている意味があると思う。

・日本とモンゴルがもっと仲良くなったらいいなと思った。モンゴルの学校は日本と似ていたのでびっくりした。

・ぼくは、モンゴルが日本のことを好きだと知って、日本のことを誇りに思う。

（2）国際協力や、世界の人々とつながるために必要なこと

・相手の国について調べたり、日本の文化や歴史を教えたりする。

・日本、埼玉、身近にいる外国の人と進んでふれあい、コミュニケーションを取り交流を深める。

・日本の文化について知ることも大切だと思う。

・国際支援の方法をもっと詳しく調べて自分たちにできることを考える。

（3）文化や生活習慣がちがう国の人々と仲良くするにはどうしたらよいだろうか
・相手のことをよく知れば仲良くなれる。相手にも理解してもらえるように説明する。
・日本のことをもっと教えてあげたり、その国のことを教えてもらったりすれば仲よくなれると思う。
・「そうだよね。」と違いを認める。
・違いがあっても楽しい思い出をつくることができれば、仲良くなると思う。
・気が合うことを見つけ交流を深める。自分を知ってもらい、相手のことをよく知る。
・相手のことを考える。話し合う。そして、相手の気持ちをわかることが大切だと思う。
・外国と日本の文化をくらべる。お互いのよいところを伝えることで友達になり、絆が深まると思う。

9　授業実践全体の成果と課題及び課題の改善策

自分の目で見てきたことを語ることで説得力があり、児童の心に響く授業実践となった。ビデオや写真はとても有効な手段であった。実践前、何を教材として扱うか厳選するのに迷い苦労した。自分の選ぶ課題や写真によって児童の考え方が左右されてしまうと考えたからである。自分の伝えた内容がよかったか不安も残る。授業実践を通して、児童に伝えたいこともたくさんあったが、児童に考えさせる場をより大切にしたいと考えるようになった。お互いの感想を交流したり、考えを深め合ったりする時間を十分に持つことに課題が残った。考えることを通して児童のこれから人生の糧の一つとなることを期待する。

（本単元におけるPDCAサイクル）

P（計画）指導計画を立て、授業のねらいを明確にして指導案を作成した。

D（実施）ねらいを達成するために、写真、動画等を活用して実施した。具体物を教材として多く用いたり、掲示したりするなどして学習内容を身近に感じられるようにした。

C（検証）発言内容やワークシートの内容を丁寧に読み取り、思考の状況を確認した。

A（改善）これらの学びを行動に結びつけていくこと。3学期に引き続き取り組みを行い、自分たちにできることについて考え、深めさせていく。

10　教師海外研修に参加して

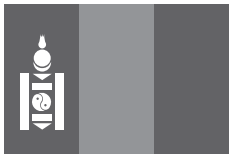
（仲間からの学び・出会い）自分と同じように在外教育施設派遣を経験した仲間、他県から参加している教員と出会い、ネットワークを広げることができた。経験を共有したり、様々な視点からの意見を聞いたりしてより研修を深めることができた。

（モンゴルという国を肌で感じることができた）実際にモンゴルに行ってみると自分の想像以上のものがたくさんあった。居心地のよさは出会った方々の優しさ、穏やかさ、明るさを肌で感じることができたからだと思う。肌で感じたモンゴルという国や日本とのつながりを大切にしていきたい。

（日本を出てからわかる日本のよさと課題）短期間であったが、日本という国を外側から見直す貴重な機会となった。あらためて日本の文化、魅力、技術の高さなどを再確認できた。一方、考えなければならない課題も見えた。モンゴルでは、夢や目標を持ち、将来は国に役立つような人材になりたいといった向上心を持っている人々に出会った。今、自分が関わっている未来を担う児童が夢や希望を持てるような教育活動、社会構築が大切であると感じた。

（日本らしい支援の仕方）日本が行っている、相手国のことを考えた思いやりあふれる支援活動は、教師が児童に対して行う教育活動に通じるところがあると感じた。児童一人ひとり見つめ、可能性を見出し、よりよい変容のために長期的な視点を持ち、それぞれに合った丁寧な支援を継続して行うことが何よりも大切だと思うからである。

（本当の豊かさとは）日本に興味・関心を持ち日本語を熱心に学習している高校生に出会った。オルホン渓谷で、当たり前のように家の仕事を手伝い一生懸命働く子供たちに出会った。その姿は凛々しく輝いていた。モンゴルの未来は明るいと確信できる姿であった。インターネットや携帯電話が当たり前の時代に誕生した現代の日本の児童に、豊かな生活というのはどういうものなのかを、人とのつながり、共生社会の中で生きることを通して考えさせていきたいと思う。



学校名：野田市立中央小学校

氏名： 今井 清人

［担当教科： 小学校全教科］

- 実践教科等： 総合的な学習の時間
- 時間数 ： 4時間
- 対象生徒 ： 小学校6年生
- 対象人数 ： 37人

1 単元名

世界に目を向けて

2 単元の目標

・モンゴルの人々や、生活、文化について知り、世界の国々への興味・関心をもつ。
（進んで参加する態度）

・モンゴルで活躍する日本人について学び、世界と日本のつながりに気づき、互いに助け合う共生の心を培う。（つながりを尊重する態度）

・モンゴルをはじめ、世界が抱える問題について知り、自分にできることはないか考えることができる。
（他者と協力する態度）

3 ESD（持続可能な社会づくり）の視点

多様性	相互性	有限性	公平性	連携性	責任性

・モンゴルと日本の生活を比較し、多様な文化や価値観があることに気づく。【多様性】

・モンゴルと日本のつながりに気づき、共生の大切さを学ぶ。【連携性】

・モンゴルが抱える問題について知り、自分にできることを考えたり、自分の生き方を見つめたりすることができる。【責任性】

4 単元の指導について

（1）教材観

6年生の子どもたちは小学校卒業を目前に、中学進学に向けての準備やこれからの自分の将来と向き合う大切な時期を迎えている。総合的な学習の時間の中では、キャリア教育を実践し、自分は何を求めて働くのか、何のために学ぶのか、どのように生きるのか等、自己と働くこととを関連づけて考えるようにしている。

今回、JICA の教師海外研修でモンゴルを訪れ、厳しい環境の異国の地で世界の国々のために働く日本人の様子を視察することができた。日本人の若者が、現地の状況に苦労しながらも、やりがいを持ち工夫して活動を続けている姿は、自己と働くことを学ぶキャリア教育の教材に適していると考えた。

また、世界に目を向け視野を広げながら、一歩深く自分の生き方を見つめてもらいたい。世界には、多様な文化や価値観を持った人々がいること、そしてそういった自分とは異なる他者を受け入れ、共に協力し合って生きていくことの大切さをこの単元を通して実感してもらいたい。

（2）児童観

本校の6学年児童は、新しい知識を得ることについて、素直に喜ぶ姿が多く見られる。外国人講師が来ての週1回の外国語活動の時間をとても楽しみにしており、異文化への興味は高い。外国語活動の時間には、英語でのコミュニケーションを積極的に楽しんでいる様子も窺える。しかし、実際の生活の中で、世界に目を向けることはほとんどなく、知っている国もほとんど挙げられない児童も見られた。

モンゴルについては、知っている児童がほとんどいない状態であった。モンゴル相撲やスーホの白い馬、ゲル等を知っている児童がいるかと思われたが、現在の横綱である「白鵬」や「日馬富士」がモンゴル人であることも知らない状況であった。数名、遊牧民や草原が広がる国というイメージを持っている程度であった。

本単元を通して、児童の視野を広げ、世界の国々の状況について興味を持たせ、日本と世界の国々がどのようにつながっているのかを理解させたい。また、世界で活躍する日本人がいることを知り、自己

の生き方を見つめ直す機会としたい。

（3）指導観

日本に対して好意的な国であるモンゴルの現状を知り、モンゴルをはじめとする世界の国々と仲よくするにはどうすればよいのかを考えさせたい。そのためには、モンゴルを身近に感じてもらうため、日本の生活と比べながらモンゴルの生活について学んでいく。特に、同年代の子どもたちの通う学校生活の中で同じような所と違う所を見つけさせる。また、興味を持っていることの大きな違いとして、モンゴルの子どもたちが日本に非常に興味を持っていることに気づかせたい。それに対して、自分たちはモンゴルについてほとんど知らない状態である。そこで、モンゴルをはじめ、世界の国々についてもっと興味を持たせ、積極的に関わっていこうとする態度を育てたい。（第１次）

日本からモンゴルへの支援について学ぶことを通して、上から目線の一方的な支援ではないことに気づかせたい。現地の人と協力して共に汗を流しての支援があったり、他国と協力しての支援があったりと、共生を常に意識しての支援が行われている。また、そういった支援が有効に行うためにも、相手の国について知ることが重要になってくる。普段どんな生活をしているか。どんなことに困っているのか。どんなことができるか。相手のことを知ることが国際理解へとつながるのである。（第２次）

世界で活躍する日本人がいることを知り、自分も世界の国々のためにできることはないか、自分を見つめ直す機会としたい。海外青年協力隊として、モンゴルのために働く日本人を紹介する。日本とは違う厳しい環境の中での苦労や、それを補うための工夫、つらい中でもやり抜ける心の支えであるやりがいを考えさせる。（第３次）

５ 評価基準

観点	関心・意欲・態度	思考・判断・表現	技能	知識・理解
評価規準	モンゴルの人々の生活を通して世界の多様な文化や国の様子について関心を持ち、意欲的に捉えようとする。	モンゴルや国際社会における課題について多面的・多角的に考察し、自分にできることはないか考えることができる。	モンゴルの人々の生活や国の様子に関する資料から、必要な情報を読み取ることができる。	モンゴルや国際社会における様々な課題について理解し、JICA の支援や国際協力についての知識を身に付けている。
評価方法	学習の様子・発言 授業の感想 話し合いの参加	ワークシートの記述 発言の内容 授業の感想	ワークシートの記述	ワークシートの記述 発言の内容

６ 単元の構成

時限	小単元名	学習のねらい	授業内容
1	モンゴルってどんな国	・モンゴルの人々や、生活、文化について知り、世界の国々への興味・関心をもつ。	・モンゴルについて知っていることを挙げる。 ・モンゴルクイズ（国旗、遊牧民の生活、学校の様子などを紹介） ・モンゴルの子どもたちの生活と自分たちの生活を比べる。 ・モンゴルなど海外の国と仲よくするには、どうすればよいか考える。
2	日本からモンゴルへの支援って何をしているの？	・モンゴルと日本の関係を理解し、共生の大切さを感じることができる。	・日本からお金を出して、学校や新空港を建設したり、家畜の感染症を予防したりする等、様々な支援を行っていることを知る。 ・日本からの一方的な支援ではなく、相手国やその他の国とも協力しながら支援をしていることに気づかせる。 ・3つの支援の共通点から共生の大切さを感じる。
3	世界で活躍する	・モンゴルで活躍する日本	・フォトランゲージで、モンゴルのゴミ事情を

	日本人　Part1	人について学び、世界と日本のつながりに気づき、互いに助け合う共生の心を培う。 ・モンゴルが抱える問題について知り、自分にできることを考え、自分の生き方を見つめることができる。	知る。 ・モンゴルの厳しいゴミ事情の中、環境教育に取り組む横山隊員の苦労、それを補う工夫した活動を知り、自己の生き方を見つめ直す。
4	世界で活躍する日本人　Part2	・モンゴルで活躍する日本人について学び、世界と日本のつながりに気づき、互いに助け合う共生の心を培う。 ・モンゴルが抱える問題について知り、自分にできることを考えたり、自分の生き方を見つめたりすることができる。	・厳しい環境の中でも、現地の特性を活かして工夫した活動を続ける日本人について、自分と比べながら考えさせる。 ・世界中の人々のために、自分は何ができるのかを考える。

7　授業事例の紹介

小単元名【世界で活躍する日本人 Part1】

（1）　指導案

（ア）実施日時　11月27日（金）第2限

（イ）実施会場　6年3組教室

（ウ）本時の目標

世界で活躍する日本人の苦労や工夫、やりがいを知り、自分はどんなことができるか考えたり、自分の生き方を見つめ直したりすることができる。

（エ）指導のポイント

日本とは違う厳しい環境の中での苦労や、それを補うための工夫、つらい中でもやり抜ける心の支えであるやりがいを考えさせる。

（オ）本時の展開

過程・時間	指導内容	学習活動	指導形態	指導上の留意点	評価（評価規準・評価方法）
導入 5分 展開 30 分	学習課題提示	世界で活躍する日本人から、自分を見つめ直そう。			
	フォトランゲージ	・草原の写真から、気づいたことを発表する。 	ペア ペア	・気付いたことをワークシートに書かせ、隣同士で意見交換の時間を設ける。	
	・草原に落ちているごみは誰が捨てた物なのか話し合う。		一斉	・びんや鉄くず等、様々なゴミが捨てられている様子を写真で見せる。	

	・写真よりモンゴルのゴミ事情を知る。	パワーポイントの資料を見ながら、教師の説明を聞く。	一斉	・モンゴルの遊牧民時代からの風習が関わっていることを押さえる。 ・そんな中で、モンゴルの子どもたちに環境教育を行う横山隊員の苦労を感じ取らせる。	
	・横山隊員の工夫した環境教育の取組を知る。	・実際に行っている環境教育を同じように体験する。 	一斉	・2択クイズ形式なので挙手させる等、全員での参加を促す。	・モンゴルの厳しいゴミ事情の中、環境教育に取り組む横山隊員の苦労やそれを補う工夫した活動を知ることができる。
	・横山隊員の取組を振り返る。	・ワークシートに横山隊員のすごいなと思うところを書く。	一斉	・自分の言葉で感想を書かせる。	
まとめ 10 分	・授業の感想	・世界で活躍日本人を学んで自己の生き方についても触れて授業の感想を書く。 			

（2）授業の振り返り

〈成果〉

・フォトランゲージから草原に落ちているゴミに目を向けさせたことで、モンゴルのゴミ問題へと自然とつなげることができた。

・最初に示した課題「世界で活躍する日本人から、自分を見つめ直そう」を意識させたことで、隊員の苦労や工夫から自分の生活を見つめ直したり、自分の将来を考えたりする活動へとスムーズに移行することができた。

〈課題〉

・パワーポイントを使用し、たくさんの写真等を見せ、実際の現地の様子を伝えるようにしたが、隊員のインタビューの動画があると、隊員の苦労や工夫がより子どもたちに伝わったのではないかと思う。

・最後に、自分を見つめ直した内容を、児童同士で交流する活動が取れるとよかった。

（3）使用教材

授業で使用したワークシート

世界で活躍する日本人から、自分を見つめ直そう

年　組　名前

☆草原に落ちているごみは、だれが捨てた物なのでしょうか？（理由も考えよう。）

☆横山隊員の「すごいな」と思うところを書きましょう。

☆自分の生き方についてもふれて、今日の授業の感想を書いてください。

フォトランゲージで使用した写真

児童の意見

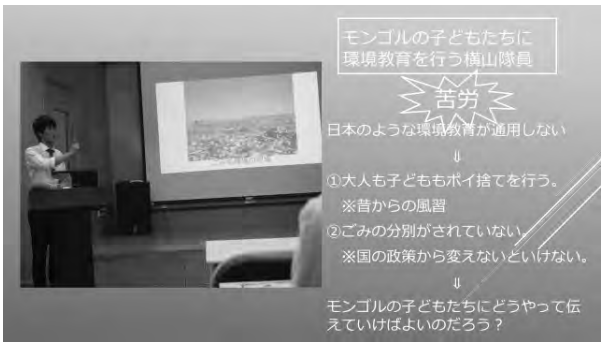
・家がない。

・人の気配がない。

・山にも木がない。

・車が通った跡がある。

・ごみが落ちている。



（4）参考資料等

特になし

8　単元をとおした児童の反応/変化

児童の感想には以下のようなものがあった。

第１次「モンゴルや他の国々の人たちと仲良くするためにはどうしたらよいだろう。」

・モンゴルや他の国に興味を持ち、知ろうとすればよい。

・日本の事をもっと教えてあげたらよい。

・いろいろな国の人たちと話をするために、英語をたくさん勉強したい。

第２次「日本とモンゴルの関係を考えよう。」

・日本だけでなく、他の国とも協力して、モンゴルのことを支援していた。将来は、どの国も仲良く助け合っていけたらいいと思った。

・モンゴルのために日本が支援しているというのがすごいなと思った。自分だけでなく、世界に目を向けなければいけないと感じた。

・日本がモンゴルにいろいろな支援をしていることを初めて知った。モンゴルの将来がよくなればいいと

思った。
第３次「自分の生き方についてもふれて、感想を書こう。」
・あきらめずに環境改善にむけて頑張っている横山隊員は、すごい。自分も、どんなことがあってもあきらめずに、人のためになることをやれるようになりたいと思った。
・私は、未来のことを考えて、今頑張って勉強して、医療で他の国の苦しんでいる人たちを助けてあげたいです。この授業をして、もっと未来についてちゃんと考えて活動したいと思いました。
・横山隊員のように、将来のことなどを考えて、何か行動してみようと思いました。

9　授業実践全体の成果と課題及び課題の改善策

教師海外研修への参加前には、日本とモンゴルとの関係を含めて日本の国際協力の在り方についての理解は浅く、授業展開にも工夫はなかった。研修先では、日本からの支援の現場を実際に目にすることができた。学校建設や空港建設等の物的支援や青年海外協力隊等の人的支援と様々な支援が行われていることを知ることができた。特に、厳しい環境の中、他国のために懸命に働く青年海外協力隊の活動を6年生の子どもたちにキャリア教育の一環として紹介し、自己の生き方を見つめ直して欲しいと考えるようになった。

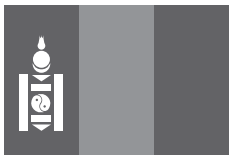
○本単元におけるPDCAサイクル

段階	項目
P計画	単元の目標や授業のねらいを設定した。 学習指導計画を作成した。 授業の準備として、モンゴルの基本情報、青年海外協力隊の活動の情報を収集した。
D実施	ねらいに基づいて、モンゴルで得た資料を教材に授業を実施した。 ワークシートに考えを記入させた。
C検証	ワークシートや授業中の発言をもとに評価を行う。 成果 ・モンゴルをはじめとする世界の国々の人たちとどのようにして仲良くしていくのかという問いかけに、今自分たちができることを考えたり、世界の国々に興味を持つことの大切さを考えたりする児童が多かった。 ・厳しい環境の中で活動する青年海外協力隊員の様子から、自分の生活を振り返ったり、自己の将来の生き方を考えるきっかけとなったりすることができた。 課題 ・青年海外協力隊の活動への感想は書けているが、自分の生活への振り返りや生き方の見直しまで書けない児童がいた。 ・児童同士が意見を交わし合う場面をもっと持てるとよかった。友だちの感じ方を知ることで、自分の考えや振り返り方、将来への捉え方等が深まってくると考えられる。
A改善	・感想の記入前に、再度、「世界で活躍する日本人から自分を見つめ直す」という本時の課題を確認する必要がある。 ・ペアやグループで話し合ったりする等、学習形態を工夫しながら学習を進めていくようにする。

10　教師海外研修に参加して

今回、JICA教師海外研修に参加し、様々なプログラムの中で、現地の方や異国の地で活動する日本人の方と交流を持つことができた。様々な人たちの話を聞く中で、日を追うごとに、日本の子どもたちは大丈夫だろうかという感情が強くなった。

モンゴルの子どもたちが、日本に関心を持ち、日本語を勉強する児童がたくさんいる中、日本の子どもたちは、世界の国々に興味を持っているのだろうか。また、我々教師が、そういう子どもたちを育てるような環境を整えられているのだろうか。日本の子どもたちが世界に目を向けられるよう、まず私が見てきたモンゴルを紹介し、他国に興味を持たせたいと考えた。たくさんの方々と交流をすることができたので、モンゴルの子どもたちの学校や生活の様子から、また青年海外協力隊として活動する3人の日本人から、その他にも日本からの支援の様子やモンゴルの環境問題等、様々な切り口からモンゴルを紹介し、世界に目を向ける子どもたちを育てるための授業作りに取り組むことができた。



学校名：四街道市立中央小学校

氏名：　川向　典希

［担当教科：小学校全科 ］

- 実践教科等：総合的な学習の時間
- 時間数　：９時間
- 対象児童　：第５学年
- 対象人数　：31 人

1　単元名

世界で輝く日本人

2　単元の目標

〇モンゴルについて調べる活動を通し、モンゴルに興味を持ったり、多様性を理解したりすることができる。（多面的・総合的な思考力）

〇世界で活躍する日本人を知り、世界の問題に対して、自己選択・決定できる資質を育むことができる。（進んで参加する態度）

3　ESD（持続可能な社会づくり）の視点

多様性	相互性	有限性	公平性	連携性	責任性

〇日本とモンゴルの文化や生活の違いに気づく。　【多様性】

〇モンゴルと日本との様々なつながりから相互性に気づく。　【相互性】

〇モンゴルと日本の物的・人的なつながりについて知り、互いに協力し合う大切さに気づく。　【連携性】

〇青年海外協力隊の人たちが他国の人のために真剣に活動する姿から、責任感をもって活動することが大切であることに気づく。　【責任性】

4　単元の指導について

（1）教材観

世界にはさまざまな国があり、日本と世界の国とでは文化・民族・宗教などに違いがある。グローバル社会を生きていく子どもたちには、それらの違いがある世界で共に協力して生きることが求められる。また、世界で起きる問題は私たちのライフスタイルにも大きく関係しており、他人事にしておくことはできない。そこで本単元を、児童にとっての国際理解の第一歩としたい。

モンゴルはユーラシア大陸に位置し、広大な土地面積をもつ国である。同じアジア圏に位置しながら、遊牧民の存在や草原など日本とは大きく異なる文化・風土を持つことに特徴がある。また、モンゴルは現在経済発展の途上にあり、開発途上国と呼ばれている。このことにより、モンゴルが抱える様々な課題の解決のために多くの日本人が青年海外協力隊として現地で活躍している。

本単元では、日本とは異なる外国としてモンゴルを扱う。日本とモンゴルの文化や生活の違いに気づかせることは、児童に多様性を感じさせるために有効であるだろう。また、そこで活躍する日本人として青年海外協力隊を取り上げることで、国際貢献の意義や日本と世界のつながりについて関心を持って学習することができると考える。

（2）児童観

学級全体の雰囲気としては、教師の話を素直に聞き行動しようとするが、おとなしい児童が多い。

世界への興味関心としては、外国語活動の時間にALTと積極的にコミュニケーションをとろうとする児童が少なかったり、夏休み中、海外旅行に行った児童が「言葉が通じなくて怖かった」「ご飯が口に合わなくて日本がいいと思った」と口にしたりするなど、あまり高くない様子がうかがえる。総合的な学習の時間では、米についての学習を行っているが、児童の関心のほとんどが日本の米についてで、世界の米について調べる児童は数名しかいなかった。

（3）指導観

児童の実態を踏まえて、本単元では児童が興味を持てるように題材を工夫し、意欲的に学習ができるようにしたい。導入では、児童がモンゴルについて興味を持てるようクイズを出したり、モンゴル料理作りを行ったりするなどの工夫をし、学習への関心・意欲を持たせる。

次に、モンゴルが抱える課題について取り上げ、それに対しての日本側の支援について考えさせる。その中でも青年海外協力隊として活躍する隊員の姿を取り上げる。児童は、世界の人のために真剣に考え行動する日本人の姿を知ることで、世界の問題や国際協力をより身近に考えることができるだろう。

これらの学習を通して、世界に興味関心をもたせ、国際社会に生きる一員としての資質を育んでいきたい。

5　評価規準

観点	学習方法に関すること	自分自身に関すること	他者や社会に関すること
評価規準	・モンゴルや、青年海外協力隊の活動に興味をもち、課題を設定しようとすることができる。 ・進んで調べることができる。 ・わかったことを工夫して表現することができる。	・調べ学習を通して、モンゴルのよさや青年海外協力隊の人の思いに気づくことができる。 ・自分なりの思いを表現することができる。	・グループの友だちと協力して、調べ学習を行うことができる。 ・自分の調べたことを周りの人にわかりやすく伝えようとすることができる。
評価方法	ワークシート 調べ学習（模造紙）	ワークシート 発言	ワークシート 調べ学習（模造紙）

6　単元の構成

時限	小単元名		学習のねらい	授業内容
1	モンゴルを知ろう	モンゴルを知ろう	モンゴルについて興味をもったり、調べようとしたりするなど意欲をもつことができる	・クイズを通して、日本とモンゴルのつながりを知り、学習の見通しをもつ
2		モンゴルについて調べよう	モンゴルの生活・文化について調べることができる	・モンゴルの生活・文化について調べる
3		グループでまとめよう	調べたことをまとめることが	・調べたことをグループごとに

			できる	まとめる
4		発表しよう	調べたことを発表し、モンゴルの文化を理解することができる	・グループごとに発表する
5		モンゴル料理作りにチャレンジ	実際に児童が調べたモンゴル料理を作って食べることを通して、モンゴルの食について理解することができる	・モンゴルについて実際に体験できるものとして、食グループの調べた料理を取り上げ、調理、食す
6	世界で輝く日本人～	モンゴルで輝く日本人～モンゴルが抱える問題へチャレンジ～	青年海外協力隊員の活動の意義について考え、次時からの目標を持つことができる	・青年海外協力隊環境教育横山隊員の活動について考える
7		世界で輝く日本人を調べよう	モンゴル以外でも活躍している日本人について調べることができる	・海外で活躍する日本人について調べる
8		グループでまとめよう	調べたことをまとめることができる	・グループごとにまとめる
9		発表しよう	発表を通して、国際社会の一員としての生き方を考えることができる	・国際社会の一員として生きることを考える

7 授業事例の紹介

小単元名 【モンゴルで輝く日本人～モンゴルが抱える問題へチャレンジ～】

（1）指導案

（ア）実践日時　平成 27 年 11 月 24 日（火）13:50～14:35

（イ）実践会場　5年2組教室

（ウ）本時の目標

モンゴルのごみ問題について知り、それを解決するために活動している青年海外協力隊横山隊員の姿を通して、世界で活躍する日本人に興味を持ち、活動の意義について考えることができる。

（エ）指導のポイント

①写真を用いて興味を持たせモンゴルの環境問題について考えさせる。

②横山隊員の活動を通して、次時への意欲を高める。

（オ）本時の展開

過程・時間	指導内容	学習活動	指導形態	指導上の留意点	評価（評価規準・評価方法）
導入 10分	①写真から何が見えるか考えさせる。 （資料1、2）	○写真から気付くことを話し合い、紙に書き込み、発表する。	グループ	○写真を各班に配付する。	環境問題に興味を持ち、発言している（発言）
3分	②通訳ツェンさんの話を紹介する。 （資料3）	○モンゴルの人のごみに対する考え方を知る。 ○モンゴルで環境教育を行っている青年海外協力隊の横山隊員のことを知る。		○日本とモンゴルでは考え方に違いがあることを捉えられるようにする。	
展開 3分	③青年海外協力隊横山隊員を紹介する。			○青年海外協力隊の横山隊員に興味を持たせられるよう紹介する。	
	青年海外協力隊　横山隊員の活動について考えよう				
8分	④横山隊員は何をしているのか考えさせる。 （資料4、5、6）	考える。		○隊員がどんな活動をしているか考えさせ、その後活動内容を紹介する。	青年海外協力隊の活動内容を知り、活動について考えている（発言）
10分	⑤横山隊員はどうしてこのような活動をしているのか考えさせる。	○活動の意義について話し合う。		○苦労しながら他国の人のため頑張る姿を強調する。	
まとめ 9分	⑥感想を書かせる。	○感想を書き発表する。		○自分だったらどうするか考えさせる。 ○数人に発表させる。	青年海外協力隊の活動の意義やその感想を書いている（ワークシート）
2分	⑦青年海外協力隊の人数についてクイズを出し、次時の見通しをもたせる。	○モンゴル以外の青年海外協力隊の活動に興味を持つ。		○現在活動中の青年海外協力隊の人数をクイズで出し、次時への興味を持たせる。	

（2）授業の振り返り

〔成果〕

・二次ではモンゴルに対して関心がある状態で本時を行った。そのため、児童は環境問題について

親身になって考えることができたと思う。

〔課題〕

・資料の提示の仕方（配布した写真が小さすぎた）

・メインの協力隊の活動意義を考える時間を多くとるべきであった。時間配分を考えたい。

（3）使用教材パワーポイント（横山隊員が利用しているパワーポイントを一部利用した。）

資料1　ゲル地区

資料2　ごみ処理

資料3　通訳さんの話

資料4　小学生にごみが自然分解するまでの時間を教えている

資料5　生ごみコンポスト

資料6　生ごみ再利用法を現地住民と活動しながら教えている

（4）参考資料

NHK for school 「スーホの白い馬」

http://www.nhk.or.jp/kokugo/ohanashi/?das_id=D0005150141_00000

8　単元を通した児童の反応/変化

〔児童の感想〕

・外国は嫌いだったけどいろいろ調べて、外国にもいい人はたくさんいるから、外国を好きになってきた。

・これから自分のできることをしたいと思います。

・言語をもっと覚えようと思った。

・外国で起きているニュースを見るようになった。

・世界と協力して絆を深めたい。

〔考察〕

児童は、世界に興味をもち、目を向けることが多くなった。国際理解の第一歩を踏み出すことができたのではないかと考える。

9 授業実践全体の成果と課題及び課題の改善策

段階	項目
P 計画	・担任の思いと総合的な学習の時間の指導要領をもとに学習指導案を作成した。
D 実施	・ねらいに基づいて、研修で得た資料を教材にした。 ・ワークシートに考えを記入した。
C 検証	・模造紙やワークシート、授業の発言をもとに評価規準に照らし合わせて評価を行った。 ・授業を参加した先生から助言を得た。 ・授業を振り返り自己評価を行った。
A 改善	・資料の提示の仕方や板書について改善をした。

10 教師海外研修に参加して

「ぼくもこんな人になれたらいいな」 これは、本時の展開で児童が書いた感想である。本単元を行うまで、自分以外のことには「関係ない」と言い、興味を示さなかった児童の言葉だ。また、二次終了後には、「青年海外協力隊になってみたいと思いました。まずしい人のお手伝いをしたい」との感想もあった。

海外研修で様々な経験をし、授業実践で何を子どもたちに伝えていけばいいのか何度も悩みながら指導案作りを行ってきた。様々な切り口はあるとは思ったが、モンゴルで出会った協力隊員の志を抱いて活動されていることに感動し、その姿を子どもたちに伝えたいと思い、本実践を行った。

子どもたちの感想からその思いが伝わったことが伺え、本当に嬉しく思った。また、本実践を通してこの二人以外にも多くの児童の変容を見ることができた。児童の変容を見ることができたことは、私にとって貴重な経験となった。

研修に参加し、たくさん悩み、迷ったが、それ以上にたくさんの学びがあった。参加することができ本当によかった。授業実践はこれで終わりだが、今後にこの経験を生かしていきたいと思う。

学校名：千葉県船橋市立塚田小学校 氏名： 髙橋 千尋 ［担当教科：小学校全科 ］	● 実践教科等： 総合的な学習の時間 ● 時間数 ： 18 時間 ● 対象生徒 ：第5学年 ● 対象人数 ：37 人

1 単元名

世界とつながろう

2 単元の目標

・世界の国々と自分たちの習慣や文化、価値観を比較することで、共通点や相違点を見付け、世界の国々への興味関心を高める。（多面的・総合的に考える力）
・世界の中の日本の役割について理解し日本が重要な役割を果たしていると共に、世界の国々はお互いに助け合っていることに気付く。（つながりを尊重する態度）
・モンゴルを始めとする世界が抱える問題を知り、自分自身にできることを考える。（進んで参加する態度）

3 ESD（持続可能な社会づくり）の視点

多様性	相互性	有限性	公平性	連携性	責任性

・世界の国々と日本には、習慣や文化、価値観に共通点や相違点があることに気付く。【多様性】
・世界中の人々は互いに関わり合って生きていることを理解する。【相互性】
・JICA のモンゴルに対する支援を知り、「支援」の在り方について考える。【連携性】
・世界の国々の「違い」を理解した上で、世界の問題に対して自分自身にできることを考える。【責任性】

4 単元の指導について

（1）教材観

本単元では、世界の国々の習慣や文化を知ることで、その違いに気付き異文化を認めると共に自国文化についても誇りを持ち、世界各国の人々と共生していこうとする態度を養うことをねらいとしている。

単元は三部構成で学習を進める。第一部「日本と関わりの深い国を調べよう」では、社会の教科書で名前が挙がる、中国・韓国・ロシア・ブラジル・オーストラリア・サウジアラビアを取り上げ、グループ毎に調べ学習を行って新聞づくりを行う。まずは世界の国々の衣・食・住と日本との関わりを調べることで、世界の国々と日本では様々な共通点や相違点があることに目を向けさせる。

第二部「世界で起きている問題について考えよう」では、モンゴルを例に発展途上国の現状や JICA の取り組みを知る。ここでは、問題の解決策を追究するだけでなく、習慣や文化が違えば「問題」の捉え方や「豊かさ」「幸せ」の価値観が違うことに気付かせたい。

第三部「ぼく・私が考える国際理解」では、学習したことをもとに実際に身近でどんなことができるのかを考え、実践していく。

（2）児童観

本学級の児童は、1年生の時から外国語活動に取り組み、週に1時間の ALT との英会話やゲームに意欲的に取り組んでいる。また、外国籍の保護者がいる児童や海外へホームスティしたことがある児童がいることで、世界には多様な文化があるという認識やそれを「知りたい」と意欲の高い児童も多い。

その一方で日本の良さはどこかという問いに対して、言葉を詰まらせてしまったり、世界に貧しい国があることを知っていても発展途上国の実情や JICA の取り組み等を知らなかったりする等児童によって知識の偏りがある。

（3）指導観

国際社会に生きていく子供たちにとって、広く世界に目を向け、外国や外国の人々に関心を持ち進んでコミュニケーションを図り仲良くしようとする気持ちを育てることは重要である。

５年生の社会の学習では、他国からの輸入によって保たれている現在の日本の食糧事情や、工業製品の貿易で他国との繋がりに気付くことができる。しかし、通常の学習の中では、教科書を読み取ったり教員の話を聞いたりして学ぶので、児童にとって世界の国々を身近に感じる実感を伴った学習にできることは多くない。

今回の単元の特徴は、教師海外研修で教員が実際に体験したことや現地の写真・動画を教材としている点である。まずは私自身が体験してきたことを語り、児童の興味や関心を高めたい。

そして、モンゴルへ行って学んだ、国際理解のためにはまずは「相手のことを知ること」、「違いを認めること」「自分自身や自国のことを好きになること」が基礎となることについて本単元を通して児童にも考えさせたい。

児童の想いを大切にし、振り返りを適宜行いフィードバックさせながら、自己の意識を保たせたり変容に気付かせ意欲化を図ったりする支援に努める。

５ 評価基準

観点	よりよく問題を解決する資質や能力	学び方やものの考え方	主体的、創造的、共同的に取り組む態度	自己の生き方
評価規準	世界の国々の習慣や文化について、目的や相手に応じて自分が伝えたい情報を取捨選択してまとめ、伝えようとしている。	発展途上国の諸問題について表現するためにどのような方法が適しているか考えている。	世界の国々について関心を持ち、その中でも発展途上国の現状について考えようとしている。	習慣や文化の違いを理解し、相手の立場に立って考え行動することの大切さに気付き、自分ができることを考えて実践している。
評価方法	学習の様子 発言 ワークシート 新聞	学習の様子 発言 ワークシート	学習の様子 発言 ワークシート	学習の様子 発言 ワークシート

６ 単元の構成

時限	小単元名	学習のねらい	授業内容
1 ～ 5	日本と関わりの深い国を調べよう	○日本と関わりの深い国を調べることで日本の習慣や文化との共通点・相違点を見付け、世界の国々に興味・関心を持つ。	1 調べ学習 （本・インターネット） 2 新聞作り 3 発表会
6	世界がもし 100 人の村だったら 『幸せ』って何だろう？①	○世界の国々や民族の多様性と世界の貧困、教育格差等に気付き自己の「幸せ」「平等」について考える。	1 「あなたは幸せですか？」 2 100人村クイズ
7	海外で活躍する 日本人	○青年海外協力隊で発展途上国で活躍してきたゲストティーチャーの話から、「国際理解・国際協力」とは何なのか考える。	ゲストティーチャー 「世界で活躍する日本人」 マラウイについて知る
8	モンゴルについて知る 「もしぼくたち・私たちがモンゴルに生まれたら」	○モンゴルを例に、人々の習慣や文化について知り、異文化への興味・関心を高める。	1 モンゴルクイズ 2 モンゴル語講座 3 モンゴルじゃんけん
9	私たちの生活の問題・モンゴルの問題について考える	○どんな国でも様々な問題を抱えていることを知る。 ○世界中の国々は、お互いに助け合って生きていることを知る。	1 日本の生活の問題 2 日本の一大事の時 3 モンゴルの生活の問題 フォトランゲージ 4 JICA とは？
10	モンゴルの学校	○モンゴルの学校の問題点を取り	1 モンゴル学校クイズ

	「もしぼくたち・私たちがモンゴルに生まれたら『幸せ』って何だろう②」	上げ、JICA がどんな支援をしてきたかを知る。 ○モンゴルの人々は「幸せ」かを考える。	2 日記から考える 3 ビデオ・JICA の取り組み（学校） 4 モンゴルの小学生の「幸せ」
11	エルサルバドルについて知る	○エルサルバドルの人々の習慣や文化について知り、異文化への興味・関心を高める。 ○これまで学んだマラウイ、モンゴルと比較する。	1 エルサルバドルってどんな国？ 2 暮らし・食事・学校
12 ～ 18	ぼくたち・私たちが考える国際理解	○発展途上国や世界の問題のために、何ができるか活動計画を立て、実践する。	1 ぼくたち・私たちにできることって何だろう

7 授業事例の紹介

小単元名【もしも、ぼく・私がモンゴルに生まれたら『幸せ』って何だろう？】

（1）指導案

（ア）実施日時　11月9日（月）第4限

（イ）実施会場　5年3組教室

（ウ）本時の目標

○モンゴルの学校の問題点について、自らの考えをまとめることができる。

○既習事項をもとに、多様な習慣や文化、価値観の違いに気付き、異文化を理解しようとしている。

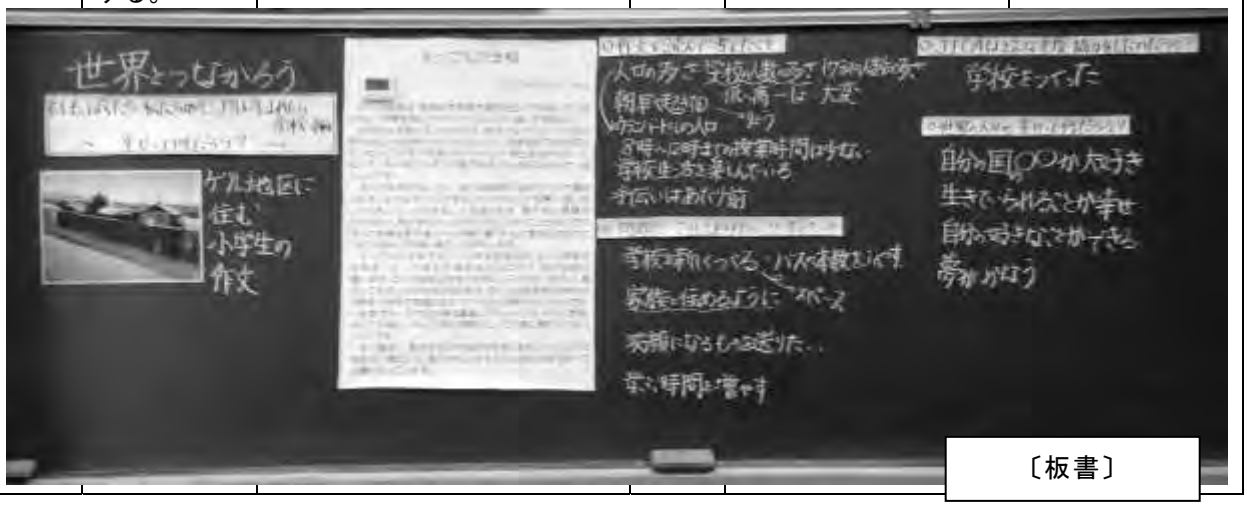
（エ）指導のポイント

・モンゴルの小学生の日記をもとに、モンゴルの教育の問題に目を向ける。ビデオで JICA の支援を知り、モンゴルの小学生は『幸せ』かを考える。

（オ）本時の展開

過程・時間	指導内容	学習活動	指導形態	指導上の留意点	評価（評価規準・評価方法）
導入 10 分	モンゴル学校クイズを行う。 学習課題を提示する。	 〔前時までの振り返り〕 ○モンゴル学校クイズを行う。	一斉	・モンゴルの学校を身近に感じられるよう、日本の小学校と比較できるようにする。	 〔クイズ〕
	もしも、ぼくたち・私たちがモンゴルに生まれたら～幸せって何だろう～				
展開 30 分	モンゴルの小学生の日記からモンゴルが抱える教育の問題に目を向ける。 JICA のモンゴル支援ビデオを紹介する。 モンゴルの	○日記を読んで、モンゴルの学校の問題点や気付いた所についてグループで討議する。 ○JICA はモンゴルの子供たち（学校）にどんな支援をしたのか知る。 ○モンゴルの小学生の生活	班 一斉 個人	・ワークシートに討議した内容を書き込めるようにする。 〔グループ討議〕 ・モンゴルの小学生	・モンゴルの学校について関心を持ち、モンゴルの教育の問題について考えようとしている。 （学習の様子 発言 ワークシート）

	小学生は「幸せ」かを考える。 通訳のツェンさんの「幸せ」について知る。	を知り、モンゴルの小学生は幸せか考える。 ○通訳のツェンさんの考えと自分の考えとを比べて、考えを深める。	個人	になりきって考える雰囲気作りをする。 ・明確な答えがあるわけではなく、モンゴルの学校の実情を知った上で、相手のことを理解しようとすることが大切だということに気付かせる。	
まとめ 5分	本時の学習をまとめ、次時の学習の予告をする。	○本時の感想を書く。	個人		



〔板書〕

（2）授業の振り返り

〔成果〕

・導入クイズを行ったことで、本時で何をテーマにしていくかがわかりやすかったようだ。また、児童にとって身近なテーマを取り上げたため、グループ討議で多くの意見交換をすることができていた。

・単元を通して住む国が変われば住んでいる人の「当たり前」や「価値観」は異なることに触れてきた。学習が進むにつれてそれが生かされ、多様な文化を認めようとする児童が増えた。

・現地で購入した品物や、実際に撮影してきた写真を教材として使用したり、教員が体験してきたエピソードを語ったりしたことが他の何よりも児童の興味・関心を高めた。

〔課題〕

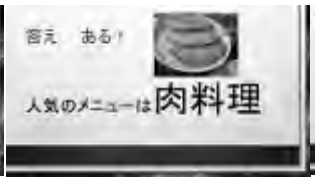
・1時間の学習の中で、「学校の問題」と「幸せ」について考える盛りだくさんの内容となってしまった。教員側が収集してきた情報をどのように活用するかで児童への伝わり方が大きく変わるため、情報を精選しねらいを絞ることも必要だった。

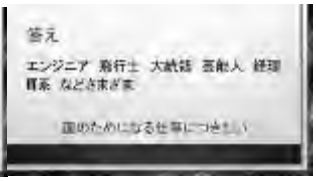
・児童の発言を、どのように評価していくかが難しかった。今後の課題としていきたい。

（3）使用教材

○モンゴルの民族衣装の帽子やゲルの模型等モンゴルで購入してきた物

○モンゴルクイズのスライド（一部）





〇モンゴルの小学生の作文（JICA モンゴル・通訳の方へのインタビューをもとに作成）

モンゴルの学校

〇〇〇〇　〇〇〇〇

〇ぼくの家族は、昨年まで草原で遊牧民として生活していたけれど、仕事を探してウランバートルに引っ越して来ました。

お母さんが話していたけれど、地方からウランバートルに移り住む人は毎年３～４万人くらいいて、１５年前までは６５万人だった人口が今では国の４０パーセントを占める１３０万人になって、その多くがぼくの家があるゲル地区に住んでいるらしいです。

近くに学校がないから、ぼくは朝早く起きてバスで通学します。なかなかバスが来なくて、冬はとても寒い思いをしたりちこくしたりすることもあります。登下校に時間がかかるから、家に帰ったらつかれてねてしまうことも多いです。ぼくの友達は家が遠いから学校に通うために家族とはなれて、りょうに住んで学校に来ている子もいます。

モンゴルの学校では、１～５年生が低学年、６～９年生が中学年、１０～１２年生が高学年とよばれて、同じ学校に通います。ぼくの学校は全校で２０００人子供がいます。人数がとても多いから学校は３部制で、ぼくたち低学年は８時から１２時まで学校で勉強します。１クラスの人数は５０人くらいです。給食でボーズが出た時は最高にうれしいです。それに学校はとても楽しいから、下校の時間になっても家に帰りたくないくらいです。

家に帰ると、家の手伝いや妹の世話をします。モンゴルでは家族の一員として、家の手伝いをするのは当たり前でぼくの日課となっています。

〇モンゴル人の通訳の方のインタビュー動画

（4）参考資料等

・『地球の歩き方 2015～16』ダイヤモンド社　2015 年

・JICA モンゴル事務所　広報用動画「モンゴルの初等中等教育に対する JICA の協力」

8　単元をとおした児童の反応/変化

事前に児童にモンゴルという国を知っているかと聞いた所、ほとんどの児童が知らなかった。これからモンゴルのことを学習すると伝えた時どんな国なのか検討もつかなかった児童たちは、学習を進めていくうちに日本と似ている所、違う所をたくさん見つけて多くの驚きや発見があったようだ。驚きや発見を積み重ねていくことで、モンゴルに親しみを抱く児童が増え、日本に近い身近な国となっていっているのを授業していく中で私自身も強く感じることができた。

以下に児童の単元を通しての感想を紹介する。（一部抜粋）

〇私はモンゴルなんて興味がなかったけれど、先生の話を聞いてモンゴルはこんな国なんだとかモンゴルと日本にも似ている所があるんだとかを知って、もっとモンゴルについて知りたいと思った。モンゴルに関する物を先生が買ってきてくれて触らせてもらえて、とても楽しい授業だった。

〇モンゴルのことを知った時、場所から考えると田舎なのではないかと思っていた。しかし、モンゴルの中心地のウランバートルのあたりは写真で見るとビルが建っていて都会のように感じられた。田舎と都会があって面白い国だと思った。

〇一番心に残ったのは移動が可能な家「ゲル」。日本と近い国なのに、違う所がたくさんあることに驚いた。

〇日本の当たり前が当たり前でない国があることがわかった。

〇幸せについて考えて、私もお金がなくても家族がいるだけで幸せなのかもしれない。

〇JICA が学校を建てる活動をしていることを初めて知って、すごく勉強になった。

9　授業実践全体の成果と課題及び課題の改善策

単元全体を振り返った時に、事前に想定していなかった学習のポイントとなったのは第９時の日本の問題について考えるという授業だ。発展途上国について学習する前に、日本にも抱える問題があって東日本大震災のような際には、世界中から支援・協力をしてもらったことを学習した。

そこで、「世界中の人々は助け合っている」ことに気付き、「困っている人がいたら助ける」という児童の日常にとっても当たり前の考えで、JICA の取り組みについてもスムーズに考えることができていた。

このように事前に考えた計画、実際にモンゴルへ行った後の実践、実践中にも常に目の前の児童にとってどのように学習を進めるか思考錯誤の連続だった。授業を実践し、単元を通して授業が

「面白かった！」と答える児童が多かった。様々な文化や価値観に触れ、世界には多くの国があって、その国について「知る」ことが児童にとって刺激があり、とても楽しいことであること、そして何より児童自身の「世界」を広げる大切なことだと考えさせられた。

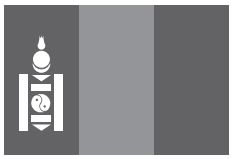
〇本単元における PDCA サイクル

段階	項目
P 計画	① 児童の実態をもとにどのような学習計画を立てればよいか、他教科との関連を考えながら学年で取り組める国際理解の単元を年間計画に入れた。モンゴルでの経験と学校教育目標、小学校学習指導要領をもとに、授業のねらいを設定した。 ① 児童が意欲的に取り組める授業形態を、学級の児童の実態をもとに考えた。
D 実施	① モンゴルへ行く前に、「日本と関わりのある国々」についての調べ学習、モンゴルへ行った後にモンゴルを中心とした発展途上国についてゲストティーチャーを呼んで授業を行っていった。児童の反応を見て、次時の授業内容を検討しながら学習を進めた。 ② 授業の導入では、スライドを用いたクイズをしたり、実際にモンゴルで購入したモンゴル土産を紹介したりした。フォトランゲージ等のグループ活動を多く取り入れた。
C 検証	① 最初に「日本と関わりのある国々」について学習したことで、児童に「これから世界についての学習をする」意識付けをすることができた。実際にその国へ行ったゲストティーチャーに話をしてもらうことで「国の実情」について生の声を聞くことができた。その結果、児童は国や人によって多様な価値観があり、それを知ることが今の自分たちにできることなのだと考えを深めていた。 ② 「モンゴルクイズ」とモンゴル土産は導入として最適で、児童の反応もとても良かった。グループ活動を取り入れたことで、友達の多様な意見に触れることができていた。その反面、課題が難しい場合やグループ活動に慣れてきてしまうと、話し合いが活発に行われないこともあった。
A 改善	① 10 日間の研修で、多くの情報を得ることが出来た。今回使わなかった資料を今後どのように学習に活用できるかを考えていきたい。 ② 課題によって、児童の活動形態を工夫する必要がある。

10 教師海外研修に参加して

JICA モンゴル事務所を訪問した際、所長が『日本的な支援の特徴として、モンゴル側のパートナーとして一緒になってやっていく、一方的な支援ではなく我々もモンゴルの人たちから学ぶことで本当のパートナーになる』とおっしゃっていた。それを聞いて、モンゴルの人たちが研修先で私たちに好意的に接してくれたのは、これまで私たちが知らない所で JICA が地道な活動の中でモンゴルとの関係を築いてきたからだと思った。モンゴルの人たちの「モンゴルを良い国にしたい」という熱意を感じて、私は授業でそれを児童に「伝えたい！」と強く思った。教師海外研修に参加して多くのことを学んだが、一番は自らの経験を「語れる」向上心を持ち続けられる教員でいたいと強く思えたことが、研修後の自分の教員としての働きぶりに大きく影響している。

今後も研修で出会った仲間と情報を共有しながら国際理解教育について学び、児童が将来「世界で活躍したい、もっと様々な国々について知りたい」と思える授業を考えていきたい。



学校名：練馬区立南町小学校

氏名：　奥山　さやか

［担当教科：全科］

- 実践教科等：総合的な学習の時間
- 時間数　：　7時間
- 対象生徒　：　4年生
- 対象人数　：　25 人

1　単元名

考えよう　外国のこと、見つめよう　自分のこと

2　単元の目標（ESDの能力・態度）

・モンゴルの人々や文化、社会について知ることで、世界の国々への興味・関心を深める。（進んで参加する態度）

・モンゴルで活躍する日本人について学び、世界と日本のつながりに気付き、互いに助け合う共生の心を培う。（つながりを尊重する態度）

・モンゴルをはじめ世界が抱える問題について知り、自分にできることや生き方を考えながら自分の生活を振り返る。（自己の生き方の追究）

3　ESD（持続可能な社会づくり）の視点

多様性	相互性	有限性	公平性	連携性	責任性

・世界には様々な文化があることに気付く。（多様性）

・自然環境やエネルギーには限りあるもので、資源を大切に使わなければならないことを理解する。また、一度破壊されたものを元に戻すには時間がかかることに気付く。（有限性）

・世界平和を実現するためには、人と人、国と国とが協力し、共生していくことが大切だということに気付く。（相互性）

・開発途上国の問題について考え、今の自分にできることを考え、行動する。（責任性）

4　単元の指導について

（1）教材観

国際化・多様化する社会の中では、お互いの違いを尊重しながら共に生きる心と、自ら考え、判断し、主体的に生きる力を育むことが大切である。日本と似ていて違う国モンゴルで教師が見てきたことを伝え、モンゴルを知ることを通して、世界を取り巻く諸問題を考える活動を設定した。

4年生の段階で、児童が将来取り組まなくてはならないであろう世界的問題（環境・格差など）を知ることや世界で活躍している日本人の活動を知ることは、今の自分を見つめ直し「どのように生きていきたいか」を考える上で重要であり、日本人が果たすべき役割について考える素地になってほしい。

（2）児童生徒観

3年生から外国の民話や絵本などを使い「世界の国々」を紹介してきた。外国への関心は高い児童が多い。しかし、「行ってみたい国は？」との問いにはヨーロッパ諸国やアメリカなどを答える児童が多く、開発途上国を挙げる児童はいなかった。外国に興味がある一方で、全く知らない国が多くあり、世界の国のイメージは「何かおしゃれ・おいしいものがたくさん・珍しいものが見られる」等の偏ったものであることが分かった。そこで本単元を通じて、世界の国々には様々な文化・問題・よさがそれぞれあることを知ってもらいたいと考えた。また、人のために何かしたいという気持ちはもっているが、行動に移せる児童は少ない。モンゴルで活躍する日本人の姿から、今自分にできることを頑張ることが世界を変えていくことを伝え、行動に移せるように励ましていきたい。

（3）指導観

前単元「地球を守ろうプロジェクト」の学習では、「小さいことでも、みんなでやれば大きな効果につながる。だから地球を守るために自分たちにできることをやろう。」とポスターを作ったり、プレゼンテーショ

ンを全校放送で行ったりした。しかし、問題が世界規模と大きかったため、なかなかイメージできていない児童も多かった。そこで本単元では、疑似体験からではあるが「実感」しながら考えられるようにワークショップを多く取り入れた。

また、グループ活動を主とし、友達と課題に向き合い、協力して解決していく態度を育てたいと考えた。児童の世界である「クラス」の中で自然に協力・支えあう態度が培われ、将来的に国際社会の中で自然に協力できる人材へと育って欲しい。

5 評価基準

観点	ア 学習意欲	イ 学び方	ウ 表現 コミュニケーション	エ 自己の生き方
評価規準	モンゴルの文化や世界の国々の文化や生活について興味関心をもって学習に取り込む。	体験を通して情報を集めることができる。	気付いたことや思ったことを進んで表現したり、できることを見付けて行動している。	専門性（得意なこと）を生かし世界で活躍する日本人の活動を知り、今の自分が頑張れることを見つける。
評価方法	学習の様子　　発言　　ワークシート			

6 単元の構成

時限	小単元名	学習のねらい	授業内容
1	世界がもし100人の村だったら	・国家や民族の多様性と世界の貧困、教育の格差、富の分配の不公平さなどに気付く。	・ワークショップ版「世界がもし100人の村だったら」より、男女・子供高齢者の割合、識字率、貧富・教育の格差についてのアクティビティを行う。
2	協力して村をつくろう	・ワークショップを通じて、世界で起きている貧富の差の拡大について感じる。 ・生きるのに本当に必要なものを考える。	・貿易ゲームを行う。 ・得たお金で村に必要なものを買う。（食べ物・家・学校・病院・車・テレビ等） ・感じたことを発表する。
3	Get to know Mongolia! ～モンゴルとなかよくなろう～	・モンゴルの写真や遊びを通して、モンゴルと日本のつながりを知る。	・モンゴルの位置を世界地図で確認する。 ・クイズを行い、楽しみながらモンゴルの文化に親しむ。 ・じゃんけんや占いを体験する。
4	日本の学校とモンゴルの学校の同じところ違うところを見つけよう	・モンゴルの学校事情を知る。 ・学校にいけないことで起こる負の連鎖について考える。	・2部制や3部制であることを紹介する。 ・都市部と地方部での教育について考える。 ・日本の援助で学校が建てられていることを紹介する。
5	モンゴルでの環境問題は？	・日本とモンゴルでの環境問題について考える。 ・日本の支援について知る。	・フォトランゲージの活動から日本とモンゴルの環境問題について考える。 ・自然と共存してきた生活様式を紹介する。 ・環境問題に関係ある日本の支援や企業の活動について紹介する。
6	絶滅した動物にもう一度会えるの？	・モンゴルが取り組んでいる野生復帰プロジェクトや動物園の役割から、自然環境を守ることの大切さに気付く。	・モンゴルの野生馬タヒと家畜馬を比較する。 ・モンゴル国立公園で行われているタヒの野生復帰プロジェクトを紹介する。 ・飼育員やボランティアの話を聞き、動物園の役割について知る。
7	世界で活躍する日本人	・海外で活躍する日本人の姿や国際社会での日本の役割を知る。 ・今の自分にできることを見つける。	・モンゴルで活躍する日本人を紹介する。 ・モンゴルで日本人が努力することが、どのような成果を導いているのかを班ごとに考える。 ・自分を見つめ、これから自分の世界（クラス）をよりよくするためにどんなことができるか考える。

7 授業事例の紹介

小単元名【世界で活躍する日本人】

（1） 指導案

（ア）実施日時 12 月 15 日（火）第４限

（イ）実施会場 ４年２組教室

（ウ）本時の目標

・専門性（得意なこと）を生かし世界で活躍する日本人の活動を知り、今の自分が頑張れることを見つける。

（エ）指導のポイント

・人と比べることなく、自分が得意なことを生かしていけばよいことに気付けるように、様々な専門性をもつ人材を紹介した。

・協力して課題に取り組めるように、グループ活動を設定した。

（オ）本時の展開

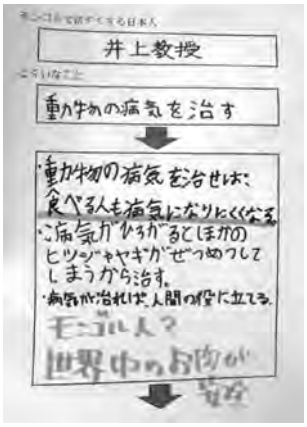
過程・時間	指導内容	学習活動	指導形態	指導上の留意点	評価（評価規準・評価方法）
導入 7分	1 モンゴルで活躍する日本人	・モンゴルで活躍する日本人とモンゴルでの問題・現状を知る。 【医師】地方での医師不足 【獣医師】家畜の病気 【建設】新空港の必要性 【教師】日本語教育が盛ん 【環境教育】ゴミ問題 【バレーボール】指導者不足	一斉	・４年生児童が理解できるように、簡潔に説明する。 ・親しみをもって考えられるようにするため、写真と名前を提示する。	学習の様子 発言
展開① 15 分	2 活動成果	・モンゴルで活動することで世界にどんな変化をもたらすかを考える。 児童の反応例 【医師】 →医者が増えて、みんな健康になる →新しい薬が開発される ・グループでの話し合いの結果を発表する。	グループ 発表	・１つ例を示すことで、活動イメージがもてるようにする。 ・様々な意見が出るようにグループでの話し合いにする。 ・話し合いが止まっている班には、助言をする。 ・実際とは異なることや、内容がずれる場合には訂正し、事実を伝える。 ・わかりやすく発表できるように、発表用のワークシートを準備する。	学習の様子 発言
3分	3 国際協力の必要性	・全グループの発表からモンゴルで活動することがどう日本と関わっているかを考える。	一斉	・人と比べることなく、自分が得意なことを生かしていけばよいことに気付けるように声をかける。	学習の様子
展開② 10 分	4 自分のできること	・世界（クラス）がよりよくなるために自分ができること（得意なこと）を考える。	個人	・発表したい児童がいれば、時間をとる。	ワークシート
まとめ 10 分	5 学習を振り返る	・学習を振り返って、思ったこと・考えたことなどをワークシートに書く。 ・発表する。	個人 発表		ワークシート

（2）授業の振り返り

児童は積極的に授業に参加していた。本時までに少しずつ紹介した方々に対して親しみを感じていたことが、本時で新しく紹介した方々についても考える力に変わったと思う。しかし、伝えたいことや児童に考えさせたいことが多すぎた。本時は2時間に分けてじっくり考えられるようにしたほうが良かった。友達の良い所を見つけるのが上手な子が多い一方、自分のよさを認めるのが苦手という課題も見えた。今

後は、自分のよさを感じられるような学級にしていきたい。

（3）使用教材



日本人の活躍でどんな
変化が起こるかを考え
まとめたワークシート

（4）参考資料等

・NHKエコチャンネル　http://www.nhk.or.jp/eco-channel/
　「“世界最悪”モンゴルの大気汚染」　2014 年1月 30 日　放送
　「モンゴル大気汚染改善へ　煙の出ない石炭を」2015 年4月 28 日　放送
・『ワークショップ版・世界がもし 100 人の村だったら』　開発教育協会発行（2003 年）
・『新・貿易ゲーム−経済のグローバル化を考える』
　開発教育協会・神奈川県国際交流協会発行（2009 年）
・『現代モンゴルを知るための50章』　小長谷有紀・前川愛編著　明石書店（2014 年）
・『国際理解教育実践資料集』　JICA地球ひろば編集、埼玉県立総合教育センタ監修（2014 年）
・資料：JICA「学校に行けない世界の子どもたち」
・研究レポート「CURRENT STATUS OF RE-INTRODUCING PRZEWALSKI'S HORSE
　(EQUUS PRZEWALSKII　Poljakov, 1881) POPULATION IN　HUSTAI」
　Dorj：USUKHJARGAL(FIELD BIOLOGIST OF HUSTAI NATIONAL PARK)
　SUPERVISOR:Professor Namkhai BANDI　（2014年）

8　単元をとおした児童の反応/変化

（1）国家や民族の多様性と世界の貧困、教育の格差、富の分配の不公平さなどに気付く。
・世界で文字が読めない人が20%もいることにびっくりした。薬か毒かわからなければ、飲むこともできないからとても困る。
・恵まれている人と、すごく苦しい人との差がすごく大きかった。
・貧しければもうあきらめるしかないと思った。（役割で最貧国になった子の感想）
・僕の班は1つのチョコを4人で分けなければいけなかったけど、隣の班はお皿に乗り切らないほどあった。これが世界の貧しさか…と思った。
・同じ人間だから不公平はなくしたい。
・富や教育の差が大きい。
・豊かな国だったら貧しい国に分けてあげたかった。
・食べ物のない国の人たちはどうやって生活しているのか、気になった。

（2）ワークショップ（貿易ゲーム）を通じて、世界の中で起こっている、貧富の差の拡大について感じる。
【資源も技術もない村】
・製品を作ろうと思っても、定規がなくて困った。途中で、先生から 10 分だけ貸してもらったときすごく嬉しくなった。
・定規を紙に写しておいたので、その後も定規として使うことができた。貧しい国になるほどたくさんの知恵が必要。
【資源がある村】
・はさみや定規がなかったけど、他の村から道具を交換しながら村を発展させられた。

・隣村の定規がうらやましくてため息をついていた。途中から隣村と協力できたので、家を建てることができた。
・紙が（資源）がたくさんあるから大丈夫だと思ったけど、最後はとても困った。もっといろいろな所に借りに行けば良かったと後悔した。
【普通の村】
・最初に渡された物に文句を言うのではなく、他の村と協力しなければいけないということが分かった。
・裕福な村がお金や道具を貸してくれたり、応援してくれたりした。村が貧乏でも皆で協力すれば、皆が裕福になると思った。
【裕福な村】
・途中から差がけっこう広がってびっくりした。お金がいっぱいあったので、寄付しようかと思った。
・ワークの途中から差が大きくなっていった。世界もこんな感じで発展している国とそうでない国とが分かれていると思うから、発展している国が支えないといけない。

（3）モンゴルの写真や遊びを通して、モンゴルと日本のつながりを知る。
・友達にモンゴルの子がいて話も聞いていたから知った気でいたけど、まだまだ知らないことがたくさんあった。
・きれいな高層ビルがモンゴルにあるなんてびっくりした。
・ボーズを食べてみたい。
・未来は日本みたいになるのかな。
・もっとたくさん知りたい。
・モンゴルが大都会だとは知らなかった。
・馬頭琴が本当に馬の鳴き声に似ているのですごいと思った。
・５年生から外国語活動が始まるけど、他の国のことも知りたくなった。
・モンゴルは貧しい国かと思っていた。でも豊かな国なんだと思った。
・あんなに動物がいるのに、動物園がないことに驚いた。
・ラクダやヤギの乳を飲んでみたい。

（4）モンゴルの学校事情を知り、学校にいけないことで起こる負の連鎖について考える。
・モンゴルの人口の半分が首都に集中しているのが驚いた。
・私はいつも学校に通っているのに、通えない子がいるということがとても悲しい。
・普段通っている学校がこんなにも大切なものだと勉強を通して知った。
・学校に行けることがこんなに良いことを学習した。
・モンゴルに５５校も学校を建てたのはすごいと思った。
・モンゴルの人たちは日本のことをたくさん知っているのに、私たちはモンゴルのことをあまり知らないのでもっと知りたくなった。
・大人になったらモンゴルに行って友達になって日本語を教えたい。
・学校をつくってくれた日本に感謝しているという話を聞いて、私も将来、他の国の人を支えられるような仕事がしたいと思った。いろいろな国と日本を仲良くしたい。
・モンゴルはこれから技術が発展していくとともに、学校も増えていって豊かな国になると思う。

（5）日本とモンゴルでの環境問題について考え、日本の支援について知る。
・日本の清掃車が使われたり、煙の出にくい石炭を作ったり、清掃工場をつくったりと日本の会社はとてもすごいと思った。モンゴルと日本がこんなに関わっているとは思わなかった。
・ゴミを拾う仕事があるなんて知らなかった。
・ウェイストピッカーの中に子供までいることがショックだった。
・日本はけっこうすごい。だからもうちょっと国内の問題も解決すればいいのにと思った。
・リサイクルごみ箱があるのに使わないのはもったいない。
・遊牧民のときはエコライフを送っていたのに、今はポイ捨てが多いのはどうしてだろう。
・骨を遊び道具、肉は食べ、フンや毛はゲルに使い、動物の全てを使う工夫がすごい。
・動物を無駄にしないようにしているところを日本は見習いたい。
・ゲルでの生活を見習ってエコライフをして環境を守りたい。ゴミの分別の大切さが分かった。
・廃車が他の国で使われる方が解体されるより環境に良いのではないかと思った。
・モンゴルと日本以外でも、国と国で支えあって世界を平和にできると嬉しい。
・青年海外協力隊に入りたい。

（6）モンゴルが取り組んでいる野生復帰プロジェクトや動物園の役割から、自然環境を守ることの大切さに気付く。
・モンゴルの人は絶滅したモウコノウマのことをとても愛していたことに気付いた。一番大切なことは絶

滅させないことだと思った。
・いろいろな人が協力して現在は 300 頭以上だと聞いて、やっぱり何事も一生懸命努力しなければできないということを今日の学習で学んだ。やはり自分に関係なくても地球上で一つの命がなくなるのは悲しい。
・モウコノウマという馬がいたことは知らなかったので、絶滅したことも、ヨーロッパやモンゴルの人が頑張っていることも知りませんでした。見た目に反してすごい馬で少し驚きました。
・問題が起きていることを知って考えることが大切。モンゴルの人はすごい。悲しんでいるだけでなく、モウコノウマを取り戻そうとして行動している。
・日本のトキも戻るといいな。
・絶滅したものをもう一度取り返すのは、きっと無理だと思う。
・モンゴルで絶滅している馬を復活させる人がいるから感動した。
・いろいろな場所でいろんなことをしてモンゴルを助けていることが分かった。
・最初はモウコノウマの写真を見たときは「弱そう」と思ったけど、本当は強くてモンゴルの人に愛されている馬だということが分かった。人が乗れないほどの強い馬だけどモンゴルの人たちにとっては大切な大切なたからものだと思った。一度モンゴルでは絶滅したけど、いろんな人が助けて今では300頭以上になったのは、モンゴルの人の強い想いとほかの人たちと助け合っているからだと思った。動物も人間と一緒で会えなくなったら悲しいということが分かった。
・初めはモウコノウマのことを家畜と思っていたけど、すごく大切な野生の馬なんだということが分かった。モウコノウマが絶滅しても、また復活させたいという人が頑張って復活させたことがすごい。
・ホスタイ国立公園の人や東京動物園ボランティアーズの人たちは必死に絶滅をとめようとしていることはすごいことだと思った。

（7）海外で活躍する日本人の姿や国際社会での日本の役割を知り、自分にできることを見つける。
・世界がよりよくなると幸せ、笑顔が増えると思う。もっと笑顔があふれる世界になってほしい。
・「人に役に立つこと」は必ずあると学んだ。
・それぞれ自分の得意なことを生かして、力を発揮しているので素晴らしいと思った。
・横山隊員みたいに世界で役に立ちたい。
・日本のことより世界のことを考えている人たちは素晴らしいと思った。自分の得意なことを生かして活動している人もすごい。
・みんな得意なことや好きなことから世界を変えているので、小さいことでも何かやりたい。
・井上教授の言葉から、同じ人間だからこの人が上この人がしたとかはやめて、みんな平等だといいと思った。

9 授業実践全体の成果と課題及び課題の改善策

［成果］ ・児童は世界の中で起こっている問題を、自分たちなりに真剣に考えることができた。
・活躍する日本人の活動から、誰かのために何かをしたいという気持ちをもつことができた。
・自分の生活への感謝の気持ちをもつことができた。

［課題］ ・伝えたいことが多すぎたり難しすぎたりするので、精選する必要がある。
・年間指導計画に位置付けられていない授業のため、時数を確保することが難しかった。「青年海外協力隊の人を学校に呼びたい。」「モンゴルの人たちと話してみたい。」などの希望が出た、児童の願いを実現・実行する時間の確保が必須だと思う。
・学校の中での情報の共有の仕方。

［改善策］ ・児童の成長段階に合わせて授業内容を設定する。
・年間指導計画の中で位置づけをして、系統的に授業が行えるようにする。

10 教師海外研修に参加して

授業後の児童の感想に「だれが上とかだれが下とかではなく、みんなが協力すればきっと世界はよりよく変わると思う。」という記述を見たときに、心からこの研修に参加して良かったと思った。研修に参加する前は、どうしても日本がモンゴルにして〈あげて〉いる支援というイメージが自身の中にもあり、どうやって児童に伝えようかと悩んだ。しかし、モンゴルで共同研究を行っている帯広畜産大学の井上教授とお話しする中で、モンゴルと日本の関係は支援国と被支援国ではなく、協力国だと確信することができた。今後もこのことを伝えていきたい。また行動に移したいと考えている。

また、他校の先生方と意見交流できたことも大きな成果だ。同じ場所に行き、同じものを見ても意見が違う。しかし全員が「児童に伝えたい」という気持ちをもち、真剣に話し合った。研修が終われば別々の学校に分かれるが、これからもモンゴルチームとして開発教育や国際理解教育に携わっていきたい。

学校名：東村山市立　久米川小学校

氏名：　杉本　万貴子

［担当教科：全科］

- 実践教科等：学級活動
- 時間数　：５時間
- 対象生徒　：１年４組
- 対象人数　：27 人

１　単元名

かんがえよう　ぼくたち・わたしたちにできること

２　単元の目標

・モンゴルの生活、文化などへ興味・関心をもち、他国の文化を尊重する態度を育むことができる。
（つながりを尊重する態度）

・諸外国が直面する課題や日本との関係を知り、今、自分達にできることを考えることができる。
（他者と協力する態度）

３　ESD（持続可能な社会づくり）の視点

多様性	相互性	有限性	公平性	連携性	責任性

・モンゴルの生活、文化などを知ることで、世界には様々な文化や価値観があることに気付く。
（多様性）

・日本とモンゴルのつながりを知る。（連携性）

・諸外国の課題や日本の支援を知り、自分達にできることを考える。（責任性）

４　単元の指導について

（１）教材観

導入では「モンゴルクイズ」を行い、自分達と同じ「小学生」がどのような生活をしているのか異文化に興味をもたせたい。そして、自分達との違いだけでなく似ている点も多いことに気付かせ、異国の子供達のことを身近に感じさせたい。展開部では、「フォトランゲージ」「ESD クエスト」「JOCV の紹介」などを行い、諸外国が抱える課題に気付かせたい。まとめとして、今自分達ができることを考え、ポスターにして紹介する。

小学１年生という発達段階を踏まえた上で、丁寧な授業展開を行い、自分達自身にも「世界を変えることができる」という気持ちをもたせられるようにしたい。

（２）児童観

大変素直な気持ちをもった児童達である。スポーツの影響か国旗について詳しい児童や、アルファベット・ローマ字に興味をもつ児童も数名いる。５月に来た教育実習生のオーストラリアでのホームステイの話に興味をもって聞いていた。サンタクロースが半袖であることや、オーストラリアでしか見られない動物の話など、目を輝かせていた。しかし、遠い外国の話でしかなく、自分ごとに捉えるという態度までは養われていない。本単元を通して、世界の様々な国や文化に興味をもつことはもちろん、そこからさらに自分ごととして捉えさせ、「何かしたい」という気持ちを育んでもらいたい。

（３）指導観

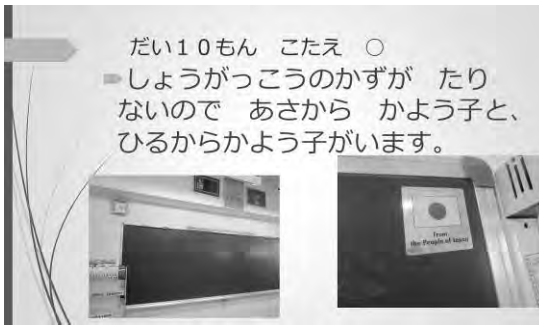
小学１年生という発達段階を考え、現地で撮影した写真や動画を多く取り入れたり、現地で購入した模型や本、教科書などを紹介したりして、イメージがしやすいようにしたい。

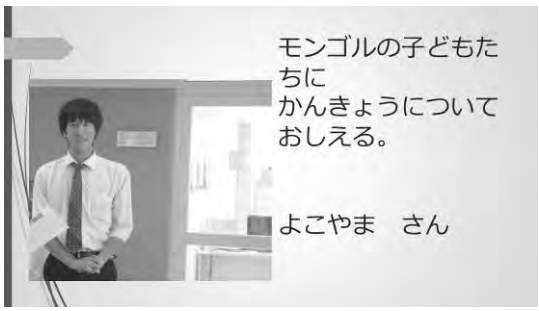
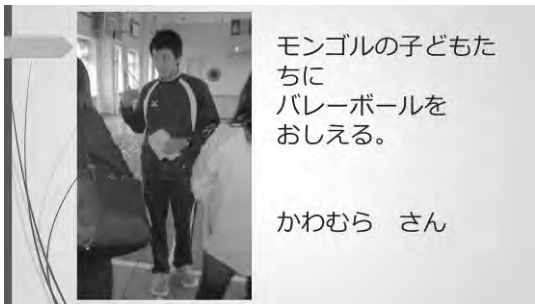
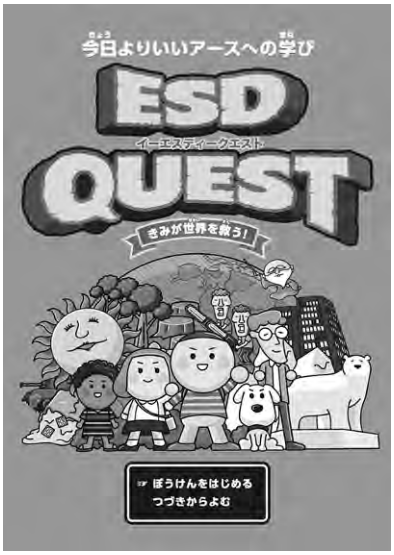
自分達に今できることを考える際には、身近な視点を与え、全体で考えを交流させた後に個々にできることを考えさせたい。また、それぞれができることが繋がり合って、諸外国の課題の解決に結びつくことを伝え、自己の力の大きさを感じさせたい。

５ 評価基準

観点	他国の生活、文化に対する関心・意欲・態度	他国の生活、文化に対する国際的な思考・判断・表現
評価規準	・モンゴルの生活、文化などへ興味・関心をもっている。 ・写真を見て、異文化を想像している。 ・諸外国の課題に対して、何かしたいという気持ちをもっている。	・諸外国が直面する課題に対して、今、自分達にできることを考えている。 ・自分達にできることを、ポスターに表現している。
評価方法	発言、学習シート	発言、学習シート、ポスター

６ 単元の構成

時限	小単元名	学習のねらい	授業内容
1	モンゴルについてしろう	モンゴルの地理的条件、言語、文化に触れ、異文化への興味関心を高める。	・モンゴルクイズをする。（パワーポイントを使用）  【モンゴルクイズスライド一例】
2	しゃしんを見ておはなしをつくろう	モンゴルという国の抱える諸問題に気が付く。	・４枚の写真（首都、馬に乗った少女、ゲルに住む家族、高台から見た町）をもとに、フォトランゲージをする。 【フォトランゲージに使用した４枚の写真】

3	かいがいでかつやくする人をしろう	途上国や地球環境の諸問題を知り、それらに対するJICA や JOCV の取組について知る。   【JOCV の活動を知らせるスライドの一例】	・ESD クエストをする。  【ESD クエスト（参考資料参照）】 ・JICA の取組や JOCV の活動内容についての話を聞く。
4	ぼくたち・わたしたちに　できることをかんがえよう	途上国や地球環境のために、自分達には何ができるか考える。	・ポスターを作成する。
5	できることをしょうかいしよう	途上国や地球環境のための活動宣言をする。	・ポスターを紹介し合う。

7　授業事例の紹介

小単元名【　できることを　しょうかいしよう　】

（1）　指導案

（ア）実施日時　11 月 20 日（金）第３限

（イ）実施会場　１年４組教室

（ウ）本時の目標

・途上国や地球環境のための活動宣言をし合い、これからの自分の生き方を考えることができる。

（エ）指導のポイント

・前時までの学習を簡単に板書で振り返り、思考の流れを整理した。

・全体での活動宣言の前にペアで紹介し合う時間をとった。

・紹介されたポスターは、分類して黒板に掲示していった。

・一人一人の紹介の合間に、その活動がどう課題解決に役に立つのか振り返ることができるように補助発問をいれた。

（オ）本時の展開

過程・時間	指導内容	学習活動	指導形態	指導上の留意点	評価（評価規準・評価方
導入 7分	前時までの内容の振り返り	・前時までの学習の流れをおさえ、本時のめあてを知る。	一斉	・問答しながら、簡単に振り返らせる。 ・大事な言葉は板書しながら児童の思考を整理する。	

展開 23分	ペアの取り組む活動を聞くこと 全体に自分の活動を発表すること （それぞれの活動が、どの諸問題に関連しているかということ）	・ペアに自分の活動宣言をする。 ・全体に向けて自分の活動宣言をする。 ・自分達の活動が、どの課題解決に結びついているのか知る。	ペア 一斉	・その後の全体への発表を意識して、相手に伝える。 ・自分の考えた活動と友達の活動を比べながら聞かせる。	自分達にできることを、ポスターに表現している。（他国の生活、文化に対する国際的な思考・判断・表現　・ポスター）
まとめ 15分	本時の学習の振り返り	・本時の学習を振り返り、学習シートに感想を記述する。	個別 一斉	・今日から自分がどのように生きていきたいかという視点で振り返らせる。	諸外国の課題に対して、何かしたいという気持ちをもっている。（他国の生活、文化に対する関心・意欲・態度　・学習シート）

（2）授業の振り返り

・4時に作成したポスターを一人一人、堂々と発表することができていた。声に出すことでさらに意欲があがったように感じる。

・節水や節電など、教師の方でカテゴライズして黒板に掲示していったことで、児童に友達の考えが振り返りやすくなった。

・自分の宣言した活動が、様々な面でつながって課題解決に役立つということを伝えたが、真に理解してもらえたかは疑問が残る。今後も自分達の身近な所で、課題解決に役立つことができるということを折に触れて伝え続けていきたい。

（3）使用教材

・パワーポイントによるモンゴルクイズ

・現地で撮影した写真、動画

・ESD クエスト

【児童が作成したポスター】

【授業の様子と板書】

（4）参考資料等

ESD:Education for Sustainable Development-文部科学省＜

http://www.mext.go.jp/unesco/004/1339957.htm＞（2015 年 11 月 10 日アクセス）

8　単元をとおした児童の反応/変化

・自分達にも「世界を変えることができる」という意識が芽生えた。

・水道の水が出しっぱなしになっているのを見た子が「先生、水を止めたよ」と言って来たり、「給食を残さないようにしよう」と声を掛け合ったりしていた。

・担任がアメリカに旅行をした話をした際にも、自由帳の世界地図を見たり、地球儀を回したりしていた。

世界を身近に感じている様子が見られている。

＜第１時の感想より（原文引用）＞

・モンゴルにこんどいってみたいです。

・モンゴルのことをもっとしりたいです。

・いっしょのところもちがうところもあってすごい。

・モンゴルのこたちにあってみたい。

・こくばんに　にほんのはたがありました。

・もんごるのがっこうを日本がつくったのがすごかったです。

・いろんなくにでもおべんきょうをしてみたいです。

＜第５時の感想より（原文引用）＞

・そんなにたべられないこや、でんきをつかえないこのために、いっぱいへらしたいです。

・みんながちきゅうをたいせつにしよう。

・お水やでんきをむだにしたら、ちきゅうがこまることにきづきました。

・みんながせんせいのいうことをきいて、まずしいこどもたちもちきゅうもへいわになってほしい。

・せかいのもんだいがつながっていることがわかった。

9　授業実践全体の成果と課題及び課題の改善策

P・国際理解教育にはもともと関心があった。しかし、「国際理解教育」と大言できるような授業をしたことがなかったので、本研修に参加して、理解したいと考えていた。授業実践にあたり、渡航前には、とにかく興味・関心をもたせるために、担任自身が楽しい異文化での体験をたくさん行ってこようと考えていた。食や遊びなど、小学１年生にとって身近なことをとっかかりに興味をもたせようと計画していた。

D・現地では、JOCV の方の生の声が聞けたことが有益であった。学校の視察に行き、校長先生のお話しをうかがったり、教科書を見せていただいたりしたことも、観光の旅行ではなかなかできないことでよかった。授業において、クイズや実物の紹介など、子供たちは意欲的に授業に参加していた。

C・世界の諸問題を自分事にとらえさせるために、１年生にはもっと丁寧に手だてをふまなければならな

いと再度認識した。今後モンゴルを教材に授業をする時には、導入から子供にたっぷり疑問・知りたいという気持ちをひきださせたい。授業において、子供たちの振り返りから、自分ごととしてとらえることができているかというと必ずしもそうではないと感じさせられた。

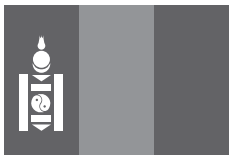
A・児童に、より自分ごととしてとらえさせるには、教師の「体験的な学び」が大切であると考える。生の外国の人とのコミュニケーションや、文化・生活体験をすることが、教師にとっても児童にとっても新たな学びを与えてくれると思う。次年度以降、自分が生きた教材になるので、説得力は増す。授業実践後、担任がアメリカに旅行したことを紹介した時にも、興味をもって聞いていた。普段長い時間を共に過ごす学級担任が体験したことは、子供たちにとって身近に感じることができる。伝え続けることが私にできることであり使命であると考える。そして、個人としてだけではなく、学校全体に国際理解教育を広げていくことと、シラバスに国際理解教育を盛り込んでいきたい。

以上のことより、成果としては①児童が外国への興味を強めたこと、②小学１年生なりに、世界のために自分ができることを一人一人が考えることができたことを挙げる。課題としては、発達段階を考えると、世界の問題を知り、それに対して自分も何かできることがあるという展開までが少し強引だったことが挙げられる。そのため、自然とそういった気持ちを芽生えさせる手立て、展開の工夫が今後求められる。

10　教師海外研修に参加して

丁寧な事前、事後研修により、国際理解教育の様々な手法を学ぶことができた。ESD 教育についても、中身を理解することができた。また、JICA の様々な取組を知ることができ、日本人として誇りを感じ、その気持ちを児童にも伝えることができた。

今回学んだことを今後も東京の子供達に還元し続けていきたい。



学校名：新宿区立牛込仲之小学校

氏名：蕎麦田　佳子

［担当教科：小学校全科］

- 実践教科等：学級活動
- 時間数　　：全5時間
- 対象生徒　：小学校1年生
- 対象人数　：27 人

1　単元名

せかいのなかまと　つながろう　～うしなかちゃん　モンゴルへ行くの巻～

2　単元の目標

・モンゴルの文化に触れ、世界の国々に興味・関心をもつと同時に、他国の文化を尊重する態度を養う。（すすんで参加する態度）

・モンゴルと日本のかかわりを知り、自分たちができることを考えることができる。（つながりを尊重する態度）

3　ESD（持続可能な社会づくり）の視点

多様性	相互性	有限性	公平性	連携性	責任性

・モンゴルの文化を知ることで、世界には様々な価値観があることに気づく。（多様性）

・日本とモンゴルのつながりを知る。（連携性）

・世界の国々の現状や日本の支援を知り、自分たちが今できること、将来できることを考える。（責任性）

4　単元の指導について

（1）教材観

現任校では、外国語活動を通して積極的に外国語を聞いたり、話したりする意欲を高めたり、日本と外国の生活・文化・習慣・行事等に違いを知り、体験的に理解を深めることを指導の重点としている。また国際交流の時間に、留学生の活用を図り、日本文化を見つめ直しコミュニケーション能力や異文化への関心を高める活動を行っている。

そこで異文化への関心を高めることはもちろん、本単元を通して児童には、自分たちが今いる環境がいかに恵まれているかを感じとらせたい。またモンゴルを含め、世界の人々がよりよい環境で生活をするために自分たちが今できることは何かを考えさせることを通して、自分がよりよく生きるためにどうしたらいいのかを考えるきっかけとしていきたい。

（2）児童生徒観

現任校は、外国での生活を経験している児童や韓国や中国などから来ている児童が多い。本学級の児童も、幼い頃から様々な国籍の友達と過ごしている児童が多いため、外国人に対して偏見をもたず受け入れることができる。外国語活動の時間にスリランカ出身のALTの先生からスリランカに

ついて話をしてもらった時には、興味深そうに聞いている姿が見られた。また英語を習っている児童も多く、日常的に英語に触れる機会が多く、進んで英語でコミュニケーションをとろうとする児童が多い。

モンゴルについては、国名を知らない児童がほとんどであったが、国旗図鑑を読んで国旗を知っている児童も数名いた。「スーホと白い馬」については、図書の時間を活用して読み聞かせを行い、興味をもたせるようにした。

（3）指導観

単なる文化紹介や異文化体験にならないようにするために、児童に課題意識をもたせるような指導計画にした。自分たちの疑問から次時の課題を設定していくことで、最後は自分の生き方や考え方につながるようにしていく。

第１時では「モンゴルについて知る」というねらいのもと授業を行った。モンゴル語や音楽、食べ物、民族衣装などに触れた。授業後の感想では「もっとモンゴル語を知りたい」「馬頭琴を弾いてみたい。」などの授業に関連した感想をもった児童がたくさんいた。他にも「モンゴルの子供たちがどんな遊びをしているか知りたい。」「モンゴルの小学校の様子を知りたい。」「ウランバードル以外の町はどんな様子か知りたい。」など、今後につながるような感想をもつ児童もいた。

児童には、モンゴルに対して親しみをもつだけではなく、日本とモンゴルのつながりを知り、さらに世界各国と日本がどのようにつながっているかを考えさせていきたい。また、世界の様子を知った上で、自分たちが今できることを考えていけるようにしていきたい。

５ 評価基準

観点	他国の生活や文化に対する関心・意欲・態度	他国の生活や文化に対する気付き	自分自身の生き方に対する思考・判断
評価規準	外国には様々な生活や文化があることを知り、そのよさについて興味・関心をもち、さらにもっと知りたいという思いをもつことができる。（１－１）	日本とモンゴルを比べ、日本とは違う生活や文化があることに気付くことができる。（２－１）	世界の現状を知り、自分自身が現在、未来において、どのように外国とかかわっていくか、そのために今できることは何かを考えることができる。（３－１）
評価方法	①発言 ②ワークシートへの記入	①発言 ②ワークシートへの記入	①発言 ②ワークシートへの記入

６ 単元の構成

時限	小単元名	学習のねらい	授業内容
1	モンゴルってどんな国？	・モンゴルの基本的なことを知り、モンゴルに興味をもつ。 ・モンゴルの文化について触れる。	・モンゴルの基本的な情報を知る。（場所、国旗、言語など） ・モンゴルの文化（あいさつ、文化、食事等）を知る。
2	モンゴルと日本の小学校を比べよう。	・日本とモンゴルの小学生の同じ所や違うところなどを比べ、モンゴルをより身近に感じる。	・ウランバートルの小学校の様子を日と比較しながらクイズ形式で知る。 ・同じところ、違うところをまとめる。
3	モンゴルと日本のつながりを知ろう。（1）	・地方に住む子供たちの教育現状を知り、自分たちが恵まれた環境で教育を受けていることを感じさせる。 ・JICAの取り組みを知り、日本とモンゴルの関係を知る。	・地方とウランバートルの写真を比べ、フォトランゲージをする。地方に住む人々の様子を知り、遊牧民に子供たちがどのように教育を受けているのかを考える。 ・遊牧民の子供たちがウランバートルの学校に行くと、どうなるかを考える。 ・日本のモンゴルへ支援していることを知る。
4	モンゴルと日本のつながりを知ろう。（2）	・日本が小学校以外でも支援していることを知る。 ・モンゴルで活躍する日本人を知り、資金だけでなく技術でも協力していることを知る。	・モンゴルで活躍している日本人がいることを知る。（インタビュー動画） ・協力隊員の話を聞き、支援するというのはどういうことかを考える。 ・なぜ日本がモンゴルに支援しているか考える。
5	他の国ともつながろう。	・日本と他の発展途上国のつながりを知る。 ・自分が将来、どんな分野で世界の国とつながっていけるかを考える。 ・自分たちの「今」と「未来」で世界とどうつながっていくかを考える。	・日本はどの国とどんなかかわりがあるかを知る。 ・世界の国々現状を知る。 ・「もし自分が青年海外協力隊員だったら」どんな分野で活動できるかを考える。 ・未来のために、今、自分たちのできることを考え、発表する。

７ 授業事例の紹介

小単元名【他の国ともつながろう】

（1） 指導案

（ア）実施日時　12 月7日（月）第5限

（イ）実施会場　1年2組教室

（ウ）本時の目標

・モンゴル以外の途上国の現状と、日本の海外協力青年隊の活躍を知ることで、今後の自分の生き方を考えることができる。

（エ）指導のポイント

・自分の生き方を考えることに十分時間をとった。世界の現状や日本の支援の様子などを押さえた上で、自分が将来どんなふうに生きていきたいか、そのためには今何をしなければいけないかを考えさせる。

（オ）本時の展開

過程・時間	指導内容	学習活動	指導形態	指導上の留意点	評価（評価規準・評価方法）
導入 5分	前時までの復習をする。	・モンゴルと日本との関係、青年海外協力隊の取組をおさえる。	一斉	・モンゴルと日本の関係や青年海外協力隊の取組などを具体的にあげて、今までの学習を想起させる。	
展開 ① 15分	青年海外協力隊が他にどんな国に派遣され、どんな活動をしているかを紹介する。	・発展途上国の現状を知り、日本の青年海外協力隊員がモンゴルだけではなく、世界のいろいろな国で派遣され、様々な分野で活躍していることを知る。	一斉	・モンゴルだけでなく、世界には支援を必要としている国がたくさんあること、日本からたくさんの青年海外協力隊員が様々な分野で活躍していることを、具体的に例示する。	
展開 ② 15分	もしも自分が海外青年協力隊員になったら もしも、自分が将来、青年海外協力隊員になったら、どんなことができるかを想像する。	・もしも、青年海外協力隊員になったら、自分はどんなことができそうか考える。 ・個別にワークシートに記入後、グループ、全体と順に発表しあう。	個別 ｸﾞﾙｰﾌﾟ 一斉	・「もしも自分が海外青年協力隊員になったら」と考えることで、世界に目を向けさせるきっかけをつくる。	自分が将来どのようなことができるかを考えることができる。 （3－1）
展開 ③ 5分	日本と発展途上国は、互いに助け合っている関係にあることを知る。	・日本は発展途上国から資源を輸入していることを知る。 ・発展途上国との関係がなくなったら、自分たちの生活がどのように変化するか予想する。	一斉	・互いに助け合っていることに気付かせる。 ・途上国から資源が輸入されなくなったら、自分たちの生活が不便になることがあることを知り、世界の国々と仲良くしていこうという思いをもたせるようにする。	世界の現状を知ることができる。 （3－1）
まとめ 5分	学習シートに振り返りを書かせる。	・学習を振り返っての感想を書く。	個別		

（2）授業の振り返り

「もしも、自分が青年海外協力隊員だったら、どんなことで世界の困っている人たちを助けることができそうか」と発問したことで、児童が将来について考えるきっかけができた。そこから、将来のために「今、どうすればいいのか」ということを考えさせた。まずは、自分が日々を大切にしっかり生きていくことが、将来何らかの形で国際協力につながると考えたからである。

そこで前時に児童の感想にあった「青年海外協力隊は他にどんな国へ行っているのか。」「他にどんな仕事をして、困っている国を助けているのか。」などの疑問を本時につなげた。青年海外協力隊の仕事分野や職種を1年生にも分かるように説明することが大変難しく、そこで時間がかかってしまった。説明をしても、1年生にはピンとこない内容もあった。スポーツ分野では、児童がイメージをもちやすく、反応が大きかった。説明時間を短くするために、もう少し紹介する職種を精選すればよかったと思った。

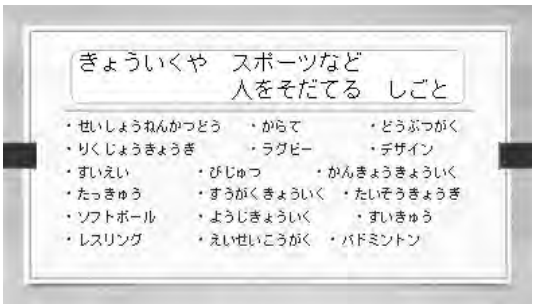
児童が、「青年海外協力隊になる」ということに対して、何の疑問も抱かず、一生懸命自分は何が得意か、将来何になりたいかなどを考えていたことが印象的だった。自分たちも、世界の困っている国を助けるのが当然だという気持ちをもったようだった。その気持ちを持続させられるような指導を計画的に行っていくことが大切であると感じた。

（3）使用教材

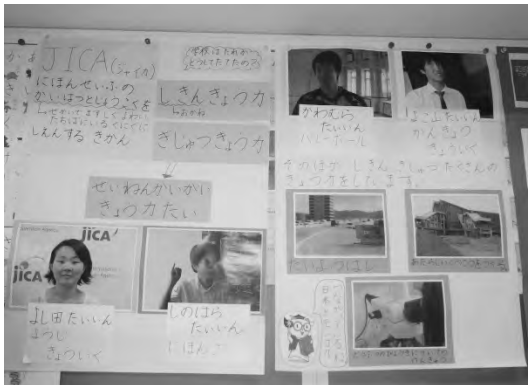
①スライド（一部抜粋）

青年海外協力隊の主な派遣先

青年海外協力隊の協力分野



②前時まで流れを掲示（一部抜粋）



③ワークシート

せかいの　くにと　つながろう
～うしなかちゃん　モンゴルに　いく　のまき～

NO5　　なまえ＿＿＿＿＿＿

①もしも　せいねんかいがい　きょうりょくたいいんに　なったら・・・・

じぶんは、どんなことで　かいはつとじょうこくの　ひとたちを　たすけて　あげられるかな。

②かんそう

（4）参考資料等

・JICAプロフィール

http://www.jica.go.jp/publication/pamph/ku57pq00000najg5-att/jica_profile.pdf

・JICAの仕事

http://www.jica.go.jp/publication/pamph/ku57pq00000najg5-att/work_151224.pdf

8　単元を通した児童の反応/変化

第１時、第２時を終えての感想

・モンゴルのことがもっと知りたい。
・モンゴルと日本は似ていて面白い。
・モンゴルの子供たちはどんなことをして遊んでいるのかを知りたい。
・モンゴル小学生はどんな勉強をしているか知りたい。
・モンゴルの学校に日本の国旗があるのが不思議。
・学校に通う人の人数が多くてびっくりしました。
・ウランバードル以外の町の様子も知りたい。

第３時を終えての感想

・モンゴルの人たちは、日本人が好きなんだな。
・モンゴルの人たちを日本人が助けたと思うと、すごいなと思いました。
・学校の中になぜ日本の国旗があるのか、意味がわかったのでうれしかった。

・日本に人がどうやって助けているのか、もっと知りたい。
・他にどんな日本人がモンゴルにいるのかな。
・他のことで助けていることがあるかを知りたい。

第４時を終えての感想
・スポーツで助けるなんてびっくりした。
・ジャイカがいろいろな国を助けているんだなと思いました。
・日本はたくさんモンゴルを助けているんだな。
・なんで日本は、モンゴルを助けているんだな。
・青年海外協力隊は、他にどんなことで助けているのかな。
・他にどんな国に行っているのかな。

第５時を終えての児童の感想
・青年課外協力隊の人たちってすごいな。
・いろんな仕事があるんだな。
・ぼくも、将来海外青年協力隊になりたい。

９　授業実践全体の成果と課題及び課題の改善策

授業全体の成果

国際理解教育では、文化を理解したり、外国の人とのコミュケーションをとったりすることに重点を置いてきたが、海外派遣を通して一時的な文化理解や支援ではなく、長期的にかかわっていくことやその国に合った支援をしていくことの大切さを学んだ。そこで児童には、単発的な「国際理解」にならないために、「自分の生き方」を通して、開発途上国とかかわっていくための素地を養いたいと思った。そこで、文化紹介や体験中心の指導計画から、児童が自分の生き方を考えていけるような指導計画に変更した。

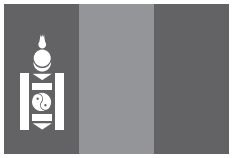
しかし１年生の児童に、世界の国々と自分とのつながりを考えさせるということは、大変難しいと感じたため、「もし自分が青年海外協力隊員だったら」と「もし」という仮定法未来を考えることで、将来の自分と世界の国々とのつながりについて考えさせることにした。第３時、第４時の学習内容の効果もあり、児童が青年海外協力隊員になるという未来に疑問を抱かず、自分が世界のために何ができるか、将来何になって困っている国を助けたいかを考えることができた。

課題及び課題の改善策

P〈計画〉：児童が課題意識をもち、児童の疑問から次の課題を設定できるような指導計画にした。
D〈実施〉：児童に課題意識をもたせるため、疑問をもつような写真を活用した。また興味関心をもつことができるよう、クイズを取り入れたり、動画を活用したり、ワークシートを工夫したりと、１時間集中して学習できるようにした。
C〈検証〉：児童の発達段階を考えると、内容としては難しかったのではないかと考える。特に言葉の説明が、１年生にわかる言葉に直すことができない面もあった。またそのことで教師の説明が長くなり、児童同士の交流等の時間が短くなった場面もあった。もう少し、児童同士が互いの考えを交流できる時間を確保する。
A〈改善〉：各教科、領域などの指導計画を見直し、児童が折に触れ今回学んだことを思い出すような機会をつくる。そして、改めて自己の生き方について考えていけるようにする。

10　教師海外研修に参加して

国際理解教育をなんとなく行っていたが、今回研修に参加して、「国際理解教育について自分はこう考える」という明確な思いをもつことができた。そのことで児童に何を伝えたいか、何を考えさせたいかという、ねらいのはっきりした授業を行うことができたと思う。教師自身が、確固たる自分の思いをもってつくりあげた授業は、必ず児童の心に響くと思う。研修に参加したことで、その確固たる思いをもつことができたことが、私にとって一番の成果である。今後も、児童が世界の国々とつながっていくために、今自分は何をすべきかをしっかりと考えていけるような機会を設けていきたい。



学校名：多摩市立大松台小学校

氏名：　濱元　徹美

［担当教科：全科］

- 実践教科等：道徳、学活
- 時間数　：　5時間
- 対象生徒　：第三学年
- 対象人数　：　29 人

1　単元名

わたしとモンゴルと世界と

2　単元の目標

・モンゴル文化や生活等を通して、世界中の様々な国にはそれぞれの文化があることを知り、他国の文化を尊重する態度を育む。
・他国の文化を知り認め合う心情を育てると共に、自国の文化について興味関心を深める。
・日本の国際協力活動について知り、異なる文化をもつ人々と一緒に活動したり、協力したりする態度や心情を育てる。

3　ESD（持続可能な社会づくり）の視点

多様性	相互性	有限性		公平性	連携性	責任性

・モンゴルの自然や文化を知ることで、世界には様々な文化や価値観があることに気付く。（多様性）
・その土地の文化や価値観は、その土地の風土や環境と関わりあっていることに気付く。（相互性）
・日本とモンゴルのつながりや、日本と他国が関わりあっていることを知る。（連帯性）

4　単元の指導について

（1）教材観

・学習活動として、児童が自分で文化の違いや多様性に気付いたり、考えたり、興味を深めたりできるように視覚的資料を用いた。
・他者の意見を尊重したり、共同的に学んだりできるようにグループ学習でフォトランゲージを行い、自分の考えを持つとともに、他者の考えも共感し受け入れるようにした。
・授業の振り返りのときに「違っているところ・似ているところ」という視点でワークシート記入し、多様性や相互性、日本とモンゴル、日本と外国との連帯性を意識できるようにした。

（2）児童観

事前のアンケートでは、「知っている外国の名前」という質問では、平均で7カ国の国を知っている。アメリカ、中国、韓国を上げる児童が多かった。ちなみにモンゴルと書いたのは一名のみ。「外国に行ってみたいですか」という質問では、29 名中 17 名が行きたいと答えた。約 59 パーセントの児童が外国に行ってみたいという結果である。「外国で生活してみたいですか？」という質問では、生活したいと答えた児童は、29 名中８名で約 28 パーセントという結果であった。「ジャイカを知っていますか」という質問では、知っている児童は一人もいなっかた。

（3）指導観

児童はモンゴルについての知識はほとんどないため、学ぶことが新鮮に感じられる状況を生かし、発見のある授業にしていきたいと考えた。また、日本とモンゴルとの違うところ、似ているところを比較しながら考えることで他国を理解すると共に、自国にも興味を深め、世界の国々はつながっているということを感じることができるよう考えた。

また、三年生という発達段階を考え、モンゴルで手に入れた教材（民族衣装、紙幣、ゲルの模型等）

を教室展示して、児童が見たり、触ったりできるよう工夫した。さらに、現地で撮影した写真や映像、青年海外協力隊の方のインタビュー映像、現地の通訳でもあるモンゴル人の方へのインタビュー映像をを授業の中で取り入れて、イメージを持たせやすくした。

そして、モンゴルのことだけではなく、世界中の国に興味や関心を持たせるため、世界中のくらしの写真をもとにフォトランゲージを行いそれぞれの国の文化を尊重し理解できるように考えた。

5 評価基準

観点	1 関心・意欲・態度	2 国際理解
評価規準	・モンゴルの文化に親しみ興味を持って取り組もうとしている。（1－1） ・友だちと協力して取り組もうとしている（1－2） ・国際協力について関心を持って取り組もうとしている。（1－3）	・モンゴル文化知り、尊重し理解し認めようとしている。（2－1） ・日本とモンゴル。日本と世界の関わりについて知る。（2－2） ・国際協力について知る。（2－3）
評価方法	発言 ワークシート 授業への参加態度	ワークシート 授業への参加態度

6 単元の構成

時限	小単元名	学習のねらい	授業内容
1	モンゴルの人々の生活について	異文化を理解しようとする力、多様性を認め合おうとする心情を育てる。	モンゴルの人々の暮らしと自分たちの暮らしを比べて考えさせる。
2	モンゴルの小学生の生活について	日本とモンゴルの生活の違いや共通点を身近に感じ相互性や多様性を理解する。	モンゴルの小学生の生活を知り、モンゴルをみじかに感じ、自分の暮らしと比べながら、考える。
3	世界の人々の暮らしについて	世界の人々の暮らしに興味をもち多様性を育てる。	世界の人々の暮らしについて考える。
4	他国でボランティアする気持ちを考えよう	他国を尊重しながら、ボランティアするときの心情について考える。	青年海外協力隊の活動から、他国でボランティアするときに大切なことは何か考える。
5	モンゴルの文化や歴史を知ろう。	他国文化を尊重し認め、自然、文化の多様性、有限性を理解する。	モンゴルの文化を通して他国の文化に興味をもち世界の文化にも興味を広げ多様性を育てる。

7 授業事例の紹介

小単元名【他国でボランティアする気持ちを考えよう】

（1） 指導案

（ア）実施日時 12 月9日（水）第5限

（イ）実施会場 3年3組 教室

（ウ）本時の目標

青年海外協力隊の活動を知り、他国でボランティアするときに何が大切なのか考える

（エ）指導のポイント

青年海外協力隊員が大切にしていることを知り、ボランティアについて深く考えさせる

（オ）本時の展開

過程・時間	指導内容	学習活動	指導形態	指導上の留意点	評価（評価規準・評価方法）
5分	JICAについての簡単な説明。	JICAについて知る。	一斉	JICAの活動内容を児童に理解できるように説明する。	国際協力について知る（２－３）
10 分	JICAのモンゴルでの活動を紹介する。	モンゴルでのJICA活動を理解する。 		児童には日本の良さを生かして国際協力を行っていること、相手国が自立できるように支援していることに気づかせる。	
10 分	青年海外協力隊のモンゴルでの活動を紹介する。	モンゴルでの青年海外協力隊の活動を理解する。		それぞれの協力隊の思いや持ち味を生かした活動であることに気付かせる。	国際協力について関心をもって取り組む（１－３）
10 分	JICAや青年海外協力隊の活動でどんなことを大切にしているのか	他国でボランティアしている中で大切なことは何か考える。 	個人	相手を気持ちを尊重しながらボランティアをすることに気付かせる。	
5分	自分自身を見つめる。	自分の考えを伝えたり、友だちの考えを聞いて共有する。	ペア	普段の学校生活や児童の身近な生活から考えさせる。	
5分	本時をふりかえる。	本時を振り返る。 	個人	学習したことを振り返り普段の生活に結びつけさせる。	

（2）授業の振り返り

・今回の海外研修で学んだ JICA の取り組みと青年海外協力隊の活動を写真や動画を使って紹介することで、児童は臨場感をもって日本の国際協力活動を知ることができた。

・青年海外協力隊の方の活動を詳しく知ることやインタビューを通して、隊員の方が大事している思いを知ることで、相手の気持ちを考えてボランティアすることの大切さを学習できた。

（3）使用教材

① 無償資金協力事業視察小学校、ゲル地区、ソンギノハイルハン地区ブリーフィング、保険卒後研修プロジェクト、モンゴル日本人材センター、新モンゴル高校、淡水資源自然保護センター、トゥブ県スポーツ委員会、新空港建設サイト、スジャータシャンド、獣医プロジェクト、オルホン渓谷の写真

→第一時でどこの国なのかを考えさせるために活用した。

② ゲル地区の小学校視察での写真、動画、校長先生へのインタビュー

→モンゴルの小学生の生活を考えることに活用した。

③ JICA での事前研修で行ったフォトランゲージ

→世界の国々の写真を見せてモンゴルだけではなく、世界の国々についてグループでフォトランゲージすることに活用した。

④ 現地の青年海外協力隊の方のインタビュー

→協力隊の活動紹介への活用、ボランティアする気持ちを考えさせるために活用した。

⑤ オルホン渓谷での写真、ゲルの中の映像、馬頭琴の演奏、通訳さんのインタビュー

→モンゴルの文化を深く知る学習に楽しく活用できた。

（4）参考資料等

・外務省世界いろいろ雑学ランキング http://www.mofa.go.jp/mofaj/kids/ranking（2015 10 月 30 日）
・世界ランキング世界経済のネタ帳 http://ecodb.net/ranking/（2015 10 月 30 日）
・外務省世界の学校を見てみよう http://www.mofa.go.jp/mofaj/kids/kuni/（2015 10 月 30 日）
・開発教育協会 http://www.dear.or.jp/book/book01_hungryplanet.html（2015 10 月 31 日）

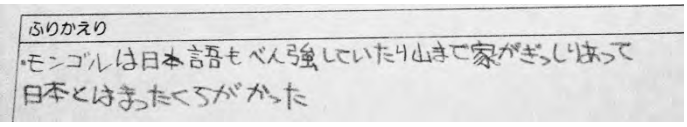
8 単元をとおした児童の反応/変化

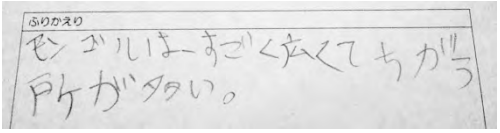
・単元のはじめの方では、写真のスライドを多く見せた。はじめは、ウランバートルの都会の写真から見せると子供達は、横浜？などという声が多かった。徐々に、スライドを進めると、町の様子から外国であることに気づき、子供達の発言では、アジアの国を上げることが多く、とても鋭い感性をもっていることに感心した。草原やゲルのスライドを見せるとモンゴルであることに気づきいた。その過程で様々な文化の融合や国と国の連帯性を感じることができたのではないかと考える
・次に、モンゴルの小学生の生活を考えることで、他国の文化に興味をもって考えさせた。その国の抱える課題について児童自身の生活と比べながら考えることができた。
・次に、世界の暮らしについて、フォトリーディングで考えさせた。モンゴルを通して世界にも目を向させたい。モンゴルのことだけではなく、世界の国々にも興味や関心を持たせ、それぞれの国の文化の特徴を理解し認め合えるようにしたかった。児童は6つの異なる地域の写真をもとに、そこで暮らす人々がどんな生活をしているのか、どんなことを大切にしているのか、どんな問題があるのか写真から想像して考えた。写真に現れている文化的な特徴に気付き、より良く考えることができた。

児童のフォトリーディング

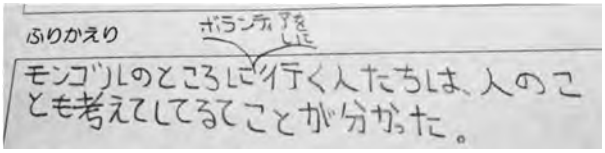
児童の感想

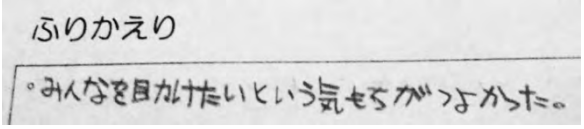
日本とモンゴルについて

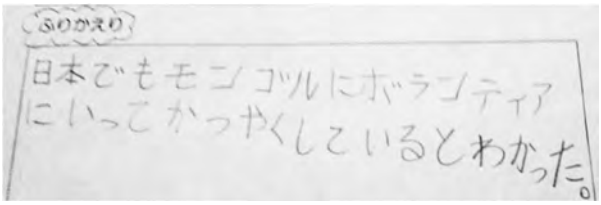

ふりかえり
・モンゴルは日本語もべん強していたり山きで家がぎっしりあって日本とはまったくちがかった

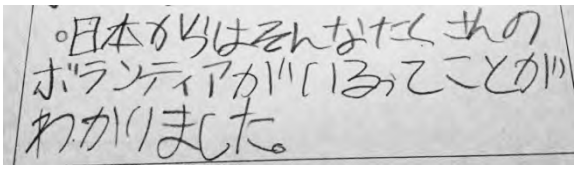

ふりかえり
モンゴルはすごく広くてちがう所がたくさん。

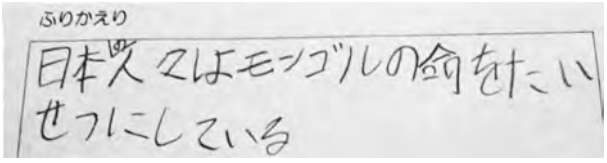
国際協力活動について

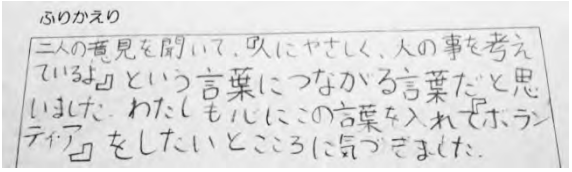

ふりかえり
ボランティアをしに
モンゴルのところに行く人たちは、人のことも考えてしてることが分かった。


ふりかえり
・みんなを助けたいという気もちがつよかった。


ふりかえり
日本でもモンゴルにボランティアにいってかつやくしているとわかった。


・日本からはそんなたくさんのボランティアがいるってことがわかりました。


ふりかえり
日本人々はモンゴルの命をたいせつにしている


ふりかえり
三人の意見を聞いて、『人にやさしく、人の事を考えているよ』という言葉につながる言葉だと思いました。わたしも心にこの言葉を入れて『ボランティア』をしたいところに気づきました。

9　授業実践全体の成果と課題及び課題の改善策

P　国際理解教育には興味があったが、実践したことはなかった。教師海外研修をきっかけにしていきたいと思って参加した。国際理解教育や開発教育とは何か調べて事前学習をした。授業構成、授業手法の研修に参加して理解を深めた。

D　似ているところと違うところを中心に写真をとった。児童に興味をもってもらえることや、理解できること、驚くことを中心に質問したり、写真を撮ったり、動画を写したりすることを心がけた。教師自身が文化について興味関心が高まり、さらに他の国はどうなっているのか興味が広がった。また、JICA の活動や青年海外協力隊の活動と現場で視察したり、話を伺ったりすることで私自身、国際協力活動について深く知ることができた。

C　旅行ばなしにならないように気をつけた。できる限り児童に気付かせる授業手法を学び研修や書籍や JICA の資料を活用した。児童の反応や興味をつかむことに不安があったので、事前授業を行ったりした。児童が授業中に活動的になれるように工夫することが難しかった。何より海外研修で経験したことや学んだことを生かして授業をしたいと考えた。授業する際に、子供が主体的に活動できる授業づくりを考え、実践しようとしたが、発達段階を理解して授業することは難しく、ゴールの設定も難しかった。今回の三学年で国際理解教育を実践できた経験を次に生かしたい。

A　私自身、国際理解教育、開発教育をより学習していく気持ちが芽生えた。また、モンゴルだけではなく他国の文化にも興味が広がった。

10 教師海外研修に参加して

研修を終えて改めて感じたことが五つあります。

一つ目は、国際理解教育、開発教育の必要性を感じました。今回、海外で研修させていただき、自分の身をもって体験することで、自分の視野が広がりました。今まではずっと日本で生活し、海外旅行や留学経験も少なかったので、国際理解に関しても実感がありませんでした。モンゴルで研修させていただき、私自身が国際理解教育に興味を深めることができました。子供たちにも、この研修で体験した感覚を伝え、興味をもってもらいたいと強く思いました。

二つ目は、発展途上国が置かれている状況、国際協力の現場で起きている現状を実感することができました。今までは、ODA の活動はパンフレットや雑誌で知ってはいましたが、実感を伴うものではなく、子供たちに教える時にも深みがありませんでした。今回の研修で、JICA が取り組んでいる事業や青年海外協力隊の活動を生で見ることができました。ODA の活動を深く感じることができ、とても貴重な体験ができたと思います。子供たちにも、自信を持って伝えることができると感じました。

三つ目は、開発途上国と日本との関係、特に相互依存関係について実感することができました。日本人が他国と一緒に手を取り合って援助しようとしている活動を見ることができ感動しました。日本の援助の良さを改めて感じることができました。学校でも、協力してやり遂げる良さや、一緒に取り組んで頑張ろうとする良さをこれまで以上に自信を持って伝えることができると思いました。また、そのような力は世界に貢献できることを伝えていきたいと思いました。

四つ目は、国際協力及び JICA の概要を理解することができました。モンゴルが援助した後も自立して活動出来るように援助を行っているということが大切であることを実感しました。17 番小学校の無償資金協力事業視察やソンギノハイルハン地区の教育、文化課長ブリーフィング、モンゴル日本人材センターの技術協力サイト、保健卒後研修プロジェクト、新モンゴル高校の篠原隊員の活動視察、淡水資源、自然保護センターの無償協力支援事業施設、新空港建設サイトの円借款プロジェクトサイト見学、トゥブ県スポーツ委員会河村隊員の活動視察、Save the children Japan 事業視察、スジャータシャンド吉田隊員の活動視察、SATREPS の技術協力プロジェクト視察のどれを通してもモンゴルの文化や習慣を尊重しながら、手を取り合って援助をしていることを感じました。

最後に、今回、この報告書には書ききれないほどの学びがたくさんありました。教師海外研修では、同行した JICA の方々をはじめ、一緒に研修を行った仲間からも多くのことを学ぶことができたと思います。教師としても、人間として大きく成長することができたと感じています。このような機会をいただいて本当に感謝しています。この研修を生かして、さらに成長し続けることが大切であると改めて感じました。

学校名： 長野県中野市立倭小学校 氏名： 松井真由美 ［担当教科：小学校全教科］	● 実践教科等： 総合的な学習の時間 ● 時間数 ： 10 時間 ● 対象生徒 ： 小学校5年生 ● 対象人数 ： 9人 （全校 46 人）

1 単元名

明日をつくるわたしたち

2 単元の目標

〇世界の多様な文化・生活を知り、自分と同じところや違うところに気づき、外国の人々や文化への理解を深める。（進んで参加する態度）（コミュニケーションを行う力）

〇環境問題や開発途上国の様子、日本の国際協力について聞いたり調べたりすることを通して、地球はつながっていることを理解し、これからの自分に生かしたいことや今の自分にできることを考え、行動しようとする。（つながりを尊重する態度）（他者と協力する態度）

3 ESD（持続可能な社会づくり）の視点

多様性	相互性	有限性	公平性	連携性	責任性

・世界には様々な文化があることに気づく。【多様性】

・環境問題は地球上で全てつながっており、私たちの生活は、世界の国々とお互いに協力し合うことで成り立っていることに気づく。【相互性】

・国際社会の平和と発展や環境の保全には、一人一人が国際社会の一員として、自分たちにできることを実践していくことが大切であることに気づく。【連携性・責任性】

4 単元の指導について

（1）教材観

本校は 11 月に「なかよし（人権）旬間」が設定されている。この機会に国際理解を目的とした全校集会を開き、私がモンゴルで体験したことや、出会った人を紹介することで、外国に興味を持てるようにする。その際、同じ小学生が馬に乗っていることなどを紹介することで、「自分と似ている人・自分と違う人―みんなちがってみんないい―」と様々な環境や文化背景があることを理解し、その違いや良さを受け入れることができると考える。そして、日本が行っている国際協力（資金面・技術・人）を紹介することで、その意義について考え、自分自身の行動や生き方についても考えを広げたい。

「子ども環境白書」「ESD クエスト」で、世界で起こっている環境問題について一人一人の興味に合わせて調べる活動を行うことで、さらに理解を深められるだろう。そして、実際に海外協力隊等を経験した方のお話を聞くことで、国際協力を身近なことと感じ、自分にもできることを考えさせたい。情報教育と合わせ、学んだことをパソコンで新聞にすることで、多くの人に伝える活動へと広げ、自分にできることを少しでも行動へとつなげていきたいと考える。

（2）児童観

５年生の子どもたちは、10 月の音楽会でクラス合唱曲として「平和の鐘」選び、戦争やその歌詞の意味について考え合い、だれもが「外国の人ともなかよくしたい」という気持ちを持っている。幼少期から同じメンバーで過ごしており、仲がよいという良さがある反面、人間関係が固定化しており、深く考えずに発言力のある子の行動に流されている面もある。小規模校であるため、様々な個性を持った子や多様な考えに触れていないという面もある。様々な人と触れ合える他校との交流活動を楽しみにしている面もあるが、慣れ親しんだ人間関係の中で安心して過ごしたいという気持ちも感じる。また、テレビでの情報から「〇〇人は〇〇だ」など、安易に一方的な情報を鵜呑みにしている面もある。

子どもたちを育む中野市は、「えのきだけ」の生産が日本一である。子どもたちは昨年４年生の時、えのき栽培工場を見学した。その際、工場には東南アジアや中国からの研修生が働いていることを知

った。また、えのきの機械を製造している工場に行った際には、作られた機械は主に中国などの外国へ輸出されることを知り、驚いていた。海外とのつながりが希薄であると思われる地域に育つ子どもたちではあるが、様々な形で諸外国との関わりがあり、今後その傾向はいっそう増えていくことが予想される。

（3）指導観

○イメージしやすいようにパワーポイントで写真や動画を提示したり、音楽を流したり、試飲したり、実物を触ってみたり等と、可能な限り五感で感じられるようにしていきたい。

○「どうしてだろう？」「なぜだろう？」と子どもたちが疑問を持ち、自ら考えたくなるような課題を設定し、考えたことを友だちと伝え合うことで考えを深められるようにしていきたい。

○「これからの未来を創っていくのは自分たちであり、（行動しだいで）未来はどのようにでも創られる」と子どもたちが、明るい未来をイメージし、前向きな気持ちで「自分のできることをやってみよう」と思えるように進めたい。

5 評価規準

評価の観点	A 学習方法		B 自分自身	C 他者や社会
	情報を収集し、分析する	相手や目的に応じてまとめ、表現する	意志決定	他者と協同して、課題解決する
具体の評価規準	進んで本を見たり、データを読み取ったり、質問したりして、世界の様子について調べている。	学習してわかったことや知らせたいことをまとめ、周りに伝えている。	世界の様子に関心を持ち、自分のできることしようとしている。	友と協力して、自分たちにできることを考え、広め、実行しようとしている。
評価方法	ワークシート	発言・ワークシート 新聞づくり	発言・ワークシート 新聞づくり	発言・話し合いの様子

6 単元の構成

時限	小単元名	学習のねらい	授業内容
1	行ってみたい国を調べよう （5年）	・行ってみたい国の生活の様子を調べることで、世界には様々な国があることを知る。	・行ってみたい国が人によって違うことを知り、その国の生活を本やネットで調べることで、自分の生活との違いに気づく。
2	モンゴルの暮らしについて知ろう （全校集会）	・モンゴルの暮らし（衣食住）や小学生の様子を知り、日本との違いやその良さを知る。 ・日本がモンゴルの小学校を建てるために、お金を出したりお手伝いしたりしたことを知る。	・モンゴルの音楽、民族衣装、日本とのつながり（相撲）について知る。 ・モンゴルの食べ物（スーティツァイ）試飲。 ・モンゴルの小学生の草原での暮らし、草原に学校がないこと、日本からの小学校建設無償資金協力について知る。
3	どうして日本は無償でモンゴルの小学校を建てたのか考えよう （4・5・6年）	・日本の無償資金協力について考えることを通して、世界は関わり合い、つながり合っていることに気づく。	・班の中で意見交換したり、他学年の考えを知ったりしながら様々な考えに触れ、日本も戦後や震災の際には援助を受けたことを知り、自分の考えを深める。
4	こども環境白書から学ぼう （5年）	・こども環境白書から ESD について知り、世界はつながっていることや環境問題について関心を高める。	・こども環境白書から、ESD の考え方を知り、興味のある地球環境問題を調べる。
5	ESD を考えよう（ESD クエスト） （5年）	・地球環境や開発途上国の問題について知り、ESD の大切さを知る。	・教材「ESD クエスト」を提示しながら、地球環境や開発途上国の抱えている問題について知る。
6	モンゴルで活躍する日本人 （5年）	・様々な分野で活動している日本人がいることを知り、国際協力に携わっている方々の想いについて考える。	・モンゴルで国際協力活動をしている日本人について知り、インタビュー画像等をみながら、その方々の想いについて考える。
7	国際協力を経験した方から学ぼう （4・5・6年）	・実際に国際協力活動を経験した方のお話を聞き、日本とは違った文化や様々な国際	・外部講師による青年海外協力隊（ブータン美術教師）や NPO（南スーダンでの学校建設）の経験者の話を聞き、その国の

		協力の形があることを知る。	文化や国際協力の実際について知る。
8	私たちにできること　（5年）	・みんなに伝えたいこと、自分ができることについて考える。	・学んだことをまとめ、意見交流し、自分たちができることについて考える。
9	新聞づくり　（5年）	・今、自分ができること、伝えたいことを新聞にして、広める。	・パソコンを利用して新聞を作成し、伝えることで、自分にできることを考えていく。
10	私たちにできること　一気持ちを届けよう一　（5年）	・お金を必要としている人はたくさんいるけれど、どの分野に気持ちを届けるのか話し合う。	・自分たちのお金（お米の売上金）の一部をどのように使うのか、話し合う。

7　授業事例の紹介

小単元名【モンゴルで活躍する日本人】

（1）　指導案

（ア）実施日時　11 月 20 日（金）第２限

（イ）実施会場　５年教室

（ウ）本時の目標

青年海外協力隊員などのモンゴルで活動する日本人について知り、どうして海外で活躍しようと思ったのか考えることを通して、人と人との国際協力の意義について考える。

（エ）指導のポイント

・子ども同士が顔を合わせて話し合えるように班ごと一枚の写真を用意したり、一斉に話し合えるように画像や動画をパワーポイントで提示したりする。

・活動している隊員の姿を伝えることで、自分の生き方（キャリア）を考えることにつなげたい。

（オ）本時の展開

過程・時間	指導内容	学習活動	指導形態	指導上の留意点	評価（評価規準・評価方法）
導入 5分	1　ESDとは何か？ （前時の復習）	○「世界や次の時代の人のことも考え、毎日の暮らしの中で考え・学び・気づくことの大切さ」を思い出す。	班	・こども環境白書2015を手元に置き、いつでも見られるようにしておく。	○ESDについて理解しているか。（発言）
展開 30分	2　モンゴルで活躍する日本人について知る。	○フォトランゲージ1 〔バレーボール指導写真〕 ・写真から、気づいたことを話し合う。 ・だれが日本人か予想する。		・自由に発想するように促す。 ・どうしてそう思ったのか理由も伝えるようにする。	
	学習問題：　モンゴルで活躍する日本人について知ろう				
	学習課題：どうして海外で活躍しようと思ったのか、考えよう				○友だちの考えを聞き、自分の考えを伝えているか。（話し合いの様子）
	バレーボール指導河村隊員 青年海外協力隊とは？ チームで行う新空港工事 障害児支援の吉田隊員 環境問題に取り組む横山隊員 馬の病気の研究に関わる井上教授	○パワーポイントの画像やVTRを見ながら、人や活動について知る。 	一斉	・予想しながら、考えるように促す。	
まとめ	3　まとめ	○ワークシートに記入し、感想を発表する。			○人と人との国際協力の意義を考えるこ

10分		○これからの自分に生かしたいことを考える。			とができたか。（発言・ワークシート）

（2）授業の振り返り

〔よかった点〕

・フォトランゲージでは、「日本じゃないね」「モンゴルの学校？」「バレ　ーボール？」「教えているの？」等、児童が気づいたことを班で伝え合い、どういう場面なのかを予想し、考えを深める姿が見られた。その後、気づいたことをクラス全体に発表することで、より興味を持って学習に参加することができた。

・教師自身がモンゴルの女子高生と一緒に　バレーボールをしている姿を動画で示したことで、より興味を持てたようだ。

・実際の画像や動画を見ることで、様々な分野での協力の現場があることの理解につながった。

・協力隊の方々の生の言葉を聞くことができ、その言葉の意味を考えることで、考えを深めることができた。

〔課題〕

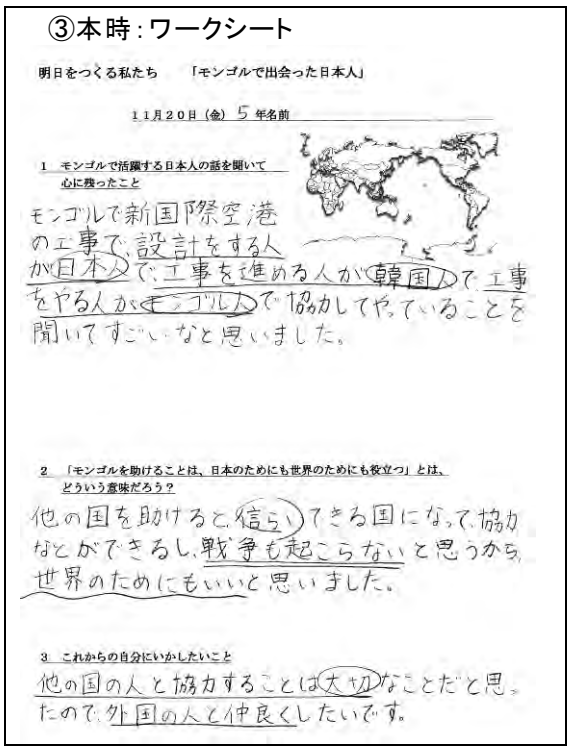
・「どうして海外で活躍しようと思ったのか」と考えることは、モンゴルや海外の様子を知っていないと5年生では難しい課題であると感じた。背景を学んでいくことの大切さを感じた。

（3）使用教材

①フォトランゲージで使用した写真

②使用したスライド（抜粋）

③本時：ワークシート


明日をつくる私たち　「モンゴルで出会った日本人」

11月20日（金）5 年名前

1　モンゴルで活躍する日本人の話を聞いて心に残ったこと

モンゴルで新国際空港の工事で、設計をする人が日本人で、工事を進める人が韓国人で工事をやる人がモンゴル人で協力してやっていることを聞いてすごいなと思いました。

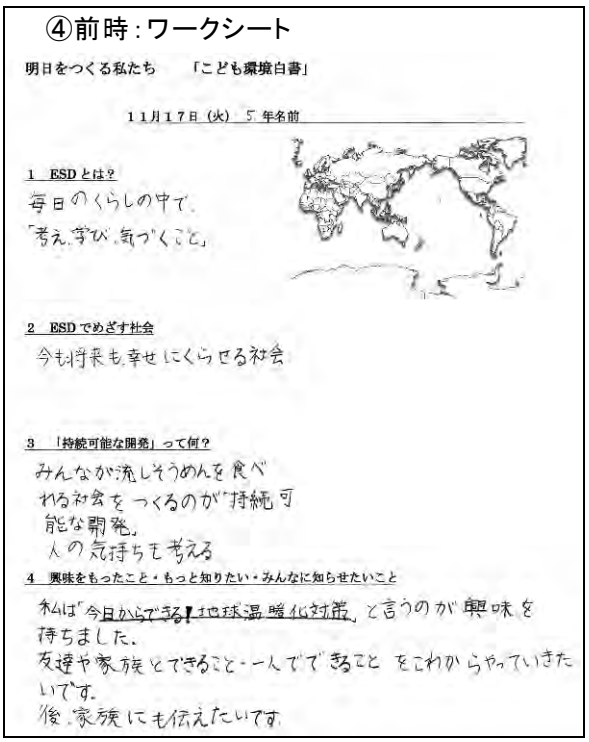
2　「モンゴルを助けることは、日本のためにも世界のためにも役立つ」とは、どういう意味だろう？

他の国を助けると、信らいできる国になって、協力などができるし、戦争も起こらないと思うから、世界のためにもいいと思いました。

3　これからの自分にいかしたいこと

他の国の人と協力することは大切なことだと思ったので、外国の人と仲良くしたいです。

④前時：ワークシート


明日をつくる私たち　「こども環境白書」

11月17日（火）5 年名前

1　ESD とは？

毎日のくらしの中で、「考え、学び、気づくこと」

2　ESD でめざす社会

今も将来も幸せにくらせる社会

3　「持続可能な開発」って何？

みんなが流しそうめんを食べれる社会をつくるのが"持続可能な開発"。人の気持ちも考える

4　興味をもったこと・もっと知りたい・みんなに知らせたいこと

私は"今日からできる！地球温暖化対策"と言うのが興味を持ちました。友達や家族とできること・一人でできることをこれからやっていきたいです。後、家族にも伝えたいです。

8　単元をとおした児童の反応/変化

〔モンゴルの暮らしについての児童の感想〕

・スーティツァイはいい感じはしたけど、味がしっくりとこなかった。
・家の近くにスーパーがないし、コンビニもないし、水道もないのに、よく生きているなぁ。
・小学生も馬をあやつって世話をしていてすごい。冬になると−30℃なんてビックリ。
・ゲルを自分たちで作っているのですごい。学校まで5～6時間もかかるから、学校に行きたくてもすぐに行けなくて、学校がたりないと知って驚いた。

〔どうして日本はお金を出してモンゴルに学校を作ったのだろう？児童の考え〕

・日本は学校の作り方を知っているからかな。モンゴル人となかよくなるため。
・学校に行きたくてもても行けない人がいたから。モンゴルの人が困っているから、日本の人たちは助けてあげたいと思った。
・昔、モンゴルの人に何か世話になったから。

児童に提示した
パワーポイントの一部

〔単元を通して〕

5年生の子どもたちは4月から総合的な学習の時間に「米作り」を行い、12 月に自分たちで育てたお米を販売した。そのお金の使い道について話し合った際、「みんなで分けておこづかいにしよう」「修学旅行のお金にしたい」という意見に加え、「少しは、学校に行けない子に募金しよう」という声が上がった。「募金」するにも、いろいろな組織があるので、どういう方面にお金を届けたいのか話し合った。児童会では、日本の障害者やお年寄り（赤い羽募金）への募金活動をしているので、5 年生は、JIM—NET（代表：鎌田實　日本イラク医療支援ネットワーク）へ募金することを決めた。JIM—NET は、私が代表者の佐藤真紀さんに JICA のセミナーでお会いし、本当に活動されていることを実感したので、子どもたちに紹介したところ、子どもたちも興味を示してくれた。「人との出会い」が人を動かすと感じた。子どもたちの意識が、自分のことだけでなく、世界の子どもたちへも向き始めていることを感じた。

〔単元のまとめ新聞づくり〕（※新聞作成ソフト「スクール版子ども新聞編集長」株式会社筆まめ使用）

まとめに一人一枚ずつ、学んだこと・自分がやること・みんなに伝えたいこと等を、新聞にした。「外国の人ともなかよくする」「（南スーダンのことを考えて）肉やご飯を残さないで食べるようにする」「（地球温暖化を防ぐために）ゴミを出さないようにする」「学校に行けることはうれしいことで、平和なこと」「自分も困っている人の役に立つことをしたい」などと、書いている子が多かった。今後、校内をはじめ、保護者の方や、交流している学校の友達に配布したりして、広めていきたい。

世界と仲良くなる新聞

H27年
12月20日
倭小学校

モンゴルと日本仲良く

ぼくは、大人になってもいろいろな人たちと協力して、いろんな国の事を知って、けんかや戦争などおきないようにしたいです。日本の食料も買ってもらいたいし、食べ物をもらえる良い関係になりたいです。

もし困っていたら、ぼく達が助けてあげたいです。世界中の人が幸せにくらせる世界を目ざしたいです。色々な人に親切にしたいたいし、日本の事を知ってもらいたいし、日本の食べ物をおいしく食べてほしいです。仲良くなった方がいいです。

モンゴルで活やくする日本人

井上さんは、帯広ちくさん大学から来て、モンゴルの人と馬の病気のなおし方の研究していて、ビックリしました。ぼくは、日本で研究をやればいいと思っていたけど井上さんは、「モンゴルを助けるということは、日本も世界も助かる」と聞いて、日本のことを考えているし、世界の人の事も考えていると思いました。ぼくも、人の事を大事にしたいです。

南スーダンとブータン

榎本さんは、ブータンにいって美術の先生をやっていたそうです。榎本さんの家からヒマラヤ山脈の一つの山をとった写真がすごくきれいでした。ブータンは、二千円で暮らせると知ってビックリしました。ブータンの二円さつをもらいました。すごかったです。

もぎさんは南スーダンで学校をつくるお手伝いをしていました。学校が家から七十㎞の所にあると知ってビックリしました。スーダンの人は、給食に肉が入っていなかったらおこっているなんて知って外国のことがわかって、ビックリしました。よかったです。

海外協力新聞

H27年
12月20日

南スーダンに学校を作る

茂木さんは、南スーダンで学校を作るお手伝いをしていました。

南スーダンの子供は学校へ行けない子もいるけど、家の仕事を、一生懸命がんばっていて、すごいと思いました。

南スーダンは、戦争があった国で、２０１１年に、新しく独立しました。それで、最近できた国と知って、びっくりしました。戦争が終わって、発展していないから、学校は、クラスがべつべつの教室にあって、南スーダンには、２階建ての建物が、ありません。私は、とても、びっくりしました。日本と、ちがっていて、感動しました。

モンゴルでバレーを教える河村さん

河村さんは、モンゴルで、高校生にバレーを教えています。私は、バレーに、興味をもって、休み時間に友達といっしょに、楽しくやっています。

もし、河村さんにあったら、バレーのジャンプサーブを教えてもらいたいです。

河村さんは、モンゴルの子供たちと仲良く、楽しくバレーをやっていて、すごいとおもいました。

これからも、がんばってほしいです。

青年海外協力隊

青年海外協力隊とは、自分の出来ることで、外国の人に、協力することです。

モンゴルで、バレーを教えている河村さん、障害のある子どものお世話をする吉田さん、ゴミのポイ捨てをやめる取り組みをしている横山さん、馬の病気の研究をしている井上教授、いろいろな人が、外国のために、いろいろな取り組みをしています。

外国のためにいっぱい考えて、いっぱいがんばっていて、すごいと思いました。

これからも協力してがんばってほしいです。

自分も、出来ることは、やっていきたいです。

9　授業実践全体の成果と課題及び課題の改善策

〔成果〕

・目の前の生活が中心で、意識しないと外国のことはほとんど考える機会がないが、世界の国々について思いをはせ、日本が行っている国際協力の意義について考え合うことができた。

・モンゴルでは定番のお茶（スーティーツァイ）を試飲した際、馴染みのない味に驚いた子がおり、それが環境からくる文化の違いだと感じることができた。

・子ども自身の経験から生まれた課題（疑問）や活動ではなく、私自身の体験を伝える中での授業展開であったが、JICA からの外部講師に、ブータン（青年海外協力隊）や南スーダン（NPO）での体験を子どもたちに話していただけたことで、さらに視野を広げ、国際協力を身近に感じ興味を持つことができた。やはり、人との出会い、関わりがとても大切だと感じた。

〔課題〕

・モンゴルで撮影した映像はとても効果的であったが、その場に行かないと環境の違いをイメージすることや実感を伴って感じることは難しい。よって、頭では理解しても、自ら行動を起こしたり、簡単に行動を変えたりすることは難しい。環境問題や発展途上国のことを、まずはよく知ることが大切であると感じた。

〔改善案〕

・今起きていることを「知る」ための一つとして、現在、子どもたちは毎週末の宿題として「興味を持った新聞記事をスクラップする活動（NIE）」を行っている。続けることで、様々な情報に触れ、何かを感じ、未来に向けて、考える機会を増やしていきたい。

10　教師海外研修に参加して

国際協力の現場を直接見ることができ、私が実際に見たことや出会った人を教材にして、子どもたちと一緒に考えることができたことがよかった。様々な分野の活動に触れることができ、何を教材にするか悩んだが、子どもたちと一緒に考え、伝えたいことから考えていった。日本の海外援助は、私たちの税金で成り立っていることを思い、現地の方に喜ばれているのか等と考えを巡らす貴重な機会となった。「人」との出会いが、何より人を動かすと感じた。お互いに理解し合い、世界へと目を向け、少しでも広い視野で物事を考えられるようになることを願い、さらに実践を続けていきたい。

学校名：東京都立王子特別支援学校

氏名： 加藤　佑圭

［担当教科：音楽］

- 実践教科等： 社会・音楽
- 時間数　： 12 時間
- 対象生徒 ： 高等部1年生
- 対象人数 ： 58 人

1 単元名

モンゴルについて学ぶ

2 単元の目標

・モンゴルを通して、文化の違いを学び世界に興味をもつ。（多面的・総合的に考える力）
・モンゴル人の親日感情を学ぶことを通して、文化が異なっても互いを認め合うことで友好関係を築き、支え合えるということを知る。（つながりを尊重する態度）
・モンゴルを通して世界の飢餓について考え、食糧を大切にする態度を養う。（他者と協力する態度）
・モンゴルの音楽に興味をもち、自国と比較しながら伝統音楽や伝統楽器を理解する。（多面的・相互的に考える力）

3 ESD（持続可能な社会づくり）の視点

多様性	相互性	有限性	公平性	連携性	責任性

・日本と他国の文化の違いを学ぶ。【多様性】
・国同士の友好関係や相互依存の関係を学ぶ。【相互性】【連携性】
・食糧難に直面している国があることを知り、食料を大切にすることができる。【責任性】

4 単元の指導について

（1）教材観

特別支援学校学習指導要領、社会には「外国の自然や人々の生活の様子、世界の出来事に関心をもつ。」「外国の自然や人々の生活の様子、世界の出来事について知る。」とねらいが記載されている。またその詳細においても、「世界の国々の自然や生活の様子を知ることで、それらの国に住む人々の暮らしの様子、言語や文化の違いなどに気付いたり、それらの国の課題に興味・関心をもったりすること」や「外国と我が国の関係について考えたり、世界の国々が協力し合うことの大切さを指導すること」の重要性について記載がある。

本単元の対象生徒は、諸外国について学ぶ機会が無かった生徒が多く、本単元において身近な教員が訪れた国から日本と異なる文化を学ぶことは、外国に興味をもつきっかけになると考える。また、これらの機会は日本の文化を改めて学ぶことができるとともに、世界の諸問題についても興味を広げ、関心を高めることができると考える。

（2）生徒観

本学年は男子 36 名、女子 22 名（うち重度重複学級の生徒は男子3名）の計 58 名からなる。出身校は、特別支援学級から 34 名、特別支援学校（知的）から 22 名、肢体不自由校、通常学級から各1名である。障害の種別は、主障害である知的障害とともに、てんかん、自閉的傾向や情緒障害などの発達障害、ダウン症候群、麻痺などによる機能障害など、何らかの副障害を有する生徒が多い。障害の程度は東京都の療育手帳「愛の手帳」で見ると、4度 27 名、3度 14 名、2度 15 名、未獲得2名、またそのうち心身障害手帳と重複して取得している生徒が 12 名いる。

学習前に本学年の生徒全員にアンケートを行った。モンゴルを「知っている」と答えた生徒は 13 名、「聞いたことがある」と答えた生徒は5名、「知らない」と答えた生徒は 30 名、未回答が 10 名だった。「知っている」と答えた生徒に、モンゴルについて訪ねると「馬頭琴・ゲル・相撲・朝青竜・中国の上でロシアの下」など多様な回答があった。しかし本学年は、高等部入学以降、諸外国について学ぶ機会が無く、半数以上の生徒がモンゴルについての知識が無い。また国外に興味を示す生徒もごく一

部だった。よって、本単元においてモンゴルを通して異文化について学ぶことで、生徒達に諸外国への興味を促し、さらにそれらの課題について考える機会を与えることができると考えた。

（3）指導観

本校の授業は学習能力別に ABC の3グループに分かれている。音楽の授業は音楽室でグループごとに、社会の授業はホールで本学年の生徒全員に一斉に行った。実態として集団授業が難しい A グループ 14 名においては、各クラスの教員にスライドに注目を促してもらったり、簡易な言葉に置き換えてもらったりするなど個別の支援をしてもらえるように配慮した。

知的障害の特徴の1つに、記銘しにくく忘却しやすいということが挙げられる。よって各授業の重点ポイントを2つに絞り、学習内容をシンプルにわかりやすく、何度も繰り返し伝えるようにした。特に愛の手帳3度と2度の生徒に関しては、言語による説明よりも写真やイラストで示したほうが伝わりやすい。よって説明時は、実物や写真、イラストや映像なども活用し、視覚的にわかりやすく、また言葉による説明を少なくするように努めた。さらに生徒から発言を求めるときは、2つの選択肢を示すことで自分の考えを表現できるようにした。

5 評価基準

観点	国外に対する関心・意欲・態度	社会的事象への思考・判断・表現	他国とコミュニケーションをとるための技能	異文化や海外の諸問題に関する知識・理解
評価規準	スライドや映像、授業者に注目しながら話を聞くことができる。	授業者の問いかけに自分なりに答えることができる。	モンゴル語で挨拶をすることができる。（3時限目該当者のみ）	クイズや穴うめ問題が記載されたプリントを半分以上回答することができる。
評価方法	学習の様子	学習の様子 挙手や発言	発言	提出物

6 単元の構成

時限	小単元名	学習のねらい	授業内容
1	「モンゴル」の学校について学ぶ 対象：学年全員	・モンゴルの学校を通して日本の無償資金協力と友好関係を知る。 ・モンゴル人の親日感情を学び、モンゴルへの興味・関心を高める。	・学校生活や家庭生活について自分たちと比較しながらモンゴルについて学ぶ。 ・モンゴル人の生徒たちが、日本へ憧れを抱いていたり、日本の文化や言語について学んだりしていることを知る。
2	クラス対抗クイズ 対象：学年全員	・モンゴルと日本を比較しながら文化の違いについて学ぶ。 ・文化に違いがある国同士も互いを学び合うことで親しくなれることを学ぶ。	・2択のクイズを通して、日本とモンゴルを比較しながら、文化の違いと似ているところを学ぶ。 ・プリントで授業内容について復習するとともに、モンゴルを学ぶ前と授業後の、モンゴルに対するイメージの違いをまとめる。
3	モンゴル人と電話をする 対象：学年全員	・モンゴル人にモンゴル語で挨拶や質問をする。 ・自分の言葉をモンゴル語に通訳してもらう経験をする。	・JICAモンゴル事務所と本校をスカイプで繋ぎ、通訳のツェンさんやドライバーのアムラーさんに対して、生徒達から直接挨拶や質問をする。 ・出演してくれたお礼に校歌を歌う。

4 5	飢餓について学ぶ 対象:学年全員	・モンゴルのウェイストピッカーから、同年代の子供が食糧難で苦しんでいる現状について理解する。 ・食に恵まれている日本の現状を再認識し、食べ物を残さないようにすることができる。	・対象生徒と同年代の子供が、学校に行けず毎日ゴミの山から鉄を拾う仕事をしている現状とその理由を写真から考える。(フォトランゲージ) ・プリントを通して飢餓について復習するとともに、食べ物を無駄にしている現状について自分なりの考えをまとめる。
6	馬頭琴について学ぶ 対象:b・cグループ	・馬頭琴と三味線を比較することで、馬頭琴の構造について理解する。	・モンゴルにおいて撮影してきた映像を鑑賞し、プリントの穴埋めをしながら馬頭琴の特徴について学ぶ。 ・以前に授業で学んだ日本の三味線と比較する。
7 8	ホーミー・オルティンドーについて学ぶ 対象:b・cグループ	・ホーミーの演奏方法を理解する。 ・オルティンドーと日本の長唄の比較して、音楽における文化の違いと共通点を理解する。	・モンゴルにおいて撮影してきた映像を鑑賞し、発声方法を真似るなどしながら学ぶ。 ・日本の長唄の映像も鑑賞し、モンゴルと比較する。
9 10	モンゴルの伝統楽器について学ぶ 対象:b・cグループ	・モンゴル琴やヨーチン、コントーションなどについて学び、日本の伝統楽器や伝統音楽との相違点や共通点を理解する。	・モンゴルにおいて撮影してきた映像を鑑賞し、プリントの2択クイズに答え、日本の楽器とモンゴルの楽器を比較しながら学ぶ。
11 12	モンゴルの伝統音楽を鑑賞する 対象:a グループ	・モンゴルの伝統音楽を静かに聴く。	・暗転した部屋で寝そべり、モンゴルの伝統音楽を静かに鑑賞する。

7 授業事例の紹介

小単元名【 飢餓について学ぶ 】

(1) 指導案

(ア)実施日時 10 月 26 日(月)第2限

(イ)実施会場 ホール

(ウ)本時の目標

・開発途上国における飢餓について理解する。

・自分たちが日常的に無意識に食糧を廃棄している現状に気が付き、食事を残さずに食べようと考えることがきる。

(エ)指導のポイント

・ウランバートルの様子を中心に、モンゴルの文化や人々の暮らしについて学んでからウェイストピッカーについて学ぶことで、目覚しく発展するモンゴルの現状を正しく理解できるようにした。

・ウェイストピッカーの概要を対象生徒と同い年の男子の暮らしを通して学ぶことで、自分と比較してもらい問題意識を高めた。

・「貧しい=お金が無い=食べ物が無い」と飢餓について簡易化して伝え、わかりやすくした。

・食べ物を無駄にしないことは飢餓で苦しむ途上国の支援に直接関係が無い。しかし世界の飢餓問題を理解するだけでなく、それらを学んだことによる行動変容もねらいたいと考えた。よって本校の1ヵ月分の給食残量を提示し、いかに意識せずに食糧を捨てているのかを自覚できるようにした。

（オ）本時の展開

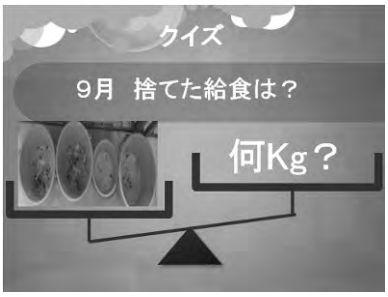
過程・時間	指導内容	学習活動	指導形態	指導上の留意点	評価（評価規準・評価方法）
2限	パワーポイントを操作しながら説明をする。	「復習クイズ」 映像や写真を見ながら、2択のクイズに答える。1番なら片腕、2番なら両腕を挙げて答える。 「言葉の復習」 全授業において繰り返し学習してきた「文化の違い」と「親日」の意味について復習する。 「16歳のバートル君」 ウェイストピッカーの暮らしについて学ぶ。 「飢餓について学ぶ」 お金がない→貧しい→食べ物が無い→やせ細る→病気になって死ぬという流れを学ぶ。 「9月の給食の残飯」 1ヶ月で130kgの残飯を捨てている現状を知る。 「ハゲワシと少女」 写真が示すことについて考える。	学年全体を対象にホールで実施	各担任は、スライドへの注目が難しい生徒に対して言葉かけや指さしなど行い参加を促す。 写真や映像を提示したり、ヒントとを伝えたりして、生徒が自分なりの答えを出せるように支援をする。 同年齢の子供を通して学ぶことで、自分の暮らしと比較できるようにする。フォトランゲージも使用する。 クイズを交えながら飢餓の内容を簡易に示し、理解しやすくする。 実際の残飯が入ったバケツなどの写真も提示し牛乳パック130本と比較するなどして量を示す 説明を加えながらフォトランゲージを使用し、生徒が自分で考えられるように支援する。	【国外に対する関心・意欲・態度】スライドや映像、授業者に注目しながら話を聞くことができたか。 【社会的事象への思考・判断・表現】選択肢の番号を表すなどして自分の考えを示すことができたか。
3限	スーテーツァイとプリントを配る。	「まとめのプリント」 スライドの内容をプリントで復習し、飢餓に対する自分の考えをまとめる。 「スーテーツァイ」 スーテーツァイを試飲し、モンゴルの代表的な飲み物の味を知る。	各クラスで各担任が進行する	スライドで学習したことと全く同様の内容をプリントに書き出すことで、聞いたことを再度考え、確認できるようにする。	【異文化や海外の諸問題に関する知識・理解】クイズや穴うめ問題が記載されたプリントを半分以上解答することができたか。

（2）授業の振り返り

・復習クイズに関しては、約7割以上の生徒が正解することができていた。また2択にしたことや、選択

肢に写真やイラストを使用したことで、発語や読字が難しい生徒においても回答することができていた。
・言葉の復習に関しては、全授業で繰り返し行ったことで約5割の生徒が正しく答えることができた。
・飢餓の説明を簡易化しクイズを交えたことで、約6割以上の生徒がまとめのプリントにおいて飢餓について正しく答えることができた。
・ウェイストピッカーについては、対象生徒と同年齢の架空人物について説明することで自分の境遇と比較しながら学ぶことができている生徒もいた。
・給食の残量を写真や天秤のイラストなどを交えて具体的に示したことで、自分たちがいかに意識せずに食料を捨てているのかを気づいてもらうことができた。
・復習プリントにおいて「食べられる物を捨てていいのでしょうか？」の問いに対して、飢餓を理解した上で自分が食料を捨てている現実を振り返り、反省している生徒が12名見られるなど、生徒の行動変容に繋がる授業ができた。

（3）使用教材



（4）参考資料等
ケビン・カーター／「ハゲワシと少女」＜www.geocities.jp/kiharasi/11-hagewasi.html＞（2015 年 10 月 24 日）
『学校に行きたい　国際協力とわたしたち』JICA2014年10月改訂第四版

8　単元をとおした生徒の反応/変化
・1時限目「モンゴルの学校について学ぶ」を通して　復習プリントより抜粋
「モンゴルの人たちは日本のことを知っているのに、日本の人たちはモンゴルのことをあまり知らない人が多いので、少しずつ知っていこうかなと思った。」
「モンゴルはすごいなと思った。」
「モンゴルの学校と日本の学校の違いがびっくりした。」
⇒モンゴルを知らなかった生徒も、身近な教員が夏休みに行ってきた国として学びを深めるうち、モンゴル人の親日感情や文化の違いから興味・関心が高まり、様々な質問をするようになった。特にお金や言葉、食べ物などの違いに興味をもち、違いを楽しんでいる生徒が多かった。

・4時限目「飢餓について学ぶ」を通して　復習プリントより抜粋
「貧しい人達は食べ物を食べられないのに、自分達は食べ物が食べられるのは当たり前だと思っているから残してしまうので、食べ物が食べられない人がいる。感謝をすること忘れずにちゃんと食べた方がいいと思う。」
「私達日本人は食べ物があります。でも食べられなくて子どもが死んでしまう国もあると学びました。

なので食べ物を残さないようにしたいです。」
「この世界には食べられない人がいるのに日本国民は食べ物を絶対捨ててはいけない！」
「世界には食べ物が無い人が沢山いる。だから食べ物を食べられるというのはとてもありがたいこと。それらのに嫌いな物や苦手な物だからといって捨てるのはよくない。食べ物を食べられない人の気持ちになってごはんを残さず食べるのが一番いいことだと思います。」
⇒飢餓という状況とそのような国があるということを理解し、自分たちが食べ物を無意識に大量に捨てている事実を認識して反省する様子が見られた。

9 授業実践全体の成果と課題及び課題の改善策

～この授業を行うまで～

派遣前、私が日頃から関心が高い「飢餓」の問題に関しては、モンゴルをきっかけに授業を行いたいと考えていた。海外派遣中、モンゴルの文化を学び、親日の生徒達と出会い、モンゴルに対して親しみを感じるようになった。それらの経験から本校の生徒においても、他国の文化や世界の諸問題を理解するだけでなく、他国を親しむ気持ちを育みたいと考えるようになった。また、日本と異なる文化や考え方に対して優劣をつけるのではなく、違いを楽しみ尊重する気持ちも育みたいと強く感じるようになった。

～PDCA サイクルについて～

「Plan」

「生徒たちが飢餓について学びを深めるとともに、自分たちが日常的に大量の食糧を捨てている現状に気が付き、食事を残さずに食べようと考えることがきる。」をねらいに授業を計画した。

「Do」

スライドで写真やイラストなどを使用しわかりやすく示した。クイズやフォトランゲージなども行い自分なりに考えられるようにした。

「Cheak」

テスト形式のプリントから生徒の理解度を確認した。C グループの生徒は9割以上、B グループの生徒は5～6割の正答率だった。

「Action」

今後より学びを深めるためには、生徒の実態に合わせ、学習能力別のグループごとに授業を展開する必要があると考える。C グループについては飢餓の現状をより詳しく、そしてそれらの国に対して自分たちはどのような支援ができるのかを考えてほしい。B グループについては、今回の内容を繰り返し扱い、全生徒が理解できるようにしたい。A グループについては、モンゴルの伝統音楽や文化を紹介した写真と「モンゴル」という言葉が一致できるようになることをねらいとし、シンプルな内容の授業を繰り返し行いたいと考える。

10 教師海外研修に参加して

私は日頃、高等部にて半数以上を占める軽度知的障害の生徒たちは、社会に支援されるだけでなく、国際協力活動において支援者になることができると感じていた。また開発途上国へのボランテイア活動などが、生徒たちの自尊感情を高め、卒業後の有意義な生活の一助になるのではないかとも考えていた。しかし彼らは世界の諸問題に関して学ぶ機会が非常に少ない。よって音楽専科の私がこれらの授業を扱うきっかけがほしいと考え、今回の研修に参加した。私は本研修を通してモンゴルについて多面的に学び、様々な人々に出会い、異文化を体で感じたことで、モンゴルについて非常に親しみを感じるようになった。また現役の青年海外協力隊の方々の話から、異なる文化や考え方の優劣をつけず、ありのままを受け入れて尊重し、共に成長する大切さと相互依存の世界のありかたを改めて痛感した。

今世、世界情勢の不安定さや東京オリンピックを迎えるにあたり、私は「真の国際理解教育」、つまり他国の知識を学ぶだけでなく、異文化や国境の壁を乗り越えて互いを思い合える心を育む国際教育が重要になっていると考える。よって今後は本校の生徒においても、モンゴルの生徒たちと同様、異文化を受け入れ尊重する態度も育んでいきたい。そのためにも他国の文化や歴史を学ぶだけにとどまらず、文通やスカイプなどを通した生徒同士の交流を取り入れていきたい。さらに、開発途上国支援のチャリティー活動などを継続的に授業に取り入れ、卒業後も生徒たちが自ら国際協力に関わろうとする気持ちと、それらを可能にする環境作りに取り組んでいきたいと考えている。

学校名：埼玉県立伊奈学園中学校

氏名： 島村 勲

［担当教科：社会］

- 実践教科等： 社会科（地理的分野）
- 時間数 ： 5時間
- 対象生徒 ： 1年生
- 対象人数 ： 80 人

1 単元名

アフリカの人々の暮らしとその変化

2 単元の目標

・様々な形の国際協力・国際貢献があるが、それらの意義や関係性について、批判的に考える。

（批判的に考える力）

・将来の理想的な世界をイメージし、その実現のためにできることを考える。

（未来を予測して計画を立てる力）

・「アフリカ州」という地域を、多面的・多角的に分析することで、その地域的特色を理解する。

（多面的、総合的に考える力）

・国際協力・国際貢献が本当に必要なのか、必要であるとすればどのようなあり方が望ましいのか、友達と互いの考えを交流しながら自分の考えを広げたり深めたりする。

（コミュニケ―ションを行う力、他者と協力する力）

・遠く離れたアフリカ州の国々と日本は、様々な面で結びつき、相互依存の状態であることを理解する。

（つながりを尊重する態度）

・持続可能な世界の実現のため、自分たちにも責任や義務があることを認識し、その実現のために今の自分たちにできることを考え、行動に移そうとする態度を身に付ける。 （進んで参加する態度）

3 ESD（持続可能な社会づくり）の視点

多様性	相互性	有限性	公平性	連携性	責任性

・アフリカ州には東西南北それぞれ多様な自然環境や伝統・文化、産業などがあり、一つの国においても、多様な民族、言語、宗教などが存在・共存している。【多様性】

・グローバル化が進展した現代社会においては、アフリカ州の国々と日本や世界各国は相互に深い関わりをもっている。【相互性】

・アフリカに埋蔵している様々な資源は有限であり、地球環境も考慮した持続可能な開発・社会という側面を視野に入れた利用が必要である。【有限性】

・アフリカの国々は歴史上欧米列強の植民地となり一方的に様々な資源を搾取されてきたが、平和で民主的な世界の構築のためには世界各国が連携し、自国の責任を認識し、公平な貿易体制を再構築していくことが必要である。【公平性、連携性、責任性】

4 単元の指導について

（1）教材観

本単元は、学習指導要領地理的分野内容（1）世界の様々な地域　ウ世界の諸地域　（ウ）アフリカをうけて設定した。ここでは、それぞれの州内で暮らす人々の生活にかかわり、かつ我が国の国土の認識を深める上で効果的な観点から州内の特色ある地理的事象を基に主題を設定し、その追究を通してそれぞれの州の地域的特色を理解させることが主なねらいである。

アフリカ州は、多くの日本人にとって、距離的・精神的に遠く離れた存在であり、自分たちの生活との関わりをあまり感じることができない地域である。（→相互性感覚の欠如）　また、アフリカへのイメージは貧困、紛争といったものや、草原、野生動物などテレビや雑誌で取り上げられるような一面的なものが多い。（→多様性感覚の欠如）　そこで、本単元では、写真資料や私自身が海外研修で見聞きした多様なアフリカの姿を認識させるとともに、アフリカの国々と日本や世界各国が深く結びつき、相互依存の関係にあることを気づかせる。また、アフリカの国々が貧困や紛争の連鎖から抜け出すことができない理由を、先進国によって人為的に作られたモノカルチャー経済という構造を通じて理解させていく。（→鉱産資源の有限性、資源利用の公平性）　そして、モノカルチャー経済の上に、いまの日本人の物質的に豊かな生活が成り立っているということにも気づかせ、問題意識を育成していく。

さらに、日本国内においては少子高齢社会の到来や景気の低迷によって多額の国債を抱え、東日本大震災をはじめとする自然災害からの復興なども遅々として進まない状況の中、国際協力・国際貢献に積極的に取り組む必要性と、どのような国際協力や国際貢献の姿が望ましか考えさせる。（→連携性、責任性）

（2）生徒観

アフリカ州は、アジア州やヨーロッパ州と比べ生活の中で自分たちとのつながりを感じにくく、事前アンケートを見てもその実態をうかがうことができる。（アンケートは、2クラス 80 人の結果を集計）

①アフリカと聞いて思い浮かべるものやイメージは？（複数回答可）

砂漠（52 人）、野生動物（41 人）、暑い（41 人）、ピラミッド（24人）、サバンナ（21 人）、黒人（15 人）

ジャングル（15 人）、紛争（14 人）、自然（12 人）、民族（11 人）　など

②知っている国は？（国名と位置が一致するもの）

南アフリカ（65人）、エジプト（63人）、マダガスカル（19 人）　など

③アフリカの国に行きたい？

行きたい（22 人）→ピラミッドなどの世界遺産を見たい、野生動物を見たい、色々な文化を見たいなど

行きたくない（52 人）→治安が悪い、暑い、環境が悪い、病気が心配、紛争、動物に襲われるなど

④生活の中でアフリカとのつながりを感じることは？

ある・・・37 人、ない・・・37 人　つながりを感じるもの・・・チョコ、コーヒー、募金

（3）指導観

私たちが生きている社会は多様であり、様々な人や事象が複雑に絡み合って成り立っている。

本単元で取り上げるアフリカ州も 54 の国からなっている。その中の一国であるザンビアに 10 日間滞在しただけで、語りつくせないくらいの多様な面を見ることができた。このような前提に立って、ザンビアを通して、アフリカの地域的特色というものを多面的・多角的に捉えさせていきたい。

授業では、距離的にも心理的も遠いアフリカ州の国々を、自分たちと関わりのある国々であると認識させること、そして様々な問題を当事者意識をもって受け止めることができるように、ザンビアでの写真や体験談を活用していく。アフリカ州の社会的事象について正しい認識をさせる際には、諸資料の正確な読み取りに加え、話し合い活動を積極的に取り入れていく。資料を正しく読み取っているか、資料にはどのような意図が隠されているのか、読み取った事実から得た解釈は正しいのか、他の解釈はないのか、その解釈はどのような価値を背景としているのかなどを、互いに批判的に考えさせていきたい。

そして、ザンビアでのJICAの支援内容をもとに、日本の国際協力の特色を追究させていく。中学校 1年生であるので、日本の国際協力の現状や特色を理解することを目標とし、中学校2年生、3年生と学年進行していく中で、日本のあるべき国際協力のあり方について考える土台を育成していきたい。

5 評価基準

観点	関心・意欲・態度	思考・判断・表現	技能	知識・理解
評価規準	アフリカ州の地域的特色や日本の国際協力に対する関心を高め、それを意欲的に追究し、捉えようとしている。	モノカルチャー経済下の人々の生活という主題をもとにアフリカ州の地域的特色と日本の国際協力を多面的・多角的に考察し、その過程や結果を適切に表現している。	アフリカ州の地域的特色について、読み取ったり図表などにまとめたりしている。	モノカルチャー経済下の人々の生活という主題を基に地域的特色を理解し、その知識を身に付けている。 日本の国際協力の特色を理解している。
評価方法	観察法 ワークシート	ワークシート	ワークシート	ワークシート ペーパーテスト

6 単元の構成

時限	小単元名	学習のねらい	授業内容
1	アフリカ州の基礎・基本	アフリカ州の基礎的・基本的知識を習得し地域的特色を大観する。	位置、国名、地形、気候、宗教、言語、人口、歴史など、アフリカといっても、国や地域によって、更には一国内においても多様性があることを、ザンビアでの経験を通して伝えていく。
2	国際協力1	日本は積極的にアフリカ支援に取り組むべきかどうか考える。	アフリカと日本の現状を、資料を通じて捉えさせ、アフリカ支援に積極的に取り組むべきか、国内政策を優先させるべきか考える。 アフリカ諸国と日本の相互依存関係や日本の国際社会における責任等を理解させる中で、支援の必要性を捉えさせていく。
3	アフリカ州の産業	アフリカの多くの国々がモノカルチャー経済という構造の中で経済成長を虐げられているという状況を理解する。	アフリカのプランテーション農業（カカオやコーヒーなど） 豊富な鉱産資源（銅、コバルトなど）
4	アフリカ州の貧困	アフリカ州の国々の多くが様々な要因が絡み合って貧困から抜け出せないことを理解する。	アフリカの貧困の原因を水、教育、医療・衛生環境、食糧などの視点から考える。
5	国際協力2	国際協力には様々な形や方法があることを知る。	『「援助」する前に考えよう』の「一枚の看板」のワークショップを行い、国

			際協力のあり方について考える
6	国際協力3	日本の国際協力の特色を知り、今後の支援のあり方について考える。	ザンビアでのJICAの支援を分類させたりランキングさせ、日本の国際協力の特色を考え理解する。

7 授業事例の紹介

小単元名 【国際協力3】

（1）指導案

（ア）実施日時　10 月 28 日（水）第4限

（イ）実施会場　1 年 1 組教室

（ウ）本時の目標

ザンビアにおけるJICAの支援活動を通して、日本の国際協力の特色を考え、これからの日本の国際協力のあり方について考える。

（エ）指導のポイント

・前時のワークショップを通して気づいた国際協力における様々な支援の方法を参考とする。

・ザンビアで実際に目にした支援活動を紹介しながら、日本の国際協力の特色を考えさせる。

・未来の理想の世界をイメージし、それに近づくための必要な支援について考える。

（オ）本時の展開

過程・時間	指導内容	学習活動	指導形態	指導上の留意点	評価（評価規準・評価方法）
5分	ザンビアの現状を説明	教師の説明を聞く	一斉	ザンビアの現状に関する写真を提示する。	
5分	支援カードを分類することを説明	支援カードの分類基準を考える	グループ		
3分	カード内容の説明	教師の説明を聞く	一斉	無償資金援助、有償資金援助、技術協力に分類できることを示す。	
5分	無償資金援助と有償資金援助のメリットとデメリットを説明	なぜ無償資金援助ではなく、有償資金援助なのか考える	グループ	無償資金援助のデメリット、有償資金援助のメリットを考えさせる。	
9分	グループの進行状況に応じた声かけ等	優先順位の高い順に援助カードを 3 枚選ぶ	グループ	選択基準（優先したい価値）を明確にさせる（命に関わること、生活を豊かにすることなど）	
5分	支援される側の意向も聞きながら支援の在り方を考えることを説明	グループの準備を発表し、その違いをどう調整すればよいか考える	グループ	前時のアイ子の援助を参考にさせる。（ザンビアの人たちの要望を聞き、日本の提案も含め、両者の合意の上で支援をする）	
10分	ザンビアでのJICAの支援内容説明	教師の説明を聞く	一斉	ザンビアで実際に見た支援を中心に、それぞれの支援の目的や、支	

8分	個人の進行状況に応じた声かけ等	日本の国際協力の特色についてまとめる。	一斉	援のつながりなどを説明する。 中学校１年生段階での考えなので、世界の様々な問題を解決することは簡単なことではないという実感を持たせる。	日本の国際協力の特色について理解している。（ワークシート6）

（2）授業の振り返り

１時間で実施するには学習内容・学習過程が多く、生徒が個人で思考して自分の考えを持つ時間、グループで思考を深める時間、クラスで思考を共有する時間が十分に確保することができず、思考の深化や広まりを持たせることが不十分であった。また、教師がJICAの支援の特色について積極的に評価するような説明をしたために、支援内容については理解できた生徒がほとんどであったが、その支援の在り方や内容について無批判に受け入れ、評価してしまう方向に生徒の思考が流れてしまった。JICAの支援方針や内容を認識した後に、それを各自で評価する時間を確保すべきであった。その時間を確保することで、今後の日本の国際協力のあり方、今の自分たちには何ができ、将来的には何ができるのかという意思決定、さらには社会参画まで視野に入れた授業展開とすることができると考える。今後も中学生に国際的な問題意識を持たせ、義務教育終了までの３年間の社会科で継続的に地球市民としての感覚や視点を育成していきたい。

（3）使用教材

電線の整備や発電事業に資金を貸し出す。	隣の国との国境の川に橋を作る資金を貸し出す。	新種のウイルスの診断方法を開発・予防するシステムを作るために専門家を派遣する。	給水施設を運営・維持管理していくために、専門家を派遣する。	授業の方法や教材の作り方などを教えるため、専門家を派遣する。
新しい道路を作ったり、排水路を設置したりするための資金を提供する。	ワクチン保存用の冷蔵庫やコールド・ボックスを贈与する。	教育の質の向上を図るため、資金を提供する。	井戸を作ったり、大規模な給水施設を作ったりするための資金を提供する。	病院建設の資金を提供する。

ザンビアの現状

①主要道路は整備されているが、横道に入ると整備されていない道ばかりで、雨季には交通困難が生じる。また、排水路も整備されていず、排泄物などから感染症が多発する。

②内陸国の経済発展のため、橋や道路の整備は非常に重要である。しかし、橋がなかったり、道路や橋が古くなり、危険な状態のまま放置されているものも多い。

③電力が通っている都市部でも電力不足が続き、毎日８時間の計画停電が実施されている。

④農村部で安全な水を利用できる人は50%で、汚染された水を飲んで感染症にかかる人が多い。水くみは女性や子どもの仕事で、学校に通えない子ども も多い。

⑤平均寿命は48歳で、特に乳幼児の死亡率が高い。死因の多くは感染症となっている。病院や医療スタッフの不足、ワクチンの保管方法など、多くの課題を抱えている。

⑥アフリカにはまだ発見されていない感染症がたくさんあり、鳥インフルエンザやエボラなど、人と動物の両方に感染する感染症に対する診断体制や予防システムが確立されていない。

⑦人口の７割が農業で生活しており、多くが小規模農家である。主食のトウモロコシ生産は生産性が低く、干ばつや洪水などの自然災害で何度も食料不足に直面してきた。

⑧企業の多くは中小企業であり、企業間の競争は少なく、生産性も低い状態である。

⑨東南部アフリカの14か国の中でも学力はかなり低く、先生の授業能力不足が原因と考えられている。

ワークシート6　　日本の国際協力３

評価　日本の国際協力（国際貢献、援助）の特色は？

（1）日本の援助は無償資金協力、有償資金協力、技術協力に分けることができる。すべてが無償資金協力ではなく、有償資金協力もある理由を考えよう。

無償資金協力のデメリット	有償資金協力のメリット

（2）優先順位の高い支援カードを３つ選び、どのような基準で選んだのか、その理由を書こう。

個人	1位：	2位	3位
グループ	1位：	2位	3位

〔基準・理由〕

（3）優先順位の違いを解消し、支援を効果的に実施するためにどうすればよいか考えよう。

（4）日本の支援の特色をまとめよう。

（5）アフリカ州の国々が貧困から抜け出すために、どのような支援が必要か考えよう。

（4）参考資料等

・『国際協力機構　年次報告書 2015』 国際協力機構、2015
・『世界の国　１位と最下位』眞淳平、岩波ジュニア新書、2015

・『新・現代アフリカ入門』・勝俣誠、岩波新書、2013
・『アフリカ・レポート』松本仁一、岩波新書、2012
・『池上彰のアフリカビジネス入門』池上彰、日経BP、2013
・『ケータイの一生』、『若者と学ぶESD・市民教育』『開発教育実践ハンドブック』
『市民学習実践ハンドブック』、『「援助」する前に考えよう』 開発教育協会
・『読売新聞』2015 年９月 30 日、朝刊、「途上国の生活支援強化」「アフリカ支援で米に対抗」
・『読売新聞』2015 年 10 月４日、朝刊、「22 か国に人材育成拠点 『カイゼン』『高専』伝授」

8 単元をとおした生徒の反応/変化

授業前の生徒はアフリカ州への支援について積極派は少数であったが、授業を実施していく中で、積極的な支援を行うべきとする生徒が増え、日本の国際協力の特色について多面的・多角的に捉え、深く理解することができるようになってきた。

《課題 「日本の国際協力の特色をまとめよう」に対する生徒の答え》

◇その国の先々まで考えている。ずっと先に、現地の人たちだけでも、国のシステムを運営することができるように、その国に最適な方法でその国の将来までずっと幸せが続くように考えられていて日本らしいなと思いました。
◇近い未来の発展だけではなく、その発展が遠い未来の世の中でも続くようにしているのが特色。
◇被支援国の実際の要求に耳を傾け、技術協力なども交えながら相手国の自助努力、発展を促す相手の立場にたった支援。
◇教えた人たちが退去しても、教わった側がそれを続けることができる、また次の世代に引き継ぐこともできる支援をしている。
◇一方的な支援ではなく、相手国が目指す姿を理解して、現地の人たちに何をしたらいいのか、日本の支援が打ち切られた時のことまで考えて支援をしていると思いました。
◇日本は「やってあげる」だけではなく、「支援してあげる国に考えてもらい、それに協力する」というふうにして協力している。それは日本が協力できなくなった時に、日本が支援していた国が何もできないという状況にしないためだと思った。
◇どうすればいいのかを一緒に考え、きちんと最後まで寄り添う姿勢を大切にしている。

9 授業実践全体の成果と課題及び課題の改善策

派遣前から日本の国際協力のあり方、ODAの使われ方に着目した授業実践を計画していた。特に他国と比較した日本の国際協力の特色やその正当性、意義などを考えていきたいと計画していた。研修中は日本の支援がどのように現地の人々に評価されているのか、本当に人々の生活の向上に役立っているのか、一方的な押し付けの支援になっていないのか、というような視点をもって視察をした。研修後は、私見や個人的な評価は保留しつつ、実際に見聞きしたことをありのまま伝えようと努めた。そして、それに対し、生徒一人一人が自分なりの評価や今後のあるべき支援の方向性などを考えていけるように心がけた。しかし、ありのままの支援の現状を伝えようと努めても、そこには私自身のJICAの支援に対するプラスの評価というフィルターを通してしまっているため、生徒にも一定の価値観の方向付けをしてしまったという反省は残る。今後は、生徒がより多面的・多角的に日本の国際協力のあり方について考え、評価し、自分の行動につなげていけるように、より多様な資料などを用意していきたい。

10 教師海外研修に参加して

「百聞は一見に如かず」という一言に尽きる。社会科は「社会認識の育成を通して公民的資質を育成する」というねらいがあるが、その社会認識に関しては、教科書や資料集の説明や資料をもとにした認識に留まることが多い。しかし、教師海外研修に参加して、実際に自分の五感を使ってしてアフリカ州を認識し、それを生徒へ伝えることで、生徒も教科書や資料集以上の現実味のある対象としてアフリカ州を認識することができた。そして、それを土台として、変化の激しく多様な価値が混在するがゆえに一つの答えがない国際社会で生き抜くための公民的資質の基礎を培うこともできるのだと考える。また、本研修で出会うことができたJICAスタッフの方々や現地でボランティア活動をする方々の生き方は、道徳や特別活動をはじめ、生きる力の一つである豊かな心を育成する場面で、大変貴重な生きた教材として活用させていただくことができると考えている。

最後に、国際社会に生きる子供たちを育てていくためには、教師自身が常に世界に目を開いて、多様な価値を受け入れ、学び続け、変化し続けていかなければならないことを再確認することができた。

学校名：東京都墨田区立両国中学校

氏名： 輪湖　みちよ

［担当教科： 社会科］

- 実践教科等： 社会科（地理）、総合、道徳
- 時間数　： 7時間（社5、総1、道1）
- 対象生徒 ： 一学年
- 対象人数 ： 225 人

1　単元名

社会科：地理的分野　第1編　世界のさまざまな地域

第3章　世界の諸地域　第3節 「アフリカ州」

〈主題〉**「よりよいアフリカ州をめざして」～アフリカ州の持続可能な発展～**

『新しい社会　地理』（東京書籍）、『アドバンス　中学地理資料』（帝国書院）

2　単元の目標

（1）　アフリカ州の地域的特色について大まかにとらえる学習活動と、アフリカ州の地域的特色を生かした持続可能な発展について考える学習活動を通じて、アフリカ州の地域的特色に対する関心を高め、意欲的に学ぶ態度を身に付ける。
（つながりを尊重する態度）（進んで参加する態度）

（2）　アフリカ州の地域的特色を生かした持続可能な発展について考える学習活動を通じて、多面的・多角的に考察した上で適切に判断し、表現する能力を養う。**（多面的、総合的に考える力）（未来像を予測して計画を立てる力）**

（3）　アフリカ州の地域的特色について資料から読み取ったり、資料を活用して、アフリカ州の地域的特色を生かした持続可能な発展について考えたりする活動を通じて、資料活用の技能を身に付ける。**（批判的に考える力）**

（4）　アフリカ州の地域的特色について大まかにとらえる学習活動と、アフリカ州の地域的特色を生かした持続可能な発展について考える学習活動を通じて、アフリカ州の地域的特色について理解を深め、その知識を身に付ける。

3　ESD（持続可能な社会づくり）の視点

多様性	相互性	有限性	公平性	連携性	責任性

・アフリカ州の地域的特色や人々の思いに気づく【多様性】
・アフリカ州の産業の特色であるモノカルチャー経済の問題点に気づく【有限性】

4　単元の指導について

（1）教材観

世界の諸地域を学習するねらいは、世界の諸地域の地域的特色について基礎的・基本的な知識を身に付けることである。本単元では、生徒の身近にあるアフリカ州の産物を学習することで、自分の生活と結び付いているという実感を引き出す。また人々が貧困の中で生活していることを学習することで、豊富な農産物や鉱産資源をもつ州の人々の生活に課題があるのはなぜなのか、関心をもたせたい。その上で、主題について学習内容をもとに考察させることで、アフリカ州の地域的特色を理解し、地域的特色を生かしたよりよい発展について主体的に考察させたい。

（2）生徒観

世界の諸地域を学ぶことに対する関心は概ね高く、旅行や TV などで得た知識を披露する生徒もいる。諸地域についての理解が自然環境中心であったり、資料の選択・読み取りに苦手意識をもつ生徒が多数存在したりといった現状から、資料を活用して多面的・多角的に地域的特色を理解することが課題である。また、適切な判断・表現力については、既習の地域において、評価規準を明記した上で、地域的特色をいくつかの観点からまとめる活動を行っており、今後も継続していく。ESD の視点で地域

的特色をとらえる学習活動は南アメリカ州で体験してはいるが、ESD の視点を含んだ主題を追究する学習活動は今回が初めてということもあるため、多様な意見を聞きながら、自分の意見を深めていくことを期待する。また、生徒アンケートの結果にみられるように『意識を行動に移す機会が少ない』という生徒に行動の機会を提供することで、生徒の実践意欲を高めていく。

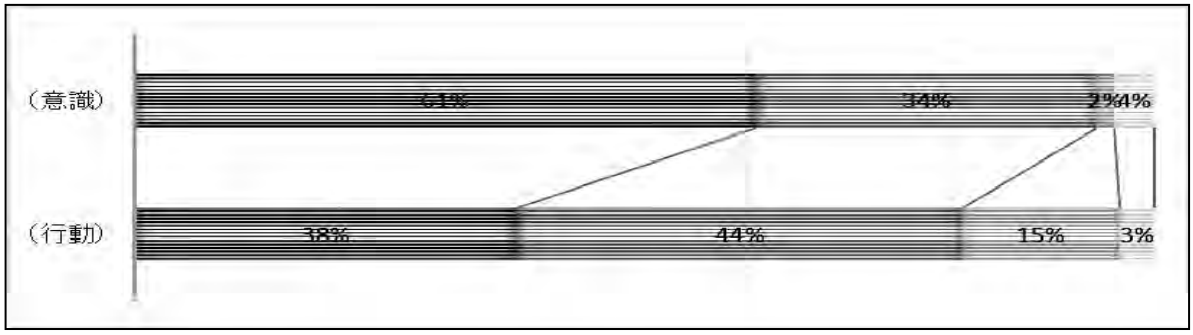
【7月に行った生徒アンケートの結果】

（国際貢献に対する意欲・実践についての項目）

世界の苦しんでいる人や悲しんでいる人を見て、何かをしたいと思うこと

（意識）とても大切 61%、大切 34%、あまり大切ではない2%、全く大切ではない4%

（行動）よくする 38%、する 44%、あまりしない 15%、全くしない3%



（3）指導観

中学校1年生の生徒にとって、アフリカのイメージは自然が豊か・砂漠・貧困・紛争といったものが多く、マイナスイメージが強い。豊かな自然については、国立公園や動植物の写真を用いて、肯定的にとらえることができるようにする。貧困・紛争については、歴史的背景の読み取りや鉱産資源、産業の特色について理解することで構図がわかり、解決策を考えるヒントとなるように授業を構成する。また、身の回りにあるものと、アフリカ州の産物との関わりを知る活動を通して、自分たちの生活との関わりを見いだしながら、アフリカ州の持続可能な発展やよりよい世界のためにできることについて考えることができるようにしたい。

5 評価基準

【社会科】

観点	社会的事象への関心・意欲・態度	思考・判断・表現	資料活用の技能	社会的事象に関する知識・理解
評価規準	アフリカ州の地域的特色について大まかにとらえる学習活動と、アフリカ州の地域的特色を生かした持続可能な発展について考える学習活動を通じて、アフリカ州の地域的特色に対する関心を高め、意欲的に学ぶ態度を身に付けようとしている。	アフリカ州の地域的特色を生かした持続可能な発展について考える学習活動を通じて、多面的・多角的に考察した上で適切に判断し、表現している。	アフリカ州の地域的特色について資料から読み取ったり、資料を活用して、アフリカ州の地域的特色を生かした持続可能な発展について考えをまとめたりしている。	アフリカ州の地域的特色について大まかにとらえる学習活動と、アフリカ州の地域的特色を生かした持続可能な発展について考える学習活動を通じて、アフリカ州の地域的特色について理解を深め、その知識を身に付けている。
評価方法	学習の様子 ノート ワークシート	ワークシート	ワークシート	確認テスト 定期考査

【総合的な学習の時間】

・アフリカ州で活躍する JICA 青年海外協力隊員やシニアボランティアの活動に興味をもち、ザンビアの

生活状況や課題、解決策について資料を活用して追究することができたか。

【道徳】(自己評価)
・アフリカ州で生活する子供の想い・ねがいをとらえ、国際貢献の意欲を高めることができたか。

6 単元の構成

【社会科】

時限	小単元名	学習のねらい	授業内容
1	アフリカ州の地域的特色① (自然環境・人口・生活・文化・歴史的背景)	図や資料の読み取りを通じて、アフリカ州の地域的特色をとらえる	・アフリカ州の位置 ・アフリカ州の代表的な国々の位置と名称 ・アフリカ州の地形 ・アフリカ州の歴史的背景(年表・国旗) 【ザンビア国旗、独立秘話、ビクトリアの滝、動物】
2	アフリカ州の地域的特色② (産業/農業)	アフリカ州の多様な農産物を図から読み取ったり、農業の特色を歴史的背景から理解したりする	・アフリカ州の農産物 ・アフリカ州の農業の特色 ・アフリカ州の農業の課題 【ザンビアマーケット】
3	アフリカ州の地域的特色③ (産業/鉱工業)	アフリカ州の多様な鉱産資源を図から読み取ったり、工業製品・貿易相手国の特色を歴史的背景から理解したりする	・アフリカ州の鉱産物・工業製品 ・アフリカ州の鉱工業の特色 ・アフリカ州の鉱工業の課題 【ザンビア銅板】
4	よりよいアフリカ州をめざして① モノカルチャー経済下での人々の生活	モノカルチャー経済の下での生活を資料から読み取り、モノカルチャー経済の問題点と解決策を考える	・アフリカ州の課題 ・アフリカ州の課題と世界(日本)との関わり ・課題解決に向けての努力 【アフリカ州における JICA の活動】
5	よりよいアフリカ州をめざして②	既習内容であるアフリカ州の地域的特色を生かした、よりよいアフリカ州をめざすための方策を考え、根拠となる資料を基に説明する(スピーチ)	・アフリカ州の地域的特色 ・よりよいアフリカ州に向けての解決策 ・考えの根拠となる資料

【総合的な学習の時間】

時限		学習のねらい	授業内容
1	ザンビアの人々の生活と JICA の支援活動	・ザンビアで行われている JICA の活動を知る ・今や未来の自分たちにできることを考える	・JICA で活動している人の写真から、どのような支援をしているのか考える。(一斉) ・今の自分にできること、未来(26 歳)の自分にできることを考える。(グループ) (JICA「世界の笑顔のためにプログラム」への参加呼びかけ)

【道徳】

時限	項目	学習のねらい	授業内容
1	4－(10) 国際理解・国際貢献	世界の中の日本人としての自覚をもち、国際的視野に立って、世界の平和と人類の幸福に貢献する	・アンケート結果をもとに、国際貢献についての両中生の意識と行動を確認する ・アフリカ州に住む子どもたちの状況を知って、どのような想いをもっているのかを考える ・アフリカ州の子どもたちと話し合うという設定で、想いをもとに、どのようにしたら世界の平和と人類の幸福に貢献できるかを考える

7 授業事例の紹介

道徳　4－(10)国際貢献

（1） 指導案

（ア）実施日時　平成 27 年 12 月 10 日（木）第4限

（イ）実施会場　墨田区立両国中学校1年5組教室

（ウ）本時の目標

世界の子どもの現状を知り、どのような想いをもっているのかを考えることや彼らと一緒によりよい世界をつくるためにできることを考える活動を通して、世界の中の日本人としての自覚をもち、国際的視野に立って、世界の平和と人類の幸福に貢献する。

（エ）指導のポイント

社会科、総合的な学習の時間を通して、（1）アフリカ州でモノカルチャー経済の下、貧困や病気で苦しむ人々がいること。（2）アフリカ州の地域的特色を生かした、モノカルチャー経済の解決策。（3）今の自分と 13 年後の自分にできること。を考えてきた生徒たちである。また、夏休み前には『JICA 出前講座』を受講し、夏休みには課題として『JICA エッセイコンテスト』に参加しており、ワークシートや感想、エッセイの内容を見ると国際貢献の必要性を感じ、『できることがあればしたい。』という想いを表現する生徒が多い。一方、生徒アンケートの結果や『JICA 世界の笑顔のためにプログラム』への参加生徒の少なさからは、想いを行動に移すまでにはいたらない生徒が大多数を占めている。今回、物語などから実際にアフリカ州で生活する同年代の実態を知り、どのような想いでいるかを想像したり、彼らと一緒に世界をより良くする方法を考えたり活動を通して、国際貢献の意欲を高めたい。

（オ）本時の展開

過程・時間	指導内容	学習活動	指導形態	指導上の留意点	評価（評価規準・評価方法）
導入 10 分	学習内容の把握	資料配付、生徒アンケート結果提示（国際貢献への意識・行動について） 補助発問 『今、欲しいものや必要なものは何ですか？』 →○○したいなど、想いがあるから手に入ると嬉しい	一斉	自分の身近な出来事から、想いがあるからこそ、叶えられると嬉しい。ということに気づくことができるようにする。	
	アフリカ州の子ども達はどのような想いをもっているのだろうか？				
展開 35 分	アフリカの子ども達の現状	資料朗読	一斉	データや文章、写真などにより、その子がおかれた状況を理解し、想いを想像することができるようにする	
	アフリカ州の子ども達 ①ウガンダ（学習に必要な教材を購入することが難しい12歳） ②ルワンダ（大量虐殺で父を亡くした25歳：パトリスくん） ③ザンビア（勉強することが大好きな14歳：アリスちゃん） ④ナミビア（街で唯一の公共テニスコートで学ぶ15歳） ⑤シエラレオネ（12歳で子ども兵士になった15歳：ムリアくん） ⑥日本（国際貢献について考え中の13歳）				
	アフリカの子ども達の想い	活動内容説明 ワークシート配布 （1）班ごとに①～⑥の役割分担をし、ほしいもの・こと、必要なもの・こと、希望するもの・ことを個人で考え、ワークシートに記入する。 （2）班で話し合ってほしいものや夢など、どのような想いで生活しているのかを考える →発表	グループ	役割分担をじゃんけんで行うこととで、生まれる場所は選べないからこそ、平等でなければならないと気づくことができるようにする。 	
	皆の想いを生かし	（3）①～⑥の役割が集まる班をつくり、それぞれの想いを生かすより良い世界のイメージ		様々な立場に立って、国際貢献とは何かを考えることができるようにする。	A～D、4段階の自己評価（ワークシー

終末 5分	たより良い世界	と、より良い世界を目指すためにできることを考える →発表		 	ト） ・授業に意欲的に取り組んだ ・国際貢献への意欲が高まった
	国際貢献について	・国際貢献についての想いを聞く。 ・授業を振り返り、感想を書く。			

（2）授業の振り返り

社会科の時間、総合的な学習の時間とのつながりで考える生徒が多かった。今までの活動を思い出しながら行ったことで考えの広がりや深まりをみることができた。また、アフリカ州の子ども達の実態から、その思いを考える場面では実態に衝撃を受けながらも意欲的に取り組むことができていた。話し合いによって、よりよい世界のためにできることを考える場面では役割演技をしながら、自分のこととして考えている様子もみられた。

（3）使用教材

アフリカの子ども達の想い、ザンビアの中学生の夢、生徒スピーチ原稿（一部）、生徒アンケート結果

（4）参考資料等

『世界の笑顔のためにプログラム　期待効果（テニスボール・ナミビア）』

『ダイヤモンドより平和がほしい』『ルワンダの祈り』 後藤健二著　汐文社

『地図でユニセフ』 財団法人　日本ユニセフ協会（ユニセフ日本委員会）

8　単元をとおした生徒の反応/変化

・社会科ワークシート（スピーチ原稿）の記述

『私はアフリカ州をよくしたいという想いで来ました。』

『砂漠を開拓して公害の少ないハイテク工場を作り、働く場所をつくり、工場の土地代で生まれたお金で水道を引いたり、食料の輸入を行ったりして、健全な州を目指す』

『日本にいる我々がアフリカ州の産物を買ったり、農作物の効率が良い収穫方法やその地形に合った物を作ったりしていく。アメリカ、中国などだけでなく、違う国とも関わっていくことで、みんなが平等に暮らすことができる州を目指す』

『人間からすれば、建物などを建てるために、動物がいる場所を使っているけど、動物からすれば、大切なすみかを壊されている。動物を傷つけてお金を壊すのではなく、動物の暮らしている場所を、動物に迷惑をかけない程度に観光スポットにする。そうすると、世界の人々がこの州に来て、州の良いところを知り、自分の国に広めて、この州に行きたい！と思う人がもっと増え、貧しい暮らしが少しでも良くなることを目指す』

『世界の多くの国が協力して、アフリカ州のためにできることを行う。特に、植民地時代に植民地支配を行っていた先進工業国が技術を教えるなど、ヨーロッパ州を中心に日本も世界もつながることが大切。子どもたちが夢を持て、叶えられ輝ける州を目指す』

『紛争が多いアフリカ州。EU のように、州が一つにまとまっていけると良い。しかし、これはたくさんの部族が住むこの州では厳しい。解決していくにはみんなで話し合うことが必要。平和で安全で楽しい生活ができる州を目指す』

→アフリカ州の特色をもとに、よりよいアフリカ州をめざす方策を意欲的に考える生徒が多かった。

・総合・道徳ワークシートの記述（感想）

『私は正直、できることが身近にあるならば協力するけれど、少し手を伸ばさないと協力できないなら、協力しなくていいやという考えでした。しかし、アフリカ州の子どもたちの生活を知って、私たちが思っている以上に、国によっての差があるのだと知り、改めて驚きました。これからは、少し手を伸ば

してでも、協力できることはやってみます。』（JICA 世界の笑顔のためにプログラムに参加）

『話し合いを通して、自分の夢を叶えることが貧しい人のためになることもあるのではないかと思いました。班の皆の意見は、すべてがよりよい世界につながる意見で、募金やお金だけでできること以外にも、人間関係を深める・交流するなどの意見があって、アフリカ州の子どもを身近に感じるようになりました。文通など、してみたいです。あと、自分なりに目標に向かって取り組むことが大切だとも思いました。』

→JICA リソースの活用によって、意欲を行動にうつすことができた生徒や、国際貢献について多様な考えをもつことができた生徒がいた。

9 授業実践全体の成果と課題及び課題の改善策

教科の特性や、自分の分掌を生かしてほぼ計画通りの実践を行うことができたことが一番の成果。教科・総合・道徳と、多くの時間を用いたことで生徒の中で教科においては、アフリカ州の地域的特色を理解した上で、アフリカ州をより良くするための方策を考えることができた。また、総合や道徳においては『国際理解・国際貢献』に対する意欲が高まり、行動に結びついた生徒もいた。いずれの授業実践においても、ザンビアで見聞きしたこと・手に入れた教材を示したことが生徒の関心・意欲をひきだすことにつながった。また、特に『世界の笑顔のためにプログラム』への参加呼びかけは、ザンビアで一番大きく日本の国際協力活動の意義を感じたことと結びつけて行うことができ、生徒の想いを行動に移す機会ともなった実践であった。課題としては、授業の評価についてと、日本にいながらにして世界のことを考えることの難しさがあげられる。評価については、通常の授業と同様、信頼性・妥当性が求められることに加えて、ESD の視点からみて、生徒に必要な力が身に付いたかどうかということについてどう評価していくのかが課題となる。この点については、他の参加者と授業実践を共有しながら、共に考えていきたい。また、日本にいながらにして世界を考えることの難しさについては学校の授業でどんなに世界の現状を想像し、考えたとしても現実の社会生活の中で生かしていくことは難しい。この点については、JICA のプログラムなどを活用して外部団体の支援・協力を得ながら、今後とも引き続き教科・総合・道徳などの授業で『国際理解・国際貢献』について学ぶ機会を設けていきたい。

このように、授業を実践する中で教員自身の ESD や『国際理解・国際貢献』に対する意欲が高まり、知識が身に付いたことも成果としてあげられる。課題としては、身に付いた知識を生かした実践によって、他の教員の ESD や『国際理解・国際貢献』に対する意欲を高めたり、知識を深めたりすることである。この点については、次年度以降に実施予定のオリンピック・パラリンピック教育において、ザンビアで青年海外協力隊として活動していた現 IOC の方を招いて講演を行うこと。国際理解教育として、本校の卒業生である現ザンビア事務所所長を招いて講演を行うことを企画している。今回は学年の実施であったが、これは学校全体の取り組みとして行うものであり、有効であると考える。また、次年度以降も継続的にキャリア教育や人権教育、道徳教育、社会科教育の一環として継続的にザンビアで得た JICA リソースを活用していくことを計画している。その中で、生徒が視野を広げたり、思考を深めたりするだけでなく、主体的に国際協力活動に参画することをねらいとしていく。

10 教師海外研修に参加して

教師海外研修に参加し、授業実践を行うことで参加する前に抱いていた『直接見聞きした世界の現状を生徒に伝え、共に考えたい』という想いが十分に満たされた。また、外部講師を招いた一過性の国際理解教育ではなく、常に生徒のそばにいて変容をみとる役目の教員が国際理解教育を行うことは、生徒一人一人の発達段階や考えに応じた指導や支援が可能になることから、生徒の意識変容に有効に活用できると考えている。

今後は、この意欲を忘れずに授業実践を見直しながら、今後の教育活動にも教師海外研修の成果を生かし続けていく。そのために、教科・総合・道徳以外にも、人権教育やキャリア教育や安全教育など様々な教育活動の中に、国際理解教育や ESD の視点を盛り込んだ計画をたてて実行し、見直してさらに実行するということを研修会や研究発表などで新しい情報を取り入れながら続けていく。

そうすることで、生徒の中から将来国際協力活動に関わる生徒がでてきてくれることを願っている。そのことこそが、教師海外研修の本当の成果であると考える。

一度しか参加できない教師海外研修だからこそ①研修を通して友好親善②帰国後の授業実践を通して日本社会に還元③関わった生徒が将来、開発協力に携わる『一粒で三度美味しい』を合い言葉に実践を続けていきたい。一人一人の幸福が、地球全体の幸福につながることを心から願って。

学校名: 阿賀町立阿賀津川学校

氏名: 石黒　富久美

[担当教科:英語]

- 実践教科等: 道徳
- 時間数　: 8時間
- 対象生徒 : 中学校3年生
- 対象人数 : 30 人

1 単元名

世界とつながる日本　～共助・共生の関係を目指して～

2 単元の目標

①ザンビアの学習を通して、相互依存の関係を知り、異文化を理解しようとする態度を育てる(多面的・総合的な思考力)

②ザンビアをはじめ、世界が抱える問題について知り、持続可能な援助の必要性に気づく(未来像を予測して計画を立てる力)

③自分にできることや生き方を考えながら、自分自身と向き合う。(自己の生き方の追究)

3 ESD(持続可能な社会づくり)の視点

多様性	相互性	有限性	公平性	連携性	責任性

・日本とザンビアとの文化、地理、経済、価値観等の違いに気づく。【多様性】

・日本と世界の相互依存関係に気づく。【相互性】

・地球をとりまく自然環境やエネルギーは有限であり、資源を大切にすることは自分達の未来につながっていることを理解する。【有限性】

・ザンビアで活躍するボランティアの方々を紹介し、互いに連携・協力・共助することの大切さを理解させ、発展途上国が抱える課題を解決するために何ができるか考えさせる。【連携性】【責任性】

4 単元の指導について

(1)教材観

道徳の学習指導要領[中3](4－10)「人類の幸福」、「国際平和」に該当する。本実践では、生徒がザンビアをより身近に感じることができるよう、現地で撮影した画像や動画をたくさん使い、現地の様子や現地で活躍する日本人の方々を紹介することで、遠くに感じていた「国際協力」が、身近に感じられることと思う。また、日本の行っている「持続可能な社会づくりの支援」を知ることで、ザンビアと日本のつながりは未来まで続いているということ、その支援は日本にも還元される win-win の関係にあるということを理解させたい。日本の行っている支援に触れることで、「困っている人がいたら手を差しのべたい」「救える命は救いたい」という、人としての生きる姿勢を感じとらせ、国際貢献に目を向ける素地を育てたい。

(2)児童生徒観

授業対象は中学3年生であり、もうじき義務教育終了の節目を迎える。中学3年ともなれば、国際協力、国際貢献の大切さについて考えられる歳である。しかし、日常生活でその正義感と思いやりを行動に表す機会は少なく、JRC 委員会を中心に、募金活動、ペットボトルのキャップ集め、地域のゴミ拾いなど、単発的な活動にとどまっている。他国を知ることは自国を知ることにもつながる。今、世界ではどんなことが起こっているのか、世界平和に向けて自分達にできることは何か、人類が互いに助け合うことの意義とは何か、について考えさせたい。それが国際貢献の根幹になると考える。

(3)指導観

・ 本校の研究主題である、「主体的に学び続ける生徒～教えて考えさせる授業～」の達成を目指す。課題を提示し、推測させ、考えさせ、意見交換させ、疑問点、関心を十分もたせてから、事実を提示するようにする。その手段として、班活動を取り入れ、全員が話し合いに参加する場面を盛り込む。人前で自分の意見を言うことを苦手としている生徒もいるので、本音でフリートークができるよう、班長に話し合いをリードさせる。他の意見に耳を傾け、認め合う姿勢の育成にもつなげる。

・ 1時間、1時間、授業の感想と質問を書かせるようにし、できるだけ出た質問に答えることで、興味・関心を次につなげるようにする。

5 評価基準

観点	関心・意欲・態度	思考・判断・表現	技能	知識・理解
評価規準	・ザンビアを通し、世界の多様な文化、価値観の違いについて、理解を深めようとしている。 ・発展途上国が抱える諸問題に気づき、問題意識をもつことができる。	・貧富の格差や環境問題の構造的なつながりが理解できる。 ・なぜ途上国に教育や支援が必要なのか追究することができる。	・資料（フォトランゲージを含む）から、必要な情報を読み取ることができる。 ・課題解決の方法について考察し、自分の言葉で他者に伝わるように発表できる。	・発展途上国の課題や JICA の支援、国際協力についての知識を身につけている。
評価方法	学習の様子・発言・ワークシートの記述・質問・感想・アンケート結果			

6 単元の構成

時限	小単元名	学習のねらい	授業内容
1	・ ザンビアについて知る ・ 都市部と農村部の生活の相違	・ ザンビアの位置、気候、衣食住等に興味、関心をもつことができる。 ・ 都市部と農村部の大きな格差を理解する。	・ 地図でザンビアの位置を確認し、画像や三択クイズ等で、ザンビアについて知る。 ・ フォトランゲージを行う。都市部、農村部それぞれの写真から気づいたことを班ごとに発表させる。
2	・ 日本と発展途上国とのつながり、日本とアフリカ（ザンビアを含む）とのつながり	・ 日本は資源や食料をどの国から輸入しているのか知り、発展途上国(ザンビア)ともつながりがあることを理解する。	・ 日本の身近な物や食べ物を例にあげ、↑それぞれの材料の輸入源を推測させる。 ・ アフリカのマップ上で輸出品を確認していき、日本は発展途上国とつながりが大きいことに気づかせる。
3	・ ザンビアの教育事情とザンビアが抱える課題の把握	・ 日本とザンビアの学校事情を比較し、発展途上国の厳しい教育事情を知る。 ・ 子ども達が学校に行けない原因を考える。（負の連鎖）	・ 発展途上国の就学率、卒業率、教員数、学校施設、カリキュラム等の情報を提示し、教育環境に関心をもたせる。 ・課題①、②について班で話し合い→発表 ①学校に行っていない子ども達は日中、どのように過ごしているのか。 ②物を売ったり、家の仕事を手伝わなければならないのはなぜか。
4	・日本の発展途上国(ザンビア)への支援体制	・負の連鎖を断ち切るにはどうしたらよいか考える。 ・日本の支援体制について理解する。	・課題①、②について班で話し合い→発表 ①学校に行けるようにするには何が必要で、どういう状況、環境になればよいのか。 ②途上国を誰がどうやって支援するのか。 ・視察した訪問場所の画像や写真を通して ODA や JICA の活動内容を紹介する。
5	・「共助・共生」の大切さ	・ 日本は借金を抱えていながら、なぜ発展途上国に支援するのか考える。	・ win-win の関係、持続可能な支援の必要性などについて理解させる。
6	・世界が抱える現在の課題・将来の危機を把握	・ 今の我々の生活が何を引き起こしているか、将来どんなことにつながっていくかを知り、自分の生活を振り返る。	・ 画像や映像を見せ、現在地球で起こっていること、将来起こりうることに関心をもたせる。 ・ 今、自分達にできることは何か、班で話し合わせ、発表させる。
7	・ザンビアのもつ素晴らしさに触	・ ザンビアの自然、動物、伝統文化等を紹介し、保	・ 画像や映像を通し、どの国にも長い年月大切に守り続けてきた生活や文化、伝統

	れる	全の気持ちを育てる。	があることを紹介する。
8	・地球人としてのこれからの生き方	・ 同じ中学生がどんなことを考えや夢をもって勉学に励んでいるのか知る。 ・ 今後、日本がやるべき支援、自分がやってみたい支援について考える。	・ ザンビアの女子中学生のアンケートを紹介する。(自国をどう思うか、将来の夢、日本の印象、欲しいもの・・・) ・ ザンビアで活躍している方々から日本の学生に向けた画像メッセージを紹介する。

7 授業事例の紹介

小単元名【日本の発展途上国(ザンビア)への支援体制】

(1)指導案

(ア)実施日時　12 月4日(金) 第4限・・・4 / 12 月 7 日(月) 第5限・・・5

(イ)実施会場　3年2組教室

(ウ)本時の目標　4・ODA(政府開発援助)と JICA の存在、支援体制を理解する。(知識・理解)
5・なぜ、発展途上国を支援する必要があるのか考え、発表することができる。(思考・判断・表現)

(エ)指導のポイント ・パワーポイントで画像を使い、説明を視覚的に捉えやすくする。
・本校の研究主題である、「主体的に学び続ける生徒～教えて考えさせる授業～」を目指し、班活動を取り入れ、全員参加型の授業を目指す。

(オ)12 月4日(金) 本時の展開・・・4

過程・時間	指導内容	学習活動	指導形態	指導上の留意点	評価(評価規準・評価方法)
導入 10分	[前時の復習] 発展途上国の学校に行っていない農村部の子ども達の現状や負の連鎖について振り返らせる。	・次の①②の発問に対する各班から出た意見を確認する。 ①「学校に行っていない子ども達は日中何をしているのか」 →水くみ(生活水が入手困難) →妹弟の面倒、農作物、家畜の世話、物を売り歩く(家計が苦しい、働き手が不足) →病気で寝ている →戦場で戦っている ②「子ども達が学校に行けるようになるために、どういった物や生活環境が必要なのか」 →学校・・・教具、教師 →病院・・・医師、看護師 →水道・・・浄水設備、技術者 →農業改革・・・機具、指導者 →産業開発・・・経営指導者、技術指導者	一斉	・ パワーポイントを使い前時の授業内容を再確認させる。 ・ 資金や物資の援助だけでなく、人が係わって支援することの必要性に気づかせる。	前時学習したザンビアについて、内容を振り返り、その劣悪な現状を真剣に受け止めているか。 (学習態度)

展開 30 分	支援とはどうあるべきか考えさせる。	発問 「課題を抱えた発展途上国を誰がどうやって救えばよいのか」 ［班で話し合い→発表］ ～予想される生徒の反応～ 誰が→金持ち、先進国、国連加盟国、ユニセフなど 何を援助→資金、物資、技術 どうやって→技術者、医者、教師を派遣	班	・「共生」という理想を実現させるためにはどうしたらよいのか、考えさせる。 ・ 班長が司会進行・発表	・真剣に考え、話し合いに参加しているか。 ・他の班の発言を尊重して聞いているか。 （学習態度・発言）
	日本の支援活動を紹介する。	・ 画像を見ながら、現在行われている日本の支援組(ODA、JICA)の存在とその活動内容について知る。 ・ ザンビアでは、実際に誰がどんな活動を行っているのか知る。	一斉	・パワーポイントで説明 ・視察現場の画像を紹介	・関心をもって画像を見て理解に努めているか。
まとめ 5分	振り返りシートに記入する。	・わかったことや感想、質問をシートに記入する。	個人		シートの記述

（オ） 12 月7日(月） 本時の展開・・・Ⅱ

過程・時間	指導内容	学習活動	指導形態	指導上の留意点	評価 （評価規準・評価方法）
導入 5分	前時の学習内容の確認	・ 前時の授業の生徒の感想、質問への返答を聞く。	一斉	・ いろいろな感想や意見を紹介する。 ・ パワーポイントを使い生徒から出た質問に答える。	・他者の考えに真剣に耳を傾けているか。 （学習態度）
展開 35 分	支援は一方通行ではなく、win-winの関係にあることを理解させる。	・ 日本がいくらくらい借金を抱えているのか、これまでに開発援助した国や地域はどれくらいあるのか知る。 発問「日本はたくさん国債を抱えていながらも、なぜ支援し続けるのか」 ［班で話し合い→発表］ ～予想される生徒の反応～ ・人として当たり前のこと ・武士道、日本人魂 ・優位に立ち、名声を得る ・将来、利益につながる	一斉 班	・ パワーポイントを使いクイズ形式で推測させる。 ・班長が司会進行・発表	・話し合いに積極的に参加し、他者の意見を聞いて自分考えを更に深めようとしているか。 （学習態度・発言）
		「支援は地球環境の悪化、感染病などの拡大を阻止する」「発展途上国と相互依存の関係にある日本にとって、支援は日本自身を守ることにもつながっている」「支援を通して築かれた信頼関係は世界平和につながっている」・・・など、win-win の関係にあることを理解する。	一斉	・パワーポイントで、画像を用いてまとめ、わかりやすく説明する。	・集中して画像を見て、支援することの意義を理解しようとしているか。 （学習態度）

	「共助・共生」の大切さについて関心を深めさせる。	・ 阪神淡路大震災や東日本大震災時、日本は諸外国からたくさんの支援を受け、そのおかげで今があるということを理解する。	一斉	・ パワーポイントで日本への支援国を提示する。 「目の前で誰かが困っていたら助ける」という原点に立ち返らせ、世界の平和・発展に目を向けさせる。	
まとめ 5分	振り返りシートに記入する。	・ わかったことや感想、質問をシートに記入する。	個人		シートの記述

（2）授業の振り返り

・生徒は高い関心を示し、毎時間、質問がたくさん出た。

＜生徒からの質問の一部＞

・水をくむためにどれくらい歩くのか　・なぜ靴を片方しか売っていないのか　・学費はいくらか
・なぜザンビア政府は政治を改善しないのか　・なぜ都市部と農村部でこんなに差が広がったのか
・日本の他にザンビアを支援している国はあるのか　・ザンビア国民は自国をどう思っているのか

・1クラスで進めたので、時間の見通しが立たず、予定したことろまで進められなかったこともあったが、自クラスだったので、授業時間をたくさん確保できた。8時間授業を継続したにもかかわらず、最後まで生徒の集中力が続いたのは、やはり生きた教材だったからだと思う。

・1週間に1回、2回のペースで進めると、準備が追いつかない時もあった。3 年生には今伝えないともう来年続きはないと思うと、あれも伝えたい、これも伝えたいと欲張ってしまった。その分、授業準備が大変だったが、生徒の質問に答えるために必死になって調べたことは自分の力となった。政治に関する質問は確信をもって返答できなかったので、もっと調べたり、JICA 関係者の方々から教えて頂き、生徒に返していきたい。

・生徒の感想に「日本は借金を返してから支援すればいいのではないか」という意見もあったが、東日本大震災で発展途上国であるアフリカからも支援がきたという事実を知り、「支え合い精神」の本質を理解できたようだった。

・国際協力についての知識はたくさん深まったが、実践の面ではまだまだである。

・現地で活躍されている方々からのメッセージの肉声がほとんど聞こえなかったのが残念である。スカイプを利用して連絡しあうことも考えていきたい。キャリア教育としてもよい教材であった。

（3）使用教材　※パワーポイントの画像の一部

（4）参考資料等

・学校に行きたい！（独立行政法人　国際協力機構　広報室）
・どうなってるの？世界と日本（独立行政法人　国際協力機構　広報室）
・ひとりじゃ生きられないニッポン（独立行政法人　国際協力機構　広報室）
http://www.jica.go.jp/aboutoda/interdependence/hitori/areastudy/area3.html
・学校に行けない世界の子どもたち（独立行政法人　国際協力機構　広報室）
・外務省　外交政策　ODA（政府開発援助）http://www.mofa.go.jp/mofaj/gaiko/oda/about/index.html
・外務省　わかる！国際情勢　震災直後から続々と届く世界中からの温かく力強い支援
http://www.mofa.go.jp/mofaj/press/pr/wakaru/topics/vol73/

8 単元をとおした生徒の反応/変化

真剣に画像を見る生徒達

・ 教育の大切さを知るとともに、発展途上国への関心が高まった。
・ 発展途上国と日本がつながっているということが理解できた。
・ 日本の支援体制を知り、何かできることを見つけて協力したいという気持ちが芽生えた。
・ 物資以外の支援の大切さや継続した支援の大切さに気づいた。
・ 環境を守ることは世界を守ること、つまり、自国を守ることにもつながっているということが理解できた。

＜アンケートより＞
①ザンビアで活躍する方々からのメッセージは　今後の人生の参考になった 30 人/ならなかった 0人
②海外研修の機会があったら　行ってみたい 23 人 / 行かなくてよい 7人
③「これはなくそう！」「なくなればいい！」
→戦争、紛争、銃、武器、少年兵、貧富の差、格差、差別、偏見、飢餓、いじめ、病気、菌、汚水、犯罪、泥棒、子供を悪用する大人、ポイ捨て、ゴミ、資源の無駄遣い・・・
＜生徒の感想の一部＞
・僕達に何ができるのか、考えさせられる授業でした。些細なことでもその積み重ねが大事なのだと感じたし、日本がしてあげられることはまだまだあると思いました。一緒に幸せになりたいと思った。
・先進国が発展途上国のことを知っても意味がないと思っていたが、それは間違いでした。写真や画像を見て発見がたくさんあった。真剣にザンビアを熱弁してくださってありがとうございました！
・青年海外協力隊が発展途上国に行き、活動していることに感動しました。自分も将来、災害などがあった場合、現地に行って困っている人を助けてあげたい。
・支援は未来にも続いている。ゴールを越えても走り続ける日本はかっこいいと思った。
・日本よりも貧しい国があることは知っていたけど、その国の生活まではよく知らなかった。今回、長くに渡ってでもこういう授業を受けられて良かった。自分達が幸せならそれでいいやではなく、世界の国々のことも視野に入れて、自分にできることは何かを考えていける人間になりたい。

9 授業実践全体の成果と課題及び課題の改善策

P<計画>	・学習計画を立て、授業のねらいを明確にし、毎時間の指導案を作成した。 ・その国について事前にしっかりと調べ、情報収集をしてから授業に臨んだ。
D<実践>	・理解しやすいよう、集中力が途切れないよう、スライド、動画、拡大写真等を用いた。 ・具体的な現地の様子や JICA に係わる方々からのメセージを盛り込み、現実感、臨場感をもたせた。 ・教師からの一方通行にならないように、全員参加型の話し合い活動を盛り込んだ。
C<検証>	・事前、事後アンケート、自己評価、授業中のワークシート、感想の記述等から生徒の理解度をチェックし、次の授業で足りないところは補足するように努めた。 ・他教員から授業を参観してもらい、助言を次時の授業の参考にした。
A<改善策>	・今回は3年生だけが対象だったので、1年生から3ヶ年を見通した学習計画をもつ。 ・持続的に学校全体で学べるように、国際理解コーナーを設ける。 ・2学期末(12 月)に授業を実施したので、知識の伝授で終わってしまった感がある。もう少し早い段階で授業を実施すると、次のアクションまでつなげられたように思う。

10 教師海外研修に参加して

滞在中は、毎日が「見る」「知る」「感じる」「考える」の繰り返しであった。書物やメディアからではなく、「自分の目で見て感じる・体験する」ということの大切さを改めて痛感した。そして、「なぜ国際協力が必要なのか」の答を見つけることができた。開発、改善、研究、学校教育等、国際協力にはいろいろな形があるが、それぞれの現場で具体的な実践を見せて頂けたこと、ESD の考え方を学ぶことができたことは本当に大きな収穫であった。現地で、使命感に燃え、日々奮闘しておられる方々の雄姿や、その方々のこれまでの生き方や今の道に進むきっかけとなった話など、大変感銘を受け心を動かされた。授業の準備は大変であったが、生徒の感想を読んで涙が流れた時もあり、授業をやってよかった、海外研修に参加してよかったと強く感じた。これから先も、国際協力や国際理解教育について研鑽を積み、授業、または何らかの形で、子ども達に伝え続け、ともに学び続けていきたい。

学校名：長野県栄村立栄中学校

氏名：市川志野

［担当教科：理科］

- 実践教科等：総合学習
- 時間数　　：2時間
- 対象　　：全校（中学1年生～3 年生）
- 対象人数　：49 人

1　単元名

私達は開発途上国とどのような関係を築いていけば良いのか

2　単元の目標

①ザンビアの生活、文化、歴史などを知ることを通して、日本と似た部分、異なる部分に注目しながら、異なる文化や生活、習慣に親しみを持つ。

②ザンビアや日本、栄村の良い部分、課題を比較しながら考えることを通して、より広い視野で物事を考え、課題に取り組んでいく姿勢を培う。

③私達の生活が多くの国と繋がり合うことによって成り立っていること、日本が支援を通して開発途上国とのつながりを深めてきたことを知り、日本が開発途上国を含めた他の国々とどのような平和的な関係を築いていくべきかについて考える。

3　ESD（持続可能な社会づくり）の視点

多様性	相互性	有限性	公平性	連携性	責任性

・異なる文化や生活、習慣について知る。（多様性）
・私達の生活が多くの国と繋がり合うことによって成り立っていることを知る。（相互性）
・日本が開発途上国を含めた他の国々とどのような平和的な関係を築いていくべきかについて考える。（連携性）

4　単元の指導について

（1）教材観

普段の生活において、海外とのつながりを感じる機会はなかなかないが、私達の暮らしは多くの国や人々とのつながりによって成り立っている。開発途上国が貧困に起因する様々な課題を抱える一方で、先進国と言われる日本にも人口減少、高齢化を始めとする多くの問題がある。特に長野県の栄村は日本が抱えるこういった問題が顕著に表れている場所であるとも言える。ザンビアという日本から遠く離れた国について考えることは、地域の問題とは大きく乖離しているようにも感じられるが、日本の過疎地域の中には、課題解決の糸口を発展途上にある国々との関係に見出し、活動している事例も見られる。また、これからの未来を担う子ども達が、自分たちの生活が世界とのつながりによって成り立っていることを知り、世界の様々な問題に目を向けることは、自分たちが暮らす地域や日本が抱える問題を解決するための力を培い、日本が他の国々と共に発展していくための平和的な関係を築くためにはどうすればいいのかについて考え実践していくことにもつながっていくと思われる。

（2）生徒観

栄村の生徒は小学校中学校を通して、豊かな自然と地域のあたたかな支えの中でのびのびと育ってきている。未来を担っていく子どもたちは、より広い視野を持って、様々な課題に柔軟に取り組んでいくことが必要とされている。

事前に行ったアンケート1では、多くの生徒が将来海外へ行ってみたいと答えたが、海外に対してあまりポジティブなイメージを持っていない生徒もいることがわかる。特に、近年起こったテロなどの影響もあり、海外に対して危険だというイメージは強い。また、今回訪れたザンビアを含めたアフリカ地域は、生徒にとって遠く、あまりなじみのない場所である。また、紛争、貧困、病気などマイナスイメージを持つ生徒も多い。

【事前アンケート1】
①将来海外へ行ってみたいと思いますか。 とても行きたい・・・22％　　行きたい・・・51％
あまり行きたくない・・・26％ 全く行きたくない・・・1％
②行きたくない理由・・・こわい、英語を話せない、日本が好き、安全じゃない、危ないなど
③アフリカに対するイメージ・・・暑い、動物がいっぱいいる、自然が多い、病気がこわい、貧しい、危険そう、食べ物がおいしくないなど

第 1 時の授業が終了したところで、日本が開発途上国に対して支援を行っていることを伝え、支援に関するアンケートを行ったところ、支援に関しては生徒全員が必要だと感じると答えた。支援がなぜ行われているかに関しては、「困っている人がいるから助けるのはあたりまえ」といった意見が多かったが、支援が日本の利益とつながっているという考えも見られた。

【事前アンケート2】
・支援は必要だと思いますか　　必要・・・100％　必要ない・・・0％
・なぜ日本は支援をしていると思いますか・・・・困っている人がいるから助け合うのはあたりまえ、日本もいつか助けてもらわなきゃいけない時がある、発展したら貿易相手になる、輸入したりしているものがある。など

生徒は、社会の授業などを通じて世界の国々ついて学んではいるが、日本と世界、栄村と世界のつながりについて考える機会はこれまであまりなかった。そこで、アンケートからわかった子ども達の考えに沿いながら、研修で得たザンビアの様子や日本が行っている支援の様子を通して、日本と開発途上国との関係について考えさせたい。

（3）指導観
第1時では、生徒に事前に行ったアンケートの集計をもとに、ザンビアがどのような国なのかを紹介を行う。特に、貧しい、危ない、病気が怖い、食べ物がおいしくないといったマイナスのイメージに対して、実際はどうだったのか、なるべく良い部分を中心に取り上げながら、知らない国であっても良い面を見つけながら前向きに向き合っていこうとする姿勢を育てたい。一方、貧困による様々な問題を抱えていることにも気付いてほしい。
第2時では、なぜ日本が開発途上国へ支援をするのかについて、色々な視点から考え、自分たちの生活が世界とつながっていることを感じてほしい。また日本、栄村、ザンビアの良い部分や課題を比較しながら、互いが発展していくためにはどのような繋がりを作っていけばよいのかアイディアを出し合い、日本が開発途上国の国々とどのような平和的な関係を築いていくべきかについて考えてほしい。

5 評価基準

観点	よりよく問題を解決する資質や能力	学び方やものの考え方	主体的・創造的、協同的に取り組む態度	自己の生き方
評価規準	・他文化や人々の生活に興味を持ち、理解しようとする。 ・日本とザンビアが共に課題を解決する方法について考えられる。	・支援において大切なことは何かを考えられる。	・他の生徒とのグループワークを通して自己の考えを深め、課題を解決する方法について考えることができる。	・開発途上国の人々とどのように向き合っていけばよいのかについて考えることができる。
評価方法	・授業での取組。 ・ワークシートへの記入。	・学習カードへの記入。 ・話し合いへの参加の様子。	・学習カードへの記入。	・学習カードへの記入。

6 単元の構成

時限	小単元名	学習のねらい	授業内容
1	アフリカはどのような地域なのだろうか。	ザンビアの良い部分、課題を日本と比較しながら考えることを通して、異なる	・アフリカに対して持っているイメージを発表する。 ・生徒のイメージに沿ってザンビアの自然、生

		文化や習慣に親しみを持つと同時に、貧困に関連する様々な問題に目を向ける。	活、文化について紹介する。 ・ザンビアの良い部分、課題について日本と比較しながら考える。 ・全体での共有。
2	私達は開発途上国とどのような関係を築いていけば良いのか。	日本人の生活が多くの国と繋がり合うことによって成り立っていること、日本が支援を通して開発途上国との繋がりを深めてきたことを知り、日本が開発途上国を含めた他の国々とどのような関係を築いていくべきかについて考える。	・支援はなぜ行われているかを考える。 ・日本と開発途上国を含めた世界の国や人々とのつながりを知る。 ・支援において大切なことを考える。 ・ザンビアで行われている日本の支援をついて知る。 ・日本と開発途上国、互いの課題を解決するためのつながりについて考える。 ・私達が開発途上国とどのような関係を築いていけば良いのかについて考える。

7 授業事例の紹介

小単元名【私達は開発途上国とどのような関係を築いていけば良いのか】

（1） 指導案

（ア）実施日時 11 月5日（木）第6限

（イ）実施会場 ランチルーム

（ウ）本時の目標

日本人の生活が多くの国と繋がり合うことによって成り立っていること、日本が支援を通して開発途上国とのつながりを深めてきたことを知り、開発途上国を含めた他の国々とどのような関係を築いていくべきかについて考える。

（エ）指導のポイント

・生徒の意見をもとに海外への支援がなぜ行われているのかを考えさせる。

・過去の地震の時に受けた支援から、支援において大切なことは何かを考えさせてから、実際にザンビアで行われている支援について紹介する。

・生徒が考えた栄村、日本、ザンビアの良い点、課題点を振り返らせ、お互いに良い部分、課題があることに気付かせたい。

（オ）本時の展開

過程・時間	指導内容	学習活動	指導形態	指導上の留意点	評価（評価規準・評価方法）
導入 5分	①世界の開発途上国と日本の支援	①日本が海外支援をしている理由について意見を出し合う。	全体	・アンケートをもとに色々な意見を取り上げる。	
展開 35 分	②日本と世界のつながり	②パワーポイントを見て、日本と世界のつながりを知る。 (a)私たちの生活とアフリカとのつながり (b)東日本大震災で受けた支援（JICA 駒ヶ根所長さんのブータンで体験されたお話） (c)戦後の支援 (d)ザンビアで活躍する看護師さん	全体	・生徒の意見を確認しながらパワーポイントを使って紹介を行う。 ・(a)では、身の周りの身近な物をいくつか挙げ、どれがアフリカと関係しているか予想させる。	・ワークシートへの記述

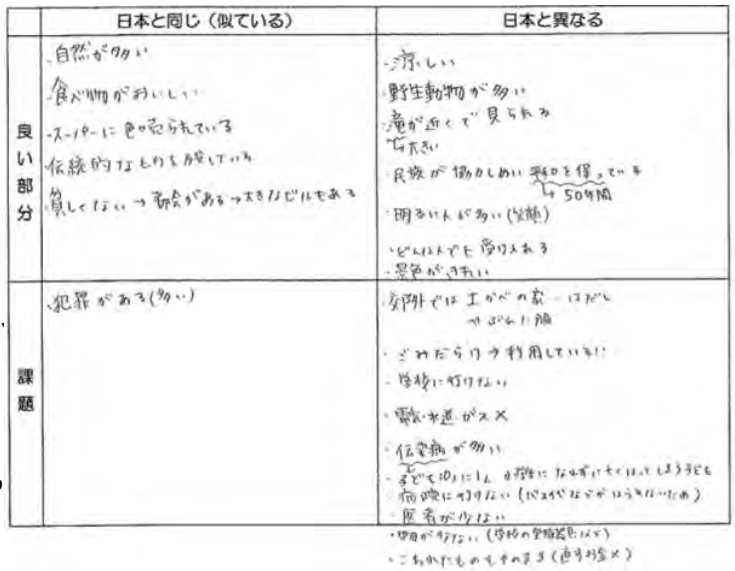
	③支援をする上で大切なこと ④ザンビアで行われている支援	③支援をする上で大切なことは何か考え、グループで意見を出し合う。 ④ザンビアで行われている支援について知り、感じたことを学習カードへ記入し、発表する。 (a)ンゴンベコンパウンドにおける給水施設の支援 (b)ルサカ郡病院アップグレード計画	グループ 個人 全体	・4年前の地震の際に受けた支援を思い出させながら、意見を聞いていく。 ・給水施設の建設、医療施設の拡充について紹介。 建物を建てるだけでなく、自立に向けた技術支援を行っていることを押さえる。 ・この地域の現状について第1時に紹介したことを再度確認する。	・話し合いの様子 ・学習カードへの記入
	⑤共に発展するつながり	⑤日本とザンビアを含めた開発途上国が互いの課題を解決するためのつながりについてグループで意見を出し合う。	グループ	・日本、栄村、ザンビアの良い点、課題について生徒が記入した資料を比較しながら考えさせる。	・話し合いの様子
まとめ 10 分	⑥私達は開発途上国とどのような関係を築いて行けば良いのか	⑥開発途上国とどのような関係を築いて行けば良いかについて感想も含めて記入する。数人の意見を全体で共有する。	個人 全体	・学習カードへの記入	

（2）授業の振り返り

授業1

「アフリカはどのような地域なのか」

①生徒がまとめたザンビアの良い部分、課題（日本と比較して） 生徒が出したアフリカのイメージをもとに、ザンビアの紹介を行ったため、自分たちのイメージと違うことが多いことに驚いている様子が見られた。



	日本と同じ（似ている）	日本と異なる
良い部分	・自然が多い ・食べ物がおいしい ・スーパーに色々売られている ・伝統的なものも残っている ・貧しくない→都会があるっ大きなビルもある	・涼しい ・野生動物が多い ・滝が近くで見られる ・大きい ・民族が協力しあい平和を保っている→50年間 ・明るい人が多い（笑顔） ・どんなことでも受け入れる ・景色がきれい
課題	・犯罪がある（多い）	・郊外では土がの家→はだし ・ごみたらりゴミ利用していた ・学校に行けない ・電気・水道がス× ・伝染病が多い ・まだ10歳にも満たない子どもたちが働いている ・病院に行けない（お金がないため） ・医者が少ない ・学校が少ない（学校の建物がない） ・ごみがたくさんあるまち（色々な物×）

②生徒の感想

・アフリカと聞くとマイナスイメージが多いけど、そうでない国もあって、日本と異なる良いところ、似ている良いことなどがたくさんあることがわかった。
良いところたくさんある反面、課題点もたくさんあるから、協力して、助け合っていかなきゃいけないと思った。

・苦しんでいる人がいる一方で、「50 年間、色々な民族が協力し合ってきた」とすごく良いことを言っている子どももいて、アフリカの印象が変わりました。

・僕がおもっていたよりもいいことが多かった。だけど、人々は十分な生活をできる人と十分な生活をできない人の差が大きい。僕も将来行ってみたいと思った。

授業2「私達は開発途上国とどのような関係を築いて行けば良いのか」

①日本が行っている支援についての感想

・相手が困っているもの、必要としているものを建てに行っているだけでなく、自分たちでもやっていけるように教えているところがいいなと思いました。

・お金を送ったりするだけだと建築技術などを教えたりすることはできないから、現地へ行ってそういった技術を伝えることも大切だと思う。

②「私達は開発途上国とどのような関係を築いて行けば良いのか（感想も含めて）」生徒の意見

・助けられ、助ける関係を築けば共に発展すると思う。相手国の文化を敬う。
・今日、色々な意見を聞いて、日本にもザンビアなどのアフリカにもたくさん課題があることを知って、自分の国だけでなく、協力し合うことでより発展させられることができるのではないかと思いました。課題はたくさんあってもそれを越えられるような、良い部分もたくさんあると私は思います。なので、お互いに意見を交わせることができる関係を築いていくといいと思います。栄村でもいろいろな意見を取り入れて、もっと課題を減らせたらいいと思います。
・今でも苦しんでいる人達に自分たちができる最大限のものは何だろう？と考えさせられた。

（3）使用教材

授業１ 「アフリカはどのような地域なのか」 パワーポイント資料の一部

生徒が考えたアフリカの「暑い、動物がいっぱいいる、自然が多い、病気がこわい、貧しい、危険そう、食べ物があまりおいしくなさそう」といったイメージについて実際はどうなのか、現地で撮った写真をもとに紹介を行った。中学校の授業の様子は撮影した動画を流した。

授業２ 「私達は開発途上国とどのような関係を築いていけば良いのか」 パワーポイント資料の一部

＊生徒のアンケート結果をもとに作成

（4）参考・引用資料等

『外務省ホームページ～わかる！国際情勢 Vol.37～』
http://www.mofa.go.jp/mofaj/press/pr/wakaru/topics/vol73/
『NHK ニュースおはよう日本ホームページ～モンゴルにコシヒカリを売り込む～』
http://www.nhk.or.jp/ohayou/marugoto/2014/01/0115.html
『国際理解教育実践資料集』 JICA 教材作成実行委員会編集（2014 年）

8　単元をとおした生徒の反応/変化

授業を行う前は、生徒の多くがアフリカに対してマイナスイメージが強く、中には拒絶ともとれるような意見もあったが、第１時の授業では、ザンビアの良い部分をたくさん見つけられたという感想がたくさん見られた。また、自分たちが普段体験することのない様々な問題についても取り上げる生徒が多かった。特にザンビアの子ども達が貧困によって厳しい生活を送っていることに対する反応が多く見られた。

また、日本が行っている支援についてもほとんど知らなかった（過去の支援の経験から支援＝お金や物を送るというイメージが強い）ため、第２時の授業では、現地に日本人が実際に行って技術を伝えるという支援があることや、現地の人達が自立することを目標に支援が行われていることが、とても新鮮であり、印象深かったようであった。第 1 時の授業の中で、小さな子ども達が病気や栄養不足で亡くなっていく現状に心を痛めていた生徒は、「日本がそのことに役だっていると知ってうれしかった」という感想を書いた。

第 2 時の授業の後半において、栄村、日本、ザンビアの良い点、課題について比較しながら互いが発展するための繋がりについて考える活動では、子ども達はグループで話し合いながら、様々なアイディアを考え出していた。この活動後の感想には、互いに良い部分は生かし、課題は補い合いながら共に支え合う関係を築いて行ければ良いという感想が見られた。授業を通して、自分たちは多くの国に支えられながら、また他の国を支える力を持っていることを感じたようであった。

9　授業実践全体の成果と課題及び課題の改善策

【成果】
・アフリカに対してマイナスイメージの多かった生徒が、ザンビアの人々の姿や生活、自然の紹介を通して、アフリカを前向きに捉える姿が見られた。
・日本が他の国によって支えられ、日本も支援等により他の国の支えになっていることを知り、互いを認め合いながら支え合える関係の大切さについて考える姿が見られた。
・生徒が互いの意見を交換する中で、新たな気づきがたくさんあった。

【課題】
・今回の授業は全校を対象としたため、それほど多くの時間が取れず、ザンビアにおける研修の一部しか扱えなかった。
・時間の少なさもあり、生徒がじっくりと考える時間や互いの意見を交流させる場があまりとれなかった。

【課題の改善策】
・今回は扱えなかった研修で得た教材を今後総合学習や教科の授業において実践していきたい。
・学級ごとの授業を行い、生徒の意見をもっと交流させながら、さらに考えを深めたり、共に実践できることを探していきたい。

10　教師海外研修に参加して

改めて振り返ってみると、この研修へ参加する前の私は、授業を受ける前の生徒とそれほど変わりはなかったように思う。テレビや新聞、インターネット、そして色々な場所で見かけていた募金を呼びかけるポスターやビラから得ていた情報は、アフリカのほんの一部分でしかなかったことを知る毎日だった。また、日本が行っている支援についても、やはり子供たちと同様に分かっているようで分かっていなかったことを知った。今回子供たちと共に最も考えたかったことは、歴史も文化も生活も違う人々とどう向き合っていけば良いのかについてであった。その気持ちは、ザンビアであたたかく迎えてくれたたくさんの人々や、人なつっこく笑顔で手を振ってくれた子供たちの姿を通して更に強くなった。授業の中で、子供たちがザンビアの様子や人々に心を寄せ、その課題について真摯に考えてくれた姿は私にとって大きな喜びとなった。これからもこの課題について、私自身に問いかけながら子供たちと考えて行きたい。

学校名：松本秀峰中等教育学校

氏名： 續 美穂

［担当教科：社会科］

- 実践教科等： 総合的な学習の時間
- 時間数 ： 2時間
- 対象生徒 ： 中学3年生
- 対象人数 ： 41 人×2クラス

1 単元名

ザンビアを通して世界の課題を考える

2 単元の目標

・ザンビアを知ることから他の世界の国や文化に興味を持ち、異文化理解の素養を身につける（つながりを尊重する態度）

・ザンビアに対する興味・関心を高め、人がいかに先入観に捉われているかに気付く（批判的に考える力）

・「自分は日本に生まれて良かった」という感想で終わらせず、先進国に生まれ育った私たちがすべきこと、やれることを話し合い発表する（進んで参加する態度・コミュニケーションを行う力・他者と協力する態度）

3 ESD（持続可能な社会づくり）の視点

多様性	相互性	有限性	公平性	連携性	責任性

・ザンビアの現状を把握することから、今、世界が抱えている問題について多面的に考察し、そのために何が必要かを考える【責任制】

・先進国が一方的に援助をするのではなく、先進国と開発途上国との相互依存の関係について理解する。【相互性】

・JICA の支援や国際協力について知り、地球規模の課題を共に解決していこうとする姿を知る【連携性】

4 単元の指導について

（1）教材観

これまでの社会科の授業でザンビアについて触れたり取り上げたことはないので、生徒たちの予備知識はほとんどない。しかしアフリカ州については学んでいるので他のアフリカ諸国やいわゆる「発展途上国」のイメージは持っている。今回、「私が見てきた 10 日間のザンビア」として写真や動画、土産品などを使って見たまま・聞いたままを伝えるよう心がけた。もちろん 10 日間では見きれない他のザンビアの側面も当然あるので一方的なザンビア感の押し付けにならないよう配慮した。

（2）生徒観

中学生ながらも、将来は医療分野や国連で社会貢献をしたいと願い勉学に励んでいる生徒もいる一方で、進路に悩みやりたいことを見つけられない生徒もいる。グローバル社会でリーダーとして活躍することが期待される中で、自ら進んで課題を見つけ解決しようとするような積極性や自発性をどう身につけていくかが課題ともいえる。「習ったことはできる、教わったことはできる」から未知なるものに遭遇した時に現状を客観的に判断し、どう工夫して発展させられるかを考えられる力を育みたい。

（3）指導観

生徒たちは、頭では世界の南北格差や貧困問題を理解していても、どこか「遠い国の出来事」として自らと関連付けて考えることが難しい。援助や支援を一方的な強者と弱者の理論で捉えるのではなく、資源のない日本は世界の色々な国とつながり支えられ存在できているという当たり前のことに気付き、自分たちができることを考えさせたい。

自分の意見を発表することを苦手とする生徒もいるのでグループワークを取り入れ、自分も発信し仲

間の意見も聞き討論させることで他者を尊重し協力する力も培いたい。
　私は生徒たちに「いつでもどこでも誰とでもやっていける力」を身に付けさせたいと常日頃から思っている。この国際理解や開発教育の授業を通して他者を理解し受け入れることの大切さやコミュニケーション能力、他者に発信する力など様々な生きる力を養うことができると考える。

5 評価基準

観点	ザンビアやそこで働く日本人への関心・意欲・態度	ザンビアや世界が抱える問題についての思考力・判断力	皆が望む世界にするために何が必要かを提案する知識・理解・技能	他者に対して自分の意見を述べる表現力・積極性・コミュニケーション能力
評価規準	意欲・関心を持って積極的に授業に参加している。	ザンビアや開発途上国が抱えている諸問題に気付くことができ、問題意識を持って考えることができる。	様々な情報や知識の中から適切なものを結び付けて考えることができ、他者に対してしっかり提案ができる。	グループワークの中で自分の意見を的確に伝え、他者の意見を受容し、建設的な討論ができる。
評価方法	観察・ワークシート	ワークシート・発言	ワークシート・発言・アンケート	グループワークの様子・発言・観察

6 単元の構成

時限	小単元名	学習のねらい	授業内容
1	・ザンビアを知る→国際理解 ・国際協力とは	・ザンビアに興味・関心を持つ ・アフリカに対する先入観に気付く ・国際協力の実態を知る。 ・ザンビアで働く日本人の思いを知り、キャリア教育の一助とする。	・アフリカ州が真中に位置する、現地で購入してきた地図を使って場所を確認し、関心を高める。 ・現地で撮影した写真・動画を使いザンビアの概要を知る。→アフリカの位置から生徒が連想するイメージ（紛争・飢餓・貧困）と写真のイメージが一致するか、しないのなら何が驚いたのかを話し合う。 ・青年海外協力隊・シニアボランティアの方のインタビュー内容を伝え、職業観やザンビアでの苦労ややりがいを知る。
2	・ザンビアを通して世界の課題を考える	・開発途上国が抱える問題に対して、自分は何が出来るかを考えさせる。→結果的に「中学生の自分には何もできない」という結論に至ったとしても、将来に向けて自分の力をどう世の中に役立させていくのかを真剣に考える。	・未来の世界に残したいものとなくしたいものを考える。 ・なくしたいと思ったものをなくすために、（皆が望む世界になるために）何が必要かを考える。自分に何ができるかも考える。

7 授業事例の紹介

小単元名【　ザンビアを通して世界の課題を考える　】

（1）　指導案
　（ア）実施日時　　11月6日（金）第6限
　（イ）実施会場　　3－2　教室
　（ウ）本時の目標
　　・グローバル社会の一員として、他人事ではなく、地球の未来や平和、安全、環境保全などを真剣

に考え、貢献しようとする態度を育てる。やや難しいテーマだが「自分には関係ない」と思わずに、世界の課題について真正面から向き合い解決の為の糸口を探す。

（エ）指導のポイント

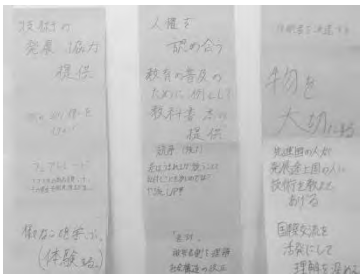
・開発途上国が抱える問題の具体例としてザンビアの衛生状態、教育問題、格差等を提示し、そこから世界の問題を考えてみる。

・グローバルイシューについて説明し、自分のこととして捉えられるようにアドバイスをする。

・資源のない日本が豊かな生活を享受できているのは、沢山の国に支えられているからである。生徒たちにとって支援や援助は持てる国が持たざる国に一方的に「してあげている」イメージがあるが、豊かな国に生まれた者として、日本を支えてくれたり日本と関わっている国に何ができるのか、世界の課題を解決する為に何をすべきなのかを『能動的に』考えさせたい。

（オ）本時の展開

過程・時間	指導内容	学習活動	指導形態	指導上の留意点	評価（評価規準・評価方法）
導入 5分	前時の振返り	前時の感想（疑問や気付き）をまとめクラス全体で共通理解する。	一斉指導	開発途上国の現状を知ると必ず出る感想が「日本人で良かった」 ↓ 素直な感想であり、自分たちがいかに恵まれているのかを知り、感謝する心は大切だが、「日本に生まれてラッキー」で終わらせていいのかを問う。私たちに出来ることはないの？と発問。	
展開 10分	20年後に残したいもの・なくなってほしいもの	4～5人のグループを作り、20年後の未来に残したいものと、なくなってほしいものを話し合い、箇条書きで書きださせる。 	グループワーク	自由な発想でとにかく思いつくものを書きださせる。 話し合いが停滞したり沈黙になってしまったグループにはヒントを出す	協力して話し合いに参加しているか。 違った角度からも意見が出ているか。
10分		各グループがなくしたいもので挙げた項目を紹介 ↓ これをグローバルイシューという。地球規模の課題のことで地球に住む我々皆が真剣に取り組まねばならないことを知る。 ↓ 国連の掲げるミレニアム開発目標（MDGs）を紹介し、生徒たちがなくしたいと思ったものと一致することに気付かせる。MDGsの後継である「持続可能な開発のための2030アジェンダ」にも触れる。	一斉指導	グローバルイシューやミレニアム開発目標など言葉が難しいので、とっつきづらくならないよう留意する。 生徒たちがなくしたいと思ったものは実は大人も本気でなくしたいと考えていて、その実現のために国連やJICAが活動していることと結びつける。	

15 分	皆が望む未来の地球のために、今私たちができること	各グループが出してくれたなくしたいもの（紛争・貧困・難病など）が20年後に本当になくなるためには、何が必要かを提案する。今、自分たちに何ができるかを真剣に考える。 1グループにつき2枚、ポストイットに提案事項を書きホワイトボードに貼る。 	グループワーク	節約をする・寄付をする以外を考えてほしい。 『持続可能』というキーワードを挙げ、「1回寄付して終わりではなく、ずっと続けられる支援活動、もしくは問題解決の方法を考えて下さい」と促す。 ↓ 中学3年生には難しいテーマなので話し合いが停滞するグループもあるが、それでも自分たちの頭で考えひねり出したものを提案するよう促す	グループ内で積極的に意見交換ができたか。 最終的にグループで2つ意見をまとめ皆に提案できたか。
まとめ 10 分	各グループの提案のまとめ	ホワイトボードに貼りだした各グループの提案を紹介し共有化を図る。	一斉指導	それぞれの提案をわかりやすく補足説明する。しっかり考えられたことを1つ1つ褒めてゆく。 最後に教師が考える「15歳の君たちが今できること」を話す。 SATREPSの紹介	

（2）授業の振り返り

・20 年後に残したいものとなくしたいものを話し合わせた時、なくしたいものは教師が誘導せずとも、各班ともほぼ同じ内容が出た。（戦争・核・難病・貧困・飢餓・格差社会・差別・環境汚染・地雷・暴力・人身売買・麻薬・テロ・いじめなど） 中学生も大人と同じように上記のものをなくしたいと考えていることがわかった。

・最後のまとめで、今、みんなにできることは一生懸命勉強することだと伝えた。今、目の前の数学や理科、英語を一生懸命勉強することが基礎学力となり、未来の世界の課題を克服するプロジェクトに関わったり、国際貢献できるかもしれないのだと。JICA では専門分野を持った様々な専門家が世界の国に派遣されて今日も国際貢献をしている。日本の技術力や教育水準がとても高く、世界で尊敬されていることを知り、生徒たちは誇らしい気持ちを持ったようだ。SATREPS(地球規模課題対応国際科学技術協力プログラム)のパンフレットを教室に置いたり興味のある生徒に貸し出しをした。地球温暖化や防災、エネルギー問題、感染症など多種多様な分野の最先端の研究チームが開発途上国と連携し、共同で世界の課題解決に取り組んでいることを紹介すると驚きとともに大きな刺激となったようだ。「中学 3 年生の今の自分には何もできないけれど、将来は誰かの役にたちたい」「困っている人の助けになりたい」という感想が出た。今、勉強することは、未来の誰かの役にたつこと、何かの為になることだと伝えた。

（3）使用教材

・現地で撮影した画像と動画（以下抜粋）

子どもの社会にも格差

スラム街でたくましく生きる子ども達

窓ガラスが割れた教室で

手作りのカレンダー

ザンビアのスーパー

ミレニアム開発目標（MDGs）とは

- 目標1：極度の貧困と飢餓の撲滅
- 目標2：初等教育の完全普及の達成
- 目標3：ジェンダーの平等推進と女性の地位向上
- 目標4：乳幼児死亡率の削減
- 目標5：妊産婦の健康の改善
- 目標6：HIV／エイズ、マラリア、その他の疾病の蔓延の防止
- 目標7：環境の持続可能性の確保
- 目標8：開発のためのグローバルなパートナーシップの推進

（4）参考資料等

・『わたしたちの地球と未来　ザンビア共和国』 愛知県国際交流協会（2009 年）
・SATREPS　地球規模課題対応国際科学技術協力プログラム
・外務省　ODA（政府開発援助）　http://www.mofa.go.jp/mofaj/gaiko/oda/
・持続可能な開発のための 2030 アジェンダ
http://www.mofa.go.jp/mofaj/gaiko/oda/about/doukou/page23_000779.html
・国連ミレニアム開発目標報告 2015
http://www.unic.or.jp/files/e530aa2b8e54dca3f48fd84004cf8297.pdf
（いずれも 2015 年 11 月 2 日アクセス）

8　単元をとおした生徒の反応/変化

・実際に自分の目で見ることの大切さを感じた。自分の先入観で物事を捉えるのではなく、実際に確かめることで今よりもっと視野を広げられるのだと思う。（私はアフリカは貧しくて、戦争が絶えない国だと思っていたので、先生の話を聞いて、50 年間 1 度も内戦がなく平和で穏やかな国があることに驚いた。シマや先生のごちそう写真にもびっくりした。アフリカにも美味しそうなものが沢山あった！）
・日本みたいに皆が豊かに暮らせているわけではないが、写真を見ていると貧しい子どもも笑顔だった。そう考えると貧しいから幸せな生活を送れないわけではないことが分かった。ザンビアの子ども達の勉強に対する意欲はすごいと思った。私たちは勉強するのが当たり前で感謝することなく過ごしているが、本当はとても恵まれていることを実感した。私もちゃんと頑張って、発展途上国で活躍しているジャイカの人たちのように、外国で人の命を救う仕事がしたい。
・「物がないなら工夫して作ろう」「できないならできるようにしよう」という先生の言葉が私の胸に残っています。ザンビアの人たちが黒板や移動実験台を自分たちで作っていることに驚きました。教科書をスーパーのチラシでラッピングしたりカレンダーを手作りしている写真にもびっくりしました。新しくきれいなものに溢れて生活している私たちには全く想像できませんでした。「日本人でよかったで終わっていいの？」と先生はおっしゃいましたが、正直今の自分に何ができるんだろうって、考えても分かりません。でも私たちが恵まれているのは事実です。だから今度は他の国の誰かが幸せになれるために私には何が出来るのか少しずつ考えたいです。
・私は将来国連で働きたいと思っていますが、国連で働くことだけが国際協力ではないということに気付かされました。いろんな国際協力の方法があるんだなぁと思いました。いろいろな職業に目を向けていきたいです。
・私はやりたいことが沢山ありますが理由をつけてできないと思っていました。でも何でもやってみることが大切だと思いました。私はザンビアに行って直接手伝うことはできないけれど、日本で何か1つでも人の為にすることができたなら、波のように優しさや幸せが広がっていけるかなと思いました。
・私はザンビアという国について名前しか知らなかったし、アフリカの貧困国だと決めつけていたが、ただの貧しくて可哀そうな国ではないと知った。一番印象に残ったのは、そこに住む子ども達だ。私たちより苦しい生活をしているのに、私たちを超えるようなやる気を持って努力している。将来を具体的に考え、勉強している。ところで、今までにこのような内容のテレビ番組を見たことはあったが、特に何も思わなかった。ところが、先生という身近な人が自らの体験として紹介してくださったことで自然と色々なことを考えさせられた。次回授業も楽しみにしている。
・ザンビアのセカンダリースクールの子ども達が「一番幸せな時は」という質問に「試験に合格した時」というのを聞いてとても驚きました。私が同じことを聞かれても勉強に関することは1つもないからです。ザンビアの人たちはすごいなぁと思うのですが、心のどこかで「私には関係ない」「私にはどうにもでき

ない」と思ってしまいます。そんな思いが変化すればいいと思いました。
・「知ること」の大切さを知りました。たった 50 円のバス代が払えずに病院に行けず、本当だったら助かるかもしれない命が失われていくなんて私には信じられない、想像もできないことが現実に起きていることを知りました。一方で日本と同じかそれ以上に高いスーパーやレストランに行くことのできるお金持ちもいて、この格差が悲しいです。格差をなくすためには何をすればいいのでしょうか。

9 授業実践全体の成果と課題及び課題の改善策

【成果】
・生徒の中にはザンビアという国名さえも知らない生徒もいたが、授業を通して興味関心が高まり、以前よりアフリカを身近に感じ、偏っていたアフリカのイメージが変化したようである。教師自身が実際に見て、聞いて、感じて体験したことを語る授業は、生徒にとってもリアリティがあり今までの先入観をふきとばすインパクトがある。ものごとを先入観をとっぱらい、あるがままに、様々な角度から見る体験の一助となれたようである。
・教科書やメディアを通してではなく、生徒たちにとって身近な教員が国際協力や支援の場を見てきて語った内容（病院やHIVのこと、学校や貧困、格差について）は、国際協力がどこか遠い国の出来事ではなく、日本が世界とつながり関わっていることをより実感として感じさせることができた。
・生徒たちは、「皆が望む未来のために今何が自分にできるのか」を真剣に考えた。大人でも非常に難しいテーマであるが、グループでそれぞれ自分の意見を出し合い討論することで、他人事ではなく自分の関わる世界のこととして捉えることができた。

【課題】
・伝えたいことが多すぎて、かなりあれもこれも詰め込んだ盛りだくさんな授業内容になってしまった。伝えるべき内容の優先順位をつけ、カットする勇気も必要だった。
・国際理解教育は教科に明確に位置づけされていないので、本校の年間授業計画との関係や授業時間数の確保が難しかった。

【改善策】
・今回、中学3年生の総合の学習の時間での実践となったが、実は他の学年の生徒たちからもザンビアの話を聞きたいと言われ、中学2年、高校1年、2年、3年の授業では社会科の授業の一環として話をした。地理や歴史だけでなく、基本的人権の問題や南北問題、国際理解や国際協力、キャリア教育と様々な切りとり方で授業が行えると考える。発達段階に応じての内容をよく吟味して来年度からも続けていきたい。

10 教師海外研修に参加して

今回、日本から遠く離れ、開発途上国のために、未来が少しでも良くなるために、一生懸命働いている沢山の人々に出会えたことは大きな喜びであり、私の財産となった。まさにこの研修に応募しなければ絶対に会えなかった方々にお話を聞くことができて貴重な経験となった。ザンビアと日本のつながりや人と人とのつながりを強く考えさせられた。また、同じ体験をしても違った角度や視点で話し合える仲間との 10 日間は本当に充実しており、自分一人では気付けない様々なことに気付くことができた。

日本と比べて圧倒的にものが不足する中で、ザンビアの人たちの「ないなら作ろう」「できないことをできるようにしよう」という向上心や心意気にとても感動した。置かれた状況が不利だったり不便だったとしても、工夫する心や向上心を持つことの大切さを生徒たちに改めて伝えたい。

日本がザンビアの人たちから感謝され、信頼されていることに日本人として誇らしい気持ちになった。物資や金銭の援助だけでなく、技術移転や人材交流に力を入れ、現地の人たちに向き合い数十年後の先まで見据えての支援活動に感銘を受けた。国際協力や支援の基本はやはり「人」であり、この「人」を育てることこそ私にできる国際協力の第一歩なのかと思う。資源のない日本が世界に誇れるのは確かな技術力と優秀な人材であり、将来、世界から必要とされる人材を育成することが私にできるささやかな国際貢献と捉え、これからも教育活動を行っていきたい。格差の是正や貧困の撲滅など、世界の課題は山積していて「どうすればいいのか」「何ができるのか」といった正解のない問いに真正面から向き合い、子どもたちと一緒に考え続けていきたいと思う。

学校名：群馬県立伊勢崎興陽高等学校

氏名：岡橋　弘和

［担当教科：農業科（食品化学等）］

- 実践教科等：課題研究
- 時間数　：6時間
- 対象生徒：高校3年生
- 対象人数：42 人

1　単元名

「食のグローバリゼーション！　～これからも美味しいゴハンを食べ続けるために私たちにできること～」

2　単元の目標

①食を通して、国際社会の一員であることを認識し、国際社会の平和と発展、持続可能な社会づくりに貢献しようとする態度を育てる。（多面的、総合的に考える力）

②ザンビアを一例に、外国の人々や文化の理解を深め、また世界と日本のつながりに気づき、多文化共生の素養を養う。（つながりを尊重する態度）

3　ESD（持続可能な社会づくり）の視点

多様性	相互性	有限性	公平性	連携性	責任性

・日本とザンビアをはじめとした他国の食文化や国民性の違いと多様性に気づく。【多様性】

・我々の食卓が外国から多く輸入をし、相互関係にあることに気づく。【相互性】

・国際社会の一員として、持続可能な社会づくりの責任があることに気づく。【責任性】

4　単元の指導について

（1）教材観

国際化・多様化が進むこれからの社会では、「異文化理解」や「共生」、「持続可能な社会づくり」が重要である。本県、ひいては我が国においては、少子高齢化が進み、外国人労働者が増える見込みが強い。そうした社会情勢において、多文化で育った人々が、互いの文化を尊重し、共に考え判断し、主体的に生きる力を育む態度の育成が急がれると考えられる。

そのためにも、生活に一番身近な文化である「食」を通して、我が国や諸外国の多様性や相互関係を学び、世界における役割と責任を認識するとともに、これからの国際社会の一員として活躍できるような素養を身に付けさせたい。

（2）生徒観

本校は総合学科であり、1 年次の 11 月に 6 系列（いのちと緑を育む系列、花と緑で環境を創る系列、食を科学する系列、食と経済を考える系列、福祉と人間を学ぶ系列、生活と文化を築く系列）に分かれ専門科目の学習内容を深めていく。

本科目を履修する生徒は、「食を科学する系列」の 3 学年 42 名であり、授業実践時はその半分に当たる b クラス 21 名（男子 5 名、女子 16 名）の授業である。

クラスの雰囲気としては、明るく活発であり発問に対する回答も積極的な生徒が多い。海外経験者は少なく、外国に対して興味は持っていても、国際関係に関しては知らない生徒がほとんどである。

（3）指導観

本校の教育目標は、「食と生活及び環境学習を中心に、情報化・国際化・少子高齢化社会に対応しうる専門的技術と科学的精神を培い、地域に貢献できる豊かな情操と徳性を備えた人材を育成する。」である。本単元では、生徒に一人一人に「国際社会の一員である自覚」を持たせ、「持続可能な社会づくり」について、自らの答えを導きださせることをねらいとし、教育目標と関連付けた指導を行いたい。

本単元では、実生活にも密接に結びつくことからグループ学習などによる能動的な学修を積極的に働きかける。また、単元内容が多岐にわたるため、学習内容に系統性を持たせ、知識や考えの変移を

記録するために、一枚ポートフォリオ（以下、OPP）を学びの柱とする。

5 評価基準

観点	関心・意欲・態度	思考・判断・表現	技能	知識・理解
評価規準	食のグローバリゼーションに対して関心を高め、問題解決に臨むことができる。	相手の話に傾聴し、自分の意見を伝え、建設的に話し合いをすることができる。	自らの考えを言葉や図式にまとめ、グループまたは、クラス内で発表することができる。	持続可能な社会づくりのために必要な事柄について理解を深める。
評価方法	ワークシート OPP	グループ学習	グループ学習 OPP	ワークシート OPP

6 単元の構成

時限	小単元名	学習のねらい	授業内容
1	世界の食卓	・日本と他国の食文化の違いを知る。	・グループごとに、写真から気づく食文化を発表する。 ・グループ学習（フォトランゲージ）
2	食料自給率とフードマイレージ	・食料自給率の意味するものに気づく。 ・フードマイレージについての理解を深める。	・自身の食事の食料自給率を調べる。（「けいさん！こくさん」HP） ・食料自給率の低数値が招く、フードマイレージ問題を扱う。
3	コーヒーの消費と生産	・コーヒーの消費と生産について南北問題に触れながら理解する。	・コーヒーにまつわるクイズを通して、南北問題について理解する。 ・生産者・企業・消費者のロールプレイを通して、サステイナビリティの重要性を学ぶ。 ・グループ学習（ロールプレイ）
4	ザンビアと日本、食品比べ	・ザンビアについて知る。 ・ザンビアと日本の食品の違いから、両国の食品の特徴に気づく。	・ザンビアと日本の食品の違いから、両国の食品事情について理解する。 ・グループ学習（ジグソー法）
5	ザンビアにおける日本の国際協力	・ザンビアに対する日本の国際協力の意義について	・ザンビアの抱える問題、それに対する日本の国際協力のアプ

		考える。	ローチや様子を実際の事例を見ながら学ぶ。 ・グループ学習（ランキング）
6	私たちにできること	・より良い食文化を持続させるために、未来の理想図をまとめる。	・今のまま進むと想定できる未来と自分が考える理想の未来を比較して、自らの考えを言葉や図式にまとめる。

7 授業事例の紹介

小単元名【ザンビアにおける日本の国際協力】

（1） 指導案

（ア）実施日時 12 月 21 日（月）第２限

（イ）実施会場 多目的室

（ウ）本時の目標 世界にある国の一例としてザンビアについて知り、ザンビアが抱える問題とそれに対する日本の国際協力の現状について理解する。

（エ）指導のポイント

・グループ学習を通して、能動的な学修を働きかける。
・教師の体験談を交えて語り、外国への興味関心を高めさせる。
・ザンビアの発展に対して、遠くの外国である日本が行っている国際協力の意義を考えさせる。

（オ）本時の展開

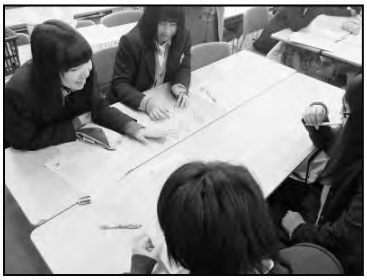
過程・時間	指導内容	学習活動	指導形態	指導上の留意点	評価（評価規準・評価方法）
導入 0	・既習内容及び目標確認	・本時の目標及び学習内容について説明を聞く。	一斉	・本時の目標をしっかり傾聴させる。	・教室や机上のレディネスが整っている。
展開 5	スライドを用いて、ザンビアで活躍する人物を紹介する。	・ザンビアで国際協力に携わる日本人について知る。		・ワークシートと連動させて、見る、考える、書く時間を分ける。	・積極的に授業に参加している。【A】
15	個人の意見をワークシートにまとめさせる。	・国際協力の必要性について、重要度と理由について個人で考える。		・グループ学習の前に、個人としての意見を整理させる。	
20	グループで個人の意見を共有させ、学び合いをさせる。	・国際協力の必要性について、ダイヤモンド型ランキングシートを用いて、グループで考える。	グループ学習	・全員が話し合いに参加するように支援する。 ・ランキングに正解はないことを伝える。	・学び合いができている。【B】

30	グループの意見を発表させる。	・グループで考えたランキングを発表する。		・他者の意見に傾聴させる。	・傾聴できている【B】
40	スライドを用いて、ザンビアで活躍する人物を紹介する。	・JICA とその国際協力の手法について紹介する。	一斉	・先に紹介した日本人は皆、JICAのもとに活動をしていることを伝える。 ・ODAとJICAの関連について理解させる。	
まとめ 45	授業の取りまとめをする。	・OPP に本時の一番大事なことを記入する。 ・次時の予告。		・出来上がった OPP を提出させる。	

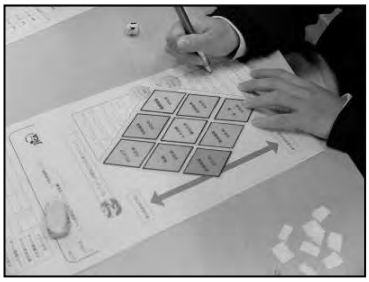
A:興味・関心・意欲　B:思考・判断・表現　C:技能　D:知識・理解

【授業の様子】

国際協力に携わる人々を紹介



グループで意見の共有



ランキングの作成

書画カメラを用いて発表

JICA の取組について紹介

OPP に気づきを記入

（2）授業の振り返り

［良かった点］

・生徒がザンビアの抱える諸課題に対して、高い関心と当事者意識を持って考える姿が見られた。

・重要度のランキングをつける際に、一番重要度の高いものは各班に違いがみられ、考え方に多様性が生まれた。

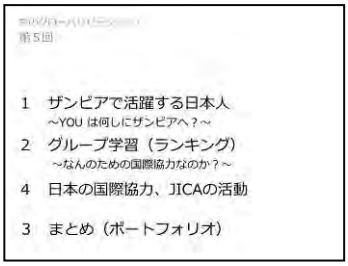
・納税後の税金の一部が ODA になり、JICA の国際協力という形で平和構築に貢献しているという流れを生徒の認識が持てた。

［反省点／改善点］

・「何のための国際協力なのか」というランキングの設問に対して、重要度の高いものには違いがあったが、重要度の低いものに選んだものがいずれの班も「日本のため」となった。日本の国際協力が、周りに回って、「日本のため」につながるような補足説明や、説明スライドを作成が改善点として考える。

（3）使用教材

・スライド抜粋



本時の流れ

何をしている人でしょう？
＜フォトランゲージ＞

関連するキーワードの説明

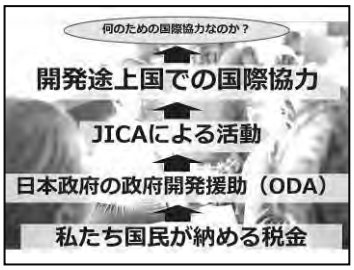
国際協力内容を写真で説明

発問「国際協力の必要性」

紹介した人物は JICA 関係者

JICA の説明

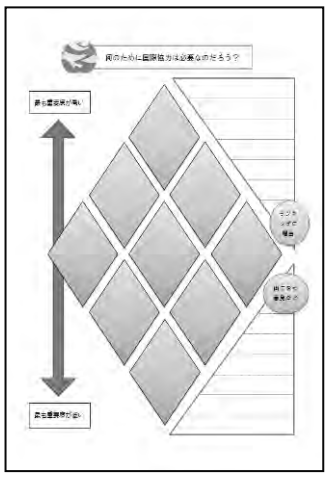
JICA の取り組みについて



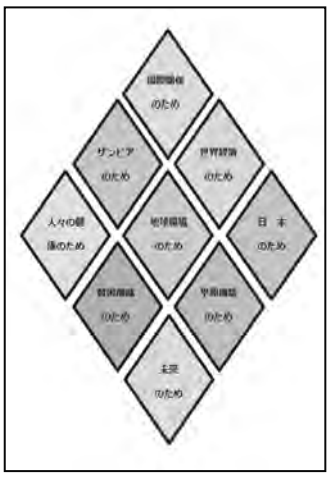
ODA と JICA の関連性

・プリント等

ワークシート
＜個人で1枚＞



ランキングシート
＜グループで1枚＞



ランキングカード
＜切って配布＞

（4）参考資料等

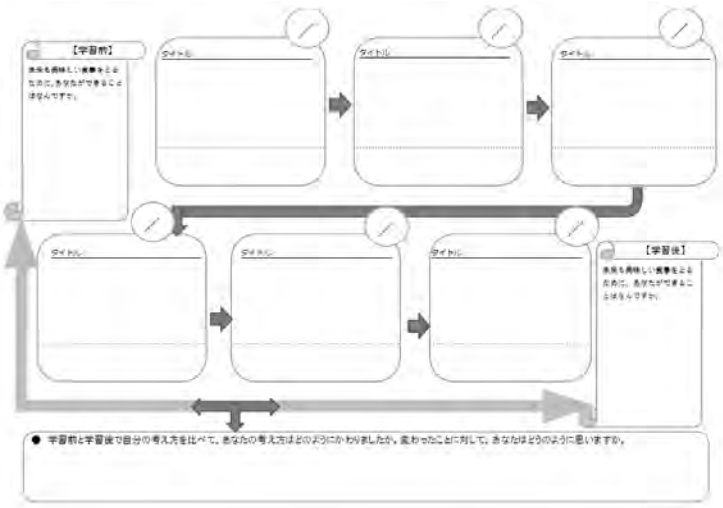
・JICA PROFILE （独立行政法人　国際協力機構／平成 27 年4月）

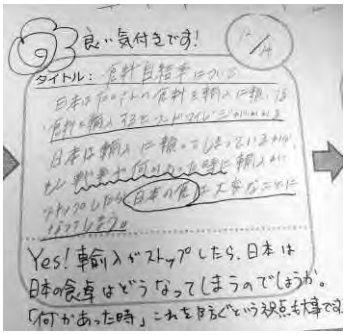
・JICA の仕事 （独立行政法人 国際協力機構 広報室／平成 26 年4月）

・開発教育・国際理解教育ハンドブック ＜アクセス日：平成 27 年 12 月 28 日＞
（http://www.mofa.go.jp/mofaj/gaiko/oda/edu/kyouzai/handbook/html）

8 単元をとおした生徒の反応/変化

・本単元の１枚ポートフォリオ（OPP）





毎時、授業のまとめ時に、授業のタイトルと授業時に気づいたことを記入させた。

（問）未来も美味しい食事をとるために、あなたができることは何ですか。（以下、回答一部抜粋）

＜学習前＞　たくさんお金を稼ぐ。健康でいる。　／　食べ残しを失くす。伝統料理を受け継ぐ。

＜学習後＞　国際協力をして世界を豊かにする。／　食品はサステイナブル認証のものを買う。

・「日本は何のために国際協力をやっているのか、友達それぞれの考え方が違って面白かったです。実際にザンビアに行って仕事をしている人に比べたら何もしてないけれど、私たちが納めている税金が役立っていると考えたら嬉しくなりました。未来の食事のためにできることは、私個人だけでなく世界をよりよく変えなければいけないという必要性に気づきました。」

9 授業実践全体の成果と課題及び課題の改善策

（1）国際協力の在り方や必要性を取り扱う授業プランについて

派遣前は、ザンビアの食品と日本の食品を比べることから経済や国際協力などに触れ国際理解教育を中心とした授業の展開を考えており、できるだけ多くの食品を購入をと考えていた。しかし、研修は多岐にわたり、なるべく多くのことを授業に還元したいと思った。そのため、予定していた単元を「外国の食品」から「食のグローバリゼーション」に広げ、科目は農業科「課題研究」で取り扱うことにした。教材はザンビアで得たものだけでなく、開発教育協会発刊の教材も使用・参考にすることで、学習の展開を行った。扱う内容の幅広さから、授業に一貫性を持たせるために、OPP を使用したことは、生徒の考え方の変容等を知る機会としても非常に役立った。

（2）成果と課題（CHECK）

はじめの発問やアンケートを見返すと、複数の生徒において海外に対する興味関心や知識は低いものだった。学習を進めるにつれ、外国の食卓や、フードマイレージ、サステイナブル認証、ザンビアの食品、国際協力の現状と触れていき、生徒一人一人の考え方にさまざまな変容を、発言やプリントみると実感できた。授業実践全体を振り返ると「課題研究」という科目の特性上、実験・実習によって知的探求を課すような単元も設定すべきだったように思う。

（3）課題の改善策（ACTION）

「食のグローバリゼーション」は国際協力の重要性だけでなく、世界の多様性を学ぶ単元でもある。食を科学する系列では、座学だけでなく実習科目で技術の指導を行っている。そのため、①生徒に諸外国（アフリカ中心）の食品、料理を調べさせ、実際に実習で試作、試食を行う。または、②外国籍のレストランのシェフを社会人講師として招き、製造・調理実習をする。今後①や②を検討し、目標に掲げた多文化共生の素養の育成を、実習を通して身に着けさせる学習機会としていきたい。

10 教師海外研修に参加して

授業実践時の生徒の感想の中で「同じ日本人として、嬉しいし誇らしい」という文があった。このことは教師海外研修中私も見学サイトをまわる中で、強く感じたことである。そのことを、授業を受けた生徒が同じように感じてくれたことが私にとって一番の成果であるように感じる。競争だけでないグローバル化を、今後も生徒に伝えるとともに、私ができる「国際協力」を考えて行動に移していきたい。

学校名：埼玉県立伊奈学園総合高等学校

氏名：箱田　恵梨香

［担当教科：国語］

- 実践教科等：国語表現
- 時間数　　：6時間
- 対象生徒　：高校3年生
- 対象人数　：25 人

1　単元名

国際協力について考える

2　単元の目標

・課題解決をするために、異なる立場の意見も尊重しながら積極的に話し合いに参加する。
【進んで参加する態度】【他者と協力する態度】
・自分と他者のもつ情報を統合・精選し、さまざまな視点で思考する力を身につける。
【多面的、総合的に考える力】
・自分の考えを伝えるために効果的な言葉を用い、伝え合う力を高める。【コミュニケーションを行う力】
・開発途上国の諸課題にはさまざまな要因が複雑に絡み合っていることや、途上国と日本が相互依存の関係であることを理解する。【つながりを尊重する態度】
・与えられた情報をもとに、今後の国際協力のありかたとともに自分にできることを検討する。
【未来を予測して計画を立てる力】

3　ESD（持続可能な社会づくり）の視点

多様性	相互性	有限性	公平性	連携性	責任性

・ひとつの課題に対して、さまざまな立場の人々の意見があることを知る。【多様性】
・国際化が進む現代社会においては、開発途上国の問題も日本とつながりがあることを理解する。【相互性】
・世界の富の不平等な分配に気づく。【公平性】
・課題解決のためには、自分だけなく異なる立場の他者とも連携し、対等な立場を構築していくことが必要であることを理解する。【連携性】
・自らの役割を見つけ、自覚し、責任を持って意見を述べる。【責任性】

4　単元の指導について

（1）教材観

1学期の学習は「効果的に書く」ことを主眼に置き、自己紹介文・要約文（「疑似科学」）・小論文（「高齢化社会」「災害ボランティア」「英語教育」「高等学校における部活動のあり方」）・志望理由書の作成とその相互評価などを行った。2 学期は 1 学期の書く経験をもとに「効果的に話す」ことを主とし、これまでにブックトーク（テーマを決めて複数の本を紹介すること）・資料を用いたディベートを行った。生徒は発表や話し合い活動の中で、その場に相応しい言葉を用いて自分の意見を的確に伝えようとしていた。2 学期当初のアンケートでは、今後取り上げてほしいテーマとして「東京オリンピック」・「死刑廃止の是非」・「選挙権引き下げについて」「安保条約」「国際化」などがあげられたので、「死刑廃止の是非」・「選挙権引き下げについて」についてはディベートの論題とし、「国際化」を単元として取り上げた。余談として、ザンビアが前回の東京オリンピックの開催中に独立したことは授業でふれたい点ではある。

これまでの学習をふまえ、当単元では適切な言葉を用いて他者と合意形成を目指すこととした。貿易ゲーム、「1 枚の看板」、ジグソー法はいずれも他者との関わりが不可欠な学習形態である。相手の立場を尊重し異なる意見に耳を傾ける必要がある。妥協せず自分の意見も十分に伝えなくてはならないので、これまでの活動より最も難易度の高いものになり、既習範囲のまとめの位置づけとなる。

以上の観点より学習指導要領の国語表現の目標である「国語で（1）適切かつ効果的に表現する能力を育成し、（2）伝え合う力を高めるとともに、（3）思考力や想像力を伸ばし、言語感覚を磨き、進んで表現することによって国語の向上や社会生活の充実を図る態度を育てる」の（1）～（3）の能力の育成をしていく。

（2）生徒観

該当講座は異なる HR の生徒が混在し、学期当初は生徒同士もほぼ初対面であった。4 月当初のアンケートでは、国語表現を履修した理由について 1 番多かったものが「人前で意見を述べたり、話したりすることが苦手だから」、次いで「文章（小論文）の書き方を学びたいから」であった。多くの生徒は立場の異なる人との話し合いや、あらたまった場での発表に苦手意識を感じているようであった。対照的に積極的に意見を述べたり、文章を書くことが得意で好きだという生徒も2～3名いる。

学習へは多くの生徒が意欲的に取り組むことができる。一方で成果をいそぐあまりに物事を短絡的に考えがちなところも見受けられる。

〈事前アンケート結果〉

問　日本と「開発途上国」において、つながりを感じる事柄があれば自由に書いてください。

・日本企業（工場など）が途上国に進出している。・南アフリカなどへの技術伝達。・貧しい国や地域に日本企業の工場を作ってしまい、現地の人に働かせるイメージ。・日本の中古の電車車両を使っているところをテレビで見た。等

問　日本は開発途上国を積極的に援助すべきだと思いますか。

ア　積極的に援助すべき

・援助をした国が将来大きくなったら日本に利益がある。・世界をひとつの国と考えた時、同じ人（人間）なのに生活の水準が違うのはおかしいと思う。・日本は財政的に厳しいと思うが、援助は金銭だけではないと思うから、できる範囲の支援を送る、貸すというのがいいと思います。・もともと資源がなかったりと国同士で不平等な面があり、その国の努力だけでは豊かな国と差が出るし、同じ人間としてできるだけ多くの人々が豊かに暮らせたら良いと思うから。・日本が技術をもっているから、その国の環境や需要にあわせて援助するべきなのかなと思いました。・災害時に援助されているので、相手が苦しんでいるならば援助すべきである。しかし、日本は国家の赤字が是正されないので、自分の首をしめない程度に、ということは念頭に置く必要があると思う。

イ　特に積極的にやらなくてもよい

・日本も現在大きな借金を抱えているし、貧困で苦しんでいる人も多くいるので、他のところに力を貸している場合ではないから。・（理由なし）

ウ　分からない

・発展するか未知だから。・具体的な援助の方法がわからない。・自分の国の現状を無視してまでやる必要はなさそう。・発展途上ということは見返りは豊富に見込める可能性が高いが、それを貧しい国の援助に充てることも考慮すべきだと思う。外交と国富に関するジレンマがあると思う。・援助したことによるトラブルはなかったのか。

（3）指導観

あくまで国語科の授業であるので、国際協力の現場を「知る」ことが最終的な目標ではないことに留意し、内容説明は最低限に抑えたい。どのような結論が出たかよりも、どのように結論を導きだしたか、その過程に着目したい。

5　評価基準

観点	関心・意欲・態度	思考・判断・・表現	技能	知識・理解
評価規準	自分の考えを適切な言葉で表現しようとしている。	相手の考えや異なる考えを尊重し、自分の考えを深める。自分の考えをまとめ、適切な言葉で表現できる。	これまでの学習事項をふまえ、相手に分かりやすく伝わるように工夫ができる。	様々な考え方ができる事柄について、主張が伝わるように、情報を活用し、論理の構成を工夫できる。
評価方法	・机間支援における観察 ・プリント ・発表	・机間支援における観察 ・プリント ・発表	・机間支援における観察 ・プリント ・発表	・プリント ・発表 ・ペーパーテスト

６ 単元の構成

時限	小単元名	学習のねらい	授業内容
1 ・ 2	経済の自由化から見える国の格差	適切な言葉を通じて、他者と関わり合う。 ゲーム中に発生した出来事について考察し、現代社会での貿易における諸問題を考察する。 ゲームを通じて考えたことを発表しあい、自分の考えを深める。	「貿易ゲーム」を用いて世界の貿易を疑似体験することにより、自由貿易や経済のグローバル化によって発生する諸問題について考える。
3 (40 分)	発展途上国とは	発展途上国の現状を知る。 日本は途上国に支援すべきかを考える。 相互依存率のデータをもとに、言葉遣いなどを工夫して自分に意見を述べる。	発展途上国と日本との相互依存の現状を知る。日本が 2011 年に世界最大の被援助国であったこと、その背景にはこれまでの日本の多方面への援助が評価されていることを踏まえ、日本は途上国に積極的に支援すべきかどうかを考える。
4 (40 分)	望ましい国際協力のあり方１	多角的な点からみた援助のあり方を探る。	『援助する前に考えよう』より「１枚の看板」のアレンジ版を使って、望ましい援助のあり方を考える。
5 ・ 6	望ましい国際協力のあり方２	JICA の国際協力のあり方を考察する 無償資金協力のメリット、有償資金協力のメリットを考察する。 自分の身のまわりでできる国際協力のあり方を考える。	知識構成型ジグソー法を用いる。 A 無償資金協力の長所・短所 B 技術協力の長所・短所 C 有償資金協力（円借款）の長所・短所 ②班替えをし、１つの班に A～C の課題を行った生徒が少なくとも１名は入るようにする。 ジグソー活動では、「ザンビアの教育の質を向上させる」をもとにA～Cの意見を精選・融合し優先順位をつけさせ、自分の考えを深める。

※1・3・5時限は授業の冒頭に漢字小テスト、新聞記事要約を実施している。

７ 授業事例の紹介

小単元名【日本の国際協力のあり方を考えよう】

（1） 指導案

（ア）実施日時 11 月 25 日（水）第 6 限

（イ）実施会場 6J教室（第 6 ハウス 2 階）

（ウ）本時の目標

班別学習を通して、国際協力のあり方への理解を深め、よりよい援助の方法を考える。

（エ）指導のポイント

・各援助の種類について、その長短所を授業者が説明するのではなく、生徒同士の班活動の中から気づきを得させる。

・班ごとの進行状況を観察し、より深い思考に結びつくよう適宜支援をする。

（オ）本時の展開

過程・時間	指導内容	学習活動	指導上の留意点	評価（評価規準・評価方法）
5	前時の内容を振り返させる。	自分の班でどのような意見が出たか、隣席の生徒と共有をする。	前回の生徒の意見を、スライドに映す。	
10	日本の支援のあり方	ODA、JICA、JICAの実施している3種類の援助（有償資金協力・無償資金協力・技術協力）の概要を知る。	スライドを使って説明する。社会の授業で既習の四職などは生徒に尋ねる。できるだけ速やかに移動するように適宜声をかける。	
5	ジグソー法実施のための班づくり①	トランプを引き、引いた数の班へ座席を移動し、4人×6班になる。じゃんけんで勝った生徒から時計回りに30秒間で自己紹介をする。		班員と時間に気をつけながら、話ができているか。
20	ジグソー法①（エキスパート活動）	A～Cの課題のうち、無作為に与えられた1種類について班毎に考察する。 A有償資金協力の長短所 B技術協力の長短所 C無償資金協力の長短所	理由・根拠を明確にするように声をかける。適切な言葉で意見を伸べるよう注意を促す。	班の活動に積極的に参加しようとしているか。考えたことを適切な言葉で表現できているか。
		トランプを引き、引いた数の班へ座席を移動し、3人×8班になる。	できるだけ速やかに移動するように適宜声をかける。	
3	ジグソー法実施のための班作り②	A～Cの順に、自己紹介とエキスパート活動の報告をする。	聞き手がメモを取りやすいように注意を促す。	分かりやすい言葉で表現できているか。
7	エキスパート活動の報告			
	1時限目終了	授業者の話とプリントによって、ザンビアの基本的な情報を得る。	新しい課題を配布する。5分経過しても報告をしている班には、問いにとりかかるよう促す。机間を周りながら、適宜声をかける。	自分の班の報告について、場に応じた言葉遣いをし、分かりやすく話そうと工夫しているか。
	2時限目開始			
3	ザンビアの概要説明	A・B・Cが1人ずつ入った班を構成し、前時の各自の活動を踏まえて課題に取り組む。 課題「ザンビアの教育の質を向上させるには」		
20	ジグソー法②（ジグソー活動） 3つの援助の特長についての理解	他の班の発表を聞いて考えを深める。	各班の発表の要約を板書する。 班の発表でタイド付援助の案が出た場合は、取り上げて解説をする。	
10	各班の発表	援助の実際を知る。	スライドを使って説明する。	プリント
10	ザンビアでのJICAの支援内容	国際協力のあり方について自分の意見をまとめる。	事前アンケートとの関連性を持たせ、授業前後での生徒の変化を測ることができるようにする。	
7	今後のよりよい支援のあり方			

（2）授業の振り返り

［良かった点］

・日本の援助について、関心を持たせることができた。

・途上国との日本との相互依存の関係性を理解させることができた。

・生徒同士のやりとりを通じて、各援助の種類の長短所を考えさせることができた。

［改善点］

・課題「ザンビアの教育の質を向上させるには」の「教育の質」の定義が曖昧で、考えにくいものになってしまった。→明確な定義づけや論点を絞った課題への変更が必要。
・途上国の人々についての情報が不足しており、教師の授業能力の低下の要因を深く考察させることができなかった。→途上国の人々のおかれている状況を、説明することが必要。
・ザンビアの教育の現状と課題の説明において、授業者が「教員の質の低下も大きな問題」と説明をしたことで、生徒の多くが「教師の質を上げるために」直接的な援助ばかりを選ぶ結果になった。
→課題に取りかかる前に、途上国の生活の状況を具体的に喚起させることが必要。

（3）使用教材
・『貿易ゲーム』
・『援助する前に考えよう』

（4）参考資料等
・『読売新聞』2015.11.17、朝刊「新興国の発展　G20 課題　貧困とテロ　負の連鎖」
・『世界と恋するおしごと―国際協力のトビラ』山本敏晴、小学館、(2006)
・『援助する前に考えよう』斉藤聖　編、開発教育協会(2006)
・『高校生のための国際協力入門』秋田市立秋田商業高等学校ビジネス実践国際協力課、アルテ(2008)
・『国際協力　新版―その新しい潮流（有斐閣選書)』下村　恭民他、有斐閣(2009)
・『高校生のためのアフリカ理解入門』(秋田市立秋田商業高等学校ビジネス実践国際協力課、アルテ(2010)
・『世界で一番いのちの短い国―シエラレオネの国境なき医師団（小学館文庫)』山本敏晴、小学館、(2012)
・『「国際協力」をやってみませんか？』山本敏晴、小学館、(2012)
・『開発教育実践ハンドブック』西あい　編、開発教育協会(2012)
・『国際理解教育実践資料集』埼玉県総合教育センター　監、廣済堂(2013)
・『ODA（国際援助）白書　2014 年度版』外務省、(2014)
・『ワークショップ版　世界がもし 100 人の村だったら　第４版』(2014)
・『新貿易ゲーム』開発教育協会（2014)
・『若者と学ぶ ESD 教育』田中治彦　編、開発教育協会(2014)
・『貧困を救うテクノロジー』イアン・スマイリー、イースト・プレス、(2015)
・JICA/「ODA が見える。分かる」＜http://www.jica.go.jp/oda/index.html＞(2015.11.10)
・外務省/「国別・地域別政策情報」＜http://www.mofa.go.jp/mofaj/gaiko/oda/region/index.html＞(2015.11.10)
・外務省/「ODA ちょっといい話＜http://www.mofa.go.jp/mofaj/gaiko/oda/region/index.html＞(2015.11.10)
・ザンビア日本国大使館/「ザンビア日本国大使館」＜http://www.zm.emb-japan.go.jp/ja/yomoyama/2012.10.02.htm＞(2015.11.10)

8　単元をとおした生徒の反応/変化
授業後のアンケートより一部抜粋
問、授業を通しての感想を書いてください。
・社会科目の授業で「情報」として覚えたりすることはあっても、「感覚」や「当事者」として向き合うことはなかったので身になりました。・自分の考えや思っていることを適切な言葉で表現することは難しいと思った。1つの視点にこだわらず、様々な角度から考えることの大切さを学ぶことができた。・国際協力

は積極的にすべきだと漠然と考えていたけれど、授業を通してデメリットも多くあるのだということに気がついた。・一見善意であるものでも、深く読み解くとアラがでてきたりするという点で、相手が何を求めているかを推し量る必要があるか分かりました。・その地域にあった方法があるから、日本にとって良いことではなくて、支援を受ける国にとっての良いことをするべきだと改めて思いました。特にザンビアの問題では、とても現実的であったこともあり、「どうにかして良くしてあげなきゃ」と無い知識を振り絞り考えました。それと同時に、自分が今どれだけ恵まれた環境にいるかを痛感しました。・ザンビアの教育の質の向上では様々な援助方法を学び、様々な視点から考えることができた。ただ、1つの援助方法を選ぶと、そのデメリットをどうカバーしたらいいか分からず、なかなか決められなかった。

問　あらためて日本は開発途上国を積極的に援助すべきだと思いますか。

ア　積極的に援助すべき

・日本は不況かもしれないけれど、生活レベルは世界でみるといい方であるから。・将来的にはお互いに助け合うことができる関係になるかもしれないから。・以前は何も知識が無かったので、「わからない」にしていたけれど、援助をした国が日本が震災などで大変な時、自分たちも大変なのに募金をしてくれたという話を聞き、心が温かくなったとともに、少しでも他の国のお手伝いができたらと思たから。

・日本国内の問題も大切だが、助けてもらうこともたくさんあるから。・日本はお金を払えば何でも手に入る国だけど、開発途上国はお金を払っても十分な食べ物や水道・電気が手に入らないから、助けてあげるべき。・開発途上国は自国が貧しいにも関わらず、東日本大震災の際は募金などをして助けてくれたから、お互いに協力すべきだと思った。・教育水準があがり、国が発展すれば貿易のパートナーになれるかもしれないから

イ　特に積極的にやらなくてもよい

・頼まれたらやる、でよい。・積極的すぎない、ほどよい位に。

ウ　分からない

・困っている国があれば、支援すべきと思っていたけれど、日本の政治にも影響が出る可能性があるので、援助のしかたをよく考えるべきだと思う。・この授業を通して、日本側にメリットもデメリットもあることが分かったので。・自分の国の問題もあるかもしれないが、今回の授業で勉強したくてもできない人がいたり、物がないなど、自分達の何倍も大変な思いをしている人達を日本だけに限らず、色んな国でともに助けるべきだと思う。・良いこともあったし、そうでないこともあった。一概には言えないけれど、「援助すべき」寄りの「分からない」

問　なぜ JICA は「国際援助機構」ではなく、「国際協力機構」なのだと思いますか。

・「協力」という言葉から、あくまで関係は対等であることを示しているから。「援助」だと常に上下関係が生まれ、いつまでも自立できない印象があるから。・一方的で不必要な助けではなく、途上国の自主性やニーズに合わせて活動を、力を合わせて達成することが真の救いになると思うから。

9　授業実践全体の成果と課題及び課題の改善策

[成果]

・物事を多角的な視点から考えるためのきっかけを作ることができた。
・一つの課題に対して、他者の意見もふまえて合意形成に至る過程を経験させることができた。
・議論をする中で、自分意見を分かりやすく説明しようと工夫させることができた。
・途上国とのつながりを知る機会を作ることができた。
・限られた情報から、望ましい国際協力について自分の意見を述べることができた。

[課題および改善策]

・考えるにとどまった感がある。授業後に行動できているかを考えると、難しい。理解、思考、行動の「行動」ができるよう教科の枠を越えて他の授業と連携を取りながら進めたい。

10　教師海外研修に参加して

これまで個人的に海外ボランティアに参加してきたが、そういったツアーでは立ち入れない場所に足を踏み入れることができた貴重な機会であった。一番の成果はザンビアという縁遠いと思っていた国に、日本が多くの援助をしていたことを目で確かめることができたことである。一方的な「援助」ではなく win―win の関係にある「協力」のあり方や現地で働く方々の姿には、自分自身心打たれるものがあった。研修中の毎日の振り返りでは経験豊かな他校の先生方を意見を交わすことができ、自分の考えを深めることができたのも大きな収穫である。今後ますます国際理解・開発教育の普及が重要になってくる。国語科教員としてその一翼になれるよう、日々挑戦していきたい。

学校名：自由の森学園中学・高等学校

氏名： 松村美緒

[担当教科： 英語科]

- 実践教科等： 英語科
- 時間数 ： 4時間
- 対象生徒 ： 高校2年生
- 対象人数 ： 55 人

1 単元名

英語で世界に出会う

2 単元目標 （ESD の能力・態度）

①ザンビアの歴史や人々の暮らしについて知り、自分たちとは異なる環境で暮らしている人々やその文化を理解しようとする姿勢を育む。【多面的総合的に考える力】

②ザンビアの水事情から自分たちの生活に立ち返り、今まで当たり前と思っていたことはそうでないことに気付く。【批判的に考える力】

③ザンビアと日本の様々なつながりやJICAの取組を知り、日本と世界のつながりについて考える。【つながりを尊重する態度】

④ザンビアの子どもたちの大切なものを知り、同時に自分の大切なものを英語で表現することで、自己を見つめる 【コミュニケーションを行う力】

3 ESD（持続可能な社会づくり）の視点

多様性	相互性	有限性	公平性	連携性	責任性

・ザンビア共和国の歴史や人々の暮らしから世界には様々な文化があることを知り、世界への興味・関心を高める。【多様性】

・ザンビアの子どもたちの大切なものを読み解くことで、住んでいる環境が異なったとしても自分たちに通じるものがあることに気付く。【相互性】

・JICA のザンビアでの取組や日本が被支援国だったことから、日本と世界とのつながりについて考える。【連携性】

4 単元の指導について

（1）教材観

本単元では、授業者の体験やザンビアの人々のことばを理解しやすい英文に書き直し、それらを音読活動や内容読解を通して学習していく。それは授業者自身が、本学園の英語科が大切にしている英語において自分のことばで表現することに取り組み、それをもとに生徒が英語を通して世界に出会うことをねらいとしているからだ。生徒の興味・関心を引き出すために、授業者が現地で撮影した写真や購入したものを教材として効果的に活用していく。

（2）生徒観

本学園では各教科の切り口で「なぜ」という問いを生徒に投げかけ、共に考える時間を大切にしている。そうした問いに自分自身が向き合い、自分とは異なる考え方を持ったクラスメイトと意見を交わしながら、自分の考えをつくっていくことを重要視している。日常の授業の中で生徒から授業者やクラスメイトに様々な疑問を投げかけることが多くあり、そうしたことから今の社会で起きていることについても同様に興味・関心を持つ生徒たちも多くいる。

（3）指導観

ザンビアという国を歴史、文化、人々の暮らしや考え方などを様々な切り口から見ていくことで、世界には多様な人々の暮らしや生き方があることに気付くことをねらいとする。そうした気付きや新たな視点は生徒たちの何気ない日常や自分が当たり前と思っていたことを改めて見直すきっかけとなる。そして、最終的には自分の大切なものは何か考え、英語で表現していくことで自分を見つめていく。また、授業を展開するにあたって、ザンビアの歴史や文化など大きな切り口から入り、最終的には自分の価値観を見直すことが Think Globally, Act locally につながると考えている。また、以上の内容を英文を読み解くことで理解し、英語を通して世界とつながることもねらいとする。

５　評価基準

観点	コミュニケーションへの関心・意欲・態度	外国語表現の能力	外国語の理解能力	言語・文化についての知識・理解
評価規準	音読活動に積極的に参加しているか。また新出単語であっても前後の文の内容から予想し、理解しようとしているか。	自分にとって大切なものは何か考え、自己を見つめながら、英語で表現できたか。	ザンビアの人々の暮らしや考えについて英語を聞くこと、読むことを通して理解しているか。	異なる文化や人々の暮らしに対して興味を示し、JICA の活動などから日本と世界とのつながりを理解出来たか。
評価方法	授業中の発言・学習の様子・プリントへの取り組み状況			

6 単元の構成 ※太枠の授業内容詳細を 「7授業事例の紹介に記載」

時限	小単元名	学習のねらい	授業内容
1 (40 分)	ザンビアってどんな国？	・世界への興味・関心を高める。 ・日本とザンビアのつながりを紹介し、日本と関わりのある国であることを知る。	①ザンビアクイズ ②日本とのつながり ③ザンビアの文化（衣食）
2/3 (90 分)	英語で世界を読み解こう	・ザンビアの水事情について理解する。 ・JICA の存在や取組を知り、日本も被支援国だったことから世界と日本のつながりを考える。 ・ザンビアの国標である One Zambia One Nation から相互理解を考える。	①ザンビアの水事情 ②安全な水が手に入らないことで生じる問題について ③JICA について ④ザンビアの国標 One Zambia One Nation とは
4 (40 分)	英語で表現しよう～What is the important thing for you? ～	・ザンビアの子どもたちが答えた「大切なもの」から、自分たちと共通するものがあることに気付く。 ・自分が大切なものは何か考えることで自身の価値観を見つめ直す。	①ザンビアの子どもたちが大切にしているものを表した英文を読み解く。 ②自分にとって大切なものを英語で表現する。

7 授業事例の紹介

（1）指導案

（ア）実施日時：12月14日第5,6限（90分間）

（イ）実施会場：高校2年2組

（ウ）本時の目標

①ザンビアの水事情を理解し、安全な水が手に入りにくい人々の生活を想像する。

②JICA の取組を知り、日本がザンビアの人々の生活を陰ながら支えていることを知る。また東日本大震災の時には日本も被支援国であったことから世界とのつながりを考える。

③ザンビアの人々が大切にしている標語 One Zambia One Nation から相互理解を学ぶ。

④上記のことに関する英文を読み解くことで、様々な単語に出会うことで語彙を増やし、音読活動を通して、意味のまとまりにそって発音出来るようになる。

（エ）指導のポイント

新出単語が含まれているため、意味の説明や発音を丁寧に確認する。また、すぐに和英辞書を引かずに、文章の脈絡から意味を想像させることを喚起する。

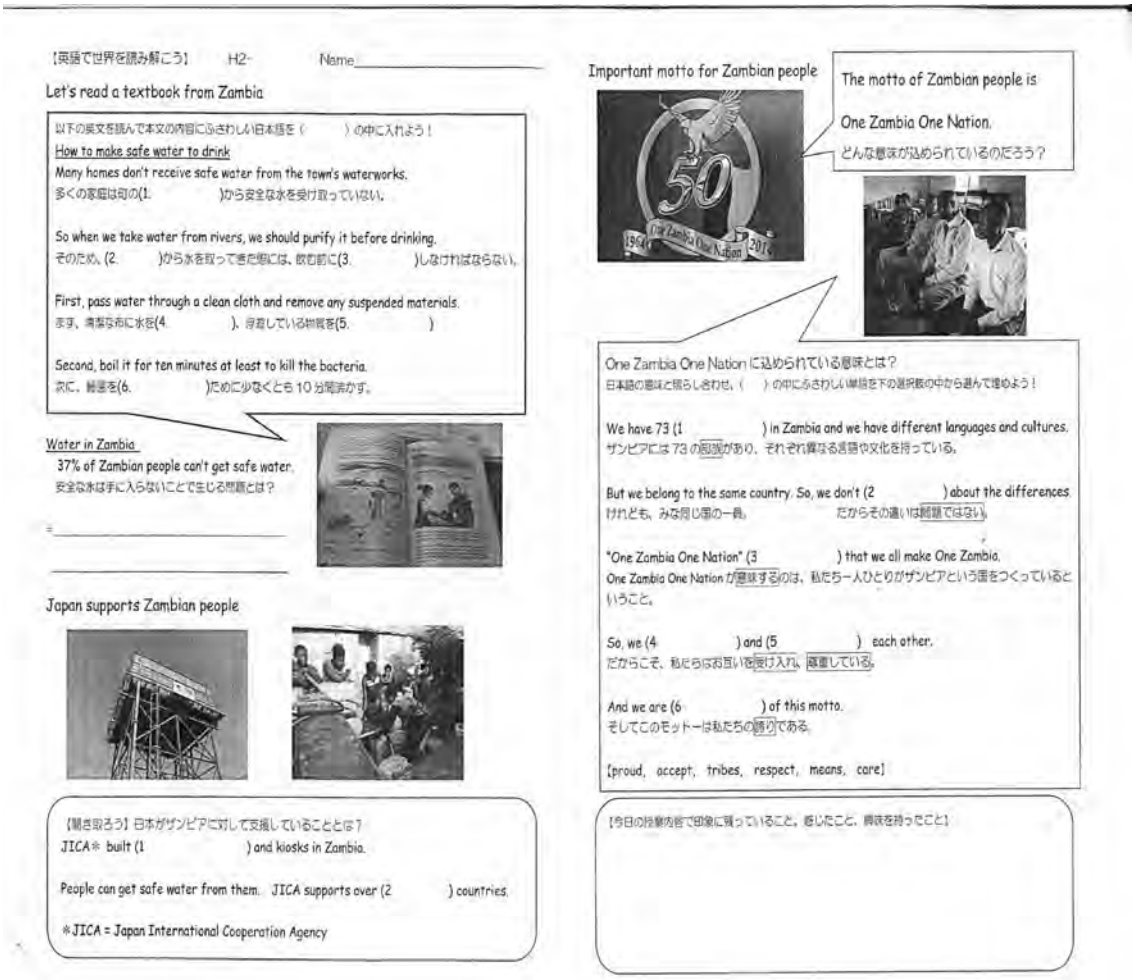
（オ）本時の展開

過程・時間	指導内容	学習活動	指導形態	指導上の留意点	評価（評価規準・評価方法
導入 （5分）	【前回の復習】 ザンビアってどんな国？	ザンビアの基本的な情報を振り返る。	一斉		発言
展開 ①ザンビアの水事情（50分）	【英文読解①】 1 ザンビアの教科書の How to make safe water to drink を読解し、ザンビアの水事情を紹介する。 2 安全な水が入らないことによって生じる問題を考えさせる。 【JICA の紹介】 視察先の給水案件を紹介する。	・本文を音読・読解する・ ・各家庭に水道が整っていないため、川の水を飲料する場合があることを知る。 ・水汲みがいかに重労働かを想像する。 ・2によってどのような問題が生じるか考える。例)感染症にかかる。 ・JICA の取組を知る。 ・東日本大震災発生時は日本も被支援国だったことを知る。	個人 ・ 一斉 一斉	プリントを使用する。 同時に普段自分たちが消費している水の量を想像させる。 写真を提示する。	プリントや音読活動への取り組み 発言
②ザンビアの国標について（30分）	【英文読解②】 ザンビアの国標である One Zamia, One Nation にこめられた想いを英文で読解・音読する。	・本文を音読・読解する。 ・国標の意味を知る。 ・部族や言語、習慣の違いを越えて、ザンビアの人々の心にこの言葉が刻まれていることを知る。	個人 ・ 一斉	写真を提示する。	プリントや音読活動への取り組み
まとめ （5分	【まとめ】 本時の感想を記入。				

(2)授業の振り返り

本時では、ザンビアの人々の暮らしを水という切り口から見ていくことで、生徒たちはそこからザンビアの課題と JICA の取組について理解することが出来た。またザンビアの人々の根底にある大切にしている言葉とそれに込められた意味を英語を通して理解することが出来た。しかし、本時では展開の内容が2つあったため、生徒たちがインプットする内容が多くなってしまった。そのため、それぞれの内容の理解を深める時間が足りなかった。焦点を一つにしぼることで、生徒がインプットした内容から考える時間やその内容をクラスで共有し、議論する時間を設けることが出来たであろう。また、本単元では新出単語も多くあったため、それらをまとめるプリントを単元のまとめとして用意するべきであった。(今回は時間数の関係上、省略。)それを活用することで新しい語彙を振り返りながら、学習内容を振り返ることが可能になるであろう。

(3)使用教材(本時で配布したプリント)



【英語で世界を読み解こう】 H2- Name_____

Let's read a textbook from Zambia

以下の英文を読んで本文の内容にふさわしい日本語を( )の中に入れよう!

How to make safe water to drink

Many homes don't receive safe water from the town's waterworks.
多くの家庭は町の(1.)から安全な水を受け取っていない。

So when we take water from rivers, we should purify it before drinking.
そのため、(2.)から水を取ってきた場には、飲む前に(3.)しなければならない。

First, pass water through a clean cloth and remove any suspended materials.
まず、清潔な布に水を(4.)、浮遊している物質を(5.)

Second, boil it for ten minutes at least to kill the bacteria.
次に、細菌を(6.)ために少なくとも10分間沸かす。

Water in Zambia

37% of Zambian people can't get safe water.
安全な水は手に入らないことで生じる問題とは?

=_____

Japan supports Zambian people

【聞き取ろう】日本がザンビアに対して支援していることは?

JICA* built (1) and kiosks in Zambia.

People can get safe water from them. JICA supports over (2) countries.

*JICA = Japan International Cooperation Agency

Important motto for Zambian people

The motto of Zambian people is

One Zambia One Nation.

どんな意味が込められているのだろう?

One Zambia One Nation に込められている意味とは?

日本語の意味と結びつけて、( )の中にふさわしい単語を下の選択肢の中から選んで埋めよう!

We have 73 (1) in Zambia and we have different languages and cultures.
ザンビアには73の民族があり、それぞれ異なる言語や文化を持っている。

But we belong to the same country. So, we don't (2) about the differences.
けれども、みな同じ国の一員。 だからその違いは問題ではない。

"One Zambia One Nation" (3) that we all make One Zambia.
One Zambia One Nation が意味するのは、私たち一人ひとりがザンビアという国をつくっていること。

So, we (4) and (5) each other.
だからこそ、私たちはお互いを受け入れ、尊重している。

And we are (6) of this motto.
そしてこのモットーは私たちの誇りである。

[proud, accept, tribes, respect, means, care]

【今日の授業内容で印象に残っていること、感じたこと、興味を持ったこと】

(4)参考資料等

『写真絵本 HIV/エイズとともに生きる子どもたち』 山本敏晴 小学館 2005

『水から広がる学び アクティビティ20』 特定非営利活動法人開発教育発行 2014

『世界の水問題』 独立行政法人　国際協力機構　2010 年

8　単元をとおした生徒の反応/変化

【小単元①ザンビアってどんな国？】 の感想

・　ザンビアという国を初めて知った。意外と日本とのつながりがあって驚いた。

・　ザンビアのご飯はすごく美味しそうに見えた。他にどんな食べ物が有名なのか知りたい。

【小単元②英語で世界を読み解こう】 の感想

・私たちは当たり前に安全な水が手に入るからこそ、水が大切なものであるという感覚が薄れている。

・日本も同じようにお互いを認め合えたら、何か変わるかもしれない。

・One Japan One Nation になるためには、私たちに何が必要なんだろう。

・ザンビアの人々の考え方にすごく感動した。モノにあふれた私たちも豊かな考え方だなって思った。

【小単元③英語で表現しよう～What is the important thing for you?】

・家族や友達が大切と感じる気持ちは世界共通なんだ。

・ザンビアの人々に関わらず、大切なものはみんな同じ。

・ザンビアの様々なことを知り、もっとザンビアのことや他のアフリカの国のことも知りたくなった。

9　授業実践全体の成果と課題及び課題の改善策

生徒の感想や授業に取り組む姿勢から、他国の文化や人々の暮らしへの興味・関心が高まり、また様々な「違い」から自分たちの生活や考え方を見つめ直す姿が見受けられたので、単元目標の①②④に関しては達成出来たと言える。しかし、③の「日本と世界のつながりについて考える」ことにおいては、そこまで深めることが出来なかった。また高校生であれば、世界で起きていることに対して自分の出来ることについても考え、英語で表現することも出来たであろう。今後はその点を改善できるような教材づくりと授業実践に励みたい。

10　教師海外派遣研修に参加して

現地で出会った子どもに好きな教科を尋ねると、「英語が好き。こうやってあなたとお話することが出来るから。」と恥ずかしそうに答えてくれた。私が英語を学び始めたのも彼と同じ気持ちがあったことを思い出させてくれた。英語を学ぶということは、世界の人と関わることができ、新しい価値観に出会い、自分の視野を自らの手で広げていくことが可能になること。このことを本研修で改めて感じた。 そして、授業を通して、生徒に改めて伝えたいと思った。そして今回、研修の内容を教材化するにあたって、何を題材にし、焦点をあてるかを定めることに多くの時間を費やした。なぜなら、10 日間という短い時間ではあったが、ザンビアという地で様々なモノ・人・コトとの出会いに恵まれたからである。自分の目で見てきたことや感じたことを生かし、今後授業実践を積み重ねていきたい。

学校名：千葉県立成田国際高等学校

氏名： 富田　明澄

［担当教科：理科（生物）］

- 実践教科等： 国際理解教育
- 時間数　： 4時間
- 対象生徒 ： 高校1年生（国際科）
- 対象人数 ： 41 人×3クラス

1　単元名

「国際協力」について考えてみよう！

2　単元の目標

・他者との話し合いを円滑に行い、多様な考えや価値観を認め合い、多面的に物事を考えられる力を養う。（多面的・総合的に考える力、コミュニケーションを行う力）

・様々な形態の国際協力が補完しながら援助を行う重要性を学び、継続的な国際協力の在り方を考える。（未来像を予測して計画を立てる力）

・国際協力を行う意義や必要性について学び考え、国際化社会の中で互いに助け合い共生する心を養う。（他者と協力する態度、つながりを尊重する態度）

3　ESD（持続可能な社会づくり）の視点

多様性	相互性	有限性	公平性	連携性	責任性

・ザンビアと日本の文化や価値観の違いを知り、尊重し合う大切さを学ぶ。【多様性】

・ザンビアと日本の様々な繋がりを知り、グローバル社会全体における相互性に気付く。【相互性】

・国際協力における相互扶助の関係に気付く。【連携性】

・ザンビアの問題を解決するために、日本や自分が出来ることを主体的に考える。【責任性】

4　単元の指導について

（1）教材観

今年度からSGH（スーパーグローバルハイスクール）に指定された本校では、「グローバル人材の育成」を学校目標の一つに掲げている。それを達成するにあたり、先進国で生きる我が国の生徒には「豊かさ」に溺れて大切なものを見失って欲しくないという願いがあり、「あなたの大切なものは何ですか？」という教材作成に至った。将来、グローバル人材として生きていく生徒達に「豊かになることが一概に良いこととは限らない」という視点を持たせ、多面的に物事を考えられる能力を養うきっかけにしたい。

また、国際協力について上辺の知識に留まりがちな生徒たちに、少し難しくはあるが具体的な援助方法や「PDCA サイクル」に着目しながら具体的に支援計画を考える活動を取り入れることで、国際的思考の強い生徒たちのポテンシャルを引き出したいと考えた。

（2）生徒観

本校は「成田“国際”高校」という名の下、外国語教育や国際理解教育に力を入れており、国際的思考を持つ生徒が多く在籍している。また、毎年多くの国際交流の場が設けられており、成田市内でのボランティアや修学旅行、短期留学等においても海外の歴史や文化に触れる機会が多い。卒業後の進路においても国際社会を学ぶ大学や就職を希望する生徒が多い。しかし、現段階では興味の域を越えず、知識は表面上に留まっている生徒が多いことは否めない。また、素直で明るく元気な生徒が多いが、自主的に考えて行動することを苦手とする生徒が多い。一方、SGHのフィールドワークの一環として、クラスで5名程度が平成 27 年 11 月にJICA地球ひろばを訪れて講義を受けているものもいる。

（3）指導観

グローバル人材の育成の実現のために養いたいと考える資質は、①多面的に物事を捉え、考えることができる。②多様な価値観や考えを認め、尊重し合える心を持っている。③互いに助け合いながら共

生する態度を育成する。の3つである。これらを育むための指導は、本校だけでなく今後の日本を担う全国の生徒たちにとって非常に重要であると考え、各単元にこれらを実現できるテーマを組み込んだ。

また、表面上の知識に留まっている生徒の現状を踏まえると、より具体的で実用的な「国際協力」や「異文化」を学べるような教材開発をする必要があると考えた。

5 評価基準

観点	国際理解や国際教育への関心・意欲・態度	主体的に考え、発信する意欲・態度	効果的にコミュニケーションを行う能力	資料・情報活用の技能
評価規準	・個人や国ごとに異なる価値観を押しつけることなく、多様な価値観や生き方を受け止め、理解して尊重する姿勢を持つことができる。	・自分の意見を自分の言葉で表現することが出来る。 ・国際協力の計画を、主体的かつ多面的に考えながら立てようとしている。	・自分とは異なる他者の意見を理解する姿勢を持ち、建設的に話し合いを行うことができる。 ・自身の意見をわかりやすい言葉で相手に伝えることが出来る。	・ザンビアの写真に関する資料や説明の中から有用な情報を適切に抜き取り、それを咀嚼しながら活用している。
評価方法	ワークシート 話し合いの様子 発言内容	ワークシート 話し合いの様子 発表の様子	ワークシート 話し合いの様子 発言内容	ワークシート 話し合いの様子 発言内容

6 単元の構成

時限	小単元名	学習のねらい	授業内容
1	What is Zambia like?	・サンビアについて知る。 ・日本との繋がりを知る。 ・日本と異なる価値観や文化を知る。	・スライドショーや現地で撮影した写真を用いて、クイズ形式で行う。 ・現地で購入したキャンディーを食べて、日本との食文化の違いも体験する。
2	あなたの大切なものはなんですか？	・自分の価値観とは異なる多様な価値観を知る。 ・他者と価値観を一致させることは非常に難しく、共生するために互いの価値観を受け入れて認め合う姿勢が大切であることを学ぶ。 ・「豊かさ」に溺れて本当に大切なものを見失わないような生き方について考える。	・「Friends」「Family」「Study」「Money」「Freedom」「Fame」「Love」「Dream」の８項目を大切だと思う順にランキングし、理由を併せてワークシートに記入する。 ・グループ内でランキングを決める。但し、多数決ではなく必ず話し合いで決める。 ・ザンビアの生徒に行った、同じ質問に対する答えを提示し、実際に記入してもらったアンケート用紙を各グループに配布し、現地の生徒の価値観を知る。
3	国際協力について考えてみよう！	・【フォトランゲージ】 ザンビアの写真を見て、現地の人々の生活を想像し、ストーリーを作る。 ・日本が行っている支援の種類やその特徴を学ぶ。	・ザンビアで撮影した「教育」「医療」「水」に関する写真を３枚ずつグループに配る。2グループずつ同じテーマの写真でフォトランゲージを行う。 ・自身の持っていた“偏見や差別、固定観念”について知る。 ・国が行う支援について学び、ODA の3種の協力（無償資金協力・有償資金協力・技術協力）の特長を考える。
4		・日本が支援がもたらす、ザンビアの理想の姿を各グループで【ゴール】を設定する。 ・【ゴール】を達成するために、数種ある支援の特長を踏まえて、どの様な支援を用いて、どのような計画で行うと良いか考える。	・ザンビアの実情を資料から読み取り、どの様な支援が必要かを考える。 ・PDCA サイクルについて学び、継続的に支援するにはどのような手段をとれば良いか考える。

7 授業事例の紹介

小単元名【国際協力について考えよう！】

（1） 指導案

（ア）実施日時 12 月 21 日（月）第２限

（イ）実施会場 1年 G 組教室

（ウ）本時の目標

・国際協力の種類や方法、その特徴を学ぶ。

・現地の写真から、生活の様子を学ぶ。また、フォトランゲージにより自身が持つ偏見や差別を認識する。

・PDCAサイクルを学び、持続的な国際協力の方法を自主的に考え、計画する。

・国際協力の必要性や意義を学ぶ。

（エ）指導のポイント

・フォトランゲージや国際協力の計画など、友人や他のグループが考えたものを見たり聞いたりする機会を設けることで、多様な価値観や考えを受け入れて尊重する姿勢を養う。

・可能な限り生徒の活動する時間を増やし、「学び合い」を意識した展開を実施する。

（オ）本時の展開

過程・時間	指導内容	学習活動	指導形態	指導上の留意点	評価（評価規準・評価方法）
導入 5分	国際協力について考えてみよう！①				
	【発問】 「日本にとって、途上国に対する国際協力は必要だと思いますか？」	ワークシートに考えを記入。その後、グループでそれぞれの考えを共有する。	グループ	日本の現状と相手国の現状を踏まえ、素直な気持ちを書くように指示。	ワークシート 活動の様子
展開1 15 分	【フォトランゲージ①】 各グループに3枚ずつ写真を配る。	・写真を見て、気付いた事や気になる事など、付箋に書き込む。	グループ	各クラス6グループで活動。2グループずつ同じテーマの写真を渡す。（テーマは、「水」「教育」「医療」）	活動の様子
		・他のグループの写真と付箋の内容を見て回る。	自由	他のグループに配られたザンビアの写真を見て、現地の様子を学ぶ。 他者の考え方や視点を知る。	回収した付箋
展開2 30 分	【フォトランゲージ②】 3枚の写真全てを繋げてストーリーを作る。	・グループで一つのストーリーを作り、ワークシートに記入する。 ・発表して共有する。 ・写真やワークシート等は終了時に回収して、生徒の活動の様子を確認する。	グループ	必要な情報は、ザンビアの状況を想像して自由に補うよう指示をする。	ワークシート 活動の様子 発表の様子 ワークシート
導入 5分	国際協力について考えてみよう！②				
		回収したワークシートと写真を返却する。		写真の裏にザンビアに関するデータや写真の解説を添付。	

展開 40分	ザンビアの現状を知る。 支援の計画を立てる。	写真の裏にある説明や、ザンビアに関するデータを読み取り、ザンビアの現状を知る。 問題点に着目し、支援を行う「目標」を設定する。 支援の「持続性」の大切さに関連付けて、PDCAサイクルについて学ぶ。 各グループで「PDCAサイクル」に則って支援計画を立てる。 グループ毎に発表し、クラスで共有をする。	グループ	班で話し合いながらザンビアの現状・問題点を炙り出すよう指示。 明確で具体性のある目標設定にするよう指示。 前時で習ったODAの支援のうち、どの方法を使うか等、詳しく計画を立てるよう指示する。	ワークシート ワークシート 活動の様子 発表の様子
まとめ	まとめ	前時の発問「日本にとって、途上国に対する国際協力は必要だと思いますか？」に関して。 国際協力を行う意義や国際協力の在り方・必要性について。 生徒に期待することや、研修に参加しての感想等。		キーワード 「恩返し」、「途上国への支援は日本への支援」、「グローバル＝他国の問題が自国の問題でもある」、「持続性」、「価値観の押しつけはNG」	ワークシート （感想等）

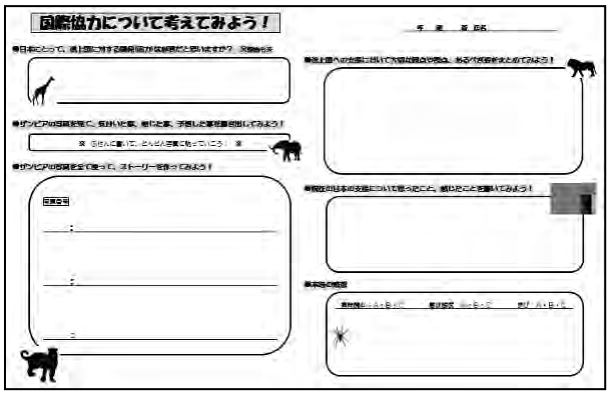
（2）授業の振り返り

現実的な計画を立てられたグループは少なかったが、時間が少ない中、具体性を持った計画が考えられており、既習事項の ODA の支援の種類についてもグループで復習・確認しながらしっかりと計画に盛り込めていた。複数の援助がそれぞれの強みと弱みを補完しながら援助する仕組みを理解して組み込めていたグループも多くあった。また、今まで「国際協力の持続性」という概念に気が付かなかったと多くの生徒が感想を述べていたが、PDCA サイクルを用いることで、改めて持続性を意識して国際協力を考えられるきっかけになった。難易度が高いと懸念した部分もあったが、国際科の生徒にとっては十分に咀嚼できる内容であり、展開方法を工夫すればより高度な内容も吸収できると感じた。

問題点としては、「目標」設定が具体性に欠けていて計画がうまく立てられていないグループも見受けられたので、目標設定の方法やヒントを再検討する必要があると感じた。

（3）使用教材

スライド

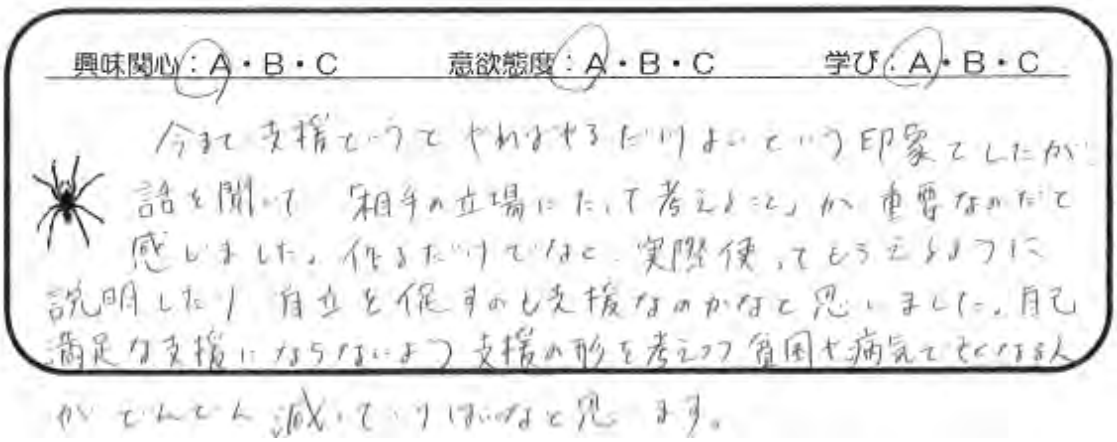


プリント

（4）参考資料等

・「国際理解教育実践資料集　～世界を知ろう！考えよう！～」 JICA地球ひろば

8　単元をとおした生徒の反応/変化


興味関心：A・B・C　　意欲態度：A・B・C　　学び：A・B・C

今まで支援というとやれるやるだけよいという印象でしたが、話を聞いて「相手の立場にたって考えること」が重要なのだと感じました。作るだけでなく、実際使ってもらえるように説明したり、自立を促すのも支援なのかなと思いました。自己満足な支援にならないよう支援の形を考えつつ貧困や病気でとくなる人がどんどん減っていけばいいなと思います。

今回の授業で、具体的な国際協力を学んだことで、「自分のやりたいことが具体的に見えた」と述べる生徒や、「グローバル化の本当の意味にも触れられた」と述べる生徒が複数おり、主体的に行動していく大切さや、相手を尊重して共存していく大切さを学ぶ良いきっかけになったのではないかと感じた。また、ほぼ全員が「興味関心・意欲態度・学び」の評価を「A」とし、今まで上辺の知識に過ぎなかった国際協力や国際理解について具体的に学べたとし、この授業が生徒たちの“何か”を動かす、又は変えるきっかけになれば良いなと思う。

9　授業実践全体の成果と課題及び課題の改善策

【海外派遣前】

・研修に参加した理由の一つとして、「世界の多様な価値観を知る」や「便利さゆえに忘れがちな、自身の大切なものに気付く」といったテーマを核にして授業を行いたいという目標があったので、この内容に関連付けて授業を展開しようと考えていた。

・国際協力の在り方や必要性、種類等については事前研修で学び、頂いた資料やJICAのホームページ等を参考に調べて海外研修に備えた。（良かった点）

・授業展開については、核にしたい授業以外、詳細を考えられず帰国後に計画しようと後回しにしてしまった。（反省点）

【海外派遣中】

・実際に現場の人の声を聞けたことで、調べた知識が実感に変わり、身になった。（良かった点）

・核になる授業の展開で必要なものや、使いたいものを事前に決めて準備していったので、より有益な情報収集が出来、帰国後の授業準備も非常にスムーズに行えた。（計画通りだった点）

・核になる授業以外は、どのような展開で行うか決められていなかったので、受け身な情報収集しかできなかった。（反省点）

【海外派遣後】

・海外派遣前後で本当に多くの事を感じ学んだが、たった数時間で全てを生徒に還元することは逆効果になると感じた。そのための取捨選択は非常に難しかった。（苦労した点）

・核になる授業に関連付けてスムーズな展開を再検討すると、より良い教材が出来ると感じた。

P(計画)

・国際協力を行う意義や必要性、自分に出来る国際協力について考えるきっかけを与える。

・国際協力を行う上で大切な観点について学ぶ。

・相手の生き方や価値観を受け入れ、尊重して生きる姿勢の大切さに気付かせる。

・国際協力の種類やその特徴について学ぶ。

・グループ活動やクラス全体での発表時間を多くとることで、自主的に考える姿勢や、円滑なコミュニケーションを行う能力を養い、多様な価値観を知るきっかけを与える。

D(実施)

・ザンビアをより身近に感じてもらえるよう、授業で行う予定のものと同様のアンケートを実施し、現地の生徒に直筆で答えてもらい、教材にした。

・自分が現地で感じた事や見たものをそのままの言葉で伝えた。
・グループ活動を多く取り入れた。

C(検証)

・毎時、感想等を記入したワークシートを回収して生徒の学習状況を確認した。(学習成果)
・多くの生徒が「持続性」や「価値観の押しつけ」にならないという観点を意識しながら、それぞれの支援の特徴を踏まえ補完し合った国際協力について計画をたてることがきた。
・生徒が毎時間興味深そうに話を聞いている姿や、廊下ですれ違った時にザンビアについて様々な質問をしてくれたので、何か考えるきっかけを与えられたのではないかと感じる。
・授業時間が圧倒的に少なすぎた。そのため、1 時間で多くの事を盛り込みすぎてしまったので消化不良を起こしている生徒がいるかもしれない。
・授業を行うコマの確保がとても難しかった。

A(改善)

・自身が担当する教科内での国際理解教育教材の開発と実施を来年度から行いたい。
・一年を通して、少しずつ国際協力や国際理解の授業を組み込んで学んでもらいたい。

10 教師海外研修に参加して

“教師”海外研修という名の研修は、教師としてはもちろんのこと、一人の人間として学ぶこと、考えさせられること、感じることが非常に多く、頭・心・身体、本当にあらゆる自分がめまぐるしく動かされた10日間でした。

後開発途上国のザンビアには、先進国の日本のような“豊かさ”はありません。しかしそこには、日本が失いかけている、又は失ってしまった“豊かさ”が確かに存在しているように、私の目に映りました。「必要の一歩先の便利」を追い求めること。それは、私たちの生活に新たな豊かさをもたらすかもしれません。しかしその豊かさが本当の意味の幸せをもたらすのか。中学生の頃から考え続けてきましたが、研修を終えた今でもその答えはわかりません。

「皆さんにとって最も大切な“豊かさ”はなんですか？」私が世界中の人々に最も聞いてみたいことです。もし私の財布の中が豊かではなくなったとしても、共に笑いあえる仲間や可愛い大切な生徒たち、そして彼らの幸せを願うことができる心の豊かさは守り続けていきたいです。そして、周りにいるたくさんの人たちを豊かな気持ちにさせられる、そんな人でありたいと改めて感じさせられた研修でした。

ザンビアで沢山の学校に行かせていただけたことで、多くの子供たちのキラキラと輝く瞳に出会うことができました。その輝きは、日本の子供たちと同じ輝きでした。この輝きに、より磨きをかけられるような社会をつくっていくことが私たち大人の使命なのだと感じました。授業実践の際、生徒たちの瞳は本当にキラキラしていて、真っ直ぐにこちらを見て真剣に頷きながら話を聞いてくれました。その姿は今でも私の目に焼き付いています。自分で経験して感じて学んだ体験だからこそ、生徒に伝えられる、そして伝わる事があるのだなと身をもって学び、一生の財産になる経験をさせてもらえたと改めて思いました。今後も、教材開発を行い続け、毎年必ず授業実践を行っていきたいと思っています。

最後に、この研修は、本当にたくさんの方々の支えや助けがあって行われていることを終始感じていました。それ故、国際協力然り、人同士の繋がり、支え合いの中で自分が生きていることを改めて感じる研修でした。ありきたりな言葉でしか表すことができずにもどかしい限りですが、この研修に参加させていただけた事に、心の底から感謝の気持ちで溢れています。今後の教員人生、そして一人の人間としての人生の中で、この研修で学んだ事を様々な場面・形で還元していきます。

今ある豊かさにおごることなく、臆することなく、謙虚に、貪欲に生きていく力を養っていける、そんな教員を目指します。

学校名:新潟県立高田高等学校

氏名: 蜂屋 有希子

[担当教科: 家庭]

- 実践教科等: 家庭基礎
- 時間数 : 5時間
- 対象生徒 : 高校2年生
- 対象人数 : 280 人

1 単元名

持続可能な社会をめざして ～発展途上国とのつながりから考える～

2 単元の目標

・異文化に対する理解を深めるとともに日本の伝統文化のよさに気づき、見直すことができる。

【つながりを尊重する態度】

・発展途上国が抱える課題について理解し、その解決策を主体的に考え、まとめることができる。

【未来像を予測して計画を立てる力】

・異文化や他国の課題に対する互いの考えを共有し、尊重することができる。

【コミュニケーションを行う力】

・自分の価値観の変容について振り返ることを通して、発展途上国との関わり方について考え、発信することができる。 【進んで参加する態度】

3 ESD(持続可能な社会づくり)の視点

多様性	相互性	有限性	公平性	連携性	責任性

・日本とザンビアの文化や価値観、生活の違いについて知る。 【多様性】

・日本とザンビアのつながりを知り、「共生することの大切さ」に気づく。 【連携性】

・ザンビアの生活課題について知り、それを解決するための方法や自分にできることについて考える。

【責任性】

4 単元の指導について

(1)教材観

「ザンビア」という国を知ることを通して、自己の暮らしの課題を見いだしたり、日本に暮らす自分の生活との共通点や相違点を考えさせたりすることをねらいとする。そのために、現地で撮影した写真や現地で購入した物を教材として多数活用する。また、すぐに答えを提示するのではなく、写真や物品の背景や意味することについて生徒自身に考えさせ、「学ぶ意欲」をかき立てるよう工夫する。

(2)生徒観

日本の文化や自分の暮らしを見つめ直し、「持続可能な社会」の構築のために自分には何ができるかを考え、それを実践する態度を身に付けさせる。

(3)指導観

勤務校では「国際社会で活躍できるグローバル人材の育成」を目標の1つとして掲げている。そ

のため、「家庭基礎」の授業においては、日本に暮らす自分と他国がつながっていることを意識させるような題材を取り上げる。また、グループ単位での話し合いの時間を多く設定し、多種多様な考えがあることを実感させたい。そして、「互いに認め合う態度」も育成したい。

5 評価基準

観点	関心・意欲・態度	思考・判断・表現	技能	知識・理解
評価規準	生活文化や生活課題について関心を持ち、意欲的に学習に取り組んでいる。	日本と他国の暮らしを知り、その中で見いだした課題の解決策を考えることができる。	持続可能な生活のために環境に配慮した生活を実践することができる。	他国との比較を通して、生活文化や生活課題について理解する。
評価方法	観察 ワークシート	ワークシート	ワークシート	発言 ワークシート 定期考査

6 単元の構成

時限	小単元名	学習のねらい	授業内容
1	日本の暮らしとザンビアの暮らし	・ザンビアと日本のつながりやザンビアの生活文化について知り、他国のことを知ろうとする意欲を高める。	・教師海外研修への参加動機、JICA の取組について ・ザンビア3択クイズ ・日本とザンビアの関わりについて ・ザンビアの暮らし（食生活、住生活、ゴミ問題）について
2	ザンビアの衣生活から日本の伝統文化を見直す	・ザンビアに日本が古着を送っていることやザンビアでも衣服が人々の身体を守るのに必要なことを知る。 ・ザンビアの生活に欠かせない「チテンゲ」という布の用途について知ると共に、「チテンゲ」に似ている日本の「風呂敷」について理解し、そのよさを見直す。	・衣生活における日本とザンビアの関わりやザンビアにおける衣服の機能について ・チテンゲについて ・風呂敷について
3	暮らしの中の水～日本とザンビア	・日頃の水の利用について振り返り、水が生活する上で欠かせないものだということ	・日常生活においてどのくらいの水を利用しているか調べる

実際に食べた現地食（シマなど）を紹介

ザンビアの女性に欠かせないチテンゲ

	の水の利用～	を再認識する。 ・ザンビアでは安全な水を必ずしも手に入れることができないことを知り、安全な水が得られないことから起こる問題点について考える。 JICA の取組について紹介	・日本とザンビアの安全な水を利用する人の割合と安全な衛生施設を利用する人の割合について ・安全な水を十分に利用できない人の暮らしとそれによって起こる問題点について ・安全な水を使えるようになるとどのような効果が期待できるかについて
4	次世代を担う命への責任 ～母子保健と HIV について～ 	・ザンビアの乳幼児死亡率及び妊産婦死亡率が高いこととその理由、ザンビアでは HIV の問題が深刻であり、母子保健が重要とされていることを理解する。 ・子どもの健康、女性の健康を守るためにどのような対策をとるとよいか考える。 シニア海外ボランティア紹介	・ザンビアの乳幼児死亡率と妊産婦死亡率の高さとその理由について ・日本およびザンビアの HIV とエイズの実態について ・母子保健について
5	子どもたちにふさわしい世界を	・これまで学んできた内容をふまえ、子どもの成長・発育にとって「よい環境」とはどのような環境か、そのような環境をつくるには何をすべきかについて考える。また、それを他者と共有し、自分自身の考えを深める。	・子どもの成長・発育にとって「よい環境」とは何か考えグループ内で意見を共有する。その後、クラス内で発表し共有する。 ・これまでの「ザンビア」を題材にした授業全体を通して考えたことについてまとめる。

7 授業事例の紹介

小単元名【子どもたちにふさわしい世界を】

（1） 指導案

（ア）実施日時 10 月 26 日（月） 第5限

（イ）実施会場 被服家庭総合実習室

（ウ）本時の目標

①次世代を担う子どもの成長・発育にとって「よい環境」とはどのような環境か、考えることができる。

（思考・判断・表現）

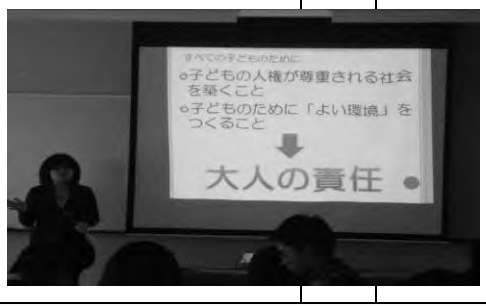
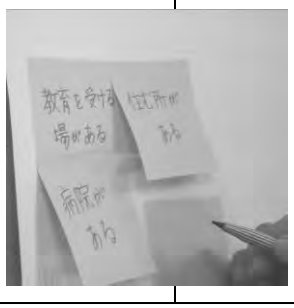
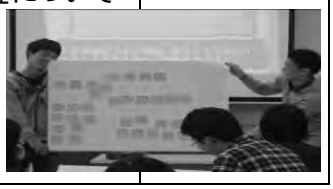
②次世代を担う子どものために「よい環境」をつくることは大人の責任であることを理解する。

（知識・理解）

（エ）指導のポイント

全員が話し合いに参加することができるように、また多種多様な意見を引き出せるように、「KJ 法的手法」で話し合いをする。

（オ）本時の展開

過程・時間	指導内容	学習活動	指導形態	指導上の留意点	評価（評価規準・評価方法）
導入 5分	過酷な状況下におかれ、今なお苦しんでいる子どもがいること、次世代を担う子どものために「よい環境」をつくることは大人の責任であることを伝える。	前回までの内容を再確認するとともに本時の学習内容を理解する。  	一斉	前回までの授業で使用した写真等を再度提示し、授業内容を想起させる。 	
展開 45 分	次世代を担う子どもにとって、「よい環境」とは？また、そのような環境をつくるためには何をすべきか、考えよう。				
	次世代を担う子どもの成長・発育にとって「よい環境」とはどのような環境か 	①付箋に個人の考えを記入する。 ②グループ内で個々に書いた付箋を見せ合い、考えを整理する。 ③グループ内で話し合った内容について発表する。	グループ	全員が話し合いに参加できるように、多種多様な考えが引き出せるように「KJ 法的手法」で話し合いを行う。発表は結論だけではなく、意見をまとめるまでの過程についても発表させる。 	

まとめ 5分	次世代を担う子どもたちとの関わりについて考えをまとめよう。				
	これまでの授業を通して、次世代を担う子どもたちとの関わりについて考えさせる。	今後、子どもたちとどのように関わっていきたいか、自分の考えをまとめる。	一斉	これまでの学習内容を踏まえながら考えるよう伝える。	今後の子どもたちとの関わりと子どもを育てる責任について考えているか。 （ワークシート）

（2）授業の振り返り

①よかった点

「子どもにとってよい環境」とは何かを考える際、「教育」「医療」「衣食住」「安全」等、私がザンビアを題材にした授業の中で取り上げてきた内容をふまえて記入する生徒が多かった。これは、本時の授業に取り組むまで、じっくりと時間をかけて発展途上国の現状について学んだことが生徒に定着していることの現れだと思う。

また、授業後には参観していただいた先生方より感想を伺った。「生徒の発表は、国際協力、JICA に対する理解をふまえた質の高い発表だった」、「教科指導の中に『国際理解教育』が位置づけられており、取組としても質が高い」などと評価していただいた。

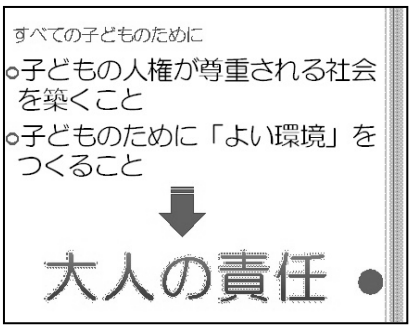
②改善すべき点

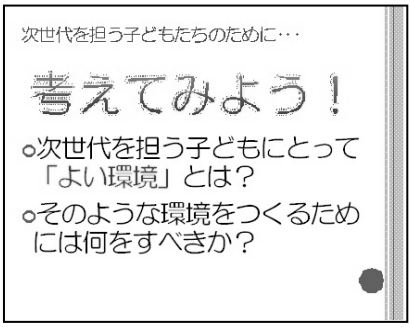
机間巡視の際、すべての班をまんべんなく見ることに意識が行きすぎてしまい、一つ一つの班をじっくり見ることができなかった。そのため、生徒のいいところに気が付かないまま授業が終わってしまった。今後は、「じっくり見ること」にも留意し、いいところは全体に伝え、クラス全体に刺激を与えるような声がけをするようにしたい。

また、話し合った内容を全体で共有するために各班の代表者に発表させたが、授業時間内に全ての班が発表を終えることができなかった。このような状況にならないよう、話し合いに使用した付箋や模造紙を作業机に置いておくなどの事前準備が必要だったと思う。今後はどの授業においても時間を守り、チャイムが鳴ったと同時に授業を終えられるよう、授業計画を入念に練るようにしたい。

（3）使用教材

・授業に使用したスライド（抜粋資料）





・授業に使用したワークシート（おもて面）

（4）参考資料等

・「高等学校　家庭基礎　ともに生きる・未来をつくる」 第一学習社（授業時に使用している教科書）

・児童の権利に関する条約（子どもの権利条約）－中学生、高校生のみなさんへ－

奈良県・奈良県教育委員会

・日本ユニセフ協会 「子どもの権利条約　特設サイト」 ＜http://unicef.or.jp/crc/＞（2015/10/11）

8　単元をとおした生徒の反応/変化

ザンビアを題材に、発展途上国の現状と家庭科の学習内容を組み合わせた授業実践に取り組んだ。多くの生徒は発展途上国との関わりについて考えたり、自分の普段の生活を見直したりする機会としてこの授業に前向きに取り組んでいた。最後に、前向きな姿勢が特に見られる、2名の生徒の感想を紹介したい。

①持続可能な社会を意識した感想

「子どもたちに自分のことだけではなく、**次の世代のことも考えて行動することが大切**だということを伝えていきたい。」

②将来の進路を意識した感想

「私は国内の恵まれない子どもたちに将来関わっていきたいと思っていたが、世界各国にも恵まれない子どもたちがいると知って、視野が広がった。**将来のことを考えるきっかけにもなった。**」

9　授業実践全体の成果と課題及び課題の改善策

今回実践したザンビアを題材とした授業を通して、生徒一人一人が水不足や母子保健などの、開発途上国が抱える課題について知り、課題解決のために何をすべきか、自分には何ができるかを考えていた。グループでの意見交換も活発に行っており、互いに意見を述べ合う中で国際協力への関心が高まっていく様子が見られた。

また、「自分でも調べてみたい」、「現地に行って、自分の知っている病気の予防策を人々に伝えたい」、「将来、今回の授業で考えた改善策を実行できるような人になりたい」など、授業実践終了後の生徒の感想を読むと、今回の授業実践を通して、開発途上国の課題や国際協力の必要性を理解している者が多いと感じた。

しかし、中には5回に及ぶ授業実践の中で学習意欲が低下した生徒もおり、すべての生徒が満足する授業をすることは難しいと痛感した。今後、国際理解教育の視点を盛り込んだ家庭科の授業を実践する際は内容の精選や授業手法の改善を図り、生徒の学習意欲を高める工夫をしたい。

また、具体的な指導に関しては次のとおりである。

Plan(指導案)・・・「ザンビアを知るための授業」にならないよう、家庭科の学習目標および内容から外れることがないように留意しながら指導案を作成した。

Do（授業）・・・「6　単元の構成」に示した流れ通りに実践した。

Check（検証）・・・本授業では全時間に PowerPoint 資料を用いた。一部わかりにくい部分（字が小さい、表示の仕方が悪い等）もあったようで、戸惑う生徒も見受けられた。また、段取りが悪く、授業時間内に終わらないこともあった。

Action（改善）・・・PowerPoint 資料は生徒の反応が思わしくなかった部分を分析し、改良していった。授業時間については事前準備に時間をかけ、時間内に終われるように計画を練り直した。

10　教師海外研修に参加して

本研修では、想像以上に多くのことを学ぶことができた。例えば、発展途上国の側面は「貧困」、「水不足」だけではないこと、日本人が失いつつある「物を大切にすること」、「自ら創造すること」が心に豊かさをもたらすことなどである。そして、これらの学びを生かした授業実践に取り組むこともできた。その中で、他国のことを知ることで、自国（日本）のことも知ることができると実感した。今後も教科指導、進路指導等、様々な場面で本研修での自分の経験を発信し続けていきたい。

8　授業実践を終えて

8　授業実践を終えて

東京国際センター地域連携課
学校教育アドバイザー　仲山　嘉彦

子どもにとっては唯一の時間、再び繰り返すことのできない時間
教師たる自分は，最高の自分でなければならない。
教師というものは勉強しなくてはならない。
研究することは「せんせい」の資格
子どもとは、「身の程知らずに伸びたい人」のこと、一歩でも前進したくてたまらない。
力をつけたくて、希望に燃えている、その塊がこども。

これは、大村はま氏著書「教えるということ」からの抜粋です。

教師海外研修に参加した先生方の授業実践を視察させていただき、冒頭に書かせていただいた一節を思い出しました。

教師海外研修は、教員自身が国際理解教育／開発教育に取り組むに当たり、実際に開発途上国を訪れ、そこで行われている日本の国際協力や支援の現場を視察し、その成果を授業に生かすことを目的としています。

JICA 東京では、昨年度まで訪問国を教員が所属する都県別に分けていましたが、今年度は校種ごとに分け、小学校及び特別支援学校がモンゴル、中学校及び高校がザンビアで研修を行いました。参加した教員は、所属する都県は異なるものの、同一校種の仲間との親交を深め授業づくりに取り組みました。

先生方は、事前研修で学んだ国際協力や支援の現場を実際に見ることで、それらの重要性の理解を深めるとともに、開発途上国で活躍する日本人にあうことで、多くの感動と日本人としての誇りを胸に帰国しました。

帰国後は、それぞれの学校において、「総合的な学習の時間」における国際理解教育や教科指導などの学校教育活動に位置付けて実践授業が行われました。

先生方は、派遣された国について、日本との違いや共通点、そこに住む人たちの生活やその国が抱える課題を、海外研修中に撮影した写真や動画、JICA 職員や現地の人から聞いた話、現地で入手した教材等を有効に使いながら授業を進めました。

その中で、現地で活動する日本人の姿を通して、国際協力の重要性や日本が取り組む支援の特長をわかりやすく児童生徒に伝えていました。

授業を聞いた子供たちは、海外で活躍する日本人の姿に自分を重ねエールを送るとともに、開発途上国に対する協力や支援について、自分なら何ができるかを真剣に考えていました。

本研修に参加した先生方が現地で受けた感動は、その先生方の言葉に乗って確実に子供たちに届き、子供たちも目を輝かせて授業を受けていました。

さて、今、学校には、グローバル社会に対応できる資質・能力を養うことが求められるようになりました。これまでの学校教育では「何を知っているか」ということに重点が置かれていましたが、これからは「何ができるのか」ということに重点が置かれるようになります。

このグローバル化する社会に対応する資質・能力を養うためには、国際理解教育／開発教育を有効に進めることが必要です。そのためには、海外を経験した教員の活用は言うまでもありませんが、その教員が海外でどのような経験をしたかを教材化することが重要です。その意味で、教師海外研修は教員にとって極めて有効なプログラムの一つに位置付けられます。

本研修に参加した先生方には、身の程知らずに伸びたい子供たちにとって、勉強し最高の姿になった教師としてあり続けてほしいと思います。

9　過年度参加者ネットワークづくり事例

9　過年度参加者ネットワーク化の事例について（新潟）

JICA 新潟デスク
国際協力推進員　和田　直

JICA 教師海外研修過年度参加者へのフォローアップを目的として 2015 年 12 月に JICA 地球ひろばにて実施された「教師海外研修過年度参加者ネットワーク協議会」に新潟県からは 4 名の先生方がご参加されました。そしてその先生方が中心となって県内における国際理解教育のネットワーク活性化に向けた取り組みが始動しました。

具体的には、新たに立ち上げるのではなく既存の団体との連携を図り活動を活性化していく立場にたち、新潟県下の国際協力に携わる団体をまとめる組織である「にいがた NGO ネットワーク（2008 年設立、以下「N ネット」）」の定例事業である「国際教育研究会（2012 年第 1 回開催、以下「研究会」）」の企画運営に参画、国際理解教育に関するセミナーを実施していくことになりました。

N ネットは、主に東南アジアの開発途上国の教育支援やフェアトレードを行っている 12 の団体会員、27 名の個人会員、12 名の賛助会員によって構成され、会員相互の情報交換や連携、協力を図るとともに自治体や地域の国際交流協会などとも連携し、国際協力を推進し国際化の進展に寄与することを目的としています。また研究会は、国際協力に携わる人材を地域で育成する必要があるとの観点から学校教育における国際理解教育の充実を目指し、これまで 9 回実施し、会員のみならず県下の小学校、中学校、高等学校、大学などの先生方にもご参加いただき、県や市の教育委員会、新潟県立教育センター、県国際交流協会についてもオブザーバーとしてご参加いただき、教育行政機関、JICA との連携も図ってきました。

今回、3 月開催予定の第 10 回研究会には、教海研過年度参加者の上記 4 名の先生が企画段階から参加しています。これまでは主に N ネットが主体的に開催し、教育行政機関と連携するとともに、多様な立場の方が参加することで多方面からの学びが得られる場となってきました。、新規の参加者増が見込まれない、学校現場での国際理解教育の実践者の増加が少ないなどの課題もあります。そこで、この既存の研究会をより活性化させることで、今後、県内での国際教育普及をより推進させていきたいと考えられました。今後は、N ネットに加え、この 4 名の先生方も研究会の企画運営に携わり、過年度参加者の積極的な参加を促したいと考え、2016 年度は年 3 回の研究会（7 月：教海研県内研修を含む、12 月：教海研県別報告会を含む、3 月）の実施とその準備や情報交換の場としての定例会を 5 回程度（4 月、6 月、9 月、11 月、2 月）とする計画をたてられています。定例会は教海研過年度参加者を中心として数名を想定していますが、国際理解教育に興味関心のある教員や大学生などにも声をかけ、門戸を広げることで国際教育について学んだり相談したりできる場にしたいと考えています。また、新たに国際理解教育のネットワーク構築のためのメーリングリストの立ち上げ、新規参加者との関係構築、HP を活用した学びの蓄積と共有も視野に入れています。

第 10 回研究会では、文部科学省国立教育政策研究所の濵野清氏を迎え「これから期待される国際教育と：ESD」について講演いただき、教海研過年度参加者による実践報告とさまざまな立場の方々によるトークカフェ（教海研過年度参加者、青年海外協力隊、日本人学校教員、大学生国際交流インストラクター）を行います。これを契機として過年度参加者を中心にメーリングリストや定例会への参加を呼びかけ、今後、継続して過年度参加者との関係強化を図ってを行けるものと期待しています。

10　おわりに

10　おわりに

教師海外研修アドバイザー
国立教育政策研究所
教育課程調査官　濵野　清

文部科学大臣の諮問を受けて、中央教育審議会では次期学習指導要領についての議論がスタートしました。昨年８月には、教育課程改善の全体像を描いた「論点整理」がまとめられ、現在、それが指し示す方向の下、各学校種、教科等に分かれて本格的な議論が始まっています。すでに現行学習指導要領にその趣旨が盛り込まれた「持続可能な開発のための教育（ESD）」については、先の諮問においても、また論点整理においても、その成果や重要性が指摘されており、その一翼を担う国際理解教育／開発教育についても、引き続きその内実化を図ることが期待されています。

これまでも国際協力機構と文部科学省（国立教育政策研究所）では、グローバル時代の初等中等教育を考える国際シンポジウムを開催するなど、価値観や文化、社会や経済の仕組みの違いを生かしながら、協力して地球規模の困難な課題を解決する力を育成するための教育の在り方について、継続して研究を重ねてきました。そのような教育の在り方について、本年度の教師海外研修でも、実際にザンビアやモンゴルの地で活躍する国際協力機構の関係者や現地の方々の姿を通して学び得たことは、極めて貴重な収穫でした。

本報告書は、それを授業計画という形で直接的には児童生徒に、指導事例という形で間接的には本書を手に取る方々に還元しようとしたものです。そこでは、実際に現地に赴いて見聞き、体験した者でなければ示し得ない資料が使用され、それ以上に実際に参加した者ならではの視点が示されていることと思います。またその一方で、参加者自身が得たものがあまりにも刺激的かつ膨大であったため、それを昇華しきれず、あるいは割愛するに忍びず、未だ整理途上のものがあることとも思います。ただ、いずれにしましても、そのような現地の匂いがするこの報告書を通して、読者の方々には研修を追体験していただいたり補っていただいたりして、掲載されました指導事例を創造的、批判的に再構成して活用していただければと願う次第です。

報告をご寄稿いただきました方、ご覧いただきました方が共々に、本報告書を通じて改めて国際理解教育／開発教育について考える機会となりますことを切に願っております。今後とも、世界各地に赴かれている国際協力機構の隊員等関係者の方々が、現地社会の一隅を照らさんと地道な活動をしている姿に思いを馳せ、私たち教師も今いる場所で私たちなりに、あるいは私たちだからこそできることを模索していきたいと思います。

11　教師海外研修を終えて

11　教師海外研修を終えて

駒ヶ根青年海外協力隊訓練所
所長　仁田　知樹

あの未曾有の大災害・東日本大震災から5年が経ちました。

あの年、災害に見舞われた日本や日本人に対し、本当にたくさんの国々から義捐金や救援物資などの支援が届きました。豊かな先進国からだけではありません。発展途上国と呼ばれる国々・・・さらには「世界の最貧国」と呼ばれる国々からさえも、温かい支援や応援の手が差し伸べられました。

実はあの2011年、日本は「世界最大の援助受け取り国」になったのです。

援助する側になった多くの途上国の人たちは、「日本はこれまで長きにわたって私たちの国の発展のために地道に、そして親身に支援してくれた。日本が災害で苦しんでいる今、その恩返しがしたい。」と、感謝と信頼の言葉を贈ってくれました。

国際協力とは、もはや先進国から途上国へ、という一方通行のものではなく、世界中の国々とそこに住む人々が、「おたがいさま」と感謝しながら「幸せを分かち合う」ことなのではないかと思うのです。

言い換えれば、みんなが持っている何がしかの幸せ（ある人が持っている幸せはほんの小さな幸せかも知れませんが）をみんなで分かち合うことが国際協力であり、「グローバルである」ということではないか、とそう感じたのです。

グローバル社会は待ったなしで進展し、誰もが世界と関わらずには生きていけない時代になりました。そのグローバル社会のこれからを担う小中学生や高校生たちが、世界に目を向け、世界と関わる術（すべ）を身につけるため、教育現場での「国際理解教育／開発教育」が急速にその重要性を増しています。

今年度も、そんなグローバル教育に情熱的に取り組むパワーいっぱいの先生方が、教師海外研修プログラムに参加されました。

先生方は、モンゴルとザンビアでの海外研修で得た貴重な経験や学びを活かし、それぞれの教育現場で、果敢にグローバル教育授業を実践・展開されています。

この報告書が、国際理解教育／開発教育に関心を持つ多くの先生方に指針を提供し、ひいては次世代を担う児童・生徒たちのグローバル化を促進する書となることを願います。

付録：参考資料

学校・教員のための
国際理解教育支援プログラム

JICAでは、世界の現状や開発途上国が抱える課題への理解を深めるため、学校現場で活用いただける国際理解教育／開発教育支援のための各事業を実施しています。

教員向けプログラム

●教師海外研修

開発途上国の現状、日本との関係や国際協力への理解を深め、その成果を子どもたちの教育に役立てることを目的とした研修です。校種や地域の違う先生方がチームとなって国内と海外の研修に取り組みます。研修で得た学びと感動を、授業や教材作成を通じて子どもたちに伝えてください！
毎年、全国で約１６０人の教員が研修に参加しています。

●国際理解教育セミナー

教員をはじめとした国際理解教育に関心がある方々を対象にした国際理解教育／開発教育の基本的な考え方を学ぶ講座を、各地のNGOや教育委員会、国際交流協会と協力して開催しています。ワークショップや参加型学習の手法を体験しながら、世界を学ぶ授業作りにお役立てください。

●グローバル教育コンクール

世界が抱えるさまざまな問題について考え、その解決のために行動できる人材を育成するため、学校現場などで活用できる素材を作品として募集しています。応募部門は次の二つ。
①「写真」部門・・・写真や映像を通して現地の人たちの暮らし、表情、そして言葉などと共に、「こんなことを、伝えたい！」というメッセージをお寄せください。
②「グローバル教育取り組み」部門・・・学校や市民団体での国際協力や教育への取り組みをはじめ、NPOやNGOなどの国内・海外での活動について報告ください。

●青年海外協力隊（現職教員特別参加制度）

教員の方々が身分を保持したまま、青年海外協力隊または日系社会青年ボランティアへ参加するための制度です。毎年、春募集時（３～5月）に募集しています。

児童・生徒向けプログラム

●国際協力出前講座

開発途上国の実情や日本との関係、日本の国際協力について知っていただくために、教室にJICAボランティアの経験者が講師としてお伺いします。講座は、異文化理解、教育や農業、医療、スポーツ、音楽といったテーマや、対象国や地域を決めて行うことも可能です。また、道徳や人権学習、ボランティア学習、環境教育、キャリア教育などの授業でも活用されています。

●国際協力中学生・高校生エッセイコンテスト

毎年、開発途上国や国際協力をテーマに中学生・高校生を対象としたエッセイコンテストを開催しています。上位入賞者には、開発途上国でのJICA事業の現場視察など研修に参加する機会が与えられます。コンテストの開催概要や募集作品のテーマについては、毎年６月頃にJICA地球ひろばのHPで発表されます。

国際理解教育／開発教育のための教材

●ぼくら地球調査隊　小冊子5種

環境、感染症、教育、食料問題など、私たちの身近で起こっている地球規模の課題について、楽しく学ぶことができます。

※ホームページよりダウンロードいただけます

世界の水問題
（環境）

学校に行けない
世界の子どもたち
（教育）

砂漠化する惑星
（環境）

いのち、輝け！
（保健・公衆衛生）

世界の食料
（食糧）

●ぼくら地球調査隊　ウェブコンテンツ

博士と3人の子どもたちが世界を旅しながら地球について学ぶウェブコンテンツです。アニメーションを見ながら、地球で起きている様々なことを知り開発途上国を身近に感じることができます。

「JICA地球ひろば」のご案内

●JICA地球ひろば

JICA地球ひろばでは、開発途上国の暮らしの現状や、地球が抱える問題、国際協力の実情などを、見て・聞いて・さわって体験できる展示と、開発途上国での活動体験談や参加型体験学習を組み合わせたプログラムを実施しています。
修学旅行、社会科見学等の団体訪問も受け入れており、年間約1万人に見学いただいています。

開館時間：10時～20時（平日）／10時～18時（土・日・祝）
休館日：第1・第3月曜日、年末年始　　○入館無料
連絡先：〒162-8433　東京都新宿区市谷本村町10-5
TEL：03-3269-2911／0120-767278

詳しくはコチラ

JICA地球ひろば　検索

あなたの近くのJICA相談窓口

●JICAデスク

開発途上国で活動した経験を持つ国際協力推進員が、皆さんのお越しをお待ちしています。

東京都（23区外）八王子市役所市民活動推進部 多文化共生推進課内　Tel: 042-620-7437
✉tamachiku-desk_yamada@friends.jica.go.jp
※東京都（23区）については、JICA東京（ Tel: 03-3485-7680 ）までお問合せください。

埼玉県　（公財）埼玉県国際交流協会内　Tel: 048-833-2992
✉saitama-desk_nakano@friends.jica.go.jp

千葉県　（公財）ちば国際コンベンションビューロー内　Tel: 043-297-0245
✉chiba-desk_izumisawa@friends.jica.go.jp

群馬県　（公財）群馬県観光物産国際協会内　Tel: 027-243-7271
✉gunma-desk_nishi@friends.jica.go.jp

新潟県　（公財）新潟県国際交流協会内　Tel: 025-290-5650
✉niigata-desk_wada@friends.jica.go.jp

長野県　（公財）長野県県国際化協会内　Tel: 026-235-7186
✉nagano-desk_enomoto@friends.jica.go.jp

※長野県はJICA駒ヶ根（Tel: 0265-82-6151（代表））でもお問い合わせいただくことが可能です。

平成27年度　教師海外研修報告書

独立行政法人 国際協力機構　東京国際センター（JICA 東京）地域連携課
〒151-0066　東京都渋谷区西原 2-49-5
Tel. 03-3485-7680

独立行政法人 国際協力機構　駒ヶ根訓練所（JICA 駒ヶ根）業務課
〒399-4117　長野県駒ケ根市赤穂 15
Tel. 0265-82-6151（代表）